
Re : Monster

刺殺から始まる怪物転生記

金斬 兎狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re:Monster 刺殺から始まる怪物転生記

【Nコード】

N1782T

【作者名】

金斬 兎狐

【あらすじ】

ある日、優秀だけど肝心な所が抜けている主人公は同僚と飲みに行った。酔っぱらった同僚を仕方無く家に運び、自分は飲みたらない酒を買い求めに行ったその帰り道、街灯の下に静かに佇む妹的存在兼ストーカーな少女と出会い、そして、満月の夜に主人公は殺される事となった。どうしようもないバッド・エンドだ。

しかしこの話はそこから始まりを告げる。殺された主人公がなんと、ゴブリンに転生してしまったのだ。普通ならパニックになる所だろうがしかし切り替えが非常に早い主人公はそれでも生きていく

事を決意。そして何故か持ち越してしまつた能力と知識を駆使し、弱肉強食な世界で力強く生きていくのであつた。

しかし彼はまだ知らない。全てはとある存在によって監視されていると言つ事に……。

今回は召喚から転生モノに挑戦。普通とはちよつと違つた物語を目指します。主人公の能力は基本チート性能ですが、前作程では無いと思われます。

あと日記帳風？ で気楽に書かせてもらつので、説明不足な所も多々あるでしょうが納得して下さい。

不定期更新、更新遅進です。

話数は少ないですが、その割には文量が多いので暇なら読んでやって下さい。

そしてこの作品はきつとストーリー重視です！

一日目〜十日目（前書き）

不定期更新です。

誤字脱字報告してくれるとありがたいです。

感想、評価どしどしください。

あと主人公の成長は非常に早いです。

一日目〜十日目

“一日目”

「どうやら俺は妹的存在兼ストーカーに刺されて、殺されて、そして転生したらしい。」

「いや、転生とか冗談で言っている訳ではなくてだな。うん、取り合えず順を追って説明しよう。というか混乱しすぎて落ちついていける風になっている俺の精神衛生上、流れを客観視しながら語らないと暴れてしまいそうなので、文句は俺の話聞き終わったら後で、という方向でどうぞよろしく。」

「えーと、そうだな、まずは名前から。俺の以前の名前は伴杭^{トモクイカナタ}彼方とは言え転生しているのだから、今現在は一応“名無し”としておこう。」

「で、俺の記憶違いや妄想　そうだったらどれ程良かったか
でなければ、俺は仕事が終わった後で同僚に飲みに誘われて居酒屋を幾つか巡り。」

「アルコールに弱いくせに明日が休みと言う事で無理やり付き合わせられて夜遅くまで飲んだ結果、案の定グデングデンに酔っぱらって一人で家に帰れなくなった同僚をその時飲んでいた居酒屋からほど近かった俺の家まで運び。」

「半ば寝ていたのを起こすのも何だか忍びなかったので俺のベッドにポイと物のように放り投げてから、昔からアルコール大好きで体質的にも強かった俺はまだまだ飲み足りなかったので月一の満月を見上げながらの独り酒でもするか、と思いながら冷蔵庫を開けた。そしてそこで、冷蔵庫の一フロア全てを支配していたビールやチユウハイなど多種多様な酒類が全て無い事に気がついた。」

「丁度昨日蓄えを飲み干し、今日同僚に誘われなければ買い込むつ

もりだったのである。それをすっかり失念していた。

そう、そうだ、昨日買い置きを飲みきってしまったのが人生の中で最も大きな失敗だった。もし一本でも残しておけば、こうはならなかっただろうに。っと、いやいや、まずは話を進めよう。

酒がどうしても飲みたかった俺は近くの二四時間営業しているコンビニに出向き、ビールを五本ほど買ってから帰路につく。もう直ぐ夏が来るとは言え夜はまだまだ肌寒く、しかしそれだけに澄んだ夜空に浮かぶ満月は美しかった。

薄らと月を隠す雲もまたなかない塩梅で、ああ、今夜の月見酒はより一層上手いだろうなあ。

と言った感じに酒に思いを馳せていると、俺は街灯の下でポツリと佇む一人の美少女に気が付いた。見知った顔である。と言うか彼女は、世間一般で言う所のストーカーキリミネアオイである。

ストーカーの名前は桐嶺葵キリミネアオイと言い、一応、現役の女子大生。歳は俺の五つ下の二十ピツタリだったか。

アオイとの馴初めを簡単に語れば、俺が高三の時に十五・六位の二人組の不良に絡まれていた美少女。当時十二・三歳だったアオイを見つけ、助けた事から縁ができたのである。

いや、助けたと言うのは間違いではないが、正確ではないか。

今とは比べ物にならないほど臆病者チキンだった俺は、年下とはいえ明らかに不良な二人組を相手に知りもしない少女を護るために闘う事などするはずが無かった。普段なら情けないが、周囲の人間のように見て見ぬふりをしていた事だろう。

喧嘩なんてした事も無かったし、ESP能力も覚醒していなかった俺はそそくさと逃げる筈だった。

何時もならば。

しかしながら、幸か不幸かで言えば恐らくは不幸な事に、宇宙にその名を轟かす大企業アヴァロン社、の傘下にあたる軍事関係の中小企業で働いていた軍人で兵器オタの伯父から、誕生日プレゼントとして受け取った護身用の軍用スタン警棒をその時の俺は持っていた。

何故そんな物騒なモノを持っていたのかと言うと、どれ程の威力があるのか気になっていたのだが自分で試す勇氣は無く、使用される事無く部屋に飾ったままだったそれを、しかし伯父と同じ兵器オタな友人が軍用スタン警棒を見たいぜよ、つか持ってきて。とメルしてきたので見せに行く途中だったからだ。

そして、予想通りだろうが俺はその軍用スタン警棒を不良達に使用した。

コチラに気が付いていなかったし、不良から美少女を護ると言う大義名分があったので、まあいつか、とかなり軽い気持ちだったのは覚えている。

後ろからバチバチとやりました、激しく痙攣しながら泡吹いた不良達には心底ビビりました、勿論パニックになって助けた少女アオイの手を引いて逃げました。

あの頃は本当に若かった。

ま、そんな感じで。好奇心と出来心で俺は不良を実験台にしたついでにアオイを助けたのである。

その後月日が過ぎて紆余曲折在った後に、アオイはストーカーになっってしまった。

いや、俺が今の職場に就職するまではそこまで酷くなかったのだが、就職してからは出張先である他の惑星にまで追っかけてくるのは如何なものかと……。追跡せずに普通に話しかけてくればいいのに、つか私生活を監視するなど言いたい。

まあ、いい。ここら辺はまだ理解できなくていい。詳しくは追々語るかもしれないので今は置いといて。

酒を買った帰り路で俺はアオイと出会った。遭遇したと言ってもいいのかもしれない。

街灯に照らし出されながら、俯き、普段の子犬を彷彿とさせる元氣一杯な姿からは考えられない程に黒いオーラを発散していたアオイを前に、俺は首を傾げる。

見つけた時点で変だとは気が付いていた。いたが、ストーカー行為を繰り返すとはいえアオイは妹のような存在。だから強く突き放せていないのだけれど。なので、俺は心配になり、どうしてそうなっているのか分からないモノの声をかけた。

返事は無かった。アオイは俯いたままだ。

それに表現できぬ多大な不安を抱えつつも俺はその理由を知るべくアオイに近づき、そしてブスリと、腹をシースナイフで突き刺された。

グリツと手首を捻る事で回転した刃が内臓を抉る激痛を感じたが、頑丈な身体をしていた俺はその程度で死ぬ事はまずなかったし、その時はまだ再生治療を施せば傷一つなく治る程度の怪我だっただろう。

使用されたのが平平凡凡なただの金属の塊でしか無いシースナイフだったのならば、俺だって抵抗して死ぬ事は無かった筈だ。

しかしアオイが使用したのはSAKUMA重工製Bランク雷性付加式小刀【寧々^{ネネカルリ}猫理】と呼ばれる、皮肉な事に伯父が務めている会社^社が売っているシロモノだった。

分かり易く説明すれば、高性能スタンガンと幾つかの能力を持つ単分子カッターだ。チェインソーのように刃の部分に極小の刃が幾千と取り付けられ、超高速で動く事で切れ味を増大させる近接装備の一種。刺した相手に高圧電流を流し、動きを一時的に麻痺させる、軍人も使用している様な一品。

なんでそんなモノをアオイが持っていたかは、考える時間さえなかった俺には分からない。しかしアオイは現にそれを持っていて、

俺は身動きできない間に押し倒されて、シースナイフの刃は俺の胴体を何度も何度も突き刺し抉っていた。

執拗に何度も何度も突かれ、混乱して訳が分からなくなっていた俺の口からは尋常じゃない量の血が吐き出される。ナイフが刺さる度に鮮血が飛び散り、肉や骨が切り裂かれる感触を感じる。

何時の間にか馬乗りになっていたアオイの全身を俺の血が赤く染めていく様は、何処か幻想的だったっけと思うがそれは置いてくとして。

それにしても危険事が付き纏う職業柄、俺は強化手術を受ける事で人間を越えた人間 ブーステッドマン 強化人間になつていたのだが、一般人なはずのアオイに呆気なく殺されたのはどういう事だ？ いや、シースナイフの性能が凄いのは知っているが、一般人が不意打ちの一撃を入れたとはいえ強化人間な俺の体勢を崩す事が可能なのか？ 高圧電流で動けなかったから、本当にそうなのか？

何故 ああ、いかんいかん。

俺の血に濡れるアオイの姿が印象的過ぎて、あの時の詳細が思いだせない。

……まあ、いい。

とにかく俺は殺された。斬殺された。

再生治療でさえ直せない様な致命傷を受けた。最後に見た光景が眼球に迫る剣尖だったので、唯一再生不可能な器官である“脳”をグチャグチャにされ、完全に死亡した事だろう。

ドリりと頭蓋と脳を切り裂かれたような感覚を最後に、俺の意識は、闇に溶けたのだから。

しかしながら話はそれで終わっていない。終わっていたら転生とか言い出さない。

一度は闇に溶けた筈の俺の意識は、気が付けば何ら変わる事無く確固たる個の存在として在ったのだ。

意識を失う前に死んだと確信が持てる光景を記憶しているのだが、死んではいなかったのか？ らしくない事だが、酔って夢でも見たのか？ と言う考えが一瞬脳裏を過り。否、それは違つと反射的に答えを出していた。

確かに俺は殺された。胸を切り裂いた刃の冷たさを、全身を駆け巡る高圧電流の痛みを覚えていて。あれは絶対に錯覚では無い。

なのに生きていて。何故だ、理由を知りたい。そう考えた俺は、やけに重い瞼を開けて、そしてそれを見た。見てしまった。

俺を覗きこむ、醜悪極まりない顔を。

それが、俺が転生したのだからと思つ事となつた、思い知らされてしまった決め手である。

ああ……と。すまん、なんか急に眠くなつたので、また、明日……。

死の闇では無く、疲れによつて生じた眠りの揺り籠に俺の意識は落ちていった。

“二日目”

パチリと目を覚ます。

瞼を開けた事で晒された二つの眼球で周囲を見回し、少しでも多くの情報を収集する。何故か頭が思う様に動かなかつたので、それほど多くの事は分からなかつたが、それでも大事な事柄は把握できた。

うん、どうやら本当に残念極まりない事だけれど、転生とかの話

は、やはり酔っぱらった末の夢では無かったようだ。

今現在俺が居るのは、どこその洞窟の中らしい。ゴツゴツとした洞窟の表面からは手が加えられた痕跡は見受けられず、自然にできたモノの可能性が非常に高い。

あと俺の上に毛布のように乗っているボロ布の感触がまた最悪だ。ゴワゴワしていて、ハッキリ言って汚い。

それに背中の中の土の感触が不快なのは気にかかる。小石が肌に食い込んでちよつと痛い。

とかは、ハッキリ言っただうでもいい事柄だったりする。

重要なのはココから。

俺の周囲には申し訳程度の布を纏っているが殆ど全裸でグースカと寝息を立てる、尖った耳に鷲鼻で緑色の肌をした醜悪な面の小人が多数居た。見える範囲ではその数三十。そして三十の内二十位は人間の赤ん坊のようなサイズだった。

と言うか、うん、小人は所謂小鬼ゴブリンです、本当に有難うございました。

……えーと、実はこれが昨日俺が転生したと思った決め手だったりする。

だって自分の手を動かして掲げて見れば、そこにあるのは周囲のゴブリンと同じ緑色をした肌の、小さな小さな赤ちゃんのような腕。鋭く尖った五指に黒い爪は、明らかに人外の物である。

自分の腕がそうなっていて、周囲にはゴブリンの群れ。人間なら襲われているだろうに、何も無い。

これこそ確固たる証明ではないだろうか。それに横で寝ているゴブリンの赤ん坊と似た腕は、顔を見なくても俺が周囲の奴等と似た

様な姿をしていると教えてくる。

どうやら俺は、ただの人間からESP能力者に進化し、さらに手
ブーステッドマン
術で強化人間にまでレベルアップした末に、人間以下の小鬼ゴブリンにまで
ランクダウンしてしまったようだ。

ちよつと本気で泣いた。

身体は思う様に動かないのは恐らく産まれたただからだろう。今
日はゴブリンの子供らしく、寝て過ごした。

これは決して現実逃避デハナイ。

“三日目”

転生してしまったのは仕方ないと諦めて、せつかく得た二度目の
生を力の限り生き抜こうと決意した。

思考の切り替えの早さは、以前の職場では必須なスキルだったか
らな。生き汚さもあそこで覚えたし。

それにしても、どうやらゴブリンという種はそこそこ成長が早い
らしい。

生まれてから三日目なのだが、寝て起きたら身体が急激に大きく
なっていた。寝る前が赤ん坊サイズだったのに対し、現在では小学
生低学年サイズなのだ。

いやしかしそれにしても、転生前より遥かに弱い肉体ではあるの
だが、今までが嘘のように身体に力が漲り、立ち上がるばかりかそ
れなりの速度で走れるようになったと言う事は、何とも嬉しい事か
思わずはしゃいでしまった。大人げないが、自由に動けないと言
うのはストレスが溜まって仕方が無かった。

まあ、この程度の事は生まれた瞬間から熾烈な生存競争を繰り広

げたりする自然界ではさして珍しい事でも無いんだらうけど。

人間などの文明を築いた知的生命体は外敵に襲われる心配が少な
くゆつくりと成長する、という選択肢が採れるが、弱肉強食の自然
界で暮らすゴブリンなどの種は成長が早くなければ子孫を残せない
のだらう。

まあどうでもいいことだと切り捨てて。

自分で動けるようになったので、今日は自分の身体がどんな事が
できてどんな事ができないのか知るために費やした。

この身体にある程度馴染むまで動き続けて、ぐっすり深い眠り
に落ちる。

寝所の快適化を要求したい。

“ 四日目 ”

ゴブリンに転生し、動けるようになって初めて狩りに出かけた。

と言うか、働かざる者食うべからず、みたいなノリで俺のように
産まれたばかりのゴブリン達に栄養たっぷり丸々と太った芋虫み
たいなモノ いや、案外美味いんだこれが をくれていたゴブ
リン（世話役）達が、お前等はコレから自分の飯は自分で獲らなく
ちやいけない、俺達も通った道だ諦めてくれ、とか言い出して配給
制度がなくなったので仕方なくだ。

生後四日目にしてハンティングに赴くのだから、自然界って厳し
いなあと実感させられる。

そんなこんなで、流石に一人 それともゴブと数えるべきか
それが問題だ では難しいと思うので、虚言甘言を駆使して獲得
した友達兼捨て駒であるゴブ吉くんとバディーで森を散策中だっ
たりする。

この世界のゴブリンって、基本莫迦らしいよ。

いや、騙す方^{コッチ}としては楽だけだね。

ああ、そうそう。ゴブリンの繁殖方法って同族同士でも勿論できるんだけど子供が産まれる確率が低いつて理由から、基本的には攫ってきた人間の“女性/雌”を犯して孕ますって何処のエロゲ設定？ だった事が判明している。

これは興味本位で寝所になっっている洞窟の最奥に行ってみた結果、宝物庫　と言う名のガラクタ置き場。錆びた剣とか落ちてました。持ち出しなんて今はできないけどね　の横にある一室にて、ポロ布を申し訳程度に纏ってほぼ全裸な数人の女性（美醜あつたが、ゴブリンよりは全員マシなレベル。美の子は他よりも酷い有り様だったとだけ）が、全身を穢す白濁した液体を拭う事も無く生気の抜けた、まさに死んだ魚の目をしていた事から知った事である。

全員何処ぞから攫われてきたのだとは簡単に推察でき、流石にどうにかしたいと思っただけと今の俺の力ではどうする事もできないのは分かり切っているので『南無』と合掌してから祈っておく。気休めでしか無いけども。

多分、誰かが今の俺の母親なんだろうなあー、と思っただけと鬱になりそうなので意識的に考えないようにしている。だからこの話はココまでにしておこう、お互いの為に。

初のハンティングは俺の指示通りに動いたゴブ吉くんとの連係プレーによって無事成功。

やっぱり一人よりも二人だよなと一人納得しつつ、しかし残念な事に獲物を勝手に喰おうとしたゴブ吉くんに対して、上下関係を心身にすり込む為に泣く泣く木の棒で全身を骨が折れない程度に打ち据えてから、そこら辺に転がし、俺は獲物の解体に移行した。

狩猟の初成果となった栄えある獲物は、茶色い毛皮の野兎、の額に二十センチ程の一角を生やさせた何かだ。

取りあえず今回の獲物は見た目から“ホーンラビット（仮称）”と呼ぶ事にして、その立派にそそり立つ角を根元からポキリと押し

折る。

この鋭さと大きさは人間では小さすぎるかもしれないが、ゴブリンとなった事で遙かに小さくなってしまった体軀には丁度良く、扱いは^{エストラック}刺突剣のように斬るのではなく突き刺すのがベストか。

【ゴブ朗は“一角獣の角（小）”を手に入れた！】

角を得た瞬間、何処かでなんかアナウンスが響いた気がしないで
も無いが、きつと気のせいだろう。

ああ、ちなみに今の俺の名前はゴブ朗である。初めて目を開けた
時に見たゴブリン（世話役の一人）が名付けた名前である。ゴブ朗
という名は甚だ本意ではあるが、以前の名を今の身体では使いた
くないので黙認している。

諦めつて肝心だよな。

角という凶器を獲得し、ついでに毛皮も剥ごうとしたんだけどや
っぱり角で剥ぐ事はかなり困難だったし、涎をダラダラと垂らして
醜悪な面を更に酷くさせつつやけにつぶらな瞳でジツと見つめてく
るゴブ吉くんの姿に流石に心が痛むと言うか、頑張ってみただけ最
終的には剥ぐのが面倒になったのでホーンラビットはゴブ吉くんと
半分に分けて毛皮も一緒にムシャムシャと食べた。

武器を手に入れられたり、新鮮な肉を食べたりと、実に有意義な
1日だった。

しかしそれにしても久しぶりの肉は美味かった。謎の虫も悪くは
無かったけどね、やっぱり肉だよ。

“五日目”

今日も生きるためにハンティングに出かける。上下関係をハツキ
リと理解させているゴブ吉くんは俺の指示通りに動き、前日の経験
もあってかすぐに獲物を得られた。

獲物は昨日と同じホーンラビットだったが、昨日のよりも二周りはデカイ大物だったりする。

今現在のゴブ吉くんの得物である木の棒だけだと少々危なかったかもしれないが、俺の得物は昨日のホーンラビットから得た角だ。そしてその角が想像以上の効果を発揮したのである。

ゴブ吉くんが注意を引き付けている内に、グサリ、と脊髄を砕いて心臓を角が突き抉った。荒っぽい使い方をした為に角の先端がちよつと欠けてしまったが、今回の獲物の角でチャラどころかお釣りがくるほどの戦果である。

思わず『角最強伝説』とか言っていた。

そして殺したホーンラビットは前日と同じように、ベキリと角を根元から押し折る。

【ゴブ朗は“一角獣の角(中)”を手に入れた!!】

再び何処ぞからアウンスが流れた気がした。

が、良く分からないので考える事を放棄し、コッチを見つめてくるゴブ吉くんと戦果を山分け。

ポリポリムシャムシャと肉や骨をかみ砕き、ゴクリと嚥下して、身体全体に漲る生命の鼓動を感じてから、俺は昨日そうかもしれないと思っていた事柄が事実であったと確信した。

どうやら俺は転生前のESP能力【吸喰能力^{アブソーブション}】を持ったまま転生したらしいのだ。

つまり能力を継承してニューゲームって所か。スタートの時点で酷くマイナスだったけどね。

ちなみにESP能力とは数世紀も前に人類が宇宙に進出した頃より、一〇〇〇人に一人の確率で生まれるようになり始めた進化した人類と言うべき【超能力者】が持つ特殊な能力の事だ。

ただ進化した人類と言っているが、その進化は一代限りな事が多

く、ESP能力者の両親の下にESP能力者が絶対に生まれる、なんて事は無い。確率は他よりも高いのは事実だが、不思議な事に絶対ではない。

まあ、宇宙人とコンタクトし、普通に共生している時代なので昔と違い現在ではESP能力者は迫害される事も無く、能力はただの個性として認識されている。能力を抑制する装置が市販されている事も大きいだろう。

で、俺のESP能力【アブソープション吸喰能力】は、【サイコメトリー接触感应能力】とか【イコキネシス念動力】や【テレポーション瞬間移動能力】などと言ったかなりメジャーで一般的な能力とはかけ離れている。

簡単に言えば、単純に鉄だろうが黄金だろうが口にしたモノはどんなに硬くてもバリバリと喰えて、喰えば毒性の物も俺にとっては無害なモノに再構築できて、そして喰えば喰ったモノが持っていた何かしらの能力やパワーを一定の確率で得られるって能力。

どういった原理で働いているかは俺自身にも不明だ。まあ、そう言った能力と言う事で納得していて欲しい。超能力の原理を問う事なんてナンセンスだろ。

ちなみに、能力とかを得るためには何でもかんでも喰えばいいと言うモノでは無かったりする。喰う物にもどうやら条件があるらしく、生物の場合は鮮度が重要になってくる。

殺されて最大十二時間後まで。それが生物を喰った場合に何かしらを得られるタイムリミットである。

あとは同じモノを喰えば喰うほど何かしらの能力を得やすくなるし、脳や心臓とか、獲物のパワーが集中している部位を喰えばより確率は上がる。特殊な能力だけでなく膂力や治癒能力に生命力などと言った身体的な強化もできる。

あと俺より強い生物を喰えばほぼ間違いないでそれが持つ能力を獲得できる。そして同じ系統の能力を持つモノを喰えば、既に獲得し

た能力を強化する事だつてできる。

つまり【吸喰能力】は単体ではそこまで強い能力ではないが、喰えば喰うほど強くなっていくんだなこれが。当然限界はあるけど。

ま、そんな能力に目覚めた俺は能力を強化する為に、転生前の俺は災害指定生物を殺して喰ったり、ESP能力を犯罪に使用していた悪者をとつ捕まえて肉体の一部を“喰う”事で多くの能力を持っていたんだけども。

しかし残念な事に、それらは全部リセットされた模様。生き残るのに便利な能力が幾つもあったので、リセットされたのは惜しい。

だが【吸喰能力】^{アブソープシヨウ}があるだけで十分過ぎるほど幸運だったと思うし、食人とかの経験（初めて喰った時に何とも思わなかったので大昔に調べた結果、【吸喰能力】は忌避感とか麻痺させている模様）があつたからこそ今もこうして平然と謎の虫とかホーンラビットを何の躊躇なく喰って生きながらえているのだから、リセットされたのは悔しいが取り返す事が可能な事ではない。

生きる上で喰う事はとても重要な事なので、常識とか倫理とかこの際無視の方向で。

で、今回喰ったホーンラビットから得られた能力は【脱兎】^{アビリティ}。どうやら逃走行為を取ると、逃げ足上昇に逃走確率上昇、環境適応能力上昇などのボーナスが発生する模様。

……なんでホーンラビットは逃げずに俺達に真つ向から突っ込んできたんだろうと首を傾げながら、その後二匹のホーンラビットをとつ捕まえて喰らう事に成功する。

腹が膨れて気分良く寝た。あとゴブ吉くんの俺に対する信頼度が急上昇中のようである。

弱肉強食の自然界で、ゴブ吉くんが俺を自分よりも上の存在だと認識しているからだろう。

“六日目”

どうやら普通の生まれただけのゴブリンは、ホーンラビットにすら負ける弱者である模様。

いや、今日まで木の実を主食にして生き延びていた（と言ってもまだ日はそんなに経ってないけど）ゴブ美ちゃんがそう教えてくれたんだ。

ゴブ美ちゃん、と名前に美がついてるけど決して綺麗では無いので悪しからず。他のゴブリン（有象無象）と同じ醜悪な面デスよ、ほんのちよつとはマシですがそれほど大差は無し、ってか俺では大雑把な区別しかできないし。

俺？俺も似たようなもん。近くの川で身体洗うついでに確認しました。

まあ、ゴブ美ちゃんによると他のなんて比べ物にならない位美形らしいけど、比べてるモノがモノだし、ゴブリンにモテてもなあー。それにゴブリンのイケメンって言われても素直に喜べない、てかゴブリンのイケメンってなんだよってレベル。

ちよつと遠い目してみたり。

あ、ゴブ吉くんは平凡クラスらしいです、良かったね。

とと、話を戻すが、生まれたばかりのゴブリンは基本的に弱く、だからこそココでは生まれつき他の個体よりも強い奴や運がいい個体、知恵がある個体だけが生き残るようになっていっているらしい。

選別してる訳ですね、本当の仲間になれる程度の能力がある者だけが生き残る様に。本当に世知辛い。

で、ゴブ美ちゃんによると、既に何人 正確には、何ゴブ？
だって人じゃないしなあ かがホーンラビットの角の犠牲になっているとか。

正直その話を聞いて、『えーマジかよ』と思った。と言うか口に出してたけど。

だってさ、ホーンラビット（平均サイズ）って本当に野兎をちよつと大きくした程度のサイズなんだよ。それに体長はともかくとし

て、二足歩行を生かして頭上から攻撃できるゴブリンが逆に殺されて喰われるとか……ああ、有りうるかと納得した。

だって他の奴ら、木の棒を使うとかって知能すらなかったし。殴る蹴るの暴行が一般的だったし。

素手で立ち向かえば、そら確かに殺されるかもなー。ホーンラビツトって、角が武器だし。馬鹿が無手で真正面はきついかぁー。あ、あと小さい体躯も原因ではあるかも。下から腹部を角でグサッと。

あ、でも最近では俺とゴブ吉くんの真似して木の棒を装備した、ちよっとは聡いゴブリンもチラホラと見かけるけどね。

その日は情報を教えてもらったお礼にゴブ美ちゃんを加えた三人でハンティング。

ホーンラビツトマジウマー。

“ 七日目 ”

今日は雨だったので、巣穴の洞窟でまったりと作業中。

カツンカツンと音を響かせながら、昨日河原で見つけた黒曜石の様な謎鉱石に大きめの石を打ちつけて研磨中。解体用のナイフモドキの製作である。

いや、そろそろ毛皮で服が欲しいかなぁーと。ボロ布から卒業したいが、角じゃ切るのに適してないしね。

音が五月蠅いのかそれとも興味を引かれるのか、同時期に生まれたゴブリン達が近づいてきたが俺が無視し続けると大半が散っていった。邪魔だからよし。

年上のゴブリン達からは何故か微笑ましいモノを見る視線を向けられる。訳が分からん。

まあ、ナイフモドキも昼を少し過ぎた位で三本も製造する事ができたので今日は良しとしておく。と言うか、両手がちよっと痛くなっていたからだが。

しかしナイフモドキを造るのを止めた途端暇になってしまったの

で、今度は俺の作業の様子を飽きることなくジッと見ていたゴブ吉くんとゴブ美ちゃんの二人　いや、次からは人ではなくゴブで数えよう　を近くに呼んで、ハンティング時のフォーメーションについての作戦会議を開いた。

あーだこーだと意見を飛ばし　殆ど俺の独壇場だったけど、ゴブ吉くんよりもゴブ美ちゃんの方が頭がよくて偶に意見を出している。ゴブ吉くんはうんうんと頷くだけ、莫迦だから　っていると、そこに一際皺くちなゴブリンが近寄って来た。

このゴブリンこそゴブ爺である。この【小鬼の集落】ゴブリンコミュニティ内最高齢のゴブリンで、ご意見番みたいな地位についていて、そして何より、俺にゴブ朗と名付けた爺さんだ。

作戦会議は一旦止め、今度はゴブ爺に色々と話聞く。いや、ゴブ爺は無駄に長生きなだけはあって物知りなので、こう言った機会は逃したくない。

まあ、二十年と少しを生きただけで老人と呼ばれるようになるのだから、この身体もそう長生きできないらしいけどね……。ハハハ。

気を取り直して。

ゴブ爺にはこの世界の事とか、レベルや存在進化ランクアップの法則　いや、なんかそんなもんがあるらしいよ　とか、何故この洞窟には俺達のように生まれたてのゴブリンと、ゴブ爺のようにとまでいかないがそれなりに高齢なゴブリンランクアップしかいないのか、を教えてください。

世界の話やレベルや存在進化ランクアップとかは追々語るだろうから置いといて、まずはこの洞窟に住むゴブリンの話しよう。

どうやら若い衆　俺の親に当たるかもしれないゴブリン達は森の外に出稼ぎに出ているそう。出稼ぎってつまりは略奪ですね分かります。

え、ホーンラビット程度に殺される程ゴブリンは弱いんじゃないかって？　いやいや、それは産まれたてのゴブリンがであってだな。確かにゴブリンは種族として弱者だけど、だからこそこの森で産ま

れたゴブリンは動けるようになった次の日から自活するように躑居られて、今の俺のように自給自足していく過程で木の棒を使ったり石を投げたりとかして、生きる術と悪知恵を文字通り命がけで習得させるんじゃないか。

弱いモノは死に、強いモノだけが生き残るってシンプルかつ厳しい自然の掟ですな分かります。

ホント容赦なくて泣いた。

まあ、今回は早々にバディー組んだり木の棒を使用してホーンラビットを初っ端から狩っていた俺達を模倣する輩が多かったので、生き残る個体数は他の時よりも多いとか。

ナルホドナーと頷きつつ、そんな歳になってもゴブリンと言う種は子孫を残す為なのかアツチの方は衰え知らず（死期が近いからかもしれないけどさ）らしく、なんだかゴブ爺の腰布の形が変化したのを確認。

オエつと吐きそうになったが、無理やりに話を打ち切って早々に視線を逸らす。見続けられるかあんなもん。

んで、話を終えたゴブ爺はホクホク顔で欲望を発散するべく、洞窟の奥に向かっていった。

しばらくして、か細く弱々しい悲鳴が聞こえた。

捕まえられた女性達に『南無』と再度合掌しつつ祈りを捧げる。

繰り返すが今の俺では助け出すのは無理なので、いつか楽にしてやりたいものだ。

流石に、あの様子では生きている事こそが酷だろう。

それくらいの情けは俺にだってある。

“ 八日目 ”

俺とゴブ吉くんとゴブ美ちゃんのとリオでハンティングに出かけた。

それにしても、数日の狩りで武装（と言っていいのか分からない

程粗末なモノだが）はかなり充実してきた。

俺は幾つかあるホーンラビットの角の中から大きいモノを二つ選び、片手に一つずつ持つ、二刀流ならぬ二角流。んで、もしもの時の為の保険として残りの角はそこらの蔦を使って括りつけ、隙間だらけの簡単な胴鎧として装備。角は案外硬いので突きなど一点突破系の攻撃を防ぐのは難しくても、打撃など大きめの攻撃に対しては効果を発揮してくれる。保険としては、十分だと思われる。

ゴブ吉くんは胴体程の太さがある木の棍棒と木の胴鎧だ。木の棍棒は流石に太すぎて両手でも持てなかつたので、持ち手を角でガリガリと削る事で細くしてあげている。いや、三ゴブの中で一番の力持ちで莫迦だから、鈍器で思いつきり殴るスタイルは彼に最適なのだよね。

ゴブ美ちゃんはホーンラビットの皮の切れ端と頑丈な蔦で造つていたスタッフ・スリングスリング 投石器スリングに棒を取り付けて射程距離を強化したモノ を持たせてみた。そこらに転がっている石を弾にして、鳥などに対して遠距離から攻撃できる後衛スタイルだ。胴鎧は時間の関係上無しだが、時間があれば造つてあげよう。

ちなみにボロい腰布は標準装備です。新しい服が欲しいです。

しかしうん、やっぱり人数が増えると楽だ。

近接前衛フォワードのゴブ吉くん、中距離型ミッドレンジの俺、後方支援バックアップのフォーメーションは効率良く機能し、今日の戦果はホーンラビットの他にも新しい獲物を得られた。

体長六〇センチ、直径六センチ程の体軀をし、黒い鱗に斑模様が特徴的な毒蛇“ナイトバイパー（仮称）”が三体。

七色の色彩を持つ翼という目立って仕方が無い、蝙蝠に似ているが恐らくは別の生物だろう“ナナイロコウモリ（仮称）”を一体。

狸とアルマジロを足したかのような、背部が硬い甲殻で覆われて硬い守りを見せた“ヨロイタヌキ（仮称）”を二体。

そして定番になってきたホーンラビットの個体数は今回二。文句

なしの結果だ。

しかしそれにしても、ジュールジュールと涎を垂らしながらつぶらな瞳を向けてくるゴブ吉くとゴブ美ちゃんはどうかしろと言いたい。いや、その気持ちは分かるんだ。

他のゴブリンのように得た獲物はその場で喰うのではなく、俺の方針が使える部位は武装に流用したいって事で、解体という、普通のゴブリンの食事よりも一手間も二手間も多くかかる。

それに解体する時は纏めてやるので、ハンティング中は栄養補給していないし。

だから腹が減っているのは分かるのだ。

が俺はそれを黙殺し、作業に移った。ガクリとうな垂れる気配を感じる。はあ、仕方ない。

何時ものようにホーンラビットの角を折り、角を手に入れてからその肉体は先にゴブ吉くとゴブ美ちゃんに投げ渡す。本当は毛皮が欲しかったが、涎たらしながら待つゴブ吉くとゴブ美ちゃんの姿はあまりにも不憫そうだったので。

しかしゴブ吉くとゴブ美ちゃんは何故かそれを受け取りながら、キョトンとし、小首を傾げている。

……ああ、喰うなと言っていたのに渡されたから、不思議がつているのかと思い、今度は声に出して言った。

少し時間が掛かるから先に喰えと。

しばらく悩んだ後、ゴブ吉くとゴブ美ちゃんはガツガツムシャムシャと肉を粗食する。血液が二ゴブの口周りを赤く汚していく。

それから目を逸らし、俺はまずヨロイタヌキの甲殻を剥がしにかかった。ホーンラビットの角を使っても破れなかった甲殻は、鎧として使うのに申し分ないだろう。

ココで昨日製作した黒曜石（のような鉱石）で造ったナイフ（モドキ）がさっそく役に立つ。

切れ味は抜群、とまではいかないものの、角よりは断然楽に解体できた。解体して分かった事だが、どうやらヨロイタヌキの甲殻は

皮膚が硬質化した結果そうなったものであるらしく、一体分の甲殻を剥がすには全身の毛皮も丸ごとの方が楽に解体できるようである。少々苦戦しながら全身の毛皮と甲殻を剥がし終わると、再び謎アナウンスが聞こえた。

【ゴブ朗は“甲殻獣の皮付き甲殻”を手に入れた！！】

何だこれとは何時もながら思う。が、まあいいかと放置する。

まだ残りがあるので俺も作業の合間に栄養補給するべく、ヨロイタヌキの心臓と脳、それと右足を干切ってバリバリ喰う。他の部位はゴブ吉くとゴブ美ちゃんにあげた。まだ肉は有るしね。

それにしてもヨロイタヌキの肉うめー。コリコリとした歯応えあってウメー。噛めば噛むほど旨味が出てくるようだ。

あ、ちよつとだけ甲殻も齧ってみよ。

【能力名【アビリテイ甲殻防御】のラーニング完了】

ちよつと齧ったらラーニングできた。先に心臓と脳、それと右足を食べたのが良かったのかもしれない。

ちなみに【甲殻防御】ってのは、生物の甲殻で出来たモノで防御すれば防御力上昇に防御確率上昇、致死攻撃妨害確率上昇って効果が発揮されるらしい。うん、なかなかいいアビリテイだ。儲けた儲けた。

気分が良くなり、やり方も分かったので先ほどよりも短い時間でもう一体のヨロイタヌキを解体し終えた。以前の職場で生物を解体する事には慣れているので、コツさえ掴めば早いモノだ。

今度は半分くらい肉を食べ、残りをゴブ吉くとゴブ美ちゃん達に投げ渡し、もう一度甲殻をちよつと齧って【甲殻防御】のレベルを上げておく。

あ、レベルって言っても明確な表示は無く、分かり易くレベル

って言ったただけだから特に意味は無い。アビリテイの効果はさつきよりも強くなつたって思つておけば十分。

次はナナイロコウモリの解体に移る。七色の綺麗な翼を根元から切り離し、血を吸う機能が有りそうな牙を引っかく。後は取りあえず皆で肉を分けて食べた。

ナナイロコウモリの肉は菌心配のあつたヨロイタヌキの肉とは違って非常に柔らかく、うん、美味である。と言うか、ゴブリンになつてから喰う獲物全部美味いんだけど。種族的な味覚がそうなんのかねえ？ どうでもいいけど。

あと、残念ながら能力はラーニングできなかつたが、身体能力はちよこつとだけ強化できたらしいと、肉を喰つて感じた身体の充実感で判断する。

ESP能力【アブソープション吸喰能力】は【甲殻防御】などと言つた能力アビリテイだけでなく、膂力とか防御力とか生命力と言つた身体も強化してくれるので本当に有り難い。

……それにしても、ESP能力って魂由来の能力なのかな？ どこぞの高名な学者様の論文では『特殊なウイルスに感染し、適合した者が能力を発症する』とか言つていたような、そうでないようなと小首を傾げるが真偽を確かめる術が無いので、益の無い思考は一旦放棄。

最後に今回のメインディッシュだろう、三体のナイトバイパーの解体に取り掛かる。

取りあえず黒曜石（のような鉱石）で造つたナイフ（モドキ）で首を切り落とそうとしたが、蛇皮がやけに硬くて一本刃が欠けてしまった。また削り直したとうな垂れつつ、何かに使えるなと思つた蛇皮をビリビリと引き剥がす。

頭部を切り落として皮を剥いだ胴体は、一ゴブ一匹と丁度良かった。

喰った。

かなり美味かった。

うん、これは焼いて酒をぶっかけたらそれはもう絶品のかば焼きになるんだろうな、と一口目から思うほどに美味かった。想像しただけで唾が溢れそうになる。

ホーンラビットやヨロイタヌキのコリコリつとちよつと硬めの肉も美味かったし、ナナイロコウモリの柔い肉も美味い。が、ナイトバイパーの肉はそれらを軽く上回るのだ。

その美味さに思わず作業の手が止まってしまい、三ゴブ揃ってガツガツと肉を喰い漁る。

【能力名】アビリティ【赤外線感知】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【蛇毒投与】ヴェノムのラーニング完了】

【能力名】アビリティ【猛毒耐性】トランス・ヴェノムのラーニング完了】

【能力名】アビリティ【気配察知】イビル・アイのラーニング完了】

【能力名】アビリティ【蛇の魔眼】のラーニング完了】

喰い終わると、五つのアビリティを習得できてしまった。

どうやらナイトバイパーは今の俺よりも格段に格が上だったらしい。

これは【吸喰能力】アソープションが自分よりも強いモノを喰えば何かを得られる確率が非常に高くなる性質上、まず間違いないだろう。

と言うか五つも得られたのってホント初めて。ゴブリンが弱い種族だからかね、と推測してみる。

いや、それにしても今日は満足いく成果になった。まだ残っている毒牙は道具として使ってもいいのだが、今回獲得した毒に対する対抗手段とも言える【猛毒耐性】トランス・ヴェノムがないゴブ吉くんにごブ美ちゃんでは、掠っただけで瀕死になってしまいうに違いない。

最悪即死だ。

それに俺は今回得たアビリティ【蛇毒投与】ヴェノムは、俺愛用の角のよ

うに尖った部位を持つ物の先からある程度意図した性質の毒を分泌できるようになるモノである。触れていないとこのアビリティは発揮されないが、この毒牙を使うよりも遥かに使い勝手がいい。

だから万が一という事もあるので、今回は能力強化の為に切り落とした三つの首は俺がポリポリと喰う。こうした方が安全だしね。

うん、毒（【猛毒耐性】と【吸喰能力】の両方で完全に無害化されている）のピリピリとした刺激がより一層美味である。

しかし、羨ましそうな視線を向けるなニゴブとも。これ、君等が食べれば死んじゃうよ？

“ 九日目 ”

今日は雨だった。土砂降りである。

なので昨日獲得した素材を使い、新武器の製作に勤しむ。

昨日の帰り路に、以前ゴブ爺に教えてもらった近くで採取できる針のような【鋼草】^{ハガネツウ}と、頑丈な紐のような【細蔦】^{ホソツタ}は既に確保済みなので、ヨロイタヌキの皮付き甲殻とナイトバイパーの皮をチクチクと裁縫していく。

最初に造ったのは俺の胴鎧だ。ココでヨロイタヌキの甲殻を前後に使用しても良かったのだが、取りあえず今回は背面が甲殻でガツチリと、前面はこれまで背面に使っていた分のホーンラビットの角を使う事ができたので、隙間を殆ど無くす事ができた。

これでやっとボロい腰布から服装がランクアップできた気がする。以前の胴鎧？ いや、あれ蔦で角括りつけたただだから服とは言えんだろ。それにボロい腰布はデフォで装備してたし。

次いで木で正方形を拵えて、残った一体分の甲殻をつけてみた。まだまだみすばらしいが、これで頑丈な盾の完成だ。これはゴブ吉くんにプレゼント。

いや、俺二角流だし、この盾俺が使うには大きすぎるんだ。だから前衛のゴブ吉くんが持つべきだろうよ。それに最近では片手で棍

棒振り回せるようになってきたしね、片手を暇にさせたままにするには勿体ない。

渡したら、大層喜んでくれた。自分の胴体と同じ太さの棍棒と、ヨロイタヌキの甲殻で造った盾と木の胴鎧を装備したゴブ吉くん。うん、なかなか様に成っていた。

次はゴブ美ちゃんのお鎧だ。使用したのは残っていた蛇皮とナナイロコウモリの羽、それと余った角を少々。それらをチクチクと縫い合わせて、何だか民族衣装的な胴鎧が完成。ナナイロコウモリの羽を使っているので色鮮やかだが、案外翼膜は丈夫らしく弾力性がある。角は急所を護る様に配置しているので、最低限度の防御効果は期待できる。

あとナナイロコウモリの牙で首飾りを造ってみた。いや、ちょっと少な過ぎる様な気がしたからオマケしたのだ。

完成品をゴブ美ちゃんにプレゼント。コツチも大変喜んでくれました。

そうだな、今度造る時は俺は武器、ゴブ吉くんは防具、ゴブ美ちゃんは弓とかかがいいだろうなあ。

あ、今日の食事は赤ん坊時代（と言っても数日前だけど）に食べていた、芋虫みたいな奴でした。これ、洞窟で獲れるらしいです。

案外美味しいのだから、この虫も侮れないよね。

ラーニングはできないけどさ。

“ 十日目 ”

狩りに出かけた。

今日の戦果はホーンラビットにナイトバイパー、それとヨロイタヌキだった。

もう少しで何かがラーニングできそうなナナイロコウモリが獲れなかったのは残念だが、仕方ない。そう言う事もある。

あ、ちなみに他にも色んな生物に遭遇してるんだけど、今の俺達

じゃ勝てなさそうな奴等が多く居るので、それらを避けてたら似た様な獲物しか取れないんだよね。

まあ、着々とレベルが上がってるし、いつかは狩れるだろうけど。ああ、今日は狩りも終わったんでレベルとかの話をしておこう。

レベルってのは、早い話が個体の強さを分かり易く表示したモノだ。どういう法則かは分からないが、意識して眉間に皺を寄せれば視界に数がぼんやりと浮かぶんだ。

レベルは最大で一〇〇まで表記されて、それ以上数が上がる事は無い。ちなみに今の俺のレベルは86とゴブリンにしてはかなり高い、らしい。

まあ、最初から怪我一つせずに格上のナイトバイパーとか殺して喰ってりや嫌でも上がるってなものだが。

あと、どうでもいいかもしれないけどゴブ吉くんは78、ゴブ美ちゃんは55である。俺達は順調に強くなっている。

とは言っても種族がゴブリンのままだと、例えレベルが一〇〇になったとしても他種族からすれば雑魚扱いされる事が多いらしいから、今はレベルとかどうでもいいんだけどね。

しかしこの世界の面白い所はレベル以外にもまだまだある。

ゴブ爺によるとレベルの上限である一〇〇にまで到達し、普通はそこで成長は止まる。しかしそこで止まる事無く成長できる素質がある個体は【存在進化】ランクアップする事が可能なんだとか。早い話が、素養のある奴は上位個体に進化し、更に強くなれるって事だな。

今の俺が順調に成長し続けたと仮定すれば、大体【小鬼】ゴブリン 【中鬼】ホブ 【大鬼】オーガと言った感じに進むだろう。

これが一般的なルートだからだ。

とは言えオーガ以上の個体もまだまだ居るし、この他にも成長するルートは存在していて、どういった種族に昇格するのはどういった行動をしてきたかによって変化するらしい。

例を出せば、

大鬼オーガにまでなり、今まで好んで獲物の生き血を啜り、一定以上の
膂力オーガと知能、そして何より高いプライドを持つ者は【吸血鬼ヴァンパイア】に。
大鬼オーガにまでなり、斧や大剣といった重量級の武器を好んで使用し、
尋常ならざる膂力と回復力を有する者は牛頭の鬼である【牛頭鬼ミラタウロス】
に。

中鬼ホフ・ゴブリンにまでなり、今まで屍の腐った肉や体液を好んで喰らい続け、
やがて【靈魂】まで喰せる様になった者は【死食鬼グール】に。

中鬼ホフ・ゴブリンにまでなり、剣や刀や槍など特定の武器の扱いに長け、一定
以上の知能や技量を有する者は人間に限りなく近く、そして全く別
の存在である【半血剣鬼ハイフ・ブラッドテイロード】など様々な分類に分かれる【鬼人ロード】系の
種族に。

と言った具合で、取りあえず素質があれば【鬼】系統に属するモ
ンスターにレベルを上げれば成れるらしい。

生物の進化の過程としてはハッキリ言って異常としか言えない法
則だが、現にあるのだから否定なんてではさすがないし、弱肉強食
の世界で生きていく俺としてはかなり助かる話だ。

ま、ゴブ爺が言うには普通【存在進化ランクアップ】なんざ早々できないらし
いけどね。何処まで行けるか挑戦してみたいって気持ちもあるので
問題ないが。

それにしても、仮に俺が大鬼オーガにまでなれたとして、どのような進
化をするのだろうか。

【吸血鬼ヴァンパイア】になるにしては、プライドは低いだろうし。

【牛頭鬼ミラタウロス】になるにしては、斧とか重量系の武器よりも刺突系の
比較的軽い武器を俺は好んでいるし。

【死食鬼グール】には、なりたくないなあ。

あ、でもゴブ爺が言うにはグールはヴァンパイア同様アンデッド
属性も兼ねるから、様々な魔術を駆使する【死者の王リッチ】とか【首な
し騎士ラバン】とかにも成れる可能性はあるらしいけどね。

アンデッド系のモンスターになりたいのなら、ヴァンパイアにな

るよりは楽に成れるだろう。でも肉の身体を持ってないのが難点だけ
どなー。

一番在りえそうなのは、様々な武器の扱いに精通する【鬼人】系
かな。

ま、まだまだ先の話なんだけどねえ。

話し疲れたし、夜になったので寝た。

十一日目〜二十日

“十一日目”

今日のハンティングの成果は、獲物がナナイロコウモリ一種類だけなのだが、その数何と三十体と大量だ。

いや、今日は散策中に他の洞窟を発見したので何かあるかなーと思いつくと、薄暗く大きく開けた空間の天井に彼奴等がびっしりと……。

うん、ナイトバイパーを喰って得た【気配察知】と【蛇の魔眼】イヴァイル・アイの両アビリティがあつて本当に助かった。

【気配察知】によつてナナイロコウモリの群れの動きを先読みしなければ、【蛇の魔眼】イヴァイル・アイで格下のナナイロコウモリの機動力を制限していなければ、俺は兎も角としてゴブ吉くんかゴブ美ちゃんのことちらかか指示が間に合わなくてまず間違ひなく死んでいただろう。いやほんと、格下相手でも十倍以上の戦力差は死を覚悟したね。戦争は、やっぱり物量だよなと再認識。

ま、だけど、俺達三ゴブは四肢欠損などの大きな怪我をする事も無く生き残つた。

切り傷などといった軽傷は数え切れない程あるが、俺とゴブ美ちゃんは新しい防具を、ゴブ吉くんは堅牢な盾を持っていたから生き残る事ができた。

いやいや、やっぱり武器の更新は大切だなあ、と思つたねホント。ま、そんな苦労話は置いて、大半は逃げられたものの、俺は殺した三十体のナナイロコウモリの翼と牙を解体することで確保し、余つた肉を喰らつた。

うん、口に入れたら蕩ける様なこの肉は、やっぱり美味しいなあ。ポリポリバリバリとナナイロコウモリを一ゴブにつき十匹と、量が量だけに腹は膨れました。

【能力名】アビリティ【反響定位】エコーロケーションのラーニング完了
【能力名】アビリティ【血流操作】バンブ・アップのラーニング完了
【能力名】アビリティ【吸血搾取】ヴァンパイアフィリアのラーニング完了

その結果、三つのアビリティを得られた。そりゃ、これだけ喰えば手に入るってなもんです。

あと、ナナイロコウモリから獲得できるアビリティはこれで打ち止めみたいだから、これ以上は身体の強化とアビリティ強化、あとは腹の足しにしかない模様。

ナナイロコウモリが弱いからか上昇率は悪いので、今後は必要に駆られて喰う事はないと思われる。まあ、美味いから喰いたくなったら喰うだろうけど。

それにしても、この段階で巢を発見できたのはよかったよかった。どのアビリティも役立つそうだしね。

視覚外の周囲の地形や動物物の把握に適した【反響定位】エコーロケーションとか、不意打ち対策に良さげだし。

生存競争の激しい自然界じゃ、大いに助けになる事だろうと期待してる。

“ 十二日目 ”

普段通り喰い物を得るべく、ハンティングに赴く。

今日もホーンラビットにナイトバイパー、ヨロイタヌキの狩猟に成功し、日が暮れたので今まで通り洞窟に帰還する。

人間と違ってゴ布林にはデフォルトで【暗視】ダークアイが備わっていて、闇は決して敵ではない。

だから夜間でも多少見難くなるだけで狩猟活動を続けようと思えば続けられるんだけど、夜はゴ布林よりも凶暴で強靭な種族が多く活動する時間帯なので、危ないんだよね。

ほら、ゴ布林って基本弱者だから。

赤毛のヒグマみたいな“レッドベアー（仮称）”を筆頭に、額に縦に並んだ三本の角を生やして茶色い鱗で全身を包んだ馬みたいな“トリプルホーンホース（仮称）”とか、六十センチくらいのサイズで鋼鉄以上に硬いだろう黒い甲殻に刻まれた黄色いラインが特徴的な“オニグモ（仮称）”とか、ゴブリンと同じく雑魚キャラみたいだけど何気に【物理攻撃無効】っぽいアビリティ持ってそうなの“グリーンスライム（仮称）”とか、まだ勝てねーからね、うん。全然勝てる気しねーから。俺でも普通に殺される可能性の方が高いから。

多分今程度の毒レベルだと短時間で無効化されるに違いない。そんな感じのヤバイ奴等が夜になると動きだす訳で。

まあ、だから夜は出歩かずに帰るだけだね。

んで、洞窟　ココはそれなりに安全な場所にあるっぽい　に戻った俺は、疲れたから明日に備えて寝てたんだ。

そして寝込みを襲われた。

常時発動している【気配察知】のお陰で寝込みを襲われてもギリギリで回避する事ができたから俺に怪我はなかったのだが、相手がちょっと問題だった。

主犯が俺と同じ年代のゴブリンだったからだ。

数は六、最近俺達の真似をして木の棒を装備しだした、ちょっと知恵のあるゴブリン共だ。

俺は不意打ちが失敗した事に驚いていた奴等の隙を逃す事無くいや、木の棒装備で寝込み襲われたら同族でも容赦しちやいけないうよ自然界　、寝る時何時も傍に置いている愛用の角を一本手にし、反撃に出た。

結果を言えば、当然返り討ちにしました。

その過程で角の先端から【蛇毒投与】^{ヴェノム}の効果で滴る毒液の配合調整をミスって一ゴブ殺しちゃったけど、仕方ない。あっちに原因があるのだから、これは不可抗力である。

他は配合調節が成功した筋弛緩系の毒で動きだけ奪って、何時ぞやのゴブ吉くんのように死なない程度にあいつ等の木の棒で全身を打ち据えてから、そこら辺に転がしておく。

襲ってきた事情は明日聞けばいいし、注入した毒も致死性のモノではないのでほっとけば明日までに治る。

ゴブリンも一応、野生だから自己治癒能力はそれなりに高いみたいだしさ。

一ゴブは既に手遅れだけど、これは繰り返すが仕方が無い。

ただそんな騒ぎがあつては、グースカと寝ていたゴブリン達も起きだし、洞窟全体がざわつきだしたのも当然だ。

何か言われるかとも思ったけど、ゴブ爺を筆頭としたゴブリン（年上連中）はそれも弱肉強食だと思ってるからか、特に何も言わなかった。微かに哀れみの視線を死体となったそれに向けるだけだ。

同族殺しの俺は処罰が科せられるかとも思ってたから、お咎め無しはありがたいが。

だけどゴブ美ちゃんがそれに納得してくれなかったし、何より怖かった。

いやいや、ゴブリンの骨格構造的に腕はそんな方向に曲がらないからね、折れちゃうよ。首はそれ以上回らないからね、千切れちゃうよ。とゴブ美ちゃんの身体を後ろから拘束しながら宥めつつ、襲ってきたゴブリン達を助ける事が今宵最も労力を費やした事だつてのが笑えない。

ああ、ちなみにゴブ吉くんはグース力寝たままだったり。いや、寝る子は育つって言うし、事実体格は同年代で一番デカイ。俺より十センチは背丈があるだろうか。

前衛として頼りにできるから、今回の騒ぎがあっても起きなかったのは図太い神経をしているからだと思っておこう。俺としても、暴走する奴がもう一ゴブ増えるのは歓迎できないしな。

そんなこんなで興奮するゴブ美ちゃんを落ち着かせ。

配合調節を施した睡眠性の弱毒を爪先から出し、それでゴブ美ちゃんの意識を飛ばしてから寝所に運んだ。

その後は自分の寝所近くに血に濡れた同族の死体を放置するのも気分が悪いので、と言うか臭くなるので、俺はそれを外に持って行く。

昨日ナナイロコウモリから獲得した【バンブ・アップ血流操作】によって強化された筋力は今のレベルでも普段の二倍くらいの力が捻りだせるので、同じくらいの体格がある死体の運搬も案外楽勝で片付いた。

ゴブ爺が言うにはちよつと離れた所に置いてくれば他のモンスターとかが喰うらしいので、置いたら速攻で逃げるとのこと。

しかし俺はある程度の所まで運ぶと、隠れて喰ってみました。興味あつたんで。

感想は、うん、美味くはないが、不味くも無いって感じかな。

この体になって初めて美味いつて思わなかった。それにちよつと小首を傾げつつ。腕一本でもういいかと思つたので、予定通り放置。ま、そんなわけで、今日は疲れたから寝た。

“ 十三日目 ”

今日は森をちよつと奥に進んだ場所にある山を散策中、ピッケルを担いで山を歩いていた豚面の亜人種を発見。肌の色は茶色くて、下っ腹が出ているが、筋肉の形がうっすらと分かる程度には鍛えら

れた体躯。それにゴブリンよりも着ている服はほんの少しだけ上等で、上下揃っていた。

それにちよつとだけムカつく。ゴブリンの初期装備はボロい腰布だけだつて言うのに。

つか腰にぶら下がっている逸物が大き過ぎて、服から微かにはみ出して見えているのはどうにかして貰いたい。

切り落としたくなるんだよね、うん。

恐らくだが、発見したのはゴブリン同様有名なモンスター【性欲豚】だろう。

体格は小学生低学年レベルなゴブリンと違い、身長が百七十かもしくはそれ以上あるだろうか。いや、今の身体で見たらオークデカイよマジで。

下手したら四・五十センチ近く差があるだろうし。

しばらく観察した結果、発見したオークは俺なら一対一で真正面からぶつかつても高確率で勝てる程度の存在だと思われる。だけど、問題は数だ。

オークは種族的にゴブリンよりも強いようだし、体格が段違いだ。今程度の俺では一対一はともかくとして、数の暴力に曝されるとゴブ吉くんやゴブ美ちゃんを守れないだろう。

それに数が違い過ぎると、流石の俺もどうなるか分からない。逃げ切れない可能性も捨てきれない。

とは言え、発見した時は一体だけだったからハグレオークみたいだけ。

でも念のため、つて事で周囲を【赤外線感知】サイモグライフで見回し 昼間は太陽見たら目がつぶれるから要注意だ。太陽がある時間帯は使い勝手が微妙過ぎて困る、それに加えて【反響定位】エコーロケーションで入念に索

敵する。

結果として、やっぱり他の個体はいないな、って事で強襲する事が決定した。

手始めに茂みに隠れながら距離をつめ、毒液で全体を濡らした小石をゴブ美ちゃんがスタツフ・スリングでオークの眼球を狙って投擲、最近才能でも開花したのか小石は狙い変わらず着弾し、眼球を潰した上に毒が体内に侵入する事に成功。

即死するような猛毒を石に塗ると取り扱いに困るし、そもそもアピリテイレベルのにまだ精製できないのでコレではい終わりってな訳にはいかないが、生物が突然視覚を潰されたのと同時に激痛を加えられて冷静に居られる筈が無く。

その後はタイミングを合わせて突っ込ませたゴブ吉くんの極太棍棒がオークの膝を真正面から思いっきり叩きつけ、鈍い音を響かせながら本来なら曲がるはずの無い角度に変える。

オークは醜い豚面を更に醜くさせながら、悲鳴を上げながら地面を転げまわった。

ココで、ハンティングし始めてから知恵とか頭脳方面はガン無視で、攻撃力と防御力重視のスタイルにさせているせいかな今のゴブ吉くんはオーク程度の肉を潰し、骨を砕く事が可能だと言う事が判明した。

ゴブ吉くん。お前って奴は、期待以上の結果を出してくれるぜ。

莫迦だけど（褒め言葉）さ。

んで、転げまわるオークの背中を【バンブ・アップ血流操作】で筋力強化された俺の足が踏みつけて暴れるのを押さえつけ、背部から人間で言えば腎臓付近だろっ場所を狙って双角でズブリ、と突き刺した。

オークは息を吸い込み、声を上げる準備を整え。

しかしオークの絶叫が発せられる前にゴブ吉くんが棍棒を頭部に振り下ろし、頭蓋を砕くまではいかずとも嫌な音を響かせた。その後もガンガンと何度も何度も振り下ろされる棍棒には、オークの鮮血が染み込んでいく。

オークは叫ぶ事も許されなかった。

俺は俺で、突き刺した角の先端から筋弛緩系の猛毒を分泌させるのと同時に角でグチャグチャと内臓を掻き混ぜてから、角を引き抜き、オークが死ぬまで角を刺し続けた。

と言う流れで、俺達はオークの初狩猟に成功。

その後は当然喰いました。

ゴブ美ちゃんが両腕と左足、ゴブ吉くんが腰椎から下全部、俺が残りつてな具合で。

味としては、やっぱり豚っぽかった。特上豚？ かな。

取りあえず、オークウマー。豚ウマー。

アビリテイ

リビドー

【能力名】**【精力絶倫】**のラーニング完了

アビリテイ

オーク・ランゲージ

【能力名】**【異種族言語】**のラーニング完了

アビリテイ

ディテクト・アナライズ

【能力名】**【物品鑑定】**のラーニング完了

んで手に入れたのがこれら。

しかしまあ、時と相手を選ぶけど使う時は大活躍しそうな**【精力**

ド

絶倫

は取りあえず放置しておくとして、

【異種族言語】と

【物品

鑑定】をラーニングできたのは幸運だった。

【異種族言語】

は今後オークと会話できるようになるらしいし、

こんなアビリテイがあるって事は、人間の言語とかもコレ系統のア

ビリテイを獲得できれば扱える様になるって事だからな。

【物品鑑定】に至っては、レベルにもよるけど見たモノ（物品限

定）の性能を知る事ができるそう。そこらに在った木の実で使っ

てみたけど、毒の有無とかまで表示されていてかなり驚いた。

うん、かなり便利なモノを手に入れる事ができたって事で。

いやいや、ココでオークを喰えたのは運が良かったねホント。何ディテクト・アナライズで【物品鑑定】って便利アビリティ持っていたかは謎だけでも。

あ、そうそう。オークが持っていたピッケルは勿論回収しました。何かに使えるかもしれないしね。

その後はヨロイタヌキやナイトバイパー、ホーンラビット等々を何時もよりも多めに狩り、日が沈みだしてきたので洞窟に戻る。

慣れ過ぎて目を瞑っていてでも解体できるようになっていた俺はそれほど時間をかける事無く下準備を済ませ、今日の成果をゴブ吉くんとゴブ美ちゃんの三ゴブのみで分けるのではなく、洞窟内でここ数日腹が減り過ぎて活発に動いていない奴等にも喰わせてやった。

いやさ、昨日襲われた原因は同年代ゴブリンの食糧事情によるモノが大きいらしいんだ。

実行犯は兎も角として、カモ知恵も無い同年代のゴブリン 比率的に雄雌だと雌が多い には餌を求めて動き回るも成果が上げられず、何日もマトモなモノを喰えていないのがいて、実行犯のゴブリン共はそれらを助けたかったんだとき。

だけど自分達じゃ自分達の飯を取る事がギリギリで、他のヤツまではサポートできない。

だから一番充実した食を堪能している俺を痛めつけて、屈服させて、飯を獲ってこさせようとか目論んでたらしい。数が揃っていたし、これなら行けると思っただらう。単純だね、ホント。

は、と嗤って無視する事もできたんだけど、今後またそんな事があると面倒なので、とりあえず恩は売っておいて損はないかなあー、って事で喰わせてみた次第である。

いや、自分で飯も獲れない様な奴らなんて知らんとですって言い
たいんだけど　あとでゴブ爺に聞いた所によると、何時の世代も
こんな要領の悪い奴等が居たそう。大半は死んだそうだけ
さ、流石に同族として情けなさすぎるので。

最初にして最後の慈悲です。

んで、なんか感謝された。泣きながらありがとって言われた。
そんなん要らんから、喰った分の獲物は獲って返せとっておい
た。

取りあえずホーンラビットを狩る時のコツをその情けない奴等に
レクチャーしてやる。

何人かで徒等組んで、木の棒に角をあえて突き刺して封じてから、
全体重を踵に乗せて背骨でも踏み砕けて助言をしておく。簡単だ
けどもこれで十分だろうと判断。

とりあえず明日はそれを実戦で試して、獲物を得られたら今日食
べた分を、何時でもいいから俺の所に持って来いと言っておく。

多分産まれて初めてになる肉の飯をやった。

狩りの方法も基礎って言えなくもない程度の事だが教えてやった。

ここまでして恩を仇で返すなら、その時は躊躇なく捨て駒にして
やろう。具体的には被害ゼロでは勝てない様な格上を罠におびき出
す罠として。ってつもりなんだからそんなに期待はしていないで待
っておく所存である。

あと、実行犯五名は既に下僕です。俺の命令には絶対服従っての
は勿論だけど、毎日の義務も課している。

今日の献上品であるホーンラビット五頭は、飢えていたゴブリン
に分配して消えました。

弱肉強食って言葉は、勝ってる間はホントありがたいよね。

飯を配給し終えたら眠くなったので、ナナイロコウモリの翼で多少はマシになった寝所に転がって瞼を閉ざす。
睡魔は即座にやってきた。

【レベルが規定値を突破しました。

特殊条件 蹂躞躍動 特異行動 をクリアしているため、【中^{ホブ}鬼・亜種^{ゴリンバリアント}】に【存在進化^{ランクアップ}】が可能です。

【存在進化^{ランクアップ}】しますか？

YES NO】

そんな表示が脳内でされた気がしたけど、かなり眠かったんで、とりあえず YES を選択して寝ました。

【ゴブ朗は 終焉と根源 を司る大神の【加護】を得た】

“ 十四日目 ”

目が覚めると、寝る前とは比べ物にならない程に身体が大きくなっていて、肌も緑色では無く黒く変色していた。

起きたら大幅に変わっていた自分の身体に驚愕しつつ、俺は昨日寝る前に表示された内容を懸命に思いだして、なる程コレが【存在^{ランクアップ}進化】ですかと世界の神秘に慄いた。

いやいや、実際に体験してみても分かったけど、この法則は本当に凄いや、を通り越して恐い。

いや、一晩で身長が小学生低学年レベルから昨日殺して喰ったオーク並みになっていたり、筋力や視力に聴力とかの基礎能力が飛躍的に上昇していたり、昨日までに得ていたアビリティもちよつと強力なモノになっていたり、とかね。

これは、恐いわ。馬鹿みたいに身体がデカクなったのに、違和感

さえ無いとか。ここまで一気に変わると距離感とかが狂いそうなものなのに、そう言ったモノが一切ないのとかも。

こんなに成長したと言うのに筋肉痛とかも一切感じないし、何よりヤバいのは今までよりも遥かに強い力が全身に漲る事で感じる、仮初の万能感ってやつだ。

怖いねーマジで。

今俺の身体は普通の奴なら浮かれて馬鹿な行動を採りそうな程の充実感が満ちているんだけど、でも実際にはそこまで強くないってトラップがある。

だから、俺はこの世界の神秘が怖いと感じている。

まあ、そんなのは置いといて。

俺は俺と同じように、大きくなった身体に首を傾げているゴブ吉くんのとある部分がとても気になっていた。

どうやらゴブ吉くんも昨日のオーク戦を経験したことでレベルが一〇〇に達し、【存在進化^{ランクアップ}】できたようなのだが、その肌の色に変化は見られない。

俺のように黒くなっているなどと言う事はない。緑色のままだった。

まあ、それも置いといて。

俺が気になるのは、その顔だ。

今までのように醜悪だったゴブリンのそれではなく、素朴ながらもどこか愛嬌のある人間の少年風な顔付。耳は相変わらず尖っているし、鼻も鷲鼻っぽいものではある。がしかし、それでも十分人間のそれのように見れた。

緑色の肌は人外のそれであるが、明らかに、人間に近づいていた。じゃあ、俺は？ って事になる訳で。黒曜石（っぽい鉱石）で造ったナイフ（モドキ）の刀身に映る自分を見る。

そこにあるのは、黒の肌を持つ、転生前の俺の顔を幼くした感じ

のそれ。

……うん、流石に数秒位はボケっとしちゃったね。

一先ず寝所近くの土壁からポコリと出てきた芋虫のような謎虫を掴み、ボリボリと頭から喰う。

うん、落ちついた。って事でゴブ吉くんと共にゴブ爺の所に向かう。

こんな時こそゴブ爺を利用しないと、ゴブ爺が居る意味が無いからさ。

一応、ヤバい臭いのする【ゴブ朗は 終焉と根源 を司る大神の【加護】を得た】ってフレーズについては触れずに喋りました。

そこで聞いた話を纏めると。

1・ホブ・ゴブリンになると人間に近づいた体つきと容姿になる。何故かは知らない。世界の神秘である。ただその容姿から、人間の街で住む個体や氏族も居るんだとか。ただし奴隷として暮らしていた過去があるか、現役の奴隷であるのが殆どらしい。容姿がいい奴は、マニアによって性奴にされているとか。

2・俺とゴブ吉くんの肌の色の違いは、通常ノーマルかバリエーション亜種かの違いだとか。亜種は総じて通常よりも優れた能力を持つらしいけど、特殊条件をクリアしなければならぬので滅多にいない。結構レアっぽいです。

3・しかも俺の肌の色は黒。黒は 終焉と根源 を司る世界最古の大神の象徴色でうんちゃらかんちゃらで、亜種の中でも一際珍しくかつ強力無比な属性持ちの特徴であるらしく、勉強すれば【終焉】系の強力無比な魔法だか魔法だかを使用できるとかなんとか。

あと 終焉と根源 の大神と、それに従う神を奉るとある宗教にとつて俺は現人神の如く崇拜する対象か、もしくは自己を大神に近

づける材料として考えられるかに分かれるだろうから、街とかに行く時は夜道に気をつけるとの事。宗教狂いはどの世界でも恐いと言
う事か。

4・つか、生後一ヶ月も経たずにホブ・ゴブリンになるとかがそ
もそも異常らしい。未だゴブリンであるゴブ爺が言うのだから、そ
うなのだろう。ちなみに出稼ぎに行っているゴブリン達（数は四十
ピッタリらしい）でさえ、ホブ・ゴブリンになっているのはたった
の三ゴブだけしかないらしい。

5・そして俺とゴブ吉くんは外に行く前にホブ・ゴブリンになっ
たので、洞窟の奥の人間の女性を自由に扱う事も許されたし、道具
置き場の雑多な品を使う権利を貰えた。

6・へー。ソウナノカー。

……うん、ちょっとソウナノカーって感じで聞き流しそうになっ
てた。

特に3辺りとか、理由はあえて言うまい。

宗教って何処の世界でも恐いねとか、あえて言うまでも無い。と
言うかね、俺が 終焉と根源 の大神の【加護】持ちって知られる
と、結構ヤバい事になりそうだ。

コレはできるだけ隠そうと思った。

この日は流石にハンティングに出かけようとは思わず、起きてか
らかなり変化していた身体に意識を慣らす為、同じくホブ・ゴブリ
ンに昇格したゴブ吉くんと組み手をしてみた。

ゴブ吉くんも力を持て余していたのか、かなり好戦的だった。

流石に仕事上、様々な格闘技を嗜んでいた俺が負ける事は無かつ
たが、素の状態ではゴブ吉くんの方が膂力がやや強いと言う事が判
明。

やはり能力構成が前衛ビルドよりに特化しているらしい。

知能や敏捷性等はそこまで高くないが、高い攻撃力と高い防御力

を持つゴブ吉くんはそのまま長所を伸ばせばさぞ強力な壁役兼攻撃
役という複合役になってくれるだろう。
ラー
ハイブリット

組み手は午前中で切り上げ、午後は小さくなってしまった武具の
新調などを行った。

身体が大きくなった関係上、今まで俺の主武器だった角が小さな
ナイフ程度になってしまっているのだが、今はコレで我慢しておく
事とする。俺には毒があるので十分凶器として使えるし。

だから今回は、溜め込んでたヨロイタヌキやナイトバイパーなど
の素材が沢山あるので、一気に重装備に換えてしまおうと目論んで
みたり。

今まで溜めていたヨロイタヌキの皮付き甲殻を重ねて、ナイトバ
イパーの蛇皮も使用して、その結果軽いながらもかなり丈夫なモノ
ができました。

言ってしまうえば、レザー系の防具だ。マントとかはないが、茶色
い革製の長袖長ズボンを思い浮かべて貰えばいいのだろうか。

金属板などの代わりにヨロイタヌキの甲殻を要所に配置する事に
よって、防御力を上昇させている。一応動きやすさも考えて造って
いて、着てみるとなかなかどうして、いい感じであった。動きを阻
害される感覚は、大きくない。

あと、素材不足で完成できていなかったゴブ美ちゃんの胴鎧も完
全版に。ナナイロコウモリの翼が主要素材だから、ちょっと派手で
すが。どこぞの民族衣装っぽいね。

ちなみに飯はゴブリン（下僕）達から献上されたホーンラビット
でした。

量が足りなかったけど、無いよりマシだった。美味いから許す！

“十五日目”

ホブ・ゴブリンにランクアップしての初めてのハンティング。そこで発揮された身体のパフォーマンスに、ちょっとビビった。

この日初めて出会った獲物は犬のような頭部に茶色い体毛を全身から生やし、人間を殺して得たのか知らないが錆びた胸鎧と錆びた長剣ロングソードを装備した、“コボルド（仮称）”と俺が呼ぶモンスターだった。

コボルドは観察した限りでは、ゴブリンよりも上のオークと同レベルの種族だと思われる。装備も含めて考えると、俺達が喰らったオークよりもさらに格上だろう。

臂力ではオークに分があるだろうが、速度や敏捷力ではコボルドが上に思われる。

それが二体一緒に現れた。

今までなら即時撤退か、もしくは俺のアビリティによって出逢わないように避けていた事だろう。

しかしながら俺達は出逢い、そしてゴブ美ちゃんの的確な毒（に濡れた）石の援護があったとはいえ、俺とゴブ吉くんはコボルドを真正面から捻り潰してしまった。

亜種に進化してしまった俺は兎も角として、ゴブ吉くんの戦闘方に伸びた能力構成ビルドは無論、甲殻製の盾と甲殻を巻いて強化した棍棒、それにコボルドの錆びた胸鎧よりも少しだけ頑丈な甲殻製の胸鎧などの装備が助けになり、ゴブ吉くんはコボルドを真正面から叩き殺した。

いやいや、ホントランクアップ怖いね。

昨日までの弱者が、今日の強者だもの。

多少の傷が目立つゴブ吉くんをゴブ美ちゃんに介抱　ゴブ爺か

ら教えてもらった薬草のストックがあるのだ　　させている間に、俺はコボルドの身ぐるみを剥いだ。

腰に下げていた三個の“火精石”

ディテクト・アナライズ
【物品鑑定】で鑑定した結

果判明した。どうやら意思の無い低レベルの火の精霊が宿っているそうなので、入りの小袋はありがたく回収し、鎧を剥ぎ、ちよつと錆びたロングソードは二本とも俺の腰に。

死体は、俺は二頭の頭部と心臓と右腕、ゴブ吉くんとゴブ美ちゃんに残った部分を山分けした。

感想としては、なんだろう、不思議な食感だった。

味は、美味しい、様な気がするって微妙なレベルだったが。

アビリティ コボルド・ランゲージ
【能力名】異種族言語】のラーニング完了】

アビリティ
【能力名】見切り】のラーニング完了】

んで、その結果得たのがこれら。

やはりコボルドは普通のホブ・ゴブリンよりも強めらしい。ゴブ吉くんが勝てたのは装備の差が大きかったしね。俺はアビリティの豊富さと経験の差です。

あと火の精霊が宿っているらしい火精石もついでに食べたなら、

アビリティ バイロキネシス
【能力名】発火能力】のラーニング完了】

発火能力も手に入れてしまった。自然界で火の能力を持っているのかいなのか、その差は大きく覆し難く。

これでようやく焼肉にできると思うと……。

その後はホーンラビットとかを狩って帰りました。

今日の献上品はホーンラビットに混じってヨロイタヌキがあつて驚いた。こいつ等、成長してやがる、と一人芝居。

後日ヨロイタヌキを取ってきたゴブリンには甲殻を使用した盾で

も送ってやるつもりだ。

晩飯は他の奴らの肉も焼いて、焼肉パーティーと洒落こんだ。

“ 十六日目 ”

殺しの手管を教えて下さい、的な事を言われながら同年代のゴブリン達全員から土下座された。

洞窟内でズラリと並んで土下座するゴブリン。かなりシユールな光景だった。

いやね、俺が飯をやったゴブリン達もそれ以外の細々と生き残ってた奴らも、最近はホーンラビットを殺せるようになったらしいんだけど、それでもやっぱりナイトバイパーとかが相手では手も足も出ないらしくてさ。

だから、それ等を殺して喰ってきた俺達に、と言うか主に俺に生きる術を教えてもらいたいらしい。

俺達の利益は？ って聞いたたら、獲物を献上すると言いだした。どうやらゴブリン（下僕）達の様子を見て、そんな考えが浮かんだようだ。

まあ、それなら損はないかな、って事で太陽が真上に昇る前まではゴブ吉くんとゴブ美ちゃんも混ぜて生き残った殆どのゴブリンと合同訓練を行う事となった。

訓練は、俺にもゴブ吉くんにもゴブ美ちゃんにも、生きるためにはやっておいて損はないからね。

弱肉強食な世界だから、最初の訓練で徹底的に俺が上なんだと身に教え込んでおく。雄雌問わずに徹底的に。反逆とかされたら面倒だから、本能に刷り込むように執拗に繰り返す。

身体と心が壊れてしまわないように、しかし元気が有り余るなん

て事はないギリギリのレベルを心掛けてみました。

その結果、今日はゴブ吉くとゴブ美ちゃんを含めた全員の足腰が立たなくなりましたとさ。

汗をダラダラと流し、息も絶え絶えに転がっているゴ布林達に、俺は献上品によってはその素材から何か造ってやる、とも言っておいた。

それでなんかやる気になったようだが、一応無茶はするなと釘を刺しておく。死んだら終わりだからさ。

……ゴブ美ちゃんがプルプルと震える身体で同年代のメスに、心底自慢げに防具と首飾りを見せていたが、何も見なかった事にしておこう。

午後になり、転生して初めて独りでハンティングに出かけた。

最初ならいざ知らず、既に庭のようになった森を動き回って動けない奴等の分も多少は確保し、今日のハンティングは終了。これくらいの手サービスはあって良いだろう。

疲労で思う様に動けないゴ布林達に飯を配給する。

その夜、俺は洞窟の奥に赴いた。

何処ぞから連れてこられた人間の女性が入られている場所だ。

ホブ・ゴ布林になってちょっと人間に近づいた姿なら、会話くらいできるかもしれないと思ってるのである。

で、結果を言えば会話はできませんでした。

完璧に壊れてます。目が完全に死んでます。涎ダラダラです。微かに死臭すら漂ってる様な気がします。

前見つけた時よりも症状が進行してました。仕方がないと言えば仕方がない環境だが。

あと美醜で言えば一番若くて美な子がこの短期間で孕まされてました。これも仕方が無いとはいえ、かなり不憫である。

この子くらい可愛ければ嫁ぎ先など幾らでもあっただろうに、彼女の結末はこんな場所で犯され続けるだけなのか、と思わざるを得ない。

だから、俺は聞いてみた。

『死にたいか』と。

以前の俺なら合掌してハイ終わりだったが、ホブ・ゴブリンにラックアップした今だからこそ、聞ける問。

今の俺ならば、例えバレたとしても自分の安全は確保できる今の俺ならば、何の躊躇いも無く彼女たちを“殺して/助けて”やれる。

ただその問いの返答は、無かった。

しかし、動きはあった。小さく弱く唇だけが動き、ふと思い出したように流れ落ちる涙で、彼女たちの意思を理解した俺は、コボルドを狩って得た小袋に入れていた小瓶（液体入り）を置いて寝所に戻った。

振り返りは、しなかった。

“ 十七日目 ”

朝起きて奥に向かうと、捕われていた女性全員が死んでいた。皆、眠るように息を引き取っていた。

その様子から、彼女達は眠りながら死んでいくような毒を飲んだらしい。何処でそんな毒を手に入れたのか、不思議である。本当に、

不思議な事もあったもんだ。

第一発見者である俺は近くに転がっていた小瓶をその証拠として回収し、腰に提げている小袋に入れてから、ゴブ爺に報告した。

急いでやってきたゴブ爺は美の女性の腹から流れたふにやふにやのゴブリンモドキを前に、情けない位涙を流しながら嘆いていたけど、俺は知らん。

彼女達の死体は、俺が責任を持って処分した。

骸を動物達に滅茶苦茶に喰い散らかされるのも不憫だったので、心臓と胃、それと片方の乳房と子宮を手間賃として貰い、俺は火葬を行った。

先日得た【発火能力】^{バイロキネシス}だけでは火力が足りなかったので、普段から何かに使えないかと思つて集めていた、火をつけるとよく燃える【油草】^{ユサ}と枯れ枝を組んで火力を確保。

【発火能力】で着火し、煌々と燃え上がる火柱を見ながら、合掌し、彼女達の冥福を祈る。

南無阿弥陀仏。

そしてどうやら、彼女達の中には冒険者的な職業をしていた子も居たらしい。

それも結構な数が。出稼ぎ組は、案外強いのもかもしれない。……
捕まっていた子達が、弱かっただけなのかもしれないが。

- 【能力名】^{アビリテイ}【異種族言語】^{ヒューマン・ランゲージ}のラーニング完了】
- 【能力名】^{アビリテイ}【大陸文字解読】のラーニング完了】
- 【能力名】^{アビリテイ}【脳内地図製作技能】^{マッピング}のラーニング完了】
- 【能力名】^{アビリテイ}【職業・魔術師】^{ジョブ}のラーニング完了】
- 【能力名】^{アビリテイ}【職業・軽剣士】^{ジョブ}のラーニング完了】
- 【能力名】^{アビリテイ}【職業・森司祭】^{ジョブ}のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】職業・細工師^{クラフトマン}】のラーニング完了】

俺としては珍しいことだが、得たアビリティの詳細について検証する気も起きず、午前の訓練を行った後、ハンティングするやる気が起きなかつたのでゴブ吉くんとゴブ美ちゃんをバディーとして送り出した後、今日は溜まっていた素材を使って盾や、甲殻製の剣などの実験製作に勤しむ。

最近何かを造る事が趣味になってきた気がするな……。

あ、さっそく【職業・細工師^{クラフトマン}】が役に立ったっぽい。以前よりも高品質な品ができたのである。恐らく、アビリティ名通り職業補正^{ジョブ}が加わつたのだろう。

結果を言えば盾や鎧は製作に成功するも、甲殻製の剣は失敗に終わりました。

飯は、昨日よりも増えた献上品とゴブ吉くんとゴブ美ちゃんが持ってくれた分で賄った。

あ、今更だけどゴブ美ちゃんもホブ・ゴブリンに今日起きたらなつてました。

ちよつと可愛くなっていてビビった。ゴブリンの時との差が著しいです。

装備も、小さくなったので俺の予備を貸している。

嬉しい様な、不満なような、ちよつと微妙な表情をしていたので後で新しいのをプレゼントしようと思う。

本当は今日作ってあげれば良かったんだが、時間が足りなかったのだ。

“ 十八日目 ”

午前の訓練を終え、普段通り三ゴブで行動中、再びコボルドを発

見。

今度は三体で、二匹は以前と同じく胴鎧にロングソードという装備だったのだが、残りの一匹は短弓と矢筒ショートボウを装備していた。

これは二日連続のゴブ美ちゃん強化フラグか、って事で、周囲を索敵して他に潜んでいないか確認。

居なかったので、強襲を選択。

遠距離攻撃が可能な弓装備のコボルドが他のよりも脅威レベルが上なので、ゴブ美ちゃんがスタッフ・スリングを使った毒石投擲による奇襲を敢行。

筋弛緩系の毒に濡れた石は見事眼球に着弾し、弓装備の個体の正常な判断と視覚を奪う。

残りのコボルド達が慌てふためいたその隙を逃さず、以前のもちよつとだけマシそうなロングソードを装備した二体を、俺とゴブ吉くんが叩き伏せた。

ボロとは言え鉄製のロングソードは今の身体に丁度良く、以前よりも身体を穿ち、首を切り落とすのが楽だった。角って、今やナイフみたいなもんだから尚更そう感じたのかもしれないが。

ゴブ吉くんが相手にしたコボルドは、全身至る所の骨が乱暴に砕かれています。ちよつとグロい。

短弓装備だったコボルドは、ゴブ美ちゃんにプレゼントした黒曜石（のような鉱石製）のナイフ（モドキ）によって頸部を切断され、止めを刺された。

どうやらゴブ美ちゃんの能力構成は知能ビルドと速度重視よりらしい。武器の巧みな扱いは知能が必要だしね。

その後はバリバリと死体を解体。鎧を回収し、短弓と矢筒はゴブ美ちゃんに持たせ、ロングソードは俺の新しい武器にした。ゴブ吉くんに適した装備は無かったので、また今度である。

残念ながら火精石は持っていなかったが、小袋を三つも増やせたのはありがたい。一つは自分用にして、残りに薬草を入れてニゴブに持たせておく。これで何かあっても、多少の役には立つに違いない。

んで、一ゴブ一体計算でバリバリと喰いました。

新しいアビリティはラーニングでできなかったけど、もう少しで何かを手に入りそうな感じだったし、既に手に入れていた【見切り】を強化できたのでよし。

【見切り】は視覚内の敵が繰り出す攻撃軌道が赤い線として見えるので、戦闘時には大変重宝するのだ。

後は適当にハンティングを繰り返して、洞窟に帰って寝た。

“ 十九日目 ”

午前の訓練を終え、俺はそのままハンティングに赴かずに、洞窟奥の道具置き場に向かった。

捕われていた女性達に冒険者のアビリティ持ちが混じっていたのだから、何かそれ関係のアイテムが無いかなー、と思い立ったからだ。

ただ見ただけでは流石の俺も道具の良し悪しを大まかにしか理解できないのだが、アビリティ【アイテム・アナライズ物品鑑定】をオークから入手しているので詳細を見る事が可能だ。

それに、【アイテム・アナライズ物品鑑定】の経験値稼ぎも兼ねているので、不発に終わっても決しては無駄では無い。

そんな気楽な気分でいたのだが、俺は掘り出し物を発見したようである。

それも大量に。

【ゴブ朗は“「武器・杖」魔術師の杖・入門版”を手に入れた！

！
 【ゴブ朗は「武器・杖」祝福された宿り木の杖”を手に入れた
 ！！】
 【ゴブ朗は「武器・剣」鉄製のエストック×3”を手に入れた
 ！！】
 【ゴブ朗は「武器・短剣」鉄製のボウイー・ナイフ×4”を手
 に入れた！！】
 【ゴブ朗は「武器・斧」鉄製のバトルアックス×2”を手に入
 れた！！】
 【ゴブ朗は「武器・遠隔」クロスボウ×2”を手に入れた！！】
 【ゴブ朗は「武器・消耗品」鉄製鏃の矢×50”を手に入れた
 ！！】
 【ゴブ朗は「防具・盾」鉄製のラウンドシールド×2”を手に入
 れた！！】
 【ゴブ朗は「防具・鎧」傷だらけのプレストプレート”を手に入
 れた！！】
 【ゴブ朗は「防具・手甲」堅牢なる錬鉄製のガントレット”を
 手に入れた！！】
 【ゴブ朗は「薬品」古くなったライフポーション体力回復薬×6”を手に入れた
 ！！】
 【ゴブ朗は「薬品」古くなったマナポーション魔力回復薬×8”を手に入れた
 ！！】
 【ゴブ朗は「薬品」エンリケ教の祝福された聖水入り瓶×3”
 を手に入れた！！】
 【ゴブ朗は「収納品」孔の開いた背囊バックパック×2”を手に入れた！！】
 【ゴブ朗は「収納品」孔の開いた雑囊フィールドバック×3”を手に入れた！！】
 【ゴブ朗は「書籍」世界放浪記・王都から秘境まで 上巻”を
 手に入れた！！】
 【ゴブ朗は「書籍」魔術師入門・基礎魔術一覧 中巻”を手に入
 れた！！】

【ゴブ朗は「書籍」自然の祈りは神の施しなり】を手に入れた
！！】
【ゴブ朗は「書籍」エリエッタ大陸文字学習のススメ】を手に入れた！！】

出るわ出るわ、今の俺からすればお宝の数々が。
以前チラツと見た限りではボロボロばかりだったが、発掘して見るとその下には十分使えるモノが眠っていたのである。

うん、ここは本当に宝物庫であつたらしい。

んで、発掘できたエストックは今持っているロングソードと性能面では大差ないが、状態が良かったので交換しておく。

ついでに今まで使っていた黒曜石のナイフと今回獲得したポウイー・ナイフ 刀身は長く、刃先は鋭い。刃は片刃であり、先端のみ両刃になった擬似刃を備えている狩猟用ナイフの一種 を交換しておく。四本と数が多いが、ナイフ専用のポケットは既に製作済みなので装備するのに問題はなかった。

ポウイー・ナイフにはこれから解体の際に活躍してくれる事を期待しておく。

あと、エストックと交換したロングソード二本と、残り一本のエストックをバリバリと喰ってみた。

アビリティ
【能力名【斬撃力強化】のラーニング完了】
アビリティ
【能力名【貫通力強化】のラーニング完了】

ロングソードを喰って【斬撃力強化】を、エストックを喰って【貫通力強化】をラーニングする事に成功。

これから分かる様に俺の【吸喰能力】は生物でなくてもアビリティ

イをラーニングできるのだが、一定レベル以上の品　能力の強弱は勿論、質や使用されてきた歴史に俺の思い入れなどが関係している模様　でないと意味が無いので、今まで喰う事は無かったが、これなら行けるかなと思ったので実行してみたのである。

失敗しても取り返しがつく、というのも実行する勇氣にはなっていたが。

結果は上々で、気分がいい。

そんな事を独りでしたら、ゴブ吉くとゴブ美ちゃんがやって来た。

どうやら俺の姿が見えない事を不思議に思い、探しに来てくれたらしい。

丁度良かったので、ポーションなどの細々とした品は腰に下げるタイプのフィールドバックに、他のモノはバックパックに詰め込んで、それでも入りきらないのを二ゴブに頼んで運ぶのを手伝って貰う。

んで、ゴブ吉くんは今まで使っていた甲殻補強済み棍棒から無骨なバトルアックスに、木の杵に甲殻を縫い付けただけの盾から鉄製のラウンドシールド　金属が縁にしかないので、真中は甲殻で補強した　に装備を変更。

あと、今まで着ていた甲殻付きレザー系の胴鎧の上からプレストプレートを着用した。頭部には二日前に製作した甲殻製の兜を装備しており、現在ゴブ吉くんの防御力は三ゴブ中最強である。

見た目はまるっきり重戦士だ。

ちなみに背中には予備装備として今まで使っていた棍棒の姿が。

ゴブ美ちゃんにはクロスボウ二丁と、矢を五十本。そして俺が今まで使っていた黒曜石のナイフが二つと、保険として渡したポウイ・ナイフが一つ追加されたのだが、重量的に見てこちら辺に限

界だろう。

俺達の中で最大の遠距離攻撃力を持つているし、素早さのあるゴブ美ちゃんが操るボウイー・ナイフの攻撃力も侮れない。

見た目的には、やっぱり獵師か弓兵って感じですよ。

最後に俺。二本のロングソードから二本のエストックに変更し、小振りな盾であるラウンドシールド 甲殻による補強済み をゴブ吉くんと同じように装備。これは右前腕部に固定できるように工夫し、手首が問題なく動かせるように調整した。

そして空いた左手の方に堅牢なる錬鉄製のガントレットを装備した。ガントレットはラウンドシールド程防御力は高くないが、丸みで攻撃を逸らす程度は可能だと思う。

防御力もそこそこに、素早さも損なわない仕様だ。

【職業・ジョブ軽剣士】の補正も加わり、かなり全体的な能力が向上したように感じる。

杖とかも気にかかるが、今日の飯も獲りに行かなくてはならないので、俺の寢床に発掘した品々を一旦置いて外に出た。

盗まれないのかって？ 盗んだらどうなるか、じっくりお話し済みなので問題ないのさ。

そして今日は今までにない程大量に捕れたので、献上品はそのまま獲ってきたゴブリン達に返してやる。

いや、喰いきれないんだよね、多過ぎて。

“二十日目”

午前は訓練。最初と比べ、他のゴブリン達も顔付が変わりだした。うん、ゴブリンは成長が早いだけに、本気で訓練を施せば短期間でも化ける様である。

それか、そうじゃないと生き残れないから、かもしれない。

午後は飯を求めてハンティングをし、成果はナイトバイパー十体、ヨロイタヌキ十四体、コボルドが五体と大量だった。

これは装備が飛躍的に向上した事が大きいだろう。

と言うか、遠距離からゴブ美ちゃんちゃんの正確な狙撃　クロスボウの強力な一撃と毒を鏃やぶに塗った弓矢の速射によるコンビネーションは鬼畜だ。俺とゴブ吉くんが盾になるから、尚更酷いね。近づけないんだから　と、重戦士なゴブ吉くんの高い防御力にバトルアックスが繰り出す重斬撃。

それに加えて俺の持つアビリティの豊富さからくるトリッキーな攻撃の数々と二ゴブを動かす指示は、コボルド程度の敵を問題にしなければならなかった。

恐らくだが、今の状態ならコボルドが俺たちの倍の数できてもなんとかなりそうである。

ただ俺的にはオークを喰ってアビリティ強化がしたいのだが、あれ以降一体も見えていない。

早く見つけたいモノだと思いつつ、今日は洞窟に早めに帰って見つけた書物を読みあさる。

いやさ、アビリティ【職業・ジョブ魔術師】があるのは良いんだけど、それに伴って亜種になってから備わっていた魔力値が大幅に上昇したのは良い事なんだけど、魔術ってヤツがどのようなものなのかを知らないから俺には、魔術的な何か扱えないのだ。

だから、こうやって“魔術師入門・基礎魔術一覧”を読みあさっているのである。

まあ、意外と難しくって難航してるけど。

というか、本を読むだけでは限界がある。しかも途中からだし。

せめて……せめて手本を一度でも見る事ができればッ。

そんな俺の叫びなど聞いてくれる筈も無く、時間は止まることな
く流れていくのであった。

二十一日～三十日

“二十一日目”

午前訓練を開始してまだ一週間も経過していないが、そこそこ使えるようになってきたゴ布林達の姿がちらほらと。

やはり生活環境が厳しい自然界だからなのか、もしくは早熟するという種族的特徴なのか、以前の俺が実際に経験した訓練や会社のサーバーで閲覧できた軍人育成プログラムの良い所取りした内容を課したゴ布林達は、その強さを日が経つことにかけている。

最近ではゴ布林（下僕）の中にもナイトバイパーを献上するようになった個体もいるし、最低レベルでもホーンラビットを単独で殺せるようになっていた。

数日前の飯さえ自分で獲れなかった者など既に居らず、その結果に教官的な立場に居る俺は誇らしささえ感じていたり。

ただゴブ爺達年上ゴ布林はその結果に心底驚愕していて、俺に慈しみと同時に畏怖の念を込めた視線を向けるようになっていた。器用なモノだと思うが、ちょっと鬱陶しい。まあ、実害が無いので無視しているのだが。

太陽が頂点に差しかかるうとした頃、俺は訓練が始まったその日から、訓練しているゴ布林達全員と組み手をしてから訓練を終わる事になっている。

その方が個々の性能を正確に把握できるし、変な癖や弱点を把握してそれを教えてやる事もできる。それに優秀な個体を見出すのも役に立ち、何より俺の訓練になるからだ。

こんな厳しい世界で生きるのならば、身体は鍛えておいて損はない。だから、三十八連戦はいい訓練になるんだな、コレが。

んで、やっぱりゴブ吉くとゴブ美ちゃんは同世代ゴ布林の間

では突出している事を再認識させられる。

ゴブ吉くんも最近では訓練の成果か、有り余るパワーを損なう事無く発揮する術を身につけてきたようだし、生物を直接 パーティだと貢献した都合によって変化する様だが 殺す事でしか手に入らない“経験値”によって上昇するレベル補正により、この世界の不思議パワーで強化された身体は頑強の一言に尽きる。

今の俺でもアビリティ無しだとなかなか手古摺る相手なので、同世代のゴブリンだと、俺とゴブ美ちゃんを除いた全員が順番に挑んでも勝てないだろう。

ゴブ吉くんの損害も相応のモノになるだろうが。

ゴブ美ちゃんは俺よりは遅いモノの、他とは比べ物にならない程のスピードがある。

ホブ・ゴブリンなのだからゴブリンよりも脅力は上だし、爪も薄く鋭く伸び、それを上手に扱う術は俺が教えてしまったので、武器無しの素手の組み手でも小さな刃物を持っている様な状態なのだ。速度があるので、アビリティ無しだとそこそこ難敵だ。

まあ、まだまだ可愛いモノだけど。脅威度で言えば、素手だとゴブ吉くんよりも下である。

組み手が終われば午前訓練も終わり、俺達はハンティングに出かけるべく解散する事となる。

普段ならば定番メンバーで出かけるのだが、今日のハンティングにはもう一ゴブの同行者がいた。

名前はゴブ江ちゃんと言い、性別は雌。今だゴブリンながら、同年代では俺たちに次ぐ実力者であり、土下座した時に先頭に立っていた子である。

いや、先日のお宝発掘で掘り出せた孔の開いた背囊を二つと雑囊

バックバック

フィールドバック

を三つ入手したまでは良いのだが、ゴブ吉くんは一番重装備で背中に巨大棍棒をサブ武器として背負っているし、ゴブ美ちゃんはショートボウと矢筒とクロスボウを二つも背負っている。

ぶつちやけ、二つある背囊バックバックの一つは俺が背負っても一つ余るし、フィールドバック雑囊は俺とゴブ美ちゃんが装備しても一つ余るのだ。

だから、荷物持ち役が欲しいなあーって事で白羽の矢が立ったのがゴブ江ちゃんである。

ゴブ江ちゃんなら、今の俺達のハンティングにもギリギリでついてこれそうだしさ。あと、強い仲間を増やしておいて損はない。

あ、バックパックとかは当然孔を塞いでますよ。

武装はゴブ吉くんがお祝いだとして渡した甲殻製の盾（お下がり）と、ゴブ美ちゃんがお祝いとして渡した今までずっと使っていたホーンラビットの革と棒で造ったスタッフ・スリング。それに俺が甲殻補強されたレーザーの上下に黒曜石のナイフと一本のボウイー・ナイフを渡したただだが、今まで使っていたホーンラビットの角と比べれば天地の差がある。

それに荷物持ちなので、そこまで重装備にする必要は全くない。というか狩りを続けていけば獲物という荷物を持たすのだから、装備を重いモノにするのは馬鹿がする事だ。最低限身を護れる装備さえあれば十分である。

そんな訳で今回のハンティング、普段以上に楽に進んだ。

今までは全員が分担して背負っていた重量をゴブ江ちゃんが肩代わりしてくれたお陰か、疲労も少なくて済んでいる。重い荷物を背負うゴブ江ちゃんも疲労はあるが、戦闘をこなす俺達と大差ない程度だ。

それにゴブ江ちゃんもハンティングにスタッフ・スリングで地味に貢献し、“経験値”を得て地味にレベル上げをしていた。

もしかしたら、ゴブ江ちゃんも俺たち同様ホブ・ゴブリンに成れ

る日が近いかもしれない。

新しい獲物はいなかったが、満腹になりました。
やっぱり肉は美味しいね。

洞窟に戻って読書してから寝た。

“二十二日目”

ちよつと増長していたゴブリンを叩き潰した。

当然殺してはいないが、最近上がってきた自分の実力に溺れかけていたので、こうして矯正してないとそう日を待たずに死ぬ事になるだろう。だから、俺は心を鬼にして叩き潰したのである。

油断はそのまま死に繋がる現在の環境では、これくらいが丁度いいだろう。

まあ、そのゴブリンはちよつと俺に反抗感情が芽生えたかも知れないが、もし何かしてきたらぶちのめすので問題無し。

今日も四ゴブでハンティング。

そろそろ新しいアビリティをラーニングできそうなコボルドを探し、そして見つけた。

数は六と今までで最大の集まりだが、今の俺達ならば問題なく潰せると思われる程度の相手である。数はアチラに分があれば、コチラには個人の能力と装備の面で大きく差があるのだから。

行くか　そう結論を出し、ゴブ美ちゃんがクロスボウでショートボウを装備した一体を狙い、トリガーを引こうとして、それは岩陰から現れた。

額に縦に生えた三本の角から恐らくはトリプルホーンホースの頭骨だろうそれを被り、手には歪に捻じれた木製の杖。着ているのは黒くボロボロのローブで、何やらぶつぶつと呟きながら狙っていた群れに近づいていく、小柄なコボルド。

見た目からして、恐らくはコボルド・メイジだと思われる。

ゴブ爺から聞いていたから知っていたのだが、ゴブリンやオーク、それにコボルドなどの下位クラスモンスターは亜種などを除いて、普通は世界の理に干渉して一定の効果を発揮する魔術を行使することはできない。

が、例外もあって、普通のコボルドやゴブリンでも魔術を扱う事ができる個体が存在する。

それがコボルド・メイジやゴブリン・メイジなどと呼ばれる個体だ。亜種ほど稀有ではないが、それでもそこそこ珍しく、個体の能力は非常に高いモノが殆どだとか。

俺はまだ魔術を扱う感覚が掴めていないので魔術を思い通りに行きださず、今回発見したコボルド・メイジとそれの取り巻きの六体のコボルドを相手にするにはなかなか難しいかもしれない。

などと考えはしたが、これはチャンスである。

コボルド・メイジが魔術を行使してくれるのならば、俺はその様子を観察し、もしかしたら魔術が使える様になるかもしれない。それができなくても、まず間違はなくアビリティを入手できるだろう。そんな考えで、俺達はコボルド一行を尾行した。なかなか面倒なミッションだったが成功し、俺達は魔術の行使を初めて見た。コボルド・メイジの魔術の犠牲になったのはグリーンスライムだ。

【物理攻撃無効】つばいアビリティも、轟々と燃え盛る炎の前では体液を蒸発され、緑色の核だけを残して消滅してしまったのである。なかなか、派手な光景だった。

しかしその光景を見て、俺は魔術が何たるのかを大まかに理解した。洞窟に帰って多少練習すれば、恐らくは問題なく行使できるようになるだろう。

そんな訳で用済みになった一行を強襲。一気に全滅させる。

コボルド・メイジはゴブ美ちゃんの毒矢を後頭部に受けて即死、
他は俺とゴブ吉くん、あとゴブ江ちゃんの毒石攻撃とゴブ美ちゃん
の速射で沈黙した。いくら強いと言っても、それを発揮させる前に
潰せば問題はないのである。

普通のコボルド達の装備を剥ぎ取ってゴブ江ちゃんのバツクパツ
クに納め、コボルド・メイジの持っていた杖を確保。それに三つの
小袋に分けて入れられていた八個の“水精石” 握り締めると水
が溢れ出る不思議な石 に、六個の“雷精石” かなり強い衝
撃を与えると放電する不思議な石 と、以前喰った事がある十個
の“火精石” をありがたく頂戴する。

コボルド・メイジと六体の心臓は俺が貰い、他は一ゴブ二体で喰
いました。

ついでに、そこに転がっていたグリーンスライムの核もパクリと。

- 【能力名】アビリティ【物理攻撃軽減】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ オート・コントロール【体内魔力制御】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【魔術師の心得】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【威嚇咆哮】のラーニング完了

どうやらグリーンスライムは【物理攻撃無効】ではなく、その劣
化版アビリティ【物理攻撃軽減】持ちだった模様。いや、それ
も十分驚異的だけどね。

でもこれで、次グリーンスライムに遭遇した時の対処法はバツチ
リ理解できた。【発火能力】で燃やしてしまえばいいのだから、簡
単だ。

んで、コボルド・メイジの杖と、三種の“精霊石”を俺は全部喰
つてみました。

取りあえず、新しいアビリティを取り込むのが癖なモノで。

- 【能力名】アビリティ ハイドロハンド【水流操作能力】のラーニング完了

【能力名】アビリティ【水氷耐性】トランス・アクアのラーニング完了
【能力名】アビリティ【発電能力】エレクトロマスターのラーニング完了
【能力名】アビリティ【雷光耐性】トランス・ライトニングのラーニング完了
【能力名】アビリティ【炎熱耐性】トランス・フレイムのラーニング完了
【能力名】アビリティ【外界魔力精密操作】マナ・オペレーションのラーニング完了

うん、中々良いアビリティだ。これで練習すれば魔術もようやく使えるだろう。

その後、ヨロイタヌキやナイトバイパーなどを帰り道に狩りながら帰った。大半は経験値稼ぎとしてゴブ江ちゃんが殺して美味しく頂いた。

【能力名】アビリティ【耐え忍ぶ】アビリティのラーニング完了
【能力名】アビリティ【魔眼耐性】トランス・イーヴィルアイのラーニング完了

どうもナイトバイパーとヨロイタヌキからラーニングできるのはこれで打ち止めであるようだ。まあ、結構喰ったのでこんなモノだろう。

その後、夜になって一人魔術の練習である。

最初は苦戦したモノの、一時間ほどやっているとコツを掴み、少々発動までの時間が必要だが問題なく行使する事ができるようになった。

ちなみに闇に紛れてグリーンスライムが襲ってきたが、魔術の良練習台だったとだけ言っておこう。しかし、投げ槍を造るって魔術なのだが一撃でグリーンスライムを殺すとか凄まじい威力だと書いてみたり。

コロリと転がった核は拾ってパクリと。

【能力名】アビリティ【自己体液性質操作】のラーニング完了

そしたらこんなアビリティを得られた。
うん、汗を酸性の液体にできるとか、中々有用そうで満足です。
しかし装備品は酸で溶けないのは不思議である。

“ 二十二日目 ”

今日は雨だった。なので外には出かけず、洞窟内で祭りを開催した。

いや、何時頃位からかは分からないが、同年代のゴブリン達は俺を筆頭とした新しい群れとして機能し始めたので、群内の順列を決めるって事で祭りという名の総当たり戦である。

結果、大体予想通りの結果になった。

頂点には俺、その次にゴブ吉くんで、ゴブ美ちゃん、ゴブ江ちゃんにその他という流れになる。

総当たり戦後、順列を理解できるように勉強会をした。上には責任があるし、下は上の命令には従う様に厳命。あと幾つかのルールも今の内に決めていく。

これで命令等も効率良く行き届くだろう。ちなみに軍の階級を用いてみた。

頂点の俺は取りあえず大佐で、ゴブ吉くんは中佐、ゴブ美ちゃんは少佐、ゴブ江ちゃんが大尉で、その後は実力差に合わせて軍曹と大きく間を開けておく。

まあ、まだまだ数が少ないのでテキトーなものだが。

“ 二十四日目 ”

本日も訓練後、四ゴブでハンティングに出かけた。

そして最初に見つけたのは黒い甲殻に黄色いラインが特徴的な体長七十センチ程の大蜘蛛“オニグモ（仮称）”である。

巢を造っていたので、【発火能力】パイロキネシスを使って丸焼きにしてやりました。

思いのほか糸が燃えたので木々に燃え広がらない様にするのにはちよつと苦勞しました。

流石に火事とかになつたら死ぬる。

【能力名【蜘蛛の糸生成】アビリティのラーニング完了】

そしたら指先から蜘蛛の糸 いや、ゴブリンの糸か？ が噴出できるようになった。

指先からブリュリユリユリユリと勢い良く糸が噴出するつてのは結構シユールな光景だが、非常に使えるアビリティなので問題無し。ただ、このままでは細かい作業ができなかった。蜘蛛の様に器用に糸を操る事ができないのだ。

今できるのは単純に糸を噴出させ、狙った標的を捕まえる程度だ。少し複雑な動きをさせようとしたら、自分に絡まって身動きがとれなくなった。

うん、裁縫とは訳が違う。

と言う事で糸を自在に操れるようになる為、オニグモを探す事となった。しばらくして発見し、今度は雷なども試しに使って殺して喰いました。三体ほど。

【能力名【操糸術】アビリティのラーニング完了】

これで細かい作業もできるようになった。

糸は丈夫そうなので、これで服などを造ろうと思う。あと、オニグモの甲殻は頑丈そうなので防具に転用しようと思う。

その後も散策を続けていると、久々にオークを発見した。

発見した場所は以前オークを見かけた場所から近くであった。こ

こ等は洞窟からそれなりの距離があつたのでなかなか来なかつたのだが、もつと早くにすればよかつたか、と思う。

発見したオークは六体で、以前のようにピッケル装備ではなく、ハルバードや杖、ハンティングナイフやロングソードを持ち、プレートやフルプレートアーマーなどという結構重装備だった。それに恐らく、ハルバード装備で一番体格のいいオークが群れの統率者　オークリーダーだと思われる。

流石に襲えない敵だと判断し、でも情報収集は重要だつて事でその後を歩いて行くと、山を一時間ほど登つた所でオーク達の採掘場がある事を発見した。

いや、ピッケル装備なオークが数十体いるのが見えたし、カツンカツンと採掘する音がココまで響いてくるのでそう判断したのだが　一先ずはココで満足し、山を降る。いや、この人数で突つ込めば死ぬから。発見されない内に、そそくさと逃げるが勝ちだ。

と思つていたら、丁度登ってくる三体のオークを発見。採掘場からそれなりに離れていて悲鳴を上げても増援がくるにもそれなりの時間が必要になるだろうし、周囲には他のオークが居なかつたので襲う事に。

茂みに身を潜め、射程距離に入るのを待つ。そしてゴブ美ちゃんフッシュとゴブ江ちゃんのクロスボウによる狙撃で二体がまず死に、残る一体は俺の雷で麻痺させてから近寄つて喉元を搔つ切つて殺した。

死体は俺が一体にゴブ吉くんも一体、最後の一体はゴブ美ちゃんとゴブ江ちゃんが、と分担してせつせと運び、安全圏にまで到達できたと判断した所でゆっくりと喰いました。

無論三本のピッケルは回収です。

【能力名【悪臭】のラーニング完了】
アビリテイ

うん、ハッキリ言つて必要ないアビリテイだ。なんだ、【悪臭】

つて。いや、確かにオークは臭いけども。

まあ、使わなければどうという事は無いし、オーク肉は美味かったので我慢するでしょう。それに、万が一にでも使い道があったら儲けモノだと思っことにする。

“二十五日目”

訓練最後に行く組み手でも若干手古摺るようになってきた個体もチラホラとあり、今の所ハンティングに出かけて死者が出ると言う事はない。怪我は絶えないが、ので、俺の育成は間違っていないと感じられて安心する。

その後ハンティングに出かけ、ナイトバイパーやらヨロイタヌキにオニグモなどを狩っていると、新たな獲物を発見した。

まるで金属製の繊維で造った様な黒い体毛を持つ狼の群れだ。とりあえず何の捻りも無く“ブラックウルフ（仮称）”と呼ぶ事にし、しばらく様子を観察する。

どうも、総数十六頭と結構な数のブラックウルフ達は現在食事中であるようだ。幸いにも俺達は風下に居たので気付かれてはいないのでこんなに余裕があるが、もし何かが違っていれば、今ブラックウルフ達に美味しく貪られているコボルドだった肉塊のようになっていたかもしれない。

俺達の四倍つてな数もそうだが、何よりも群れの統率者のブラックウルフリーダーの存在が厄介極まりないのだ。体格も他のよりも遙かに大きいし、個体としての能力も段違いなのは間違いない。

正面からやりあったら、コチラも大きな被害を受けてしまうだろう。数は向こうが多いので、どうしてもアドバンテージはアチラにある。

が、それでも奇襲はそのアドバンテージを覆す。

コボルドだった肉塊を喰うのに夢中になっているブラックウルフ

リーダーの胴体を、ゴブ美ちゃんが放ったクロスボウの一矢が突き刺した。それと同時に、ゴブ江ちゃんの一矢がすぐ傍にいた一体の頸部を撃ち貫く。

ブラックウルフリーダーの強靱な生命力ならば胴体に普通の矢が突き刺さっていても即死しないのだろうが、鏃には俺の毒液を塗っているのです、数秒だけヨタヨタとよるめいた後、バタリと倒れてブクブクと泡を吹いて痙攣しだした。

それでもまだブラックウルフリーダーはまだギリギリの所で死んでいないようだが、そう時間は必要とせず死めだろう。ちなみに即効性の毒に耐性が無かった事に加えて頸部を穿たれた普通のブラックウルフは早々に死んでいる。

これで、迅速な連係プレーを封じる事ができた。群内の順列が入れ替わってトップがどれかになるにしても、それ相応の時間が必要だ。突然の事態に慌てふためく姿が見える。

その混乱を逃さず、近づいていた俺とゴブ吉くんが突っ込む。

狼系のモンスターは転生して初めて戦うが、特殊な能力が無い限り対処方法は大体同じだから問題はなかった。鋭い牙を剥き出しにして最大の攻撃である“噛みつき”をしてくるブラックウルフの口腔、そこに毒液の滴るエストックの剣尖を突き入れる。双方の突進力が合わさった一撃は容易く肉を裂き、骨を穿つと共に脳を破壊した。

混乱して逃走しようとする個体が視界の隅に映ったので、迸る雷撃や高圧の水刃を発生させてその個体の四肢を斬り飛ばす。

ゴブ吉くんの振うバトルアックスは強靱な体毛を持つブラックウルフを切り裂く事はできなかったが、その重撃は強引に背骨や肋骨などを押し折り、走る勢いをつけて押し出された盾と正面衝突したブラックウルフの頸椎は強引に砕かれた。

その合間合間にゴブ美ちゃんとゴブ江ちゃんによるクロスボウの狙撃があつて、確実に数が減っていく。

しばらくして、最大の武器である連係を失い、噛みつき攻撃も効

かなかったブラックウルフの群れは全滅した。一匹も逃がす事はなかった。

その後、ゴブ吉くんを除いた三ゴブでブラックウルフの解体作業である。ちなみにゴブ吉くんを除いたのは不器用過ぎるからだ。装備に転用する為に、そしてまだ狩った事がなかったので出来るだけ綺麗な状態の毛皮が欲しいって事で、不器用なゴブ吉くんには任せられないのである。

だから周囲の警戒を任せている。【気配察知】があるのでしなくてもいいのだが、何事も経験しておいて損はない。生存競争が激しい自然界なのだから尚更だ。

ゴブ美ちゃんとゴブ江ちゃんは、これからも数をこなせば問題なく【解体】技能を取得できると思われる。二人とも手先が器用であるし。

その後、毛皮を回収して肉は一ゴブ四頭計算で美味しく頂きました。

【能力名】アビリティ【群友統括】のラーニング完了

【能力名】アビリティ【集団狩猟の心得】のラーニング完了

【能力名】アビリティ【鋼硬毛皮】のラーニング完了

やはりブラックウルフリーダーは統率者として優秀だったようだ。

【群友統括】と【集団狩猟の心得】はどちらも配下運用に対してポーナスが発生するらしい。

それに加えて【群友統括】は俺が指示する事に最も見合った能力を持つ者を素早く選出する事ができ、全体の能力を若干強化する補正がある。

【集団狩猟の心得】は指揮の回数を重ねれば重なる程味方全体を効率良く的確に動かせるようになる。

【鋼硬毛皮】は自分自身の毛や皮膚に加えて毛皮系や革系の装備品の防御力を上昇させるってな能力だ。純粹に防御力が上がるアビ

リテイは持っていて損は絶対ない。

いやいや、今後の事を考えるとともありがたい。

その後グリーンスライムやらオニグモなどを狩って帰って喰って寝た。

“二十六日目”

朝起きたらゴブ江ちゃんがホブ・ゴブリンになっていた。

祝い品を贈呈する。品は牙などで使った民族品のアクセサリーだ。

何時も通り訓練を終え、普段ならばハンティングに赴くためにココで解散する。

が、今回は解散せずに皆武装の点検をしていた。一番下で一番多い二等兵なゴブリン達の武装はホーンラビットの角と甲殻製の盾に服だ。点検する箇所は数えるしか無く、三十分とせずに皆揃って洞窟を出る。

今回は全体のレベルの底上げ、そして俺のアビリティ熟練度上昇の一環として、オークの採掘場に奇襲をかけようと思うのだ。特にオークに恨みはないが、強く生きるためには必要な行為である。

だから、襲う。襲って、喰うのだ。今後も生き抜くために。

そして結果を述べると、コチラの陣営は重軽症者多数ではあるが死者は一ゴブも出なかった。オークは採掘場に居た全てが死んだ。それにはオークリーダーなども含まれる。

コレの結果は訓練の内容が攻撃よりも防御に重点を置いた方針だった事と、組み手で俺が果断に苛烈に攻め立てた結果だろう。だから自然、防御技術が高くなっていったようだ。

まあ、オークリーダーなどの主戦力は俺の糸で一網打尽にして、その隙にチクチクと削り殺したってのも大きいのだが。

え？ 卑怯？ いや、自然界ではそんなの大した問題では無いの

だ。死んだらそこでお終いなだから、どんなに卑怯な手を使ったって生きてりゃ勝者なのである。

勝てば官軍負ければ賊軍、って事だな。

俺は死なないように、賊軍にならないように常に気を張っているけども。

一つの戦争は終わり、その後軽傷者には持ってきていた薬草【癒し草】を磨り潰し、絞った液体に浸した布を傷口に当てる、という簡単だが意外と効果のある治療を施し。

命に係わる怪我を負った重傷者には、【職業・森司祭^{ドレイド}】によって扱えるようになった祝福系の回復技能^{ヒールングスキル}を使ってその怪我を癒していく。

いや、魔術の練習をしていて使えるかなー、と思って色々と試していたら、扱えるようになっていたりする。

片腕が斬り落とされていても、無理やり繋げて回復技能^{ヒールングスキル}を使えば時間は多少必要だが癒着できる。しばらくは違和感があるようだが、それでも隻腕などになるよりはマシだ。動かす事も、リハビリすれば問題なさそうだし。とか、凄い治癒能力だと思わざるを得ない。

実に、ありがたいことだ。

かつて【森司祭^{ドレイド}】だった女性には、本当に感謝の念を抱く。もしこれがなかったら、多少数が減っていただろうから。

以前ならばゴブリンがどれ程死んでも何とも思わなかっただろうが、日々鍛えていくこいつ等は俺の部下か弟子のような存在になってしまっている。

だから、助けられるのなら助けてやりたいと思うようになっていた。

あの日亡くなった彼女達を思い浮かべ、南無阿弥陀仏と祈りを捧げる。

治療している間に怪我していなかったゴブ吉くん達にオークと装備品の収集を命令していたので、治療が終わったらすぐに次の行動に移せた。

どうやらオークリーダーが持っていたハルバードは魔術による素材補強がされているらしく、結構な業物である。丁度いいので俺の新しい得物にした。剣もいいが、俺としては長物の方が使い慣れているので。

その他にも多種多様な武装が獲得できたし、これで全体の武装のランクを引き上げられそうだ。最低ラインの武器がホーンラビットの角から、ショートソードに変化した事は非常に大きいだろう。

それに何より、火精石や雷精石は勿論だが、風精石や土精石などまだ喰っていないかった精霊石を多く得られたのは大きい。しかも採掘場の奥にはまだまだ発掘できるそうだ。

そうこう色々しながらオーク達の身ぐるみを剥いだ後は、皆で美味しく頂きました。全体に行き届く数は十分にあったので、階級が上の個体がより多く喰えるように分配している。

オークリーダーにオーク・メイジなど主戦力部隊だったオークは勿論俺の腹の中に。

【能力名アビリティ】同族を呼ぶ声【のラーニング完了】

【能力名アビリティ】消化吸収強化【のラーニング完了】

【能力名アビリティ】斧槍使いの心得【のラーニング完了】

正直ビミョーだが、まあ、あればそこそ役立ちそうなアビリティだろう。

アビリティはあつて困る事はない。一部例外を除いて、だが……。オークの焼肉を貪りながら、火精石や雷精石に水精石、新しく手に入った風精石と土精石は摘まみとして俺だけが美味しく頂きました

た。

【能力名】エアロマスター【大気操作能力】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【風塵耐性】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【地形操作能力】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【岩土耐性】のラーニング完了】

それにしても、いやいや、焼き豚祭りで本当に満足だった。

オーク肉は独特な味と食感というか、まるで特上豚とでも言えばいいのだろうか？ それが大量にあるのだ。喰っても喰っても、まだまだ喰い足りない程には。

それにしても、ああ、ご飯と酒が欲しい。特に酒の方が、本当に欲しくて堪らん。

思い返せば、というか思い返すまでも無く、俺は転生してから一滴も飲んでいないのだ。酒を買った帰り道にアイに刺されたのだが、あの時の酒はどうなってしまったのだろうか。

ああ、段々と尚更恋しくなってくる。

その後夜になる前に洞窟に帰って寝た。

“二十七日目”

普段通り洞窟の外の空き地で午前訓練をしていると、見知らぬゴブリンの集団がやってきた。

大して手入れがされていないのか、若干刃毀れしているが使い込まれた感のあるショートソードやバトルアックスなどを腰に下げ、着ているのは薄汚れたチェインシャツと、その上に黒い汚れ 恐らくは血だろう が染みついていて革鎧レザーアーマーなどを装備している個体が全体の四分の三ほど見受けられ、ホブ・ゴブリンの数は三体も居

た。

これは二日連続の生存戦争勃発か？ とちよつとワクワクしていたのだが、どうやら俺達の親にあたる出稼ぎ組の帰還であるらしい。いや、とりあえず先制攻撃を仕掛けようとした俺を、訓練を見学していたゴブ爺が止めたから分かった事である。

そうかそうか、敵ではないのか。なら一応は挨拶でもしとくか、つて事で声をかけようとして、俺はそれに気がついた。

最初は後方にいた大きなバックパック 十中八九今回の出稼ぎの成果である強奪品が入っていると想われる を担いでいる、明らかに下っ端そうなゴブリンの影に隠れて見えなかったのだが、同じく下っ端そうなゴブリン数体に担がれ、暴れない様に四肢を拘束されて猿ぐつわを噛まされている五人の女性達の姿があったのだ。服装からして四人は一般人、もう一人は安そうな革鎧レザーアーマーを装備していたので冒険者のな何かの子なのだろう。

冒険者のな女の子だけは殴られたような痕跡が頬に薄らとあるものの、まだ服装は大して乱れていないので強姦はされていないようだが、それも時間の問題である。

股間を隠すボロい腰布を気持ち悪く膨らせたゴブ爺と、ゴブ爺に話しかけているホブ・ゴブリンリーダー（推定）の姿を見ればもうね。誰だつて予測できると言うモノだ、嫌でも。

俺は他者を殺して喰う事に躊躇いは絶無ではあるが、やはり無理やりつてのは好きじゃない。子孫を残そうとする生物の本能は無論理解できるが、気分的に良いか悪いかで言えばまた別の話になる。

俺も仕事で危険な場所に赴いた時、異性の同僚と精神が高ぶって偶にした事はあったが、あれは同意があつての事。

コレから起こるだろう無理やりつてのは、どうしても気分が悪い。可愛い子は愛でるモノだろう。

一応、弱いゴブリンが人間達に抵抗するには数が必要で、今回の遠征で減った数を補充する必要があるのは理解できる。

だが、知るかそんなもん。転生したばかりの俺が、この短時間

で今まで培ってきた考え方を変えられるものか。
って事で助ける事に決めた。

そんなのは偽善だろうだって？ やらない善より、やる偽善なの
で俺的には問題無しだ。

ゴブ爺と話しているホブ・ゴ布林リーダーに近づき、女性を解放する事を要求。俺がそう言った瞬間何故だか知らんがゴブ爺が絶望的な表情を見せたが、無視する。

ホブ・ゴ布林リーダーには何言っただお前って顔されたが、俺は要求を繰り返す行方。

何事も話し合いは大事である。どんなに嫌いな相手でも、最初はまず話し合いをするべきだ。敵対するかどうかはさて置き。

根気よく説得を試みたが、ホブ・ゴ布林リーダーは聞く耳持たずである。そればかりか、執拗に語り続ける俺に対して苛立ちを覚えたのだろう、俄かに殺気立ち始めた。

それでも説得を続けるが、アチラの陣営のゴ布林までもやがて苛立ち始めるとこれ以上は無駄だと悟る。

ホブ・ゴ布林リーダーなどショートソードを抜き、嘲笑面で剣尖を俺の喉元に向けてくるほどだ。斬りかかってこないのは、俺の背後にゴブ吉くん達がアチラと同じように、かつ同等レベルの武器を構えて控えているからだろう。

俺は俺で、ああ、コレは説得は面倒だな。じゃ、殺そうか。

って事で俺は腰のエストックを抜くと同時にホブ・ゴ布林リーダーのショートソードを弾く。

その瞬間、場の空気がハッキリと変わった。

両方の陣営のゴ布林達は武器を本格的に構え、俺かホブ・ゴ布林リーダーがこれ以上何かアクションを採れば即座に動くだろう。

無論、目の前の敵を殺す為に。

今動きが無いのは、トップの意思決定を待つってのもあるが、単純に今動けばどちらにも大きな損害が出る、と本能で理解しているからに他ならない。

アチラの数二十八、コチラの数三十九。アチラ側よりもコチラ側の数が多いのでその点では優位かもしれないが、実戦経験や連携ではアチラに分がある。

正直どちらが勝つか情報が少な過ぎて判断できないし、そんな状態で正面からぶつかればどちらにも甚大な被害を受ける事は必至、だから下手には動けないのだ。

ちなみにゴブ爺達年上連中も近くに居るには居るが、若いモンが群れの方針を決める的な感じなのか、手を出す事無く傍観しているので中立です。

しばらくは睨みあい、駆け引きが面倒になった俺が争いの引き金と引くべく一歩踏み出して前傾姿勢に。

エストックを握る腕には力が籠り、剣尖がホブ・ゴブリンリーダーの心臓を真っ直ぐ狙う。

脚はエネルギーを溜めるように曲げ、敵を貫くための疾走を

しようとした時、声が響いた。

思わず動きが止まり、声がした方を振り向く。

声の主はアチラ側の三ゴブいるホブ・ゴブリンの内の一体だ。

見た目からして雌で、杖を持っている事から俺を除いて唯一魔術が扱えるホブ・ゴブリン・メイジだろう。それ曰く、『私闘に私達を巻き込むな』『群れの方針を決めるリーダーは強いモノがなれ』だそうだ。

メイジは他の個体よりも知能が高くなるから、こんな状況でも冷

静な判断が下せた模様。

一応コイツよりも魔術を使えるアンタの方が強いんじゃないのか？
って聞いてみたら、リーダーは趣味じゃないと返されました。
クールだ。

そんな訳で、【小鬼の集落】ゴブリンコミュニティの頂点を決める喧嘩が開催される事が決定した。

ルールは実に簡単。武器使用不可、一応殺しはありだが、基本的に気絶したりギブアップした時点で終了って野蛮なルールだ。

喧嘩の審判はゴブ爺である。

いや、中立であるべき審判はご意見番であるゴブ爺が適任なんだよね。

それにしても喧嘩の準備中アチラ側のゴブリン達が賭けを始めたのにはちよつと驚いた。ギャンブルという考え方を持っているのかと。しかも銅貨と銀貨のやり取りしてたので、そう言った知識もあるらしい。

まあ、確かに余興にはもってこいだよな、コレは。

ちなみにコチラ側のゴブリンは行儀よく座っている姿もどうかと思う。キチンと並んでコレから起こる喧嘩を観戦するゴブリン達。うん、シユールだ。

それにしても、景品になってしまった五名の女性達には悪い事をしているとは自覚がある。無駄に怖がらせてしまっているのだから。まあ、それもこれも彼女達の為だ。我慢して貰うよりない。

そして簡単な準備が終わった後、リーダーを決める喧嘩は始まった。

片や今まで仲間を引っ張ってきた実績のある、傷だらけな歴戦の兵士。

片や同年代を鍛え上げ、現段階でホブ・ゴブリン亜種にまでなっている俺。

どうやら賭けはアチラに入れる奴が多いようだが、空気を読む気は一切無いので速攻で行きました。

さて、結果だけを述べよう。

当然、俺が勝った。

蛇に睨まれたカエルのように格下の身動きを阻害する【蛇の魔眼】

イーヴィル・アイ

本来では出せない程の音量を出す事で相手を萎縮させる【威嚇咆哮】

その重複した効果を発揮するアビリティを開始と同時に発動する事で敵の鼻を挫き、その隙を逃さずに距離を詰めると同時に俺の糸でその身体をグルグルに巻いて、木から吊るしてサンドバック状態に。

ゴブ爺が糸について何か言ってきたが、これは間違いなく俺の身体の一部だったモノだ。極端に言えば唾液みたいなものだ。唾を吐き出したからと言って、それを武器として扱えるものか。

だから問題ない。武器じゃないのだから、使ってもルールには接触していない。と言う事にしよう。うん、グレイゾーンである。

サンドバック状態にした後は、ただただ殴る蹴るの暴力の出番だった。

一応殺さないように手加減しようとしたのだが、コイツの種族がホブ・ゴブリンでゴブリンよりもタフだった事に加えて、『俺がリーダーなんだ、よくもこんな姑息なマネを。恥を知れ恥を』的な事を状況判断もできない状態で生意気に喚いてきたので、ちよつと本気になってしまった。

まあ、仕方ない。不可抗力だったのだ。と言う事にした。

まず最初に、ギブアップなんて白ける事を言わせない様に糸の猿ぐつわを噛まず。

その後ただただ無言で殴り始めて三分くらいはまだ元気があったが、十分もすれば小さく呻くだけの血袋に。いや、殺してないけど。ちなみに十分間休む事無く殴る蹴るしてましたが、体力にはまだまだ余裕があったりする。

これは日頃の訓練の成果だろう。

そして気絶したので手を止める。感触からして骨はギリギリ折れていないし、内臓も破裂してはいないだろう。放置しても死ぬ事はないだろう。

それでも一応は、って事で数種類の草と薬草【癒し草】と数種の虫と清水を混ぜ合わせて試しに製作した、ほんの僅かだが効果のある自家製体力回復薬モドキを無理やり飲ませ、糸を切って適当に寝転がす。

回復力は本当に小さいが、一応切り傷程度を治す事は可能だと実証済みなので、明日になれば体内の損傷も多少マシな状態になっているだろう。最も、今日一日は絶対に目が覚めないだろうが。

作業を終え、ある種の達成感に浸っていると周囲がドン引きしている事に気がついた。コチラの陣営のゴ布林達は他と比べればまだマシだが、それでもその目には恐怖の色が薄らと。

何故だ。あと、近づこうとしたら軽く逃げようとするのは地味に傷付くんだが……。

え？ 何々ゴブ美ちゃん。俺の糸が理解でき無さ過ぎるのと、さっきの悲惨な光景に加えて俺の表情が怖すぎたからだろうだって？ いや、こんなのは普通じゃないか。

……ああ、それは俺だけに当てはめられる事ですかそうですか。でも、やっぱりこの位大した事じゃないよな、ゴブ吉くん。……

あ、そうじゃないと。いやでもゴブ江ちゃんなら……はいはいそう

ですかそうですねか味方は居ませんか。

一通り嘆いた後、他に挑戦者は居ないかと問いかける。ココで立場をハッキリさせる事で、追々発生するかもしれない面倒事は少な
くできるだろう。

結局挑戦者は誰も居なかったので、本日俺は正式にこの【小鬼の
ユニティ
集落】のトップに君臨したのであった。

その後、この女性達には手出し厳禁と宣言し、詳しいルールは後日告げると言って解散させた。

猿ぐつわと手足を拘束していた縄を解いた五名の女性達には、嘗て捕われ孕まされて絶望の中死んでいった哀れな女性達が放り込まれていた洞窟の最深部に入ってもらおう。移動してもらったのは、彼女達に逃げられては困るからだ。

いや、逃げても別にいいんだけど、こんな森に非武装な女性が放たれてもどれかに殺されて喰われるだけである。

折角助けたのにそんな結末では納得できるはずがないだろう。だから、話し合いをするためにも洞窟がベストなのである。それに幸い、【異種族言語】ヒューマン・ランゲージがあるので会話する最低条件はクリアされているってのも大きい。

やがて移動が終わり、俺が予め造っていた松明に火を灯して光源を確保。【暗視】をデフォでもってるゴブリンは兎も角、人間にこの暗闇は見難い事この上ないのだ。

そうやって準備を整えてから、話し合いである。俺は君等に危害を加えないと約束するし、衣食住も保障する。それにもし襲われたら俺がその個体を処断するし、時間はかかるけど街にも帰そうと語り続ける。

大体五、六時間は経過しただろうか。俺の献身的な説得のお陰か、それとも別の理由からか、ポツポツと彼女達は話し始めてくれた。

話してくれたのは、いち早く立ち直った冒険者の女性 赤い髪

をショートにした、活発そうな綺麗よりも小動物的な可愛いさを持つ子 だった。

赤髪ショートの話を纏めると、四人の女性は行商人のペトラー一団である星神亭 の従業員メンパーだったそうだ。

そして赤髪ショートは 星神亭 が総合統括機関に金を払って募集した護衛の依頼クエストを引き受けた冒険者組合 弱者の剣 の構成メンバーの一人なのだそう。

冒険者組合 弱者の剣 は駆けだし冒険者 やっぱりそんな職業があるらしい。これで確定した を相互支援する事で個々の能力を育みより強くなる事を主な活動方針として掲げる、典型的な支援クランであるらしく、【職業・戦士】持ちな赤髪ショートは駆けだしなので、まずはそこで力を蓄えよう、と思って所属したそう。

そしてそんな彼女達が何故こうなったのか、その流れは簡単に述べるところなる。

彼女達一行は防衛都市 トリエント に向けて街道を進んでいた。そこに待ち伏せしていたゴ布林（親）達の毒矢による奇襲発生。

最初の攻撃により指揮を採っていた中堅冒険者なリーダーとその取り巻きメンパーが悉く殺される。

経験つて事で護衛の冒険者の数は揃っていたが、どれもこれも初心者冒険者ばかりだ。そんな連中では武装した上に群れとしての熟練度も高かったゴ布林（親）達にはとてもではないが敵わない。死にたくない一心で我武者羅に反撃してゴ布林数体は初心者冒険者でも殺せたが、ホブ・ゴ布林が三体もいて組織的に動き敵に最終的には屈する。

というかホブ・ゴ布林メイジの存在が致命的。

魔術を操るメイジ系に対抗するにはその個体よりも高い戦闘能

力を持つか、【職業・魔術師】を所持している。もしくは高額で使用できる魔術と使用回数が決まっているが、子供でも魔術行使が可能になる巻物スクロールか短杖ワンドなどのマジックアイテムが必須になる。だが、そんな高級品を駆けだし冒険者が買える訳が無い。

結果、抵抗むなしく鎮圧され、武器や商品は略奪、男は殺され、生き残りの女である彼女達は攫われて現在に至る。

俺が言うべきではないのだろうが、何とも世知辛い話である。彼女達以外全滅っぽいのが尚更だ。

まあ、運が無かったと言うしかないだろう。

そこまで話してくれると、我慢できなかつたのか泣き始めた。

流石に仲間を殺したゴブリン種とこれ以上一緒に居るのは気持ちの整理もできていないのだから辛いだけだろうと思ひ、予備の松明と毛布を置いてある場所を告げてから引き上げる。

今は、ただただ感情のままに泣かせてやるべきだろう。

さて、今の内に【職業ジョブ】について語っておくべきだろうか。

亜人種やら獣人種やらその他のモンスターやらとにかく人間では無い生物には【存在進化ランクアップ】という法則がこの世界には存在する。そして俺の言い回しからも分かるかと思うが、【存在進化ランクアップ】という法則が人間には無いのだ。

ただその代わりとして在るのが、多種多様な【職業】である。人間は基本的な能力がモンスターに大きく劣る。

だから多くの【職業】を獲得 どれにもそれなりの条件があるようだ。そして強力なモノほど条件は厳しいらしい する事でより多くの“恩恵/補正”をその身に宿して自己を強化し、強大な敵に立ち向かうのだそうだ。

それに【職業】レベルは誰でも時間をかければあるラインまでは

簡単に上昇するし、ある程度の適正がある者なら上位職に【位階上昇^{ランクアップ}】する事が可能である。

【勇者】や【英雄】と呼ばれる存在が出来上がるのも、この【職業】の補正が大きいのだろう。

そして実際に【職業・英雄】とかあるらしいと言うのだから笑えん。

もつと噛み砕いて言えば、モンスターの【存在進化^{ランクアップ}】は個体の素質に大きく左右されるが一度でその地力を飛躍的に上昇させる事ができ、人間の【位階上昇^{ランクアップ}】は成長はモンスターと比べ遅いが時間をかければ誰だってそれなりの力を持つ事ができるのである。

数段飛ばしで行くか、一段一段確実に行くか、と言った感じだろう。

もしくは質と量のような違いかもしれん。

ちなみにコレはゴブ爺からの情報なので正しいと思われる。

“二十八日目”

泣いて疲れて寝て多少はスッキリしたのか、もしくは立ち直りが早いだけなのか、早朝様子を見に行くと赤髪シヨートには元気よく挨拶された。

他の四人にはまだ怖がられている風であるが、それは仕方ない。それは時間が必要だって事で納得しつつ、略奪品の中にあつた調理道具一式と食材を使って俺が作ったシチューモドキを出す。

いやいや、久しぶりに文明的な食事が出来て嬉しいです。自画自賛になるが、シチューマジで美味しいぞ。

食事ってやつは、生きるためには絶対に必要だ。

そして食事は美味ければ美味い程精神を癒してくれる、一種の治療薬のようなモノでもある。飯を喰い、落ち付いて話し合いができるようになった事を見極め、彼女達について更に詳しく聞いていく。もし何かできるのであれば、出来る事をやらした方が気が紛れるだろうから、という考えがあつたからだ。

ちなみに赤髪シヨート以外の四人はデフォで【職業・行商人】ペドラー持ちなので説明は省略しておく。

ほんわかとした雰囲気を持つ一人は【鑑定士】と【鍛冶師】スミス持ちであるらしいので、シヨートソードやロングソードなどの刃を研いでもらつたりする事に。設備が整えば、もっと何かできるそうなので用意すると約束した。

同じ顔から姉妹らしい二人は【料理人】コックと【仕立屋】テイラー持ちであるらしいので、今後は料理や衣服製作を担当して貰う事に。流石に仇であるゴブリンの服を作れとは言えないので、自分達の服を作る様に言うておく。全体の為の料理だけはしてもらうが、これは我慢してもらいたい。

知的なクール系美人の一人は【錬金術師】アルケミストらしいので、ポーション作成などをお願いした。ただ、毒物を作つて飯に盛る時には君達の護衛のためにメンバーを選出しなくてはならないから、ヤル時は予め言うて欲しいと囁いたら、怖がられました。

何故だ。

赤髪シヨートは農作業とはかできるけど、現状ではハツキリ言つて役立たずなので、今後は訓練に参加して強くなるって方針で決まつた。女性は自分の身は自分で守れるのにこした事はないのだ、特に今回の様な場合もあるんで。

食事を終わると訓練、つてのが今までの流れだったが、今日はしない。全ての荷物を纏めて引越しの準備である。

何故引越すのかと言うと、帰ってきたゴブリンを含めるとこの

洞窟ではかなり手狭なのだ。今までは産まれたゴブリンがこれほどまで残る事が無かったので問題はなかったそうが、流石に今回はそうはいかない。

だから、オークの元採掘場に引越すのである。あそこなら広さも申し分ないし、何より採掘場として機能していたので崩れない様に補強されていて頑丈だ。あと、さり気無く精霊石も狙っていたり。

ゴブ吉くんをリーダーとした十ゴブを先発部隊として送り出し、荷物を全て持って洞窟を出たのはそれから一時間後の事だった。即座に動けたのは、作業員数やバツクパツクの数が増っていたのが大きかった。

彼女達はゴブ美ちゃんやゴブ江ちゃんなど信頼できるメンバーだけで護衛し、歩く事一時間以上。ようやく目的地に辿り着いた。

どうやら再びオークがやってきていたそうだが、ゴブ吉くん達が既に殺した後だった。心臓は俺が貰い、他は褒美として先発メンバーに分配する。

そして採掘場内の内装を整えていく。とは言え、飾るモノ何て殆ど無いので武器や食料を置く場所を簡単に決め、寝る場所を整備するなどだ。

無論トイレも忘れない。

一通りの事は終え、残りの細々とした事柄はゴブ爺達任せ、俺は彼女達の暮らす一画の整備を開始。

幸い【地形操作能力^{アースコントロール}】があるので作業は簡単だった。

鍛冶師さんの鍛冶場、姉妹さん達の調理場、錬金術師さんの作業場、そして彼女等の寝る場所を、と手早く済ませていく。寝所は俺の糸で造ったベッド。木の枠に糸を張り巡らせただけのかかなり簡単な構造。であるが、そこそこの寝心地はいい。

飲み水や光源は壁を掘ると出てくる精霊石があるので、全然問題は無い。鍛冶師さんも、ちょっと工夫すれば簡単な鍛冶は出来ると言っていた。

今日は引越しの片づけやら雑務で一日費やした。

飯は姉妹さん達が作ってくれた。

流石【料理人】^{コック}持ち。大層美味であった。

“二十九日目”

ようやく年上ゴブリン達の訓練を開始する。

まずは見本と言う事で整列や実戦訓練を簡単に見学させた。年上ゴブリン連中はその光景に驚いていたが、実際にやってみらうので驚いたままでは困る。

そんな訳で本番だ。まずは整列を素早く行うや耐久ランニングなどの基礎から開始する。どこぞの鬼軍曹のように罵声を浴びせ、遅れた者には罰として腕立て伏せをプレゼント。殴りかかってきた馬鹿もいたが、そんな奴にはパンチをプレゼントすると共に腕を押し折る。絶叫をしばらく捻りださせた後で治療し、再び訓練に戻す。そんな感じで数時間程訓練し、最後に俺との組み手を行った。そして、うん、何処かで見た光景になった。最終的に、誰も動けなくなったのだ。

ちなみにゴブ吉くん達はその光景を遠巻きに見ながら、『ああ、やっぱり』『ああ、分かる分かる』『あれ、キツイんだべさ』とか言っていたり。

まあ、流石に体力はあの時のゴブ吉くん達以上なので回復に費やす時間は少なかったたので、大体体力が回復した頃合いを見計らって訓練を再開したが。

今日はハンティングには出かけず、年上ゴブリンの訓練と俺が定めた階級やら俺ルール等に関する勉強に時間を費やした。

“三十日目”

今日は豪雨である。流石に外を出歩くのは憚られた。

そんな訳で、丁度いいので再び群れの順列を決める祭りを開催した。群れの大雑把な階級はさっさと決めていた方が何かと都合がいいのだ。

ただホブ・ゴブリンとゴブリンとは基本的な能力面で大きな差があったので、その二つを分けて素手で勝負し、順列を決めていく。

結果、まあ、順当に決まったと言えばそうだろう。

トップは相変わらず俺で、次席はゴブ吉くん、その次が元ホブ・ゴ布林リーダーで、その後にゴブ美ちゃんってな感じに。後の三ゴブは大体同じくらいの格闘技量だった。

魔術使用可だったらホブ・ゴ布林・メイジのホブ星さんが俺の次に来たかもしれないが、今回は魔術使用不可だったのでこうなった。

祭りが終了し、その後は実戦訓練を続行するゴブ吉くんのグループ、ピツケル担いで採掘訓練に赴くゴブ江ちゃんのグループ、ゴブ美ちゃんを教師役にして俺が決めたルールやら階級や大陸文字についてやらの勉強をするグループ、と大体三グループに分かれてた。ちなみに俺はホブ星さんと色々話をした。どんな魔術が使えるのか、興味があったのだ。

聞いた所によるとホブ星さんが扱える魔術は【炎熱】【水氷】【深淵】の三系統らしい。とはいえ、中途半端な所から始まる書物しか読んでいない俺に系統とか言われてもどんなモノなのか正確には理解できないので、ふーんと理解したフリをしておく。

その後は色々と情報交換してからそれぞれの用事の為に動く。ホブ星さんはゴブ美ちゃんの所で勉強しに、俺は彼女達が居る場所に赴く。

様子を見に行くと、鍛冶師さんの鍛冶場は火精石や水精石によって火と水が確保され、採掘訓練の際に大量に出てくる精霊石と鉄鉱石で道具を製造中だった。鍛冶道具は略奪品の中に数セットあったので問題なくできているようだ。

何か不満が無いか聞き、鍛冶場をちよいと使い易いように組み直す。若干俺に対して怖がらなくなつて来たようで、満足である。

その次は姉妹さんの所に向かう。

コチラも調理道具は略奪品の中にあつたので問題は少ない様だ。ただ作る量が量だけに今から大量に食材を刻んで、と二人でやるには大変そうだったので手伝いをする。

まだちよつと怖がられるが、積極的に話しかけ続けたのがよかったのか、多少は話してくれるようになったのでよしとしておこう。偶に笑みも零すので、なおよし。美人の笑顔はいいもんだ。

ついでに俺が知っているレシピも教えてみる。

その次は日々ポーションを製作している錬金術師さんの所に。

コチラも前と同じく道具が揃っていたので問題ない。幾つか出来上がった薬品を【物品鑑定】してみたが、今の所毒薬は作っていないようだ。

興味があつたので造る過程を見学する事に。冷たそうでかつどこか棘のありそうなクール系美人な錬金術師さんは製作中まったく喋らないのだが、それでも目の保養になつたので問題なし。

作り終えてから軽く会話し、俺は自分の作業場に赴いた。

そこである程度加工しておいたブラックウルフの革を使った防具生成に勤しむ。

俺の糸で革を縫い、慣れとアビリティ効果で製作は比較的早く進んだ。とは言え、完成したのは夜遅くだったが。

寝る前にハルバードで素振りを行い、感覚を慣らしておく。

今日は激しく動いていて疲れたのか、ぐっすりと眠りました。

三十一日目〜四十日目（前書き）

今までで最大の文章量になりました。
チマチマ読んでやってください。

三十一日目〜四十日目

“三十一日目”

今日も豪雨で、洞窟で過ごす事になった。

今回は普段通りに午前訓練を終えた後、昨日製作したブラックウルフの毛皮と今まで集めた素材で造った新しい防具を着て、今だ実戦で振えていないハルバードの慣らしも兼ねて、完全武装なゴブ吉くんと結構本気な戦闘訓練を行った。

ちなみに俺の防具はちよつと余裕のある黒いレザーパンツに黒のロングコート、左手には堅牢なる錬鉄製のガントレットを装備し、右手には甲殻補強したりと色々と改良したラウンドシールド。頭部防具は無く、足には年上連中なゴブリン達が持ち帰った冒険者御用達の頑丈そうなブーツを、つてな具合に。

うん、俺の肌の色も黒いので夜になると【ハイディングポーターナス隠密補正】が非常に高い装備である。

あと、保険つて事で胸部の裏側には軽くて頑丈なオニグモの甲殻をさり気無く縫い付けているので、何気にアビリティの重複使用によってレザーな見た目に反して改造したフルプレートメイル並みの防御力があつたりする。

ゴブ吉くんの装備はオーク討伐時に得られた品々に幾つか変わっている。

メインウェポン主武装は俺が発掘したバトルアックスから大きめの“火精石”が装飾として埋め込まれた事によって【火炎刃】を獲得した燃えるクレセントアックスになり、盾は甲殻で補強したラウンドシールドがかなり重いがその分防御力が高く、それに加えて魔術による素材強化まで施されているらしい黒鉄製のタワーシールドに。

鎧はオークリーダーが装備していた重鎧をベースに、細々とした部位に俺の糸と甲殻と毛皮を組み合わせて防御力と動きやすさを向

上させたモノに変わっている。

まるで動く鋼の要塞のようになっていて、ゴブ吉くんは、肉体的能力も前衛特化になっていて、この装備面の向上によってその戦闘能力は洒落にならない事に。

いや、ゴブ吉くんは本当に強いんですよ。

普段の訓練でもその強さをヒシヒシと感じていたが、こうやって完全武装した状態で対峙すると、その強さをより一層感じられた。

基本的に多彩なアビリティで自分を強化し、様々な手法で相手を混乱させ、後ろからブスリってなやり方を得意とする俺は、今回のようにアビリティ無しで真つ向勝負をした場合、ゴブ吉くんのように純粹に強い相手は苦手なんだよね。

それでもまだ技術で勝てる相手ではあったが、ハルバードの遠心力を乗せた重連撃をタワーシールドでほぼ完璧に防がれたのは流石にビックリした。それに繰り返す一撃一撃が非常に重いし、何より斧の扱いが熟練されていたのも驚嘆に値する。

どうやったら斧をより鋭く、より速く、より重く振れるのかを経験で理解しているようなのだ。まあ、最初のハンティングからこれまで棍棒 斧 斧って感じで似た系統の武器を扱ってたからだろうけどさ。

何気に、ゴブ吉くんはこの【ゴブリンコミュニティー小鬼の集落】で斧の扱いに関しては最強になっているようである。

あと燃えるクレセントアックスは思った以上に厄介だ。俺は【炎熱耐性】があるからクレセントアックスの刀身に纏わり付く【火炎刃】で酷い火傷を負う事はないのだが、耐性はあくまでも耐性でしかない。なので熱いモノは熱いし、燃え盛る炎で視界が悪いのなんの。あと長時間近くに居ると柄まで金属製のハルバードが熱を持つようになるのは勘弁してもらいたい。

そんな感じで結構な時間を模擬戦闘に費やし、昨日の様に服を造って、採掘された“精霊石”を摘まんで、姉妹さんが造ってくれた

晩飯を喰って寝た。

そして皆が寝静まった夜、それは発生した。

五人の彼女が眠る場所にひっそりと向かう八体分の反応を、俺の【気配察知】が捉えたのである。

何事かと思い目を覚まして気配のする方向を見て見れば、そこにはひそひそと小言を交わしつつ、彼女達の寝込みを襲おうと意気込んでいるゴブリン達の後ろ姿が。

それを見た瞬間、俺は枕元に置いていたハルバードを片手にその後を隠れながら追走し、ゴブリン達が彼女達の寝込みを襲ったのをしっかりと確認　言い逃れできない証拠って奴は非常に重要だ。

やった後で勘違いでした、とか勘違いでした、とかだと洒落にならん　してから、ハルバードの一振りが一番後ろにいたゴブリンの頸部を薙ぎ払う。

斬り飛ばされ、重力に引かれて落ちてコロコロと転がる頭を踏みつけ、グシャツと一気に踏み潰す。踏み潰され、頭部の中身が溢れ出てブーツを汚すが気にならない。

ちなみに血が大量に噴出すると後処理が面倒なので、胴体の方の傷口は切った瞬間に焼いている。

肉の焦げる臭いが、俺の戦闘本能を刺激した。

恐らく今の俺は、嗤っているに違いない。

突然発生した無残な殺害にピシリと固まる空気。

何が起きたのか処理できずに茫然と俺を見てくる全員の視線を意識して無視し、糸で襲おうとしていたゴブリン全員を捕縛する。捕まえた顔ぶれを見て、元ホブ・ゴブリンリーダーの部下にしたメンバー+　だと理解する。

そして真つ先に赤髪シヨートを襲っていた元ホブ・ゴブリンリー

ダーが股間をギンギンに膨らませた状態で目の前に転がっている
で、誰が言い出しつぺなのかは確定している。

殺す前に少し話を聞いてみると、どうやら性欲が抑えきれなかつ
たようである。同族の雌で発散しろよと聞いてみれば、一度人間の
女の身体を知ってしまえば雌ゴブリンの身体では満足できないら
しい。快感が桁違いなのだとか。

んな事知るかかって話である。取りあえず一発殴ってから、襲われ
た彼女達の服が一部破かれていたりしたので話を途中で打ち切る。
聞きたい事は聞けたのでもう十分だ。

自分の身体を抱きしめる様にして震える彼女達に、昨日の内に造
っておいた俺の糸製の肌触り抜群なカーディガンを渡して回る。

破けた服装で居るのは、他のゴブリン達にとって目の毒になる可
能性があるからだ。

全員に配り終わると赤髪ショートに抱きつかれて泣かれたので、
背中をポンポンと擦りながら声をかけて落ちつかせてやる。そした
らさらに勢いよく泣きだしたけど、根気よく落ちつけるようにゆっ
くりと声をかけ続けた。

そうこうしていたらゴブ吉くんとゴブ美ちゃんとゴブ江ちゃんが
やってきたので、糸でグルグル巻きにしているゴブリン達を訓練に
使用している出入り口近くの広間に持って行くように指示。あと寝
ている全員も起こす様に言う。

俺が頸を刎ねてできた一つの屍は放置である。

指示を出し終え、ちょっと時間を置くと赤髪ショートも落ち着い
てきたようではあったのだが、俺の服を放してくれなかった。なん
か、意思とは関係なく手が開かないそうだ。まだ微かに震えていた
ので、無理に解く事はしない。

本当はコレからする事は精神衛生上見ない方が良いとは思うのだ
が、仕方がないので、一緒に連れて行く事に。

残った四人はまだ震えていたモノの、約束通り助けた俺から離れるのを嫌ったのか、もしくは見届けるべきだとも思ったのか、あるいはそれ以外の理由からか、ちよつと間を開けてついてきた。

眠っていた全員を起こし、全員が出入り口近くの広間に集まったのを確認し、捕まえたゴブリン達をハルバードの穂先で指し示す。

こいつ等が何をしたかあれこれやゝゝ、俺の言う事がうんぬんかんぬんゝゝ、と説き、理解させ、レッツ拷問。

手始めにボウイー・ナイフで指先から刻んでいく。出血死しない様に傷口を火で焼いたり、回復技能ヒーリングスキルを使って生命力強化・体力強化などの祝福を施して死に難くしてからジワジワと。

悲鳴が五月蠅いので口を糸で塞ぐ。あと舌を噛み切らせないって意味合いもある。まあ、舌を噛み切ってもすぐには死ぬわけではないからそもそも無駄だけどなー。

うん、周囲ドン引きだ。

物理的にも精神的にも、ドン引きである。

しかしながら、俺が交わした約束を反故しないと彼女達に証明するにはこうやって行動で示した方が分かり易いし、そもそも現リーダーな俺の言う事に従わず、前リーダーの言う事に従う輩何ぞハッキリ言つて必要ない。

こんなのを残しておけば追々面倒事を起こすに決まっているので、未来の為に厄介事の芽を摘むって感じでやりました。

今これをやらなかったから未来で後ろから刺されて死んだ、って結末にでもなつたら馬鹿らしいので。

六体のゴブリンを様々な手法で処理し、最後の一体になった。

最後の一体　元ホブ・ゴブリンリーダーは目で命乞いしてきたけど、サンドバックにしてあんなに可愛がってやったのに何も理解できていない愚者に、俺はどうしても存在価値が見いだせない。群れ内ではやはり強かったからそれに見合っただけの地位にしていたのだが、やはり馬鹿は馬鹿でしかなかったようだ。

馬鹿でも理解できるように俺が幾つか定めた最低限のルールすら守れないような奴はもう知らん。

こんな結果になったのはコイツの意思である。

流石に俺だつて気にいらなくてだけで一応の身内を殺しはしないのだ。コイツの様に、相手を殺すに足る理由が無ければ。そもそも、話は戻るが組織内に二つの勢力があつてもいい事なんて限りなく少ない。

つてな事で躊躇はなく、片腕を燃やしたり、水攻めしたり、重しを乗せて鞭打ちしたりを繰り返して繰り返して、死なないギリギリのラインを保つように拷問を続行。

“三十二日目”

元リーダーが息絶えたのは、朝日が昇って洞窟の入り口から陽光が差し込んできた時だった。

どうも、ちょっと熱中し過ぎたようだ。ゴブリンよりも生命力強いから、なかなか死ななかつたんだよね。俺が回復させ続けたつてもあるけどさ。

正気に戻って周囲を見回す。全員完全に怯えてました。

ニコツ、と笑つて、理解できたか？　つて問いかけると皆、凄いい勢いで頷いてくれた。それに満足したので、解散して昼まで眠る事を厳命。いや、皆疲れたら寝ればいいのにさ、ずっと動かさずに見続けていたんだよね、拷問を。

だから俺と同じく寝てないんだよ、気絶した個体を除いた殆どが、その為命令して寝かせるのである。ついでに訓練も今日は休みと言う。

能力で作った水球で手や顔に付着した返り血を流し終え、ふと誰よりも近かくで作業を見つけていた赤髪ショートが小刻みに震えながら虚ろな目をしているのに気が付いた。

新しい水球を作って顔面をバシヤリと濡らして正気に戻す。

驚いた隙に横抱きにして彼女達の寝所まで運んで行く。身体の震えが強くなっていくがあえて無視。無事に運んで広間に戻ってくると、他の四人もまだ動く事ができていなかったため、同じ事を四回繰り返しました。

運搬作業を終えて、他のゴブリン達が寝所に戻るのを確認してから俺も眠る。

午後二時辺りになって目が覚めた。

殺したゴブリンの心臓と胃を昼飯代わりに喰らい、残りの部分は

アースコントロール
【地形操作能力】で地下に埋葬する。

その頃になると他のゴブリンも起き始めたが、訓練は今日は無いと言っているのです、そのまま四ゴブでハンティングに出かけた。

一応彼女達の守りは奴隷兼部下な五ゴブとゴブ爺達 襲ったら、分かっているよね？ と聞いたら凄い勢いで頷いたので安全だろうに任せているので問題ない、多分。

まあ、俺の糸で造った避難区域もあるので何かあっても時間稼ぎくらいはできるだろう。ショートソード持たせた赤髪ショートも残っているし。

それにオーク討伐時に得た非常招集用の角笛も持たせているので、危険があればそれを鳴らす手筈になっている。音は広範囲まで響くようになっていて、あまり遠出しないうちにしているのです、何か危険があれば急いで帰れば間に合うはずだ。

そんな訳で安心してハンティングに出かけた俺達が最初に見つけたのが、トリプルホンホースだった。

見るからに堅牢そうな鱗に、普通の馬よりも二周りは大きい体躯。今の身体だと、大きく見上げなければならぬ程の巨馬だ。生物としてホブ・ゴブリンなどよりも遥かに上位者として進化している種である。それが二頭だ。恐らくは番なのだろう。もしかしたら、腹の中に子供もいるかもしれない。

しかしそんな事は分からないし、俺達が生きる為の糧になってもらうべく、俺達は定番の奇襲を実行。

初撃は定石通りにゴブ美ちゃんとゴブ江ちゃんの毒矢を装填したクロスボウによる狙撃だ。

狙撃の結果、ゴブ美ちゃんの一矢は一体の目玉を正確に貫き、ゴブ江ちゃんの一矢は僅かに狙いが外れて胴体に直進し、強靱な鱗によって弾かれた。

鱗硬ッ！ クロスボウの一撃は並のプレートアーマーなら軽く貫通する程強力なのに、簡単に弾きやがったッ！！と思わず叫びそうになる。

それに鏃には俺が生成できる中でも結構強力な毒を塗っていたのに、目に矢を受けたトリプルホンホースは即死する事無く、しかしその痛みで激しく暴れだした。凄まじい生命力だと呆れる他ない。そう驚いている隙に、無事な一体が俺たちに気が付き、縦に並んだ三本の角を突き出すように、怒りにまかせて突っ込んできた。まあ、俺の糸と電撃のコンボで動きを止める事が何とかできたのだが、密度が薄い時の糸がブチブチと強引に引き千切られていく様は正直キモが冷えた。

一体どれ程の馬力を持っているというのだろうか？

ホブ・ゴブリンなどとは比べ物にならない程の臂力であるのは間違いない。

痛みで暴れている一体を、ダメージは微々たるものだがゴブ美ちゃんもゴブ江ちゃんの狙撃でその場に引き止めつつ、糸で雁字搦めにした無傷な一体を俺のハルバードとゴブ吉くんの燃えるクレセントアックスで斬りまくる。

最初の方はやはりその鱗で弾かれていたが、それを幾度も繰り返すうちに鱗の簡単な削ぎ方を発見するに至る。そうなれば話は早い。ハルバードとクレセントアックスの刃が鱗を削り飛ばし、その下の肉を切り裂き、その太い首を刎ねる事に成功する。

もう一体は毒で弱っていたのに加えて殺し方も理解できていたので、最初よりは簡単に狩れた。

かなりの重労働だったが大きな怪我も無く、実に有意義なハンティングだった。素材は全部持ち帰っても良いのだが、初めて狩った獲物だと言う事で俺達が全部食べる事に決定。

大きいのでゴブ吉くんを除いた三ゴブで残りの鱗をせっせと削ぎ、その肉を切り分けていく。ちなみにゴブ吉くんは再び周囲の警戒役だ。適材適所って事で。

んで、俺は六本の角と心臓と、四等分した肉を仲良く分け合ってボリボリと喰った。

あと、なんか得られるかもと思い鱗もバリバリと。

- 【能力名】アビリティ【鱗鎧駆動】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【鱗馬の嘶き】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【高速治癒】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【脚力強化】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【突進力強化】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【三連突き】のラーニング完了

喰い終わるとアビリティを六つ獲得できた。これはトリプルホーンホースが強いつて事の表れだ。普通じゃ、ホブ・ゴブリンが四体

居た程度で殺せる相手ではないのだから。

あと、転生して初めて物理直接攻撃系アビリティを手に入れたのは大きい。

【三連突き】ってなぐらいなんだから三度突くのだとは思うが、モノは試しにとアビリティを発動させながらエストックで木を刺突し、結果幹に穴が三つできました。

うん、これ、実は一度しかエストックを突き出していなかったりする。目に見えない程の速さで三回突いたとかではない。なのに穴が三つできた。それも上下に一っずつ。

原理が不明なのは今更なので何とも思わないが、これって、上下の攻撃は物理防御無効なのかな？ と考えてみる。が、答え探しはまたの機会にしよう。

その後は色々散策して、普段通り獲物を狩って帰って寝た。

寝ていたら赤髪ショートが俺の寝所に潜り込んできたので、一緒に寝ました。

言っておくが、エロスとかはなかった。

ヒトの温かさは、やはりいいもんだと再確認。

“三十三日目”

目を覚まして起きあがろうとしたが、身体が重くて動かなかった。感覚的には腕を広げた大の字なのだが、両腕の感覚が鈍いのは何故だと疑問が。一先ず情報を得ようと左右に頭を振って確かめてみると、右にはゴブ美ちゃんの寝顔、左には赤髪ショートの寝顔が。うん、所謂腕枕である。腕の感覚が鈍いのは、二人の頭が乗っている事によって血流などが邪魔されているからだ。

どうしてこうなっている。

本音を言えば感覚が薄くなっている腕を早く動かしたいのだが、

すやすやと幸せそうに眠る二人を起こすのは忍びない。て言うかね、うん、ゴブ美ちゃん何時の間に入り込んできたのと言いたい。

赤髪シヨートは寝ぼけていたからまだ納得できるけど、それでも潜り込んできたのは覚えているからまだ納得できるけどさ。

俺の【気配察知】でも感知できない程の高度な【ハイディング隠れ身】を持っているのか？ いや、そんな訳が無い。

恐らく、【気配察知】は相手が殺気を出していないとか敵意が無いとかだと反応がちょっと鈍いから、そんな感じで見過ごしたのだろう。

とりあえず何とかしたいなーこの状況。と思っていたらホブ星さんが近くを通りかかった。ホブ星さんとはホブ・ゴ布林・メイジの名前ね、メイジの名前。分かっているだろうけど、一応補足しておく。

助けてくれと目でお願い。くすりと小さく笑って、自作の道具箱に入れていた俺の愛読書の一つ 【魔術師入門・基礎魔術一覽中巻】を拾い上げて、優雅に去って行きました。

くそ。それ、ちゃんと返してくれよ。

その次は朝練を自主的にするためか、クレセントアックスを担いだゴブ吉くんが近くを通った。

ゴブ星さんと同じように目でお願い。しばらく悩んでいたけど、結局合掌して去って行きました。底抜けに明るい笑みが恨めしい。

おーい。俺達の仲だろ、助けてくれ。

ゴブ吉くんの後は眠たそうに欠伸をしているゴブ江ちゃんだった。ピッケル装備で、最近では宝石みたいに綺麗な“精霊石”蒐集にハマリ、他のゴ布林（メス）と一緒に精霊石採掘クラブなるモノを結成したようなので、今は午前訓練前の趣味の時間なのかもしれない。

い。
縋る様に目でお願ひ。仕方ないな、と言わんばかりに苦笑していたのでこれはいけるか、と思っただけど何かを見た途端冷や汗を流しだして、俺があれ？　っと思っっている間にそそくさと去って行った。

そろそろ……、助けてくれ……。腕の感覚が……。

俺の願ひは誰にも届く事無く、そのまま放置される事に。

ちらほらと俺達の様子を見ていく奴等もいるけど、誰も助けくれなかったのである。

そして俺が目覚めてから約一時間後に、二人はようやく目を覚ました。いや、流石にそろそろ腕が危ないなあ、て身動きしてたからだろうけど。

寝ている間ずっと腕枕は、ハッキリ言ってキツイ。しかも両腕は、腕の感覚がしばらくの間無かった。

姉妹さんが作ってくれた朝飯を喰ったら、午前訓練を開始。

なんか皆、鬼気迫る程の迫力で取り組んでいた。

あれえー？　と小首を傾げていたら、上のポスト　元リーダーの席だ　が一つ空いたからそこに滑り込みたいつてのと、単純に俺のように強くなるためには本気を越えた力で取り組むしかないんだと理解したからだそうだ。

これはゴブ吉くんからの情報だ。訓練を受け持つゴブリン達の話
を纏めたら、そうなたんだとさ。

ああ、そうそう。言ってなかったけど、ゴブリンの数がかなり増えたので最近俺が全体の監督役にして進行役を務め。

ゴブ吉くんは特に攻撃力と防御力のあるメンバーで構成された敵を正面から駆逐する為の重武装部隊　ラーヴェロジオン　の指導役

兼部隊長に。

今まで紹介されていなかった最後のホブ・ゴブリンなホブ里さんは、攻撃力と速度に特化した個体を集めてヒットアンドアウェイな戦法が採れる機動力重視な軽武装部隊 レッドシャルジュ の指導役兼部隊長に。

ゴブ美ちゃんは接近戦に適正の無い個体を集め、ショートボウやクロスボウを主武装にした遠距離攻撃部隊 ティラール の指導役兼部隊長に。

ゴブ江ちゃんは上記の三つの部隊に入るには戦闘能力が不足していると俺が判断した個体を集め、自衛出来る程度には戦闘能力を保ちつつ、料理や裁縫など身の回りの仕事をこなす後方支援部隊 パトリ の指導役兼部隊長に。

ホブ星さんはメイジの素質を持つ者が今の所俺以外居ないので個人特訓だけしかしていないが、魔法行使部隊 マジシアン の部隊長になっている。

ちなみに終了間際の俺との手合わせは総数五十九ゴブ 同年代ゴブリン三十九+年上組二十八-殺した八ゴブの合計 となった今でも続けている。ただし木刀ありの、俺一人に相手はバディーだ。

まあ、ハンデありでも問題なく勝ていたり。

でもゴブ吉くんとかゴブ美ちゃん、ホブ星さんとか辺りでは流石に一对一だけでも。アビリティ使えば俺対全員でも勝てるだろうが、それでは地力を上げる訓練にならないので。

そして午後のハンティングである。今回は皆やる事があるとかで俺一人だった。

ゴブ吉くんは指導しているゴブリン達にお願いされて午後も一緒に訓練をやるみたいだし、ゴブ美ちゃんはまだ階級とか大陸文字とか俺が考えた簡単なルールとかを覚えられていないゴブリン達の教師役をずっと言っていたし、ゴブ江ちゃんはゴブ江ちゃんで“精霊

石”をもつと大量に掘りだすべく採掘クラブのメンバーを伴って
そいそと奥に。

だから俺は一人で外にハンティング、である。

出かけて、最初にオニグモを見つけた。

以前と同じ手法で殺し、その甲殻を剥ぐ。オニグモの甲殻は軽く
て頑丈な上、【甲殻防御】で硬度を上げられるので重宝できる。

現に今も使っているしな。

【ゴブ朗は“高品質な甲殻”を手に入れた！！】

剥がした甲殻をバツクパツクに入れた後、残りの部分は全部喰っ
た。

オニグモは食用の蜘蛛などでは無いので、味はあんまり美味くな
い。

【能力名【アビリティ視野拡張】のラーニング完了】

新しいアビリティを得られたので味には目を瞑り、気分を良くし
ながら次に。

そして今度はトリプルホーンホースを見つけた。今回は昨日の様
に二頭ではなく、一頭だけだ。

丁度いいので俺が使う【終焉】系魔術の威力を見定める相手にす
る事にし、魔術を発動する準備を開始。

魔術には、一般的に三つの要素が関係するとされているそうだ。
うにゃうにゃと世界の理に干渉する【呪文】スペルを唱えるのがまず一
つ目。

体内で使用したい魔術に必要な量の魔力を練り上げる【体内魔力
制御】コントロールを行うのが二つ目。

そして体外　つまりは空气中に充満する魔力と形成する魔術そのもののコントロールを行う【マナ・オペレーション外界魔力精密操作】の、計三つだ。ちなみに、三つ目の【マナ・オペレーション外界魔力精密操作】が上の二つよりも数倍は困難なの為には魔杖などの外部補助装置を用意するのが一般的だ。俺は杖のアビリティも既に持っているんで、杖を持っていなくても関係なく扱えたりするのだが。

俺は魔術で生み出された漆黒の投げ槍を構え、勢い良く投擲。

漆黒の投げ槍は狙い違わずトリプルホーンホースの太い首を捉え、そのまま直径二十センチほどの範囲を綺麗に抉って消滅。衝撃によってプチプチと肉が千切れた首が宙を舞い、力が抜けてその場に崩れ落ちる身体、という光景はインパクトが強かった。

うん、これ、こんなに威力高かったんだ、と慄く。

いやさ、亜種になってから基礎魔術的なモノの呪文が何時の間にか記憶されていたつてのは、以前にも言ったと思うが、その呪文で精製したこの槍がココまで威力があるとは初めて知りました。グリーンスライムとかには使っていたからそこそこ使えるとは思っていたんだけど、トリプルホーンホースクラスが相手でも大きく外さない限りは即死攻撃が可能とか、魔術つて凄いな。

それとも【終焉】系魔術恐るべしと言うのがいいのか？（恐らく）初級魔術でコレかよ、と。

ま、威力が高過ぎて自爆しそうだからコレは奥の手にするべきだな、と思いつつ解体作業に。

全身の鱗を剥ぎ、三本の角を斬り落とし、脚一本くらいは皆の土産にしてやるかって事で血抜きをする。血が抜けるまでの間に、俺は残りをボリボリ喰った。

【アビリティ能力名【アビリティ鎧鱗精製】のラーニング完了】

【アビリティ能力名【アビリティ強靱な骨格】のラーニング完了】

鱗を造れる様になった。

いや、うん、このアビリティは非常に優れているけど、見た目的にちよつと気持ち悪いので自重しようと思う。いや、試しに使ってみただけど、俺の腕に黒い鱗が一瞬でビッシリと……。

他人には早々見せられたモノじゃないな。

一瞬で^{リザードマン}蜥蜴人になった気分？ と言えはいいのかもしれない。慣れたら大丈夫だろうけど、流石に、見た目的にちよつと、今は視覚的にキツかった。

気を取り直し、獲物を求めて動きまわる。

今度はグリーンスライムだった。サクサクと焼き、核をパクリと。

アビリティ メタモルフォーゼ
【能力名】【形態変化】のラーニング完了】

腕を鞭のようにしならせる事ができるようになった。

ほら、スライムって言うてしまえば粘液の塊である。だから骨とか関係無しに形を変えられるのは、簡単に理解できると思う。

そこでこのアビリティ。骨がある俺がそのスライムと同じくらいの動きができる様にしてくれるのだ。身体をスライムのようにして水溜りみたいになることだってできるし、試しにホーンラビットを粘液化した身体の中に取り込んで【自己体液性質操作】を使って体質を酸性にすると、溶かしてみたらそのまま栄養にできたりした。

それに身体の一部が千切れても、攻撃受ける前にスライム状態になつていたら、飛び散った部分を取り込めば怪我を負う事はないよ。うだ。限界はあるだろうけど、酷い仕様だと思う。

なんて反則、とか思いつつ。使えるアビリティを得られたので悪い気はしない。これもヒトに見せる時には気をつけた方がいい様なシロモノだが。

日も暮れだし、満足いく獲物も狩っていたので、そろそろ帰るかと思っていた俺はその時“発見し/出逢っ”てしまった。

赤い体毛に包まれた巨岩、とても言うべき巨躯を持つ“レッドベアー”に。

体長は目測で四メートル以上はあるだろうか。レッドベアーは遠くから見かけただけでヤバい生物だ、関わってはいけない生物だ、と誰もが理解できるような生まれ持ったの強者である。赤い金属繊維のような体毛は俺のハルバードでもそう簡単には切り裂けないだろうし、仮に体毛を斬れたとしてもその下にある分厚い肉で勢いが止められる様は簡単に想像できる。

普通なら逃げる。一目散に逃げる。そう選択するしかない様な存在だ。

しかし気が付くと俺は隠れて様子見しながら、レッドベアーを殺す為のプランを立てていた。

いや、転生してからこんなにヤバい相手とは闘っていないのだが、転生前はコレよりももっとヤバい奴と殺し合いを演じていたのだ。そしてその度に殺し、喰ってきた。

だからだろうか、コイツと闘いたいと思うのは。

それに喰ってアビリティを得たいと、本能が囁くと言うか何と云うか。

まあ、そんな感じで、俺は俺が持てる全てでもってレッドベアーを殺しにかかったのだった。

激闘が、始まった。

“三十四日目”

レッドベアーと死闘を繰り広げ、それが終わった時、太陽が昇っているのによやく気がついた。

俺の全身はレッドベアーの爪や牙によって切り裂かれて、無事な所など探す方が無駄なくらいに重症だ。それにガントレットを装備していた左手に至っては肘から先が綺麗に無くなっている。

レッドベアの鋭爪を防御したモノそのまま斬り飛ばされ、切り落とされた腕は戦っている最中に喰われてしまったのだ。

無くなったモノはどうしようもないので左腕は糸で止血しているし、全身の数え切れない傷を癒す為に回復技能ヒールングスキルの一つである持続再生リジェネは既に発動済みなので、俺が出血死する可能性は低い。

全身から大量の、それこそ致命的なまでの血が出ていたのにどうしてだ？ と思うかもしれないが、外に流れた血はとある手段で既に補充しているから、全身血濡れな見かけに反して体内の血量は十分に足りているからだ。

まあ、それは後で語るとしよう。

装備面の被害は大きいと言うしかない。二本あったエストックは二つとも根元から折れて使い物にはならなくなっているし、数本あったボウイー・ナイフは木っ端微塵に砕け散りたり、刃毀れしたり、根元から折れたりと無事なモノは殆ど無い。

主要武器だったハルバードは刃毀れが酷いし、鉄製の長柄にはレッドベアの攻撃を幾度も受け流した為に大きく歪みがでている。全壊こそしていないが、修理が必要なのは明らかだ。

まだ新しかったはずの防具は戦闘前の小奇麗な姿など見る影も無くなり、現在はポロボロのハーフパンツとスタボロの上着といった有様だ。

パツと見では負け犬でしかない。いや、負けゴブリンか。それくらいに酷い有り様だ。

だけど、俺は生き残った。俺が生き残ったのだ。

自分で言うのもなんだが、よく死ななかつたな、本当に。

【高速治癒】と回復技能ヒールングスキルによる重複した回復能力が無ければ、ホブ・ゴブリンな今の俺程度では五十回以上は軽く死んでいたに違いない。

【甲殻防御】 【物理攻撃軽減】 【鋼硬毛皮】 【鎧鱗精製】 【強靱な骨格】 等の重複した防御力強化アビリティが無ければ、確実に全

身に裂傷と片腕を失う程度の損害では終わらなかつただろう。と言うか、素の状態では一撃喰らっただけで肉体が削り飛ばされたに違いない。

それほどにレッドベアーの一撃は反則染みていた。というか、反則だつたな、あれは。

しかし俺だつて負けてはいなかつた。

ウェノム

エレクトロマスタ

ハイドロハンド

【蛇毒投与】から始まり、【発電能力】やら【水流操作能力】に【蜘蛛の糸生成】など多種多様な能力の連続使用に加え、糸に電撃や毒などの組み合わせによるコンボは地味にダメージを蓄積する友好的な手段だつた。

本当は【終焉】系魔術によって生み出せる例の投げ槍を多用し、一撃でドカンと甚大なダメージを加えられたらもつと楽に殺せただろうけど、今の俺では魔術の構成に時間が掛かり過ぎて戦闘中にはとてもではないが使えない。隙が大き過ぎて、即座に殺されてしまふからだ。

それにそもそも、最初の奇襲の時でさえレッドベアーには胴体を狙った槍を外されたので、使えたとしても回避されるか、もしくは集中し過ぎてコチラの隙を生むだけの無駄な結果に終わった可能性もあつた。

獣の直感恐るべし、だ。

まあ、右腕一本を最初の奇襲時に奪えたから、あの一撃で満足したのは正解だつたつて事だろう。

それと【斬撃力強化】【貫通力強化】【突進力強化】【脚力強化】

パンプ・アップ

【血流操作】等の強化系アビリティを上乗せして繰り出したハルバードの【三連突き】が凄まじい威力を發揮してくれたのも運が良かった。

ちなみに使っていて判明したのだが、【三連突き】の上下のアレ。あれは物理防御力無効攻撃である事が判明した。ただ実体ある真中の攻撃が突き刺さつた深さまで、同じ大きさまで、つてな条件があるみたいだけ。

あと、使った得物によって穴の大きさは当然変わるので、ハルバードではエストックよりも大きく、それだけ強い一撃になっていたり。

そして最も俺を救ってくれたのは、意外な事にナナイロコウモリから得た【吸血搾取】ヴァンパイアフィリアだったりする。

これ、吸血行動の際に限っては対象の防御力のある程度までなら無視できるし、吸った血を自分のモノに即座に換えられる能力なのだが、コレのお陰で上げられるだけ上げた防御力を突破してきたレッドベアーの攻撃で流された致命的なまでの量の血を、レッドベアーから供給する事ができたんだよね。

つまり自分の血を敵から補充できて、その分の血は相手から奪ったモノなのだからそのままダメージとなっただけで事。

現在の俺はスライムのように身体の一部を変化できるので、指をストローに見立ててレッドベアーに突き刺せば、そこから血を吸えたので補給するのに困らなかつたのも大きい。

うん、もし今持つてるアビリティが一つでも足りなかつたら、今のような結果にはなっていなかったかもしれないなあ。

ああ、そうそう。【悪臭】、あれにも助けられたっけ。胴体に噛みつかれた時咄嗟に使ったらレッドベアーが鼻を押さえて悶えだして解放されたんだよね。いやいや、ホント何が役に立つか分からんもんだ。

激闘を振り返り、しばし黄昏てから、俺はレッドベアーだったモノに目を向けた。

激しい戦闘の余波でなぎ倒された木々の中心にて息絶えた赤い巨熊。全身は俺のように所々傷だらけで、しかし胸部には俺が集中的に攻撃した証拠として大きな斬痕が刻まれている。

虚ろで光の消えた瞳には傷だらけな姿で見下ろす俺が映り、眉間に深々と突き刺さっているボウイー・ナイフが何処となく哀愁を誘う。

何度も語ってしまうほどに、このレッドベアーは、本当に強かった。

【見切り】によって攻撃軌道が赤い線として見えているのに、攻撃速度が速過ぎて回避が間に合わない事があったり、爆発音にも似た咆哮や鋭い眼光で俺の動きを阻害するなどの特殊技能を所々に織り交せてきたのだ。

それにコイツ、熊の癖に口から火炎放射器のような炎の吐息を吹きやがったつけ。本当に、どんな熊だつて話だ。

俺は【炎熱耐性】と【水流操作能力】ハイドロハンドを持っていたから炎で大ダメージを受ける事は無かつたけど、それとこれとは話は別だ。

いやはや本当に、強かつた。勝てたのも、運が良かつた部分が多い。

しかし勝つたのは俺で、勝者は敗者の分まで生きる義務が、責任がある。

ボロボロの身体に鞭を打って近くに転がっていたレッドベアーの右腕を手に取り、少しでも体力を取り戻すべく、喰つた。

【能力名】アビリティ【重撃無双】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【強者の威圧】のラーニング完了】

右腕を喰い終わると、ふつと意識が何処かに飛びそうになった。

これは激闘で失われた体力が大き過ぎて、本能が生存する為には意識を遮断して体力を温存するのが最適だ、とでも判断したからに違いない。【高速治癒】と持続再生リジェネで身体は今も回復し続けているから、意識を失っても死ぬ事は無いと確信している。

俺の肉体だ、それくらいは把握できる。

だが、流石にこのまま気絶するには無防備過ぎた。気絶している間に他のモンスターに喰われる可能性は非常に高く、だから生きる

為に残る力を振り絞って糸を噴出し、余波によってなぎ倒されて周囲に散らばっている木々でレッドベアーと俺の周囲を包み込むように壁を造る。

即席の避難所だ。

木で少しはカモフラージュできているだろうし、糸には噴出時に毒も染み込ませているので、仮に誰かが攻撃を仕掛けてきても最終的に毒でどうにかなるだろう。それでもダメだったら俺は所詮ここまでの存在だったって話で、諦めもつくと言うモノ。

一先ずの守護を完成させると俺は力尽き、意識を

【レベルが規定値を突破しました。

特殊条件 王者殺害 覇道闊歩 神 をクリアしてい

るため、【大鬼・希少種】に【存在進化】が可能です。

【存在進化】しますか？

YES NO】

失う寸前に根性で YES を選択した。

“三十五日目”

何かに促される様に目を覚ました。薄暗いが、それはさして気にならない。

今までにない程の飢餓感に突き動かされる様に、近くに転がっていたレッドベアーの死体に手を伸ばす。

眉間に深々と刺さっていたポウイー・ナイフの柄を掴まんで引き抜いてから、頭部を力尽くで耄り取る。ブチブチと頸部の毛皮や肉、それと頸椎が無理やり引き千切られる音が響いた。

まだハッキリと意識が覚醒しないながらも、手の中にあるレッドベアーの頭部を条件反射でポリポリと喰った。

【能力名】アビリティ【山の主の咆撃】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【威圧する眼光】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【全属性耐性】トランス・オイルのラーニング完了】

頭髪を磨り潰し、頭蓋骨を噛み砕き、脳を嚼つてと数秒ほどで喰い終わり、ほんの少しだけ働く様になった頭でレッドベアの毛皮が必要だと判断して、とても小さくなってしまったボウイー・ナイフで丁寧に剥いでいく。

なんかレッドベアが気絶する前よりも小さく思えたが、まだ頭が正常に働かなくてその疑問の答えが導き出せない。

ただ今はこうする事が正しいと思ったから、毛皮を剥いているにすぎないのだ。他の事まで頭が働く事はない。

俺の左手はやっぱり肘から先が無いけど、この程度の事はアビリティで何とかできるので問題なかった。【形態変化】メタモルフォーゼを使用すれば、肘までしか無い左腕に細長い指をでっち上げて毛皮を掴んだりはできるのだ。

小さいナイフと器用に動かすのが難しい左手の義指に苦労しつつも毛皮は無事剥ぎ終わり、その後で剥き出しになったレッドベアの肉に喰らいついた。

強い飢えに導かれる様に、その血肉を一心不乱に喰らい尽くす。

【能力名】アビリティ【山の主の堅牢な皮膚】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【山の主の強靭な筋肉】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【連撃怒涛】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【獣王の霸道】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【炎の亜神の加護】のラーニング完了】
【能力名】アビリティ【炎熱完全耐性】のラーニング完了】

噛めば噛むほど旨味が出てくる今までで最高の肉を喰らい、まる

でワインのように濃厚な血を飲み干し、一口事にレッドベアの生命力を感じられる臓腑を嚙下し、鉋物のような齒応えのある骨髄を貪り尽くして、そこで俺の頭はようやく本格的に頭が働きたした。

自分の身体を見下ろす。

体色は黒と変化は無いのだが、大量のレッドベアの返り血に加え、何やら見覚えは無いが何処か宗教的な意味のありそうな赤いライン　刺青と言えはいいのだろうか？　が全身に追加されていた。

それに人間の成人男性の胴体以上の太さは余裕でありそうな腕や、ボコリと割れた腹筋などから、俺はホブ・ゴブリンとは違う存在になった事が簡単に理解できた。

それに髪。確実にこんな長くはなかった。ホブ・ゴブリンになって髪の毛が生えたのだが、精々肩に触れるか触れないか程度だったのに対し、今は肩甲骨の下辺りまで髪の毛の感触がするのだ。長髪になっていて、髪の毛の色は灰色だ。

あと角だな。額から生えた二本の鋭角。触ってみるとかなり硬質な上に鋭く尖り、頭突きをすれば牛のように角で対象をブスリと突き刺せるに違いない。

そうやって色々身体の点検していると、意識を失う前のメッセージが思い出せた。

うん、俺、大鬼オーガになった模様。

しかも亜種ではなく、希少種とかまたけつたいなモノに。

まあ、流石にこれだけ殺せば【存在進化】ランクアップくらいはするってなものだろうし、希少種とかになったものは仕方が無い。きっと悪い事ではないのだと無理やりに納得しておく。

オーガ希少種になった事でゴブリンからホブ・ゴブリンになった時同様全能力、全アビリティ等が強化され、仮初の万能感が身体全体に漲っていたが、それ等の検証はまた後だ。

今は拠点に帰るべきだろう。帰らなかつた事で心配させているだろうし。

まだ直せば使えるだろうハルバードを拾い上げ、外に出ようとし

て気が付いた。ボロボロだったがそれでも一応隠すべきモノは隠していた服が、身体が大きくなった弊害で全て弾け飛んでいたのだ。つまり現在俺は全裸なのである。

股間でブラブラと揺れているそれは、自分のなにしばらく凝視してしまっただけに立派でした。

さてどうしようかとちよつとだけ悩み、今さっき剥ぎ取ったレットベアーの毛皮を腰に巻きつけてデカくなったそれを隠す事で問題は解決。

なるほど、こうなる事を予感していたから毛皮を剥いだのか俺は、思いながら風の刃で盾にしていた木と糸をズバンと斬り裂いて外に。威力が上がっていたので、手加減した状態でも一発だった。

太陽の位置から察するに、今は大体三時くらいだろうか。かなり眠っていたようなので、急いでアジトに戻る。その途中で近くに転がっていた俺のバックパックとフィールドバック、それからリサイクルする為にエストックやボウイー・ナイフだった鉄片を出来るだけ回収する。

バックパックに入れていたトリプルホンホースの足の肉は既に奪われていたが、オニグモの甲殻など他の素材は残っていたのでこれくらいの被害は仕方ないと諦めた。

バックパックとかがボロボロにされて使い物にならなくなるとかよりはまだマシだ。

そして身体が大きくなっている上に、アビリティの使用であつと言つ間に俺は拠点に辿り着き、見事に警戒されました。

うん、そりゃ見ず知らずのオーガが来たらこうなるよな、と苦笑する。

そしたらもつとビビられた。ああ、オーガになったことで俺は凶悪な顔付になっているに違いない、とここでそう確信したね。

ゴブリン 醜悪。

ホブ・ゴブリン 人間に似てくる。
オーガ 何処のバーサーカー？ 状態。

って感じなのだろう、きつと。

ちなみに確証は無いが、今の俺の身長は二メートル以上は確実にあると思われる。俺を警戒している周囲の下っ端ゴブリン達と比べたら、それくらい視点が違う。

完全に見下ろす形だし。近過ぎると死角に入って見失ってしまうのだ。

しばらくすると、奥から出てきたゴブ美ちゃんが俺だと気付いてくれた。それによって他のゴブリンの警戒が無くなる。

俺の姿に一瞬ポカンとしたゴブ美ちゃんは、次の瞬間には怒りにじませた表情で俺の下に。で、脛を思いつき蹴られた。

全然痛くなかったけど、一応痛がる演技をする。ただ本気で痛そうに悶絶しているゴブ美ちゃんにはさり気無く回復技能ヒーリングスキルで痛みを和らげてあげました。

その後痛みから立ち直ったゴブ美ちゃんに正座させられて、本当に心配しただの何やってただの何でオーガになっただの、あれこれ言われました。左手が無い事も勿論突っ込まれた。

しかもちよつと涙目で言ってくるから少しも反論できません。心配させてごめんなさいと謝っていたら、ゴブ吉くんゴブ吉くんに赤髪ショートも騒ぎを聞きつけてやってきた。

んで、やっぱり驚いてます。あんぐりと、口を開いて驚いてます。そりゃ、一日帰らないと思って心配していたら、オーガになって戻って来たらそうなるってなものだ。

一応成り行きの説明って事で、ゴブ江ちゃんにホブ星さん、ホブ里さんにゴブ爺など集まっていなかった主要メンバーを招集してから、説明開始。

他のゴブリンは後から説明すると言って追っ払いました。

えー、ハンティングしててそろそろ帰ろうかと思ってる時に“レッドベアー（仮称）”を発見。腕試し的な意味や本能的な部分が理由で攻撃を開始。

その後夕方から始まった激闘は夜通し続けられ、決着がついたのは今日の朝日が昇ろうとしていた時の事だった。

その後俺もダメージが大き過ぎて動けなくなって、糸の結界を敷いて一眠り。体力回復を図る。

で、ついさつき目が覚めたらオーガになっていた。しかも希少種らしいです。

装備品はボロボロになってしまったが、レッドベアーの毛皮が戦利品としてあるので、損ばかりでは無い。

いやー、生きててよかったよかった。

そこまで話して、ホブ星さんにホ布里さん、あとゴブ爺が顎が外れたかのような間抜け面を晒しているのに気がついた。

どしたんゴブ爺。え？ 赤い巨熊を殺したのかって？ だから、

そう言ったじゃん。と言いながら腰に巻いた毛皮を叩いて意識を集める。

ん？ どしたんホブ星さん。ふむふむ、この森には“ハインドベアー”ってかなり強力で、近場ではほぼ敵無しな熊タイプのモンスターが生息しているんだけど、そいつ等の毛並みは普通灰色で、体長は三メートルほどもある。

そして、その中に亜種で毛並みが赤い個体が居ると。その亜種はメイジのように魔術は使えないけど、その代わりとして高い知能と炎を吐き出す能力を持っているし、膂力とか嗅覚とかといった肉体の基本性能は普通のハインドベアーとは隔絶としたまでの差がある。

で、そいつはハインドベアーの中でも一番強いんだからつまり、この辺り一帯で一番強いって事になる。

だからそのハインドベアー亜種は“山の主”とか言われていると。

その強さはオーガでも容易く殺して喰らうほど、ねえ。

なるほど、そんな化物を俺は二度も目撃していたのかと、広いようで狭いこの世に思いを馳せた。

あて。ホブ里さん頭を叩かないでくれ。ぜんぜん痛くないけどさ。……え？ 毛皮をもつとよく見せる？ 仕方ないなあ。って事で見せたら、間違いなく本物だとか言われた。

まあ、オーガになった状態でも普通にあれだけの数のアビリテイ得られていたし、そもそも【山の主の強靱な筋肉】とかつてアビリテイがあつたので、間違いなくそうだろうさ。

あと、こんな短期間でオーガになった俺は“異常”を通り過ぎて“在りえない存在”だとも言われました。なつたものは仕方ないだるって言い返しましたが、そんな簡単に言っている事が在りえないんだと自覚しろと逆切れされた。

理不尽だ。

その後も色々と言われて、色々と話して、一時間後には一区切りがついたのでこの場は解散する事になった。

いや、流石に露出度で言えば生まれた時と同じくらいになってしまっている現状、早く新しい服が欲しいんだよね。恥ずかしいと言うか何と云うか、流石にモロダシの状態で居るのは落ちつかない。

あと、周囲の視線が色んな意味でちよつと、ね。

俺が自分の製作工房に向かって移動すると、その後ろをゴブ美ちやんと赤髪シヨートがついてくる。カルガモの親子か、とツツコミたかつたけど自重する。

実害が無いからほつとくとして、残る四人の女性陣にも一応挨拶しておかねば。

留守中に何かあったかもしれないので、それらの確認も兼ねて。

んで、見事に恐がられました。出会い頭に悲鳴までもらいました。集まるなお前等、さっさと散れ、となんだなんだと集まって来たゴブリン達を追い払う。

彼女達の反応にちょっと泣きそうになったけど、糸を出したり炎を出したり交わした話を語ったりして、ようやく俺であると理解してもらおう。

まだちょっとビクビクしてるけど、ホッと笑みを向けてくれるのは嬉しいね。

皆可愛いし、グツジョブ、って言いたくなった。

って、密かに皮を抓つからないでね二人とも。ちよつとだけ痛い、よくな気がするから。皮膚は鍛えられないんだぞつと。

ま、これも心配させた罰ゲームだと思う様にして、色々と話していく。

鍛冶師さんにはボロボロになってしまったハルバードの整備を頼んだ。これはまたよくココまでやったわね、ってお小言貰いながらだが。

あと、“精霊石”を使って造ったナイフとかができたらしいので、後で見てくださいと言われました。

それともし良かったら私が貴方の新しい武器も造ろうか、と聞かれたので即座に頷いておく。ちよつと嬉しそうに微笑み、赤くなつた頬がとつてもキュートだった。

思わず頭を撫でてしまう。無論怪我しない様に力加減は慎重にだ。それにしても、可愛い子の撥つたそうな表情とか、とてもいいと思うんだ。やはり女の子は笑顔が一番だと思つたね。

あと、何故か二人の抓る強さが上がった。

何故だ。

【料理人】な姉妹には今度灰色熊ハインドベアーを狩ってくるから、熊鍋にしよつって話で盛り上がる。話をしていると熊鍋をするならあとコレと

これとソレを集めて来て、とか言われたので、部下で奴隷な例のゴブリン達に採取してくるよう命令を出す。

最近では俺が扱き使っているからか、こいつ等のレベルも一〇〇に近いので、そろそろホブ・ゴブリンになれる奴もでてくるかもしれないな。

あと、やつぱり二人だけじゃ人数的に厳しいので、せめて材料を切る係が欲しいとの事で、後方支援部隊に所属している中で、俺と同年代のゴブリン（メス）を三名ほど選んで補助員に任命。

これはオスだとまだ怖いだろうとの配慮だが、それにしてもこの子達、とんでもなくタフである。

友人知人、もしくは肉親や恋人を殺した上に自分達までも攫ったゴブリン相手に、個体レベルで見れば違うとは言っても、この短期間でココまで慣れてきているのだからその適応力と精神力は目を見張るモノが在る。

いやはや、凄いなホント。俺としては嬉しい誤算だけでも。

二人とも良いお嫁さんになれるね。もし良かったら俺の嫁さんになる？ とか冗談を交わしつつ、その後で晩御飯楽しみにしているからねー、と言い残して移動した。

嬉しそうに頬を染めて笑顔を向けてくれた二人は可愛かったです。

あと二人から後頭部を木刀で叩かれた。

理不尽だ、全く痛くないけどさ。

錬金術師さんは普段どおりポーションを造っていたが、その中に何気に毒薬が混じってた。それも苦しめて殺すタイプの毒では無く、即効性だが身体が動けなくなるタイプのヤツだ。

まあこれも仕方ないよねーと苦笑しつつ、耳元でそっと囁くと、毒薬の使い方を教えてくれた。何でも、コレは護身用なんだとか。

人間にも色んなのが居る様に、自分達を襲ったゴブリンとかの中にも俺みたいのもいるって理解できたから飯に毒を混ぜたりする気持ちはもう起きなくて、だけど最低限の備えが無いと恐いから作っ

た、だそうだ。

殺したい程憎いんじゃないのか？ って聞いたら、確かに殺したい程憎いゴブリンも居るには居るけど、あの夜の一件以来俺は信用できるそうです。それに最近では、ゴブ吉くんとか辺りも信用できると思っているそうです。

それと、オーガになって迫力出過ぎてって言われました。身体が凄過ぎるそうです。赤い刺青もちょっと恐いとか。

これは仕方無いだろー、と両脇に手と義指を伸ばしてその身体を持ち上げたりしてじゃれていたら、後方の二人から絶対零度の視線を感じた。

やばい、殺される。と思ってしまう程の力ある視線だった。

なので、二人にも同じ事をしてご機嫌取りをした。そしたら鍛冶師さんとか姉妹さん達もやってきて、同じ事やらされました。

全員身体が柔らかくて脆いので、壊さないように気を使ったので肉体はともかく精神的に疲れました。

その後ようやく自分の工房に到着し、服をチクチクと。

新しい防具の素材にしようと思っっているレッドベアーの毛皮はまだ加工処理ができていないので、しばし放置する事に決定。当分の繋ぎとして、既に造り置きしておいたヨロイタヌキのなめした皮で半ズボンを製作する事に。

オーガになって寒さとか全く感じないし、今の俺サイズのズボンを造ろうと思えばそれなりの数の皮が必要になるので、半ズボンにしたのは皮を節約するためである。

ちなみにレッドベアーの毛皮は毛皮をそのまま使用したハイドアーマーでも十分効果は期待できるだろうけど、折角のレッドベアーの毛皮なのだ。ハインドアーマーよりも防御力が高いハードレザアーマーとかにしたいと思っっていたり。

手早く半ズボンが完成させると、早速装着。

俺の人としての尊厳がこれで保たれる。様な気がした。

その後レッドベアの皮を茹でて硬化させて、といった作業を行っていく。

明日は狩りに出ずに装備の製作に勤しもうと思う。今俺達が持っている武器の大きさが、俺のサイズに合わなくなっているってな理由もあるけど。

“三十六日目”

部下で奴隷な例のゴブリン達五名の内三ゴブがホブ・ゴブリンになっっていた。

祝いの品を送る。

しかし昨日の今日でなるとは、空気を読み過ぎだと言いたい。

そして午前訓練の終了を告げる俺との組み手が無くなりました。いや、危ないんだ。手加減に手加減を重ねた位の力でやってみても、普通のゴブリンじゃ軽く殴っただけで死にかける。というか、大慌てで治療しなけりゃ死んでたな、あれは。

唯一完全武装なゴブ吉くんが対抗できたけど、かなり必死そうだった。それに装備がギシギシと軋むので途中で止める他無かったし。黒鉄製のタワーシールドは俺の拳で凹凸ができてしまった。

だから、組み手は止めました。

今後は一対一で模擬戦をさせ、負けた方に何らかの罰ゲームを科す事にしよう。

そして午後、俺は昨日に引き続き防具の製作に当たる。

ゴブ吉くんは何か難しい顔でハンティングに出かけた。一人では危ないので、バディーを組ませる。相手は荷物持ちと補助役に徹する様に命令した、奴隷兼部下で今朝ホブ・ゴブリンになったばかり

の個体だ。

ゴブ美ちゃんとホ布里さんは同性って事と接近戦闘時のスタイルがちよいと似ているって事で仲が良くなって、四ゴブ程部下を連れて狩りに出発。

ホ福星さんは防具製作中な俺の横で読書中だ。いい加減その本を返してと言ったが、無視された。

ゴブ江ちゃんは今日も精霊石採取に勤しんでいる。精霊石がもつと多く取れるポイントを発見したそうで、やる気に漲っている。採掘ペースが上昇しているのだ。

赤髪シヨートは居残りのゴ布林達と木刀で訓練中。周囲のゴブリンの成長に負けないようにする為か、真剣な顔つきで訓練に打ち込み、自分達を襲った年上ゴ布林達とは兎も角、俺と同年代なゴ布林達とは次第に打ち解けてきているようだ。

ほんと、タフだよな。

防具製作の合間の休憩時には鍛冶師さんの所で精霊石製ナイフの面白い能力に笑ったり、姉妹さんの所で俺が知っている簡単な料理の造り方を教えてみたり、錬金術師さんの所で新作ポーションのアイデアをだしあったりと。

うん、久しぶりにゆっくりとした一日でした。

“三十七日目”

奴隷兼部下でホブ・ゴ布林になれていなかった二ゴブがホブ・ゴ布林になった。

二日連続かよと思いつつ、祝いの品を送る。

午前訓練が滞りなく終了し、姉妹さん達が作ってくれた昼食を食べていると、採掘に向かった筈のゴブ江ちゃんが大慌てで俺の所にやってきた。

その腕の中には額に真つ赤な宝石がある茶色い小人が抱かれていて、その全身には鋭い切り傷が刻まれている。何時ぞやの俺のように、全身血塗れだった。ゼエハアゼエハアと息も絶え絶えで、今にも死んでしまいそうだ。

一先ず“カーバンクル（仮称）”と呼ぶ事とし、ゴブ江ちゃんが助けてあげてと言ったので回復技能ヒーリングスキルの一つである損傷回復ヒールで治療を施す。

あと十数分遅れていけば手遅れだったに違いないが、怪我は治っていくので何とか間に合ったようだとい安心しておく。

ただ失われた血まではヒールでも戻らないので、造血作用のある草を磨り潰して色々と配合して作製された錬金術師さん作“造血ポーション（試作品）”を無理やり飲ませてから寝転がす。今は飯を喰ったばかりなのでカーバンクルを喰う気にはならなかったし、ゴブ江ちゃんが助けてと言ったので助ける方針です。

数分後、体長三十センチ程のカーバンクルが目覚め、事情を説明する。

有難うございますと言われた。

どうしてそんな怪我を、と話を聞いた所によると、カーバンクルの名前はリターナと言いつ、傷だらけで死にかけていたのは人間の冒険者にやられたからだそうだ。

何でもカーバンクルの額にある立派な赤い宝石は超高級品で、売れば一億ゴールド 多分一ゴールド十円だと思う になり、それが目的であるらしい。

大変だったんだなと思っていたら、今度は土下座されて、襲った人間達をどうにかしてくれと頼まれた。

話を聞き、それを整頓するところなる。

1. リターナは大昔に生きてその名を大陸中に轟かせた伝説の魔

術師ベルベットなんたらが生み出した人造カーバンクルだそうな。

ゴブ江ちゃん達が精霊石採掘の為にピツケルで掘り進め、岩壁を貫通した先にあった【ベルベットの隠し宝物殿】 世間ではダンジョンと認知される類の建造物だそうな 管理人なんだとか。

2 . 俺によつて表面上の怪我は治つた様に見えるようになってるが、実は人間達に攻撃された時に自らを構成するのに最も重要な“核” リターナは人造カーバンクルだから、寿命は無いけど核が壊れると死ぬそうだ を深く傷つけられたので、残された時間が少ない。ヒールは消える時間を延長させたらしい。

3 . 宝物殿の最奥にはベルベットがその生涯を通し、苦勞して蒐集した最高でも【伝説^{レジェンダリー}】級のマジックアイテムや宝石類が山の様に眠っている。その宝物庫を野蛮で欲に塗れた愚者に荒らされ、宝物を奪われたりするのはどうしても我慢できない。

4 . 冒険者はできる事なら自分で何とかしたいのだが、核を傷つけられている為に残された時間が少なく、戦力も足りていない。ダンジョンに配置されている魔法生物である骸骨兵士や、その上位種^{スケルトン}として骸骨兵士を召喚、使役している上級骸骨兵士では、冒険者一行の構成メンバーの性質上相性が悪過ぎるそうだ。だからちよつと強そうな俺達に侵入した冒険者一行をダンジョンから退け、その上で入り口を埋めてもらいたいらしい。

5 . もし排除する事が出来たのなら、そのお礼として宝物庫の身を譲るとの事。ベルベットは人間嫌いだったので、どうせなら人間では無くオーガな俺達に遺産を引き継いで欲しいそうだ。

しばし考え、どこにも損は無いかたと考える。

ゴブ吉くんにゴブ美ちゃんにゴブ江ちゃん、それからホブ星さんとホブ里さんに完全武装するように言い、俺は鍛冶師さんに精霊石製のナイフを持ってきてと頼んだ。素手よりは何か武器になるモノがあった方がいいと思つたからだ。

精霊石製のナイフって、見た目的に派手な事ができるので抑止力とかにもなりそうだし。

指示していると鍛冶師さんを始め、赤髪シヨートとに姉妹さんに錬金術師さんがちょっと不安そうな顔で俺を見てきた。

そりゃ、人間を殺してくれって聞こえる頼みだからな。見ず知らずな相手でも、気分はよくないのだろう。

でも、リターナが頼んでいるのはあくまでもダンジョンから追いつ出す事であって、冒険者一行を先手必勝で殺す事では無い。

最初に説得を試みて、それでダメならコツチも実力行使になるだろう。身を護るためには仕方が無いから、恐らくは殺す事になるだろう、と言う。

でも、何よりも会話は大事だよね、と笑って見せたら多少は納得してくれた。

準備が整い、ゴブ江ちゃんがリターナの管理していたダンジョンに繋げてしまった穴に向かう。

んで、結果的に言おう。

ダンジョンに侵入し、リターナを殺そうとしてきた冒険者男女六名は全員殺しました。

いや、俺は説得を試みたんだよ。

コチラの数が多いと不安になるだろうからって事で、ゴブ吉くん達には隠れてもらって俺一人で説得に赴いた。これは俺なりの誠意だったんだ。

けどアイツ等俺に出逢った瞬間、『グレータースケルトンだけじゃなくてオーガ亜種も居るのかよ、ココは。弱いくせに数が多いつつうんだよ、くそつたれが。まあ、そこそこ面倒な相手だが俺達の敵じゃねえ。さっさと殺させてもらうか。それに逃がしちまったアイツも探さないといけねーしな』とかフラグ的な事を言いながら、

殺る気を漲らせて襲いかかってきやがったのである。

俺、亜種じゃなくて希少種だし。そもそも俺の話なんて少しも聞
く気がねーでやんの。流石に、これって強盗だよな、と思っただね。

いや、人様の御宅に不法侵入した拳句、そこで暮らす住人 モンスター俺
は違うけど を殺しまくってさらに宝物を強奪するとか……コレ
は紛れもない強盗殺人事件であるッ！！ しかも罪の意識とかない
から全く救い様が無いぞッ！！

ちなみに【物品鑑定】した所、強盗犯達の装備品は全て魔術かソ
レ系統の技術で何らかの属性とかが付与された高品質な品ばかりな
ようで、見た目的にも雰囲気的にもかなり強そうなパーティーだっ
た。

しかしながらレッドベアーのような絶望感とかは全く感じなかつ
たし、今の俺はオーガ【希少種】って事で素の状態のスペックの高
さに加え、アビリティの重複使用を行っているので強盗達程度の攻
撃を防ぐ事は簡単な作業だと感じられた。

というか、初撃を見てそう判断できていた。

アチラの攻撃は全体的に拙いのだ。狙いも比較的単調だし、効率
的な武器の扱い方もできていないばかりか、攻守の中には敵を惑わ
す複雑怪奇なフェイントも殆ど混じっていないのである。

斬撃は速く、武器の能力も高いので普通のオーガならば惨殺して
余りある連撃なのだろうが、俺から言わせれば戦闘技術が身体のス
ペックに追いついていないと言うか、強引過ぎる攻めだという感想
を抱く他ない。

レベルによる肉体補強やら【職業】補正で彼等は確かに強いのだ
ろうが、それが逆に地力を上げる為の努力 無意識でも敵を切り
殺せるように剣を振る、使える技の熟練度を上げる等々 を阻害
しているのかもしれない。

恐らく今まではレベルを上げて強引に、力任せに突っ込んで敵を
殺せていたから、彼等は自然と努力する事が少なくなってしまうた
のだろう。別に他人事なのでとやかく言うつもりは全くないが、し

かしそれが現状、余りにも致命的過ぎた。

努力していれば、俺と互角に戦う程度は出来たに違いないと言うのに。それほどスペックは間違いないとあるというのに。

努力を怠っていたが故に、彼等は俺の敵では無かった。

格下だったが故に俺には余裕が生まれ、敵の攻撃を全て弾き防御バリイング、パリイング、パリイングしながら説得を続けたのである。

強盗に殺されそうになりながらも説得するなんて、普通は無いやなあ。

で、しばらく攻撃されながら説得してたらさ、ずっとダンジョンから出ていくように優しく言っていた俺の顔面に後方に居た【魔術師】だろっ青年の行使した【雷光】系魔術がズドンと直撃。

流石に衝撃でたたらを踏むが、倒れはしない。ダメージ的にはちよっとだけ痛い程度だった事もある。

ちなみにそう言ってしまうえば小さい攻撃だった様に思えるかもしれないが、【全属性耐性】トランス・オウルやら【雷光耐性】トランス・ライトニングなどを重複発動していなかったら、頭部が跡形も無く蒸発していたくらいの威力はあった。だから、流石にね。そこまでやられたらさ、仕方ないよね。我慢の限界が来てもいいよねって事で。

隠れていたゴブ吉くん達に攻撃開始の合図を送り。

俺はリターナに内心御免と謝りつつ、どこぞの王宮だよと言いたくなる程に神秘的な乳白色の回廊の一部の地形を操作し、冒険者たちの退路を断つ。

そして注意を俺に引き付けるべく、正面から突っ込んだ。

うん、精霊石製のナイフの能力は面白いだけかと思っていたが、実は普通に凄かった事が判明。

本体自体には切れ味とかは絶無なのだが、素材に使われているのは水精石だったから、振れば刃から水が噴出されてる。そんな代物

を俺がちよつと真面目に振れば、高速で射出された水が水刃に変貌し、ズパツと冒険者を守る鎧とその中身を真つ二つに切り裂いていったのだ。

すげーすげー、って事でゴブ美ちゃんにもその快感をお裾分けつて事で渡してみたら、うん、水は出るけど相手は斬れませんでした。濡らすだけです。

どうやら相応の速度で振らないとダメみたいである。凄い事には変わりないけどな。

そうして冒険者全員を殺した後、身ぐるみ剥いで俺が全員の上半身を、ゴブ吉くんとかは下半身を喰いました。

- 【能力名】アビリティ【職業・暗殺者】アサシンのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・十字騎士】クルセイダーのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・守護騎士】ガーディアンのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・高位魔術師】ハイ・ウィザードのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・司祭】ビショップのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・付加術師】エンチャンターのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【高速思考】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【並列思考】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【騎乗】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【対魔力】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【短縮呪文】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【騎士道精神】インチュイションのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【直感】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【気配遮断】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【慈愛の亜神の加護】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【戦乱の亜神の加護】のラーニング完了

やはり人間の中でもそこそこ高レベルな冒険者だったのだろう。

装備品も上質なモノが多かったし、かなり使える魔具マジックアイテムを発見。当

然即座に喰いました。

【能力名】アビリティ【自己ステータス隠蔽】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【アイテムボックス】のラーニング完了】

喰ったのは“隠者の指輪”と“収納のバックパック（大）×6”
の二種類の魔法の道具である。

冒険者一行の装備品は俺が得たアイテムボックスに全部収納
取り出す時は念じたらポンっと出ました。転送機能のよう
で懐かしさがこみ上げる。ちなみに収納量は1200種類
の一種類九十九個まで収納可という反則ぶり。し、
リターナに案内されて出入り口に赴いた。

洞窟の最奥、という隠された場所にあった出入り口
なので地形操作で天井を崩し、ゴブ江ちゃんが貫通
させた場所以外の出入り口はコレで完全に閉鎖
された。後はあの出入り口も封鎖すれば、全ては
土の中に封印されるだろう。

その後は宝物庫に案内され、俺達は見た。

様々な金銀財宝に、先ほど手に入れた冒険者の
装備品など霞むほどに強力なマジックアイテムの
数々を。そしてそんな品々が所狭しと置かれた
宝物庫の最奥の玉座に鎮座する、白銀に輝く異形
の左腕を持つミイラを。

リターナはミイラの事を主と呼んだ。つまりこの
ミイラがベルベツトなのだろう。

その後はもう直ぐ時間が尽きると言うリターナ
と他愛も無い話を交わし、そしてそこで分かった事
もあった。

俺達の現在の住処である採掘場でざっくざっくと
採掘できた多種多様な精霊石は、このダンジョン
の影響があつてこそなんだとか。精霊石は普通、
属性に見合った場所。風精石なら風通しのいい場

所、火晶石なら火山の近くなど　で採取されるモノで、色んな属性の精霊石を一ヶ所で得る事は普通できないそうだ。

が、ココのダンジョンが精霊の扱いに長けていたベルベットが建築した場所なので、寿命が存在しない精霊が今でも滞在する事もあるとかなんとかで、その影響で多種多様な精霊石の採掘が可能なのだそう。

そして最後まで話を続け、時間を迎えたリターナは、最後は笑顔で消えていった。

コロリ、と額の宝石だけが取り残される。

それを俺は拾い、喰った。

【能力名【黄金律】のラーニング完了】

アビリティ

一同、リターナに黙祷を捧げ。

そして宝物庫の財宝全てを回収した。いや、アイテムボックスは本当に凄かった。

宝物庫に所狭しとあった財宝全て入れてもまだまだ余裕があるのだ。うん、これは先ほどの冒険者一行には感謝してもらいたくないなあ。

と思っていたら、伽藍と寂しくなった宝物庫には異形の左腕を持つミイラなベルベットだけになり、放置するには流石に忍びないと思ったので、宝石で装飾された玉座は回収させてもらい、ミイラは燃やした。

南無、と合掌して顔を上げたら、轟々と勢い良く燃えていた火が消えていて、白銀色に輝く異形の義手だけがその場に残されている。何だこれかと思いつつ【物品鑑定】をしたら、

名称：【白銀の義腕】アガートラム
分類：【神迷遺産】アイティファクト
レジェンダリイ
等級：【伝説】級
能力：【武装殺し】スヘルブラスト
【魔法殺し】セルフエボリューション
アトリビュートエコー
【自己進化】 【属性反響】

備考：前装着者ベルベットがあるとある神代ダンジョンの奥深くで発見した神製の義手。腕を失った者は装着すると以前と何ら変わりなく動く腕を手に入れる事ができる。

また他の金属を取り込む事で装着者の意思によって形状変化を可能とし、その能力は使う事に進化していく。破壊は例外を除き、基本的に不可能。

とあった。

ふむ、これは左腕が無い俺に『俺には必要ないから、お前にくれてやる』とベルベットが言っているのか？ と考える事にし、拾って肘から先の無い左腕に近づける。そしたらなんか、装着できました。

感想、凄く痛かったです。

いや、なんか近づけた瞬間に腕の装甲がぶわっと展開して、その中から金属製の触手みたいなのが伸びて俺の左腕を肩まで包んだ。そしたらなんか触手によって俺の肉が喰われるような感覚がして、余りの痛みで意識が飛びそうになった。

で、気合い入れて持ち直していたら俺の左腕は肩まで白銀の義腕アガートラムになってました。拾った時は人間サイズだった銀腕は、オーガである俺には遥かに小さかった筈なのだがその長さや太さも何故か右と

同じくらいのサイズに変化していて、俺にピッタリと適合していた。これが【自己進化】の効果なのだろう。

五指を軽く握ったり開いたりしても、違和感はない。気味が悪いくらいに、全く無かった。

それにモノを触っている感触はあるのだが、壁を殴ってみても痛みは全く感じない。義腕なのだから痛覚が無いのは納得できるが、感触はどういう仕組みで伝わるのだろうか。

理解不能だが、そもそもアビリティ発動原理もさっぱり分かっていないのだから今更深くは考えないけどな。

あと関節可動域がとんでもなく広く設定されている様で、所々にギミック盛り沢山であるようだ。手首や指はまるでドリルのように回転させる事ができ、肘は勿論肩までもがオーガの骨格構成上不可能な角度でも動かせたりした。

それと銀腕でもアビリティがちゃんと発動するのを確認した。鋭く尖った指先からは、糸も問題なく出す事ができた。

うん、凄く良いモノを手に入れました。義指でもどうにかできていたが、やはりしっかりとした基盤があるってのは何事も扱い易い。

その後、拠点に帰って宴会しました。大戦果だったし、冒険者一行の所持品の中に酒瓶　コレ重要な　が幾つか入っていたので、こんな時やらずにいつやるんだと。

あと、リターナとベルベットの魂を送りだすって意味合いもあつたり。ベルベットの魂は大昔に死んでいるのだから別にどうでもいいのかもしれないが、気分の問題だから気にするな。

赤髪ショートに鍛冶師さん達には、懇切丁寧に詳細を説明して納得してもらおう。

頑張つて説得しようとしても、欲深な人間には無意味だったつね。

しかし、うん、酒が美味エー！！

“三十八日目”

午前訓練を終え、今日は鍛冶師さんの所で昨日手に入れた品々の鑑定・分類・整頓作業を行った。

流石に伝説の魔術師と言われているだけあって、ベルベットの遺産は殆ど全てがとんでもない代物ばかりだ。

俺ではまだ多くの事は読み取れなかったのだが、鍛冶師さんは流石旅商人の一員であり、かつ様々な武器を取り扱う【鍛冶師】ディテクト・アナライズただけあってか【物品鑑定】のレベルが高く、俺ではまだ見れないレベルの情報をスラスラと読み取って教えてくれたのだ。

それでもまだ全ては読み取れない部分が多々あるようだが、いや、本当に助かった。

今日一日は品を分別するので費やしました。

“三十九日目”

午前訓練を終え、大量に手に入った武具をこのまま持っていては何だなど思ったし、しかし充実し過ぎると墮落するだろうと判断したので、現在十ゴブしかないホブ・ゴブリンだけに先日手に入れたマジックアイテム 防具や武器、あとは効果持ちの指輪など多岐にわたる を、一ゴブにつき二品ほど支給する。

そしてそいつ等が使っていた装備の幾つかは下に流れ、全体の最低ライン装備は甲殻製の盾と革鎧にショートソードって感じになりました。

日々訓練しているので普通の群れでは考えられない程に個々のレベルが高く、それに加えてこのレベルの装備にこの数だと、以前のように毒矢による奇襲をせずとも真正面から襲えば、中堅所の冒険者相手でも高確率で殺せるだろうとは、ゴブ爺談。

まあ、実力が拮抗か僅かにしたのゴブリンの群れに襲われればそ

うだろうなと思うが。

この群れでは、現在が間違いなく最強の軍団だそうだ。

午後は総数十のホブ・ゴブリン全員と俺と、あとどうしても一緒に行きたいと言う事で赤髪ショートを連れて、以前言っていた灰色熊狩りに出かけた。

ちなみに俺の現在の主武器はベルベットの宝物庫で手に入れた【メインウエポンカズィクル・ベイ 餓え渴く早贄の千棘】とかつて名称の朱色の長槍だ。

防具はレッドベアの革とオニグモの甲殻とその他の素材を使って造ったロングコートタイプの厚手革鎧と、ハードレザーアーマー余裕を持たせた赤いレザーパンツ。生身の右手には普段は黒銀の腕輪だけど、装着者の意思によって臂力上昇などのアビリティを發揮する頑丈な手甲に早変わりする【ペーオウルフ孤高なる王の猛威】とかつて代物を装備している。

槍と腕輪と銀腕は、三つとも【レジェンダリィ伝説】級の【アイティファクト神迷遺産】だ。

うん、今更かもしれないが、まずは【アイティファクト神迷遺産】について簡単に説明する。

【アイティファクト神迷遺産】は世界中に幾つか存在する「神代ダンジョン」と言うところでも危険かつ特殊な場所で得られたアイテムを鑑定すると、必ず浮かび上がる言葉であるらしい。

そして鑑定によって閲覧できるアイテムデータに【アイティファクト神迷遺産】って表示が加わると、同じ効果を發揮するマジックアイテムの性能にも差が生じるそうだ。使い捨てのライフポイントでも、その効果の差が二倍から三倍以上はあるらしい。

【アイティファクト神迷遺産】のライフポイント ライフポイント60回復。

一般的な製法で造られた普通のライフポイント ライフポイント25回復。

みたいな感じだろう。道具類に関しては良質な物を見分ける基準

になるって程度の認識でいいと鍛冶師さんには言われた。

次に【伝説】^{レジェンダリー}級とかの話だ。

これはアイテムの等級を表すモノである。

下から【粗悪】^{インフェリオリティ}級、【通常】^{ノーマル}級、【希少】^{レア}級、【固有】^{ユニーク}級、【遺物】^{エンジ}級、【伝説】^{レジェンダリー}級、【幻想】^{ファンタズム}級と、七段階に分類されているそうだ。

例えを出すなら、コボルドを殺して得た刃毀れしたロングソードやゴブ吉くんが使っていた甲殻補強した巨大棍棒（俺製）などは最低ランクの【粗悪】^{インフェリオリティ}級であり、コボルド・メイジが持っていた魔杖は【通常】^{ノーマル}級だ。

ベルベットの宝物庫で殺して得た冒険者の武器は大体【固有】^{ユニーク}級の品で、その中に数品だけだが【遺物】^{エンジ}級が混じっていた程度だった。

つまり、高レベルの冒険者パーティーでも【遺物】^{エンジ}級、【伝説】^{レジェンダリー}級、【幻想】^{ファンタズム}級の品を得るのは相当に難しいらしい。

【固有】^{ユニーク}級の品が小国の国宝級の品である事もあるそうだ、と言えばイメージし易いだろうか？

というか、そもそも【遺物】^{エンジ}級以上のマジックアイテムの殆ど全ては【神迷遺産】^{アイティファクト}なのだそう。だから、欲しけりゃ神代ダンジョンに潜れと言う事だな。

余談だが、神代ダンジョンを取り囲むように城壁ができて、迷宮都市なるモノもあるのだとか。面白そうなので行ってみるのもいいかもしれん。

俺の銀腕や朱槍や腕輪はどれも【伝説】^{レジェンダリー}級なのは、生前のベルベツトがそれほど凄かったかって事の証明だな。

【伝説】^{レジェンダリー}級のマジックアイテムは一つ得るだけでも国が動くそうだから、ベルベットさんマジ凄いと尊敬せざるを得ない。

一番上の【幻想】^{ファンタズム}級だとどうなるのかなどは、想像を絶するので止めておこう。情報が不足し過ぎて良く分からんしな。

本題に戻るが、ハインドベアー狩りは順調に終わりました。

ハインドベアーは確かに強かったけど、マジックアイテムで武装し、連携プレーも問題なく行えるようになった今の俺達相手では、ハインドベアーは強敵だったけどそこ止まりの相手でしかなかった。いや、銀腕と朱槍と腕輪の能力が反則過ぎて、俺がオーガになって真正面から殴り合っても殺せるって事も多少は理由としてあるのだろうが、今回俺はあくまでも補助に徹した。

だから高品質のマジックアイテムで武装した現在のゴブ吉くんやゴブ美ちゃんとかが、ホブ・ゴブリンのレベルじゃない強さを発揮したってのが主な理由である。

今回のハンティングでそれぞれ大きくレベルが上昇した様で何よりだ。

うん、熊鍋うまい。

ちなみに、酒をもっと飲みたくて仕方が無いってのが、最近の悩みであります。

酒が、欲しい……。

“ 四十日目 ”

雨だった。

丁度いいので再び階級を決める総当たり戦を行った。元ホブ・ゴブリンリーダーの穴を埋めるのに最適だしな。

人数が増え過ぎない間は、細かくこういう事を行う事で全体のやる気アップとかって考えも。

命令系の改善は、今の段階なら幾らでもできるのでヤッという損は少ないだろうしな。

ただゴブリンとホブ・ゴブリンでは勝敗は分かり切っているし、オーガである俺と他では話にもならないので、ゴブリンはゴブリンの中で階級を決め、ホブ・ゴブリンはホブ・ゴブリンの中で階級を決めるのは変わりない。

今回の階級が落ちた者もいれば上がった者もいたり、皆一喜一憂してました。

うん、全体のレベルも上がってきたし、そろそろ赤髪ショートとかを連れて街に乗り出すのもいいかもしれんな。それは後で聞こうと思う。

外に出たら傭兵団を結成するのも面白いかもしれないな。今俺達が活動している近辺では、もう俺に殺せないモンスターは居ないので、レベルもなかなか上がらないのだ。

山の主を殺してしまえば、そうなってしまうのは仕方が無く。

うむ、外には遅かれ早かれ出なければならんようだ。色々思いながら、ぐっすり寝ました。

四十一日目〜五十日目

“四十一日目”

太陽が昇ったばかりの早朝、今まで喰った事の無い獲物を求め、単身で行った事のなかった場所　俺が未踏破区画と呼ぶ事にした脳内地図の空白地帯を散策中である。

午前訓練は既に俺がいなくともゴブ吉くん達だけで回せる段階にまでなったので、直接訓練を担当する機会が非常に少なくなってしまった。

つまりだ、朝は暇になってしまったのである。

組み手が無くなった、てのが特に大きい。

今まではそれでも何かあったら大変だろう、特に怪我したりした場合には。って事で自分の基礎訓練を終えた後は服や防具、それに寝袋などを作る事でその暇を潰していたのだが、全員に寝袋や甲殻製の胴鎧が着替え分も含めて配給出来てしまったので、取りあえず急いでやっという方がいい案件が無くなってしまった。

だからどうせなら、新しいアビリティを得た方が有意義だ、という事で現在に至る。

本日の最初の獲物は、黄金色の艶やかな甲殻が特徴的なニメートル級の“コガネグモ（仮称）”だった。

カサカサと蜘蛛だけに動きは機敏、噴出する糸はやたらと頑丈な上に量が多く、黄金色の甲殻はオニグモのそれと比較できない程に高硬度。と三拍子揃って殺すのにそこそこ手古摺ったが、コチラも糸で応戦したり火で焙ったりして、最終的には銀腕でコガネグモの甲殻をぶち抜いて仕留める事に成功。

殺した後はその使えそうでかつ高額で売買できそうな甲殻を剥いで、残りはポリポリと。

合計八匹見つけて喰いました。

【能力名】^{アビリティ}【黄金糸生成】のラーニング完了】
【能力名】^{アビリティ}【金剛蜘蛛の堅殻】のラーニング完了】

結果、糸の強度と防御力が上昇するアビリティをラーニングできました。

今回のアビリティで凄く綺麗な糸　　というかアビリティ名そのままな黄金色で、天然の金系か？　かなり派手だ　　が生成できる様になったので、これでゴブ美ちゃんとか赤髪シヨートとかにプレゼントでも造ろうかと思う。

流石にこの糸で編んだ黄金の服ってのはセンスを疑うので、以前ゴブ美ちゃんにあげた民族品的アクセサリー辺りが妥当だろうな。

次の獲物は薄いピンク色をした紅水晶^{ローズクォーツ}で出来ているかのような双角と、四つの瞳に四つの耳が特徴的な“アカシカ（仮称）”だった。　　どうやらアカシカは気性が荒いようで。　　真正面からその鋭利かつ綺麗な角を突き出し、邪魔な木々をまるでドリルのように削りながら突っ込んできたが、そこはその程度では傷一つつかない銀腕で頭を押さえて爪先から毒を注入。

毒を注入してから四秒程でアカシカは泡を吹きながら死んだ。

綺麗で高く売れそうな角は当然として、目立った損傷がなく毛並みの良い毛皮もあれば役に立つだろうと一応剥いで角と一緒に俺のアイテムボックスに放り込み、その後は肉を喰らう。残念な事だがアビリティは確保できなかったが、あと二、三頭も喰えば何かをラーニングできそうな手応えがあるし、身体の強化ができたのでよしとしとこう。

その次は樹木に宿る美女“ドライアド（仮称）”だった。ほぼ裸体でプロポーシオン抜群なギリシア系美女という見た目で俺の前に現れた彼女を俺は殺してはいないんだけど、うん、喰ったと言えば

喰ったので数に換算しておく。

取りあえず色々あって、ようやく【精力絶倫】が大活躍したとだけは言っておこう。使わなくても今の俺なら問題なかったかもしれないが、ドライアドさんはどうやら種族的特徴として吸能力があるらしいので、衰え知らずな【精力絶倫】を使って対策してみたのだ。

すごく甘い一時でした。

それに密着した状態と耳元で甘い声でまた来てねとか囁かれた事に加えて、非常に色っぽく惚けた表情を向けられたらもうね。

【ゴブ朗は“^{ドライアド}宿り木の祝愛”を手に入れた！！】

まあ、つまりそんな感じだった。

ドライアドさんと分かれて再び散策していると、それなりの規模の川を発見。特に理由は無いがその川の上流に向けて歩いていたら今度は大きな滝を発見し、その下の小さな湖で行為をした事で流れた汗と独特な匂いを放つ身体を洗う事にした。

服を脱いでそれなりの大きさがある湖で泳いでいると、水中から近づいてきていた緑色の鱗を生やした^{リザードマン}蜥蜴人に取り囲まれてしまった。俺が油断し過ぎていた事もあるが、どうも今のレベルの【気配察知】では、水中の敵に対してはやや反応が鈍いようだ。

今の段階で気が付けたのは、僥倖と言う他ない。この事実について、真正面からでは対処できないような強敵に遭遇した時によろしく自覚する事になったりしたらと思うと、背中に寒気が走るのを禁じ得ない。

まあ、とりあえず、過ぎた事は置いといて、即座に思考を切り替

える。見た目からして、目の前のリザードマン達は“グリーンリザード（仮称）”と呼ぶ事にしよう。

グリーンリザード達の武装はしっかりと手入れされたファルシオン 刃が緩やかな弧を描き、棟が真っ直ぐな刀剣 が一本。それと少々損傷が目立つが問題なく使えそうなラウンドシールドの一種である円盾が一つ。^{バックラー}

肉体にはオークやコボルドのように革鎧や金属鎧などの防具は一切無く、精々局部を隠す厚い布で出来た服程度と軽装だった。

グリーンリザードに防具は無い。しかし全身をビツシリと覆う緑色の鱗が鎧と同じか、もしかしたらそれ以上の効果を発揮するのは目に見えているし、長く太い尻尾による死角からの攻撃も決して侮れるモノではないだろう。

尻尾は第三の腕であると考えるべきだ。しかもその尻尾が今は水中にあるので、目視し難くなっている今はその危険度を増している。そんなグリーンリザードの数は八とそれなりに多く、群れでの狩りが慣れているのだろう。アイコンタクトなどで細々とした連携も取れている。

それにアチラさんは無駄に長い舌やファルシオンをチラつかせて『ヒヤチャヘツチイゾオー』『ゴオーギャクツテエロウイキヤー』『ジャンベツテンバチュルアー』と意味不明な奇声を上げているが、やる気満々であるのは雰囲気を読み取れる。明らかに俺を殺す気だ。今日のハンティングは銀腕の慣らしや性能の確認を兼ねてずっと無手で探索していたし、独りで行動をしていたから仲間の助けはない。そして下半身は抵抗の強い水の中、つてな具合に地の利はアチラにあるってのもあり、例えオーガ そう言えば、今更ながら、ゴブ爺によると【希少種】って存在は聞いた事すら無いそうだ。いつか機会があれば調べてみよう でも組み易しとでも思ったのかもれないが、うん、問題はありませんでした。

アビリティを重複起動させ、行動に移す。

未だに下半身は水の中だが、【水流操作能力^{ハイドロハンド}】を使用すれば水を推進力として扱う事は容易く、そもそもアビリティの重複発動によって強化された脚力は水の抵抗など殆ど無視できるのだ。

水流操作による激流の補助と突進力強化によって爆発的な速度を得た俺は一瞬で敵の懐深くに踏み込み、普段以上の勢いを乗せた銀腕と生身の腕で構築された拳をグリーンリザードに喰らわせる。

グリーンリザードの反応は良く、初撃となった銀腕の拳をギリギリの所でバックラーを間に挟んでガードしようとしたが、しかしバックラーは一瞬で爆散してその意味を成さず、一体の命はそこで潰えた。

銀腕の一撃はグリーンリザードの片腕をバックラーもろとも千切り飛ばし、それで勢いが衰えることなく胴体に突き刺さったのだ。胴体も結果は腕と大差無く、鱗は砕け散り、肉は引き裂かれ、骨は砕けて、とそのまま軌道上の一切合切を銀腕の拳は貫通してしまっただのだ。

ちなみに、生身の拳は鱗を砕いて肉を潰し骨を折るだけに止まっている。それでも驚異的な一撃には変わらないが、威力は銀腕とは比べるまでもなく低い。

まあ、仕方ない話だけどな。

殴つては殴る、時に蹴る、を繰り返していたらグリーンリザード達を殺すのに三十秒も必要としなかった。逃げ出そうとしたのは糸と雷で真っ先に捕まえたので、取りこぼしは無しだ。

殺した後はグリーンリザードの武装をアイテムボックスに回収し、解体は面倒になったのでそのまま喰いました。

アビリティ
【能力名】水棲【のラーニング完了】

アビリティ
リザードマン・ランゲージ

【能力名】異種族言語【のラーニング完了】

グリーンリザードの肉や骨は独特な味と歯応えで、なかなか美味しい。

もうちょつと量を喰いたくなくて、近くに他のヤツが居ないかなーと探してみたがそれ以上いなかったので一旦諦める事に。

アビリティ【マップ脳内地図製作技能】により自動的に作成されている脳内地図で黒く塗り潰されて表示されない未踏破区画を目指して歩いて行く。

しばらく歩いていると森を抜けてしまい、そこに広がる草原を確認。

転生して初めて森と川と山以外を見ました。吹き抜ける風が心地よい。

軽く物想いに耽っていたらコチラに突っ込んでくる牛を発見した。鋭い二本の角に、人面牛と言う事で“バイコーン（仮称）”と呼ぶ事に。

ひたすら只管に真っ直ぐ突っ込んでくるバイコーンに対して踏みこんでのジオルトカウンター！！とか思いながら銀腕で真正面から殴つたら、銀腕が肘まで喰い込んでバイコーンはスプラッタ死体になら。

うん、今日一日で銀腕の使い勝手の良さを確認するには十分過ぎた。銀腕をくれたベルベットには幾度感謝しても足りない。

南無。再度祈りを捧げる。

バイコーンは一匹だけだったのでまるまる喰ってもアビリティは得られなかったが、肉体強化ができた上に独り焼肉できて満足である。しかもバイコーンの肉は全身全てが美味しかった。

皆できた時は、殺してバイコーンの焼肉パーティーをすると今決めた。

その後は時間も丁度良かったので、ナイトバイパーなどをお土産

として狩り、帰って喰って寝た。

“四十二日目”

奴隷兼部下な五ゴブのホブ・ゴブリンの内二ゴブにメイジ適正がある事が判明した。

さっそく俺直属からホブ星さんの部隊　マジシアン　に所属を変更し、魔術の勉強を開始させる。

俺も興味あつたんでついて行ったら、ホブ星さんの寝所には幾つか魔術などに関する書物が数十冊ある事が判明。聞いた所によるとどれもこれも今までの略奪品で、コツコツ溜めたそうだ。

話を聞いて行くと、ホブ星さんも最初から今の様に三系統の魔術を扱えたわけでは無いそうだ。

メイジ適正のある個体は俺がそうだったように、自分に一番相性のいい系統の基礎魔術　俺が【終焉】だったように、ホブ星さんは【炎熱】らしい　の呪文スベルが脳内に何時の間にか記録されていて、レベルが上がる事に新しい呪文スベルが追加されていくのだが、そのままでは最初の魔術の上位版が扱えるようになっていくだけで、他の系統の魔術は扱えない。

鍵スベルとなる呪文を知らないのだから、当然である。

しかしこの集められた書物を教材にして勉強した結果、ホブ星さんは今の様に使える魔術の幅を広げたそう。努力家である。

んで、ホブ星さんは初めてできた弟子が嬉しいらしく、魔術などに関する基本的な教育を二ゴブにみっちり教える気満々なので、俺は邪魔にならないように横で書物を読みあさる。

ふむふむ、おお、なるほどな。って事で今まで使っていた破壊力抜群な投げ槍などの【終焉】系魔術以外にも、【炎熱】系やら【水氷】系など他の系統魔術の扱い方をそれとなく学習できた。

いや、どうやら俺の持つ生体属性【根源】はなんでも即座に扱えるようになる便利属性らしいのだ。相性が悪くて威力が半減したり

そもそも発動自体しないなど、他の奴らじゃ必ず苦勞する（らしい）事も、問題なくスラスラとできたり。記憶力も強化されてるっぽいし、うん、楽だな。

まあ、そこら辺の細かい事は置いて、使えるようになったのだから文句は言わせん。つっても【発火能力】とか【発電能力】が既にあるから、無意味かもしれないが。

まあ、使える幅が広がるのは悪い事ではないので問題無い。

そして三時間ほどの時が過ぎた頃、ホブ星さんのコレクションの中の新たな一冊を手に取り読んだ結果、俺はようやく【職業・付加術師】の使い方を見出した。

いやさ、【職業・司祭】はちょっと違うが【職業・森司祭】と似ている部分が多々あったのですぐに使える様になったんだけど、【職業・付加術師】は【職業・魔術師】とかと比較しても扱いが違って、上手く発動させる事ができなかった。

だから半ば放置してたんだ、今までは。

ええと、そうだな。

【魔術師】は基本的に外に解き放つ技術であり、【付加術師】は物質に干渉する技術なんだそうだ。

そうだな、魔術師は素材の強化とか付加術師と似たような事はできるんだけど、補助という一点に置いて、効果上昇率の度合いは付加術師に遠く及ばない。まあ、その代償として戦闘はからつきしだけどな、付加術師は。

うん、取りあえず魔術とは扱いが違うとだけ思っておけばいいだろう。

難しい事は一先ず置いて、一応【付加術師】が使えるようになった。その経験値稼ぎを兼ねて鍛冶師さん達の所に。

俺の顔を見た瞬間ちよつと不機嫌そうになった鍛冶師さんに小首

を傾げつつ、出来上がっていた品々を練習に使わせてもらった。

精製された精霊石製のナイフとか、鉄鉱石から造った錬鉄製のナイフとかに属性付加エンチャントを施してみたり。

その結果、火精石製ナイフならもつと強力な火が噴き出す様になったし、水精石製ナイフならもつと大量の水を噴出するようになり、錬鉄製のナイフは強度と切れ味が飛躍的に上昇した。

うん、【付加術師エンチャンター】の使い勝手の良さには驚かされるね。強力な武器が、比較的簡単に造れる様になったし。

まあ、その陰で属性付加エンチャント失敗で砕け散った試作品の数々があるのだが……。

慣れない内は、成功確率が低いとです。

そんなこんなで時間が流れて、ハンティングに行つて喰つて寝た。

“ 四十三日目 ”

最近ゴブ美ちゃんが不機嫌だ。正確に言えば二日前、俺が一日独りでハンティングして帰ってきた辺りから。

何故だろうか？ と小首を傾げながらゴブ吉くんに相談したら分からないと言われ、ゴブ江ちゃんに相談したら胸に手を当てて聞いてみると言われ、ホブ星さんやホブ里さんに相談したら若いっていいわねえ〜とか言われたが、結局は明言を避けられた。

本気で分からなかったので赤髪ショートの所に行つたら可愛らしく頬を膨らまして顔を背けられ、次いで鍛冶師さんの所に行つたら私もちよつと不機嫌なんですけど、と言われた。それは昨日から思っていたけど、なんで？ と聞いたら呆れられてちよつと怒った様な顔をして何処かに行つてしまった。

悩みながら姉妹さん達の所に行つてみたら有無を言わずに試作品ですどうぞ、とちよつと毒物混じりなモノが差し出されたけど、喰つてみたら結構美味しかった。繰り返すが、毒物は俺には効か

んだ　　ので、また造つてと言つたら驚かれた。

何故だ。

ほとほと困つて、最後の頼みだと思いながら錬金術師さんの所に赴くと、ちよつと呆れられつつも原因を教えられてくれた。

うん、原因は嫉妬ジエラシーだったそうです。いや、ドライアドさんとの一件で首筋に幾つかキスマークをつけられてたそうで、それを見つけて怒っていたそう。今は持ち前の回復能力で残っていないけど、どうやらドライアドさんが一日は消えないように何らかの細工していたみたいである。

無害だから別にいいけどな。

そうなのかー、と謎が解けて頷いていたら錬金術師さんに不意に抱きつかれて、そのまま貪る様なディープキスをされた。

情熱的に舌と舌を絡ませ、唾液を交換しながらあれえー？　と思いながら続けていると、しばらくして解放される。

そしてコレは命を助けてくれたお礼と私の気持ちだつてさ。そうなのかつて事で頷いて、ちよつと見つめ合つて、潤んだ瞳と唇にクラツときて、錬金術師さんのバランスのとれた身体を触つてみたらコツチも触られたりして、気分が乗ってエスカレートしていった。

壊さない様に気を付けながら身体を抱き寄せて隠れてイチャイチャしてたら、そこにゴブ美ちゃん乱入。

俺が浮気を発見された夫みたいに慌てふためいていたら、抱きつかれました。

んで、何と、私にもしるこの事。

ゴブリンの時と比べ、ホブ・ゴブリンになった辺りから可愛くなっていたので俺の心境的にも何ら問題はなく、そういうあれこれしていたら次々と乱入者が！！

うん、その後は正確には語らないけど、本当の所はできないんだけど、乱入してきた赤髪ショートとか鍛冶師さんとか姉妹さんとかも交えての一夜を過ごす事となりました。

【形態変化】^{メタモルフォーゼ}と【自己体液性質操作】の二つが大活躍だった。うねうねと自分が触手的な事をするとは、転生してから夢にも思ってませんでした。

そしてこんなに大人数でやるとも思ってたませんでした。

あと、【自己体液性質操作】でまさか体液が天然の興奮剤になるとも思いませんでした。

ちなみに糸で他のゴブリン達が覗かない様に簡易密室を造ったし、^{エアロマスタ}【大気操作能力】で声も外に洩らさないように極力努力してある。

感想。

うん、凄く気持ちよくて爛れた一夜だった。

ただ、俺の体力値が半端じゃないので何回出しても全く衰える事が無く、その上アレが大き過ぎて、^{メタモルフォーゼ}【形態変化】を使わないと皆を確実に壊してしまったに違いない。

一応、それでも非常にキツかったけどねとだけは言っておこう。

大切な人達が、俺が守るべき存在が、できてしまいました。

うん、こんな予定は全く無かったんだが、な。

まあ、仕方ない。幸せであるのは、間違いないのだし。

“ 四十四日目 ”

【気配察知】に感あり。

最近ではアビリティレベルも上昇し、一度見た事のある種族ならば種族名 俺が仮称としたモノだが が表示され、名前を知っていればその名前が表示されるようになっていたりする。しかも敵

味方識別機能つきだ。便利すぎる。

それによるとどうやら近づいてくるのはゴブ吉くんとその部下のニゴブらしく、何かあったのかと思って起きあがろうとして、俺の身体にピッタリと寄り添う様にして寝る存在達に気がついた。

昨日の激しい行為の疲れからスヤスヤと眠っている彼女達を起こすのは忍びないので、【形態変化^{メタモルフオーゼ}】を使って起こさない様にすり抜ける。

そして糸で造った部屋から出てゴブ吉くんと会話。話によるとどうやら耳の長い美形な亜人種が三名、洞窟の入口にやってきてふんぞり返っているそうだ。

そいつ等を襲って殺すにしても、洞窟内部に招き入れるにしても、トップである俺の判断は重要だろうって事で呼びにきたんだ。今は判断できないので、外で待たせているそうだ。

間違った考えでは無いので、これも教育の賜物かもしれん。以前なら問答無用で襲いかかっていただろうし。

一先ずアイテムボックスから大瓶（先日の湖の水入り）を取り出し、中に入っている水で素早く身体を洗って最低限の身だしなみを整えてから向かうと、そこに居たのは男一名にその従者兼護衛だろう武装した女性二名の“エルフ（仮称）”だった。

三名ともかなりの美形で、男の礼服や女性二名が着ている軽金属鎧などはどれもそこそ上等なシロモノだ。センス云々は兎も角として、相応の身分なのだろうと予測するのは容易い。

後ろに控える女性二名の腰にある刺突細剣は鑑定して見た所【希^{レア}少】級のマジックアイテムで、その他にもある指輪タイプのマジックアイテムや腕輪型のマジックアイテムも全て【希^{レア}少】級である。

これは相応の身分じゃないと、揃えられる筈のない装備の質だ。

ちなみに、以前の冒険者の方が良い装備よかったよな？ と思うかもしれないが、冒険者の大半は高品質の装備はダンジョンから発掘

した品を装備するので、高レベルの冒険者の装備の質は必然的に良いモノとなる。

しかしダンジョンに潜らないモノがそれ相応の品を揃えるには、どうしたって財力が必要になる訳で、つまりはそう言う事だ。

あと、かなり高圧的な態度も要因の一つか。まあ、これは種族的特徴かもしれないが。

アポなしでやってきたくせに偉そうな口調してんじゃねーぞ腕むしって喰ってやるうか、と乱暴な言葉を内心で吐き出す事で諸々を我慢しながら訪問した理由を聞いてみると、どうやら我らが傘下にうんぬんかんぬん。

全てを話すと長話になるので纏めていくと、俺とその配下を自分の部下　というよりは奴隷に近いと思われる、言い方的に　にしたいってのが主な要件だそうだ。

なんでも『下等なるヒューマン共がエルフの秘宝を狙って争いを近々仕掛けてきそうな雰囲気とそれを裏付ける情報があり、それに備えて少しでも強そうな手駒が欲しい』んだと。

そうなると、エルフの狩人達でも狩る所か逆に狩られていた元山の主“レッドベアー”を殺した俺　最近森で噂になっていらいらしい。まあ、レッドベアーの毛皮で造った防具装備の黒いオーガは目立つよな、うん　はまさに最適だったわけだ。

雇う報酬として配下のゴブリン達の分まで含んだ大量の食糧はデフォとして、【固有】^{ユニーク}級のマジックアイテムを一品か、もしくはエルフの美女二名を俺にくれるそうだ。

これは、オーガに対する報酬とするにはあまりにも桁外れである(らしい。何時もの様にゴブ爺談)。

【固有】^{ユニーク}級のマジックアイテムは買おうと思えば最低でも一千万

ゴールド以上の金額になるそうだし。それと当然だが、能力などによって値段は大きく変わる。それこそ三千万ゴールド以上になるモノもあるのだそうだ。

流石に報酬は【アーティファクト神迷遺産】ではないだろうが、それでも高額なのは違いない。

そしてエルフは目の前の女性二名を見れば分かるが、非常に美人だ。こう言っては悪いが、赤髪ショート達よりも美人なのは確実だ。個人の好み云々は兎も角としても、一般的な美醜の観点では間違いない。なく美なのだ。

提示された報酬についてはちよいと驚いたが、しかしそれを報酬とする程に結構切羽詰まっているんだろうか、と思わなくもない。表面上は余裕を見せているが、多分戦力的に大きく負けているんだろつなアーと。実に定番と言えば定番な展開である。

この後エルフの王族が奴隷になって、とかだと王道過ぎて笑えないな。

数はそれだけで暴力なのだ。圧倒的な力を誇る個も、やがては集団に押し潰される時が来るってのは、前例が多過ぎる話であるからにして。

数日前ならこの話に乗っても良かったんだが、もつと上質で強力なマジックアイテムが既にベルベットの遺産として相続されているので、俺の心は動かなかった。

エルフの女性二名は惜しいと言えば惜しいが、まあ、ここは内通者は要らんとっておく。

容姿は勿論大切だが、長い付き合いになると、やはり内面が重要だと思っし。

最終的に、エルフの勧誘はキツパリと断りました。

理由は、建前を抜かして言ってしまうと、そっちの事情何ぞ知る

か、って事で完結する。

下等なるヒューマンうんぬんは俺にとってどうでもいいし、利害や思想などの違いから発生した争いも勝手にすればいい。戦争はその良し悪しは兎も角、大量のアビリティ確保のいい機会であるので俺にとって都合なのは確かだし、提示された報酬も悪くは無い。

優れた品が手元に多く在って、悪い事は少ないのだ。

けど、ココまで分かり易く見下された状態で一方的に命令のような話し方をされれば、誰だって嫌だろう。命をかけるような仕事なら尚更だ。誠意を見せると声高々に言いたい。

せめて下手に出ると内心で忠告する。意味は無いが。

断って数秒、エルフ（男）は間抜け面で固まった。どうやら断られるとは思っていなかったらしい。

暗喩で俺達を馬鹿にしていたのを、俺が気がつかないとも思っていたのか。一般的なオーガは脳筋らしいから、気がつかれないと思っていたのだろう。多分、と視線で見下すのも忘れない。

やがて再起動 戦場だとあまりにも致命的な時間が過ぎた後にを果たし、俺の言った事と視線に込められた意味を理解し、エルフ（男）が真っ赤になつて怒りを顔にしようとして、何かを言う前に俺が睨み付けて沈黙を選択させる。

【蛇の魔眼^{イヴル・アイ}】と【威圧する眼光】、それと次いでに【強者の威圧】も重複発動させたのだが、それで十分過ぎたようだ。

うん、まさか呼吸までできなくなるとは予想外である。ってなわけ【強者の威圧】は解除。

それでやっと呼吸できるようになり、恐怖からか顔面蒼白になるその様には思わず笑みがこぼれ、それが余計恐がらせる結果になった模様。

オーガの顔は恐いからねー。と他人事のように。

ココまでビビらせたので一応は満足し、銀腕でエルフ（男）の首を素早く掴んでグイッと引き寄せる。咄嗟に動こうとした護衛な女

性二名を視線だけで制し、捕まえたエルフの耳元で外に隠れている護衛達に弓を下ろすように命令。すると同時に一本の矢が顔面に向かって飛来したが、それは口で銜えて止めた。

ボリボリと矢を喰いながら、コレ以上何かリアクションがあればお前の首が千切れるぞと視線だけで語ってみる。まあ、ニコリと微笑んだだけだが。

なんか小声で言われたが、はいはいそうですかと聞き流し、さつさとしる指に力を込める事で伝えてみる。慌てながら大声で命令を下したエルフ（男）に再び笑みを向け、【視野拡張】と【見切り】の重複発動で隠れて矢で俺を狙っていた護衛達が命令通りにしたのを確認してから、解放する事無く耳元でゆっくりと言い聞かせる。

今回の其方の御願は俺の気分が乗らないので却下するが、まあ、人間達が住処を荒らすというのなら協力するのは吝かではない。同じ森の住人なのだから、それ相応の対処には付き合ってやる。それくらいの分別はある。

が、もし仮に今回の事で報復とかを考え、俺の部下や大切な人達を傷つけるのならば、俺はお前達を喰らいに行く、と。お前の味方は全員を喰い殺してやる、と再び【強者の威圧】を発動させながら教え込む。

そしてそれだけの暴力が俺にはあるのだとハッキリと理解させる為にアイテムボックスから【カスイクル・ベイ 餓え渴く早贄の干棘】を取り出し、地面に突き刺して朱槍に内包されたアビリティ【ツェベン 血塗られた朱槍の軍勢】を発動。

それにより、今日やってきたエルフ全員の眼前に朱槍が突如出現した。隠れていた筈の者も一人残らず、である。

色々あった末に血相変えて逃げ帰っていくエルフ達を見送りながら、手中にある朱槍を見下ろす。

原理は分からないが、このカズィクル・ベイは半径百メートルの範囲内であるのなら、突き刺した対象やそれに触れている物体までならば際限なく朱槍を出現させる事ができる。今回で使用したのは二回目なのだが、地面や木から朱槍が出現するのは中々シユールだ。

まあ、切れ味といい長さといい、オーガな俺にとっては非常に使い勝手が良く、“突き刺し縫い付ける”という事に特化しているの
で俺の戦術的にも最適な武器であるので不満は無いが。

しかし、これと同等かそれ以上の事ができるマジックアイテムが幾つもあるというのだから、この世界は本当に理解し難い。

赤髪シヨートとかと話した内容などからちよつと進歩した部分がチラホラと見受けられるファンタジー世界だと思っていれば、こんな明らかにオーバーテクノロジーと理不尽な塊が存在するのだから、この世界は酷く歪だ。

【アイテムファクト神迷遺産】は神の遺物などと言われる事もあるそうだが、それにしたって文明と不釣り合い過ぎる様な気がする。

そこら辺は一先ず置いて、これくらいやれば、報復とかは考えないと思われる。それでも突っ込んでくる可能性は否定できないが、何事も零パーセントにするのは難しいのだ。

何かあった時は、その時に考えよう。

あ、そうそう。

補足だが、俺が脅した男のエルフは次期氏族長候補の一人で、相応に偉いそうです。

それとエルフの里的な場所はまだ行っていない未踏破区画のちよつと奥深くにあるっぽい。今度行ってみるのも面白いかもしれん。

それと【オーク・ランゲージ異種族言語】などの効果のほどもある程度推察ができた。グリーンリザードのように俺達と大きく発音の仕方が変わる種族とかには非常に便利だけど、オークやゴブリンや人間など多少は似

通った言語を解するヒト型の種族だと、無くても何となくではあるが会話する事は可能なようだ。

これはエルフと話して分かった事だ。俺まだエルフ喰って無かったからアビリティ持ってなかったけど、話は通じたし。でも一応あった方が楽なのは確かで、そうだな、こんな系統のアビリティがあれば独特な言い回し　つまりは方言の意味が理解できると言えはいいのか。

例を出せば『えらい』　『疲れた』とか『こわい』　『疲れた』とか。

ま、そんな感じだ。

エルフを追い返した後、ハンティングしたりと普段通り過ごして、今日もガッツリと熱い夜を。

“四十五日目”

早朝、今日も独りで森の中を放浪中。

脳内地図の黒く塗り潰された未踏破区画を歩いていると、グリーンスライムの上位種っぽい“グレースライム(仮称)”を発見した。仮称となった切っ掛けである体色は灰色で、グリーンスライムとはまず二倍くらい大きさが違い、うねうねと動く触手や全体の速さが違い、撒き散らす体液の消化力が違っていた。

それに狩って分かった事だが、グリーンスライムと比較して遥かにタフである。というか、なんか変だった。

せっかく覚えたのだからという事で【炎熱】系魔術で攻撃してみたら今一つ効が悪くてなかなか殺す事ができず、じゃあ【発火能力^{ファイロキネシス}】の炎はどうだと思って試してみたら、結構簡単に殺せたのである。

この事から、どうやらグレースライムには【炎熱】系魔術に対する耐性持ちなようだと思推察した。

転がった灰色の核を拾い、アイテムボックスに収納して次のグレイスライムを搜索。どういった特性があるのかの調査が必要だ。

狩ったグレイスライムの数は一時間で二十体ばかり。

それから判明した事だが、グレイスライムは俺が扱える【終焉】系を除いた全ての魔術の効きが非常に悪かった。

その事からグレイスライムは【炎熱】系魔術だけではなく、魔術そのものに対する耐性があり、一定レベル以下の魔術は全て中和してしまう模様。あと、それに加えて物理攻撃軽減能力も優れているようだ。

スライムの基本的な能力である【物理攻撃軽減】によって一定レベル以下の直接攻撃はダメージ激減かもしくは無効化され、スライム種にとって致命的な魔術には少々強めの耐性がある。それに動きはそこそこ速いし消化能力も高いとくれば、普通に相手をすると相応な強敵になると思われる。

ただ不思議な事なのだが、【発火能力】パイロキネシスの炎や【発電能力】エレクトロマスターの雷を使えばあっさりと殺せたのは一体どういう事だろうか。

魔術じゃないからだろうか？ その所は分からないが、“必要な事/殺し方”は理解できたので別にどうでもいいか。

二十体分の灰色の核をアイテムボックスから取り出し、一気に頼張る。直径五センチ程の核は飴玉に近いだろうか。味は無いが、コロコロと口内で転がす感覚は飴玉そのままだ。

アビリティ
【能力名】物理攻撃耐性【ラーニング完了】

アビリティ
【能力名】自己分体生成【ラーニング完了】

アビリティ
【能力名】補液復元【ラーニング完了】

どうやらグレイスライムは【物理攻撃軽減】ではなく、そのちよつと上位版アビリティ【物理攻撃耐性】だった模様。そら強いよなあ、と納得した。

所で、スライムが増殖するのはある程度体積が増えたと二つに分かれるかららしい。いや、【自己分体生成】をラーニングして理解できたんだよね、これ。

指先を噛み切って血を流してみると、その血がウネウネと蠢き、真つ赤で小さな俺を造れたのだ。しかも【自己分体生成】ってアビリティ名だから小さな俺とオリジナルな俺との間にはある程度の繋がりがあるらしく、思考共有や視覚共有ができたりと。

視覚共有を行うと俺の視界では小さな俺が見え、小さな俺の視界ではオリジナルな俺が見えている、という奇怪な状況に。

流石に皮膚感覚などは無理なようだが、それでもこの能力は凄く使い勝手がいい。というか、自分の事ながらこれは酷い反則だと思っただ。

即座に能力を発揮する類のアビリティではないが、時間をかければかけるほどその有用性は発揮されるだろう。諜報とか、戦力確保とか、凄く簡単にできそうだ。

材料にした血液も、吸血によって他者から簡単に補充できるのだし。

その後は気分良くコガネグモとかオニグモとかトリプルホーンホースなどを狩って喰った。

“ 四十六日目 ”

今日はハンティングには行かず、ゴブ美ちゃんに赤髪ショートに鍛冶師さんに姉妹さんに錬金術師さんの為にプレゼントを製作中。

防具ではなく、遠出様の可愛い衣服が良いかと思ひ、取りあえずサイズを測らせてもらう。彼女達の身体で見てない場所は既に無いが、大まかなサイズは兎も角、正確なサイズは知らないのだ。服は街などに行った時に派手過ぎて悪目立ちする事が無い様に、それでいて地味にならないようなデザインを考える。それに何かあった時でも安全を確保できるように、という事で綺麗な布（かつて

の略奪品」と普通の糸で編んでいく。

そしてそれに加えて何かあった時の為につて事で裏側に俺の血で造った分体を密かに染み込ませ、緊急事態を俺に教えられる様に工夫を施す。いざとなれば足止め程度には働いてくれるだろう。

俺の糸と分体などによつて製作された下手な防具よりも遥かに防御力の高い衣服を渡し、それだけだとちよつと寂しいかな、とも思つたのでアカシカの紅水晶ローズクォーツのような角やコガネグモの甲殻を材料に、豪奢になり過ぎず、それでいて綺麗なブレスレットなどのアクセサリーも追加でプレゼントした。

大層喜んでくれて、頑張つたかいがあつたというモノだ。その夜は皆、ちよつと激しかったです。

あとなゴブ美ちゃんと赤髪ショート、その衣服は普段の狩りや訓練に着るのは止めといた方が良くと思うぞ。破けるかもしれないからな。

まあ、大丈夫だとは思うんだが。

“ 四十七日目 ”

普段通り目が覚め、その時から【直感】インチュイションが活発に働いていた。

今日はひっそりと身を隠して洞窟から動かない方が良いと、動けば後悔すると囁くのだ。

という事で【隠れ身】ハイドニング補正などが高くなる【職業・暗殺者】アサシンを発動し、一応【気配遮断】も重複発動して洞窟の奥の方にある鍛冶師さんや姉妹さんや錬金術師さん達の所で寛ぐ事にした。

俺は寛ぐが、最近趣味になってきた脳内地図の穴埋めはしたい、つて事で昨日の内に俺の血や肉片やらで造つた俺の腰ほど程しか無いサイズの分体　総合能力も半分程度、行動は一定の法則によつて決められていて、自由意思も多少はある　を外に出す。

この分体、グレースライムから確保できたアビリティ【補液復元】

が、四肢欠損したり腹に穴が開く様な攻撃を受けても取りあえず水分さえ必要量吸収する事ができれば肉体をある程度まで復元できるってな能力だったので、造ってみたのだ。

現在の戦闘能力は俺よりオリジナルも格段に低いオリジナルが、それでもそこそこ程度には強いので殺されたりはしないだろう。逃げ足も速いし。

メタモルフォーゼ【形態変化】を使い、まるで巨大な狼のような姿となつて外へ疾走していく分体を見送ってから、当初の予定通り俺は奥に引っ込んだ。

鍛冶師さん一人では何かと不便そうだったので、後方支援部隊パトリに配属した同年代ゴプリンを補助に回したり、姉妹さんの所で新しい料理を考えて実際に作ってみたり、錬金術師さんの所でベルベットの遺産として確保した、何故か経年劣化していない大昔の秘薬などを解析したりしていたら時は過ぎ去り。

それは起きた。

基本的にゴブ吉くん達が訓練をしているのは洞窟の入り口に直結している、大ホールと呼んでいる場所だ。住処の中で最も大きな空間であるそこは、木剣を片手にゴブ吉くんやゴブ美ちゃんに赤髪シヨート達が訓練に勤しんでいる真つ最中だった。

そんな時に俺の【気配察知】がその入り口に接近する敵性対象を感知。表示された種族はなんと“エルフ”だった。しかもその中に、以前追い払ったエルフ（男）の名前も混じっている。まさか早々にやってくるとは流石の俺も予想外だ。

急いで洞窟内のゴプリンを招集し、準備を整える。幸い訓練中だったので装備は既に装着済みで、僅かな時間で事は済んだ。

装備を簡単に点検した後は大ホール付近に予め作っていた身を隠し、それでいて侵入した敵に対して奇襲し易い場所で待ち構えるだけだからだ。一応ゴブ江ちゃんには採掘を続行してもらい、採掘音

を響かせてちよつとした偽装を施す。

しばらくすると、武装したエルフの集団が洞窟に入ってきた。静かな上に迅速に、それでいて得物を手にして殺気を放っていた二十五名のエルフはゴブ吉くんなどのホブ・ゴブリンならばともかく、今のゴブリン達では三体一でも勝てるかどうか、難しいレベルの敵のようだ。

雰囲気だけで既に敵対する気満々なのは分かるが、それでも一応は捕まえて話を聞くべきだろう。

単身、物陰から飛び出すのと同時に【威嚇咆哮】と【鱗馬の嘶き】¹を重複発動した大声で怯ませ、その上更に【威圧する眼光】と【蛇¹の魔眼】^{ヴィル・アイ}で咄嗟に動けなくしてからその隙に糸で捕縛する。

その後は縛ったエルフ達を並べさせ、次期氏族長うんぬんなエルフ（男）の頬を朱槍でペチペチと叩きながら少々お話しした。

うん、どうやら俺が自尊心を傷つけ過ぎたようだ。

二日間を挟んだ事によって恐怖が若干薄らいで、ちよつとだけ冷静に考えられるようになって、何故高貴なエルフである私がうんぬんかんぬん、オーガ如きに恐怖せねばあれやそれや、って事があって自分を見下す奴は殺すしかない¹と決意し、配下の中でもレベルの高い精鋭エルフを引き連れて、感情の勢いに任せて強襲した結果、¹返り討ちにあつて現在に至ると。

こんな上司の下で働くようになったエルフが不憫である。以前護衛していた女エルフ二名もうな垂れた状態で目の前に居るし。少々気になって話してみると、聞く耳持たずだったそうだ。

上司が無能だったためにその下が被る被害は身に染みているので、このまま殺すのは流石にちよつとだけ気分が乗らなくて、多少の情けをかける事に。

1. この次期氏族長的なエルフは死んだモノとして諦める。

2. 俺以外のホブ・ゴブリンにゴブリンと模擬戦をし、相手を殺

さずに気絶などで無力化すれば勝ち。

3．模擬戦で勝てば殺さない、負ければ殺して喰らいます。

簡単に言えばこんなものだ。

説明し終え、次期氏族長的なエルフ（男）以外の糸を解いてやる。すると忠誠心が高いエルフが一名俺に斬りかかってきたが、顎にフックを決めて顎を砕くと共に脳震盪を引き起こし、フラフラと動けなくなったエルフの頭部と肩を掴んで、捻って頸椎を砕いて殺した。

赤髪シヨートや鍛冶師さん達には俺が戻るまで奥に居るように言っているので、心置きなく新鮮な死体をボリボリと。

アヒリテイ エルフ・ランゲージ
【能力名【異種族言語】のラーニング完了】

エルフさん達の震えが止まりません。

身体が竦んで動けないそうなので、戦う気が起こる様にヒューマンとの抗争が近いのにこんなところで無様に死んでいいのかと、生きたくはないのかと語ってみる。

自分で言うのも何だが、非常に白々しい。

しかしそれでも一応の効果は有ったのか、皆さんやる気になった。そして、模擬戦は始まった。

結果的に述べると、模擬戦に参加した二十三名の内、生き残ったのは十七名だ。

ゴブ吉くんやゴブ美ちゃん、ホブ星さんなどに当たった人はご愁傷様と言うしかない。普通のエルフとホブ・ゴ布林なら十中八九エルフの勝ちで終わるのだろうが、訓練し続けているゴブ吉くん達の強さは既にホブ・ゴ布林を超越しているのだ。

命乞いする負けた方達には残念だが、俺達を殺しにきたのにそん

な都合が良い事はありません、と言ってから殺しました。

残念だけど、これが戦争なんだよね。しかも最初に引き金を引いたのは向こうだ。同情する必要は無い。

負けてしまった六名　全員男だ。いや、美女・美少女をあえて無駄に殺す事は嫌だったので対戦を調整したらそうになりましたは、美味しく頂きました。

【能力名】アビリティ深緑の住人【のラーニング完了】

【能力名】アビリティ精霊使い【のラーニング完了】

【能力名】アビリティ弓術の心得【のラーニング完了】

【能力名】アビリティ追跡術【のラーニング完了】

【能力名】アビリティ隠れ身【のラーニング完了】

敗者を喰い終わり、その様子をボンヤリと見つめていた勝ち組工ルフさん達に振り返り、装備しているマジックアイテムを全て一ヶ所に置かせてから、再び糸で捕縛する。

解放されない事に悲鳴が上がったが、俺は別に“解放する”とは言っていないのだとここに宣言しとこう。

あくまでも殺さないというだけで、それを解放すると勘違いしたのかもしれない。俺は赤髪ショート達などのように一方的に虐げられる方には偽善で助けたりする事はあるが、襲ってきた“敵”にまだは多少の情けしかかけるつもりはない。

今回の情けは“殺さない”事だ。

そうだな……内訳は十名が男で七名が女だから、数を増やす事に協力してもらおうか。ああ、前にも俺は無理やりは嫌いだと言ったが、無理やりは絶対にしない。それは本当だ。

ただ自分の体液を調整して造った興奮剤を全員に投与して、自分から求めるまでは手出し無用と厳命してから牢屋に放り込むだけで

ある。

同室に入れるとお互いで発散するかもしれないので、全員個室だ。男のエルフは子を産めないが、まあ、性欲発散には貢献してくれるだろう。外見はいいしな。

いやーしかし、正直タイミング的にはありがたい。同年代のゴブリンは兎も角、年上ゴブリン組はそろそろ雌ゴブリンの身体では満足できなくなっていて、ストレスが溜まってきていたのだ。今までは過酷な訓練で体力を奪い、気を逸らしていたが、訓練にも慣れてきたようで、そろそろ限界が近づいていた。

だから、ありがたいのだ。

……俺が外道だった？ いやいや、勘違いしてもらっては困る。そもそも最初に仕掛けてきたのは向こうだ。

アチラはコチラを殺そうとした結果負けたのに、襲われた俺達がり得ないだろう。理不尽に殴られたのに、殴り返したらコッチが悪役にされるくらいに在りえないだろう。

そもそも、捕虜に対する条例なんて俺達の間には無いんだし、これくらいしても問題ない。在ったとするのなら、それは感情からくる個人の問題でしかないだけ。

あと、自分で言うのも何だが先に言っておこう。まだ比較的良心的なルールを造るつもりだぞ、俺は。

そんな光景に首謀者なエルフが何か言ってきたが、無視した。

十七名のエルフが牢屋に連れて行かれた後は、一人取り残されたエルフを材料に色々。新しい拷問の仕方や、ヒト型の急所的な場所についてのレクチャーをしたりしました。

最後は当然腹の中に。

【能力名】アビリティ【売値三十%増加】のラーニング完了】

【能力名【買値三十%減少】のラーニング完了】
アビリティ

喰った数もそこそこで、個人の能力も高かった上に重複した技能を持っていたので役には立つアビリティを多く確保できたりと、うん、合掌するくらいにはありがたい存在だったな。

“ 四十八日目 ”

ハンティングに出かけ、コボルドやオニグモ、ハインドベアーにコガネグモなどを探して殺して喰いまくった。

久しぶりの平和で平凡な一日だ。

夜は勿論……。

“ 四十九日目 ”

起きたらゴブ吉くんが大鬼オイガに【存在進化】ランクアップしていた。

ここ最近ハインドベアーも単身で殺せるようになっていたので、そろそろかなーと思っていたら案の定。

ちなみに【通常】ノーマルではなく【亜種】バリエーションだ。肌の色は“赤銅色”ダークメタリックレッド。体色が赤いと言いつ事はレッドベアーと同じく、赤い肌つてのは大抵の場合、【炎の亜神の加護】持ちである証明らしい。

試しに火を吹いてくれ、と言ったら実際に火炎放射器の様なブレスが吹けたので、間違いないようだ。

どうも亜種になったのは、火晶石を埋め込んだ燃えるクレセントアックスを使い、その次もベルベットの遺産の一つだったマジックアイテム【魔焼の断頭斧】メインアームって名称の身の丈ほどもある巨大な両刃の戦斧を愛用するなど、炎熱系の能力を有する主武装を愛用していたからかもしれん。

あと皮膚は鉄のような光沢があり、これはどうも【炎の亜神の加

護】に加えて【戦乱の亜神の加護】まで所持しているようだとは、ゴブ爺談。腕を軽く叩いてみたら、ガツンガツンと金属のような手応えが。

二柱の加護持ちって凄いの？ とゴブ爺に聞いたら珍しいと言えは珍しいが、お前さん程じゃないって言われました。

ああ、さいですか。

それとゴブ吉くんが組み手しようぜ、とオーガだけど何処か愛嬌のある笑みを浮かべて言ってきたのでやりました。

結果を述べると、ゴブ吉くん強くなり過ぎです。

身長は約二メートル八十センチと俺より三十センチほど大きく、赤銅の皮膚と筋骨隆々な肉体は、アビリティ無しの素のスペックでは膂力や耐久力などは俺を軽く越えていた。

俺も【吸喰能力】で肉体の能力も向上してる上に希少種だから、オーガ亜種ビルドなゴブ吉くんには負けてないと思っただが、うん、能力構成の振り分けで負けたようだ。

俺は筋力やら体力やら耐久やら知能やらの能力にポイントを全部均等に振り分けているオールラウンダータイプだとすると、ゴブ吉くんは戦闘に關係する項目に集中して振り分けている特攻タイプである、と思えば分かり易いだろうか。

見た目からして、筋肉量が明らかに違うしな！。

とは言え、まだまだ体術などの格闘技術は俺が勝っていたので勝ちました。かなりギリギリな勝負だったが、ゴブ吉くんは好敵手ライバルであるのは間違いなく。

組み手を終え、ガツチリと握手を交わし、目と目で語り合う。

最初は捨て駒として仲間に引きずり込んだゴブ吉くんがココまで

成長するとは、ハッキリ言って予想外だ。

今では俺の右腕ポジを独占してるし、既に心友として、居なくてはならない存在である。

ランクアップしたお祝いとして、ゴブ吉くんの装備も整えていく。
メインアーム
主武装は変わらず巨大な戦斧型のマジックアイテム【魔焼の断頭斧】なのだが、ホブ・ゴブリンの時には両手で持たねば重過ぎて扱いきれなかったのに対し、しかしゴブ吉くんはオーガに成ったことで数十キ口は在る【魔焼の断頭斧】を片手で操れるようなので、再び盾を装備する事に。

贈った盾は【黒鬼の俎板】まないたって名称の、無骨で分厚い黒星鉄製の城壁のようなタワーシールドだ。戦斧と同じくベルベットの遺産であるマジックアイテムの一つで、ランクは斧と同じく【遺物】エンシェント級。

その能力は【重量軽減】と【突破困難】に【衝撃反射】という非常に手堅い仕様だ。ゴブ吉くんがコレを装備すると、俺でも突破するのにかなり苦労するだろう。

防具は俺の糸やらゴブ吉くんが狩ってきたハインドベアー等々の素材と、コレまたベルベットの遺産の一つである【固有】コニーク級の金属鎧の一部を流用し、ゴブ吉くんに合わせてカスタマイズしたモノだ。

うん、凄い迫力である。というか、凄まじい迫力である。

巨大な両刃の両手持ち戦斧を片手で木の枝のように軽々と、それでいて熟練した戦士のように巧みに扱うその姿。巨大な身体の四分の三ほどを隠す黒く巨大でかつ強固なタワーシールドは敵の攻撃の悉くを阻むのを想像するのは容易く、幾つか補助として持っているマジックアイテムに、レッドベアーとまではいかないモノの相応に丈夫なハインドベアーの毛皮とマジックアイテムの鎧を複合して製造されたロングコート装備の、大鬼とか、オーガうん、俺が人間だったとすると、あまり戦いたくない、遭遇したくない存在になってしま

った。

フル装備なゴブ吉くんの迫力は、オーガになったばかりの俺よりも間違いなく上だろう。装備云々があるとはいえ、凄まじいモノがある。まあ、自分の事なので比べ難いつてもあるが。

しかしそれにしても、どここの重機兵だ、と小一時間ほど問い詰めたくなるな、うん。

眼前にすると今の俺でも見上げるのだから、普通の人間からすればどう見えるのか。想像するのは簡単だろうよ。

この日は内部の雑用をやって過ごしました。

エルフさん達は、まだ欲望に屈することなく牢屋の中だ。プライドが生物としての欲望を抑えているのか、もしくは欲望自体が種族的に薄いから対抗できているのか、もしくはその両方なのだろう。

だからなゴブ爺、いちいち来るなと小一時間……。

“ 五十日目 ”

夢を見た。

それもかなり不思議な夢だったような気がする。

何だかどっかで見た事のある老人に、『すま 謝 』
を頼む』 『これはせ プレゼ 』って、何かを言われたような気がするのだ。

目が覚めてから時間が経つとその時の事の詳細は忘れてしまったのだが、コレは凄く重要な事であると思えてならない。俗に言う、フラグ的な何かではないだろうか？

何だったんだろうかと詳細を思いだすべく小首を傾げるが、やはり思いだせない。薄い靄のようなものがかかっている様な感じがする。

まあ良いかと気分を切り替え、今日は午前中はゴブ吉くんと組み手をしたり、午後は二時間ほどゴブ美ちゃんとバディーを組んで八

ンディングに出かけ、外でちよいとイチャついてみたりした。
その後は鍛冶とか料理とかを学ばせている後方支援部隊 パトリ
所属なゴブリンの様子を見学したりと。
その日も皆で楽しんでぐっすり寝ました。

【ゴブ朗は】 の眷属【を手に入れた!!】

あれ？ 眠る直前に、何か、表示された様な……。

俺の意識は眠りの闇に埋没した。

五十一日目〜六十日目

“五十一日目”

目が覚めると新しいホブ・ゴブリンが四ゴブ増えて総数十二になっていた。

しかも四ゴブの内一ゴブはメイジの素質があり、さらに一ゴブはクレリックの適性持ちだった。

今まで大きな怪我は基本的に俺が治していたので、他者を治療する能力を持つクレリックが増えたのは正直言っておりがたい。一度に大勢の怪我人がでた場合は手遅れになる可能性も捨てきれないのだから。

そんな訳で、ホブ・ゴブリンクレリックになったゴブ治くんを隊長とした医療部隊 プリエール を新設した。今の所はゴブ治くんしか隊員はいないが、今回のゴブ治くんに引つ張られる形で他にもクレリックとなる個体が出てくるかもしれない、と期待しつつ。

ちなみに『あれ？ ホブ・ゴブリンの数が少くない？』と思うかもしれないが、数はこれで間違っていない。

ゴブ美ちゃんにゴブ江ちゃん、ホブ里さんに奴隷兼部下な五ゴブの計八ゴブに四ゴブが加わったのだから、数は十二なのだ。簡単な足し算だな。

名前を出さなかったホブ星さんだが、今日目が覚めると【存在進^{ランクアップ}化】^{アップ}していた。本人によると、数年ぶりだそうだ。

ホブ星さんがランクアップして成った種族は【鬼人^{ロード}】系種の一つに数えられる【半魔導鬼^{ハイフ・スベルロード}】だそうな。

ホブ星さんが今回の数に入ってなかったのは、そんな理由があったからだ。

ハイフ・スベルロード

ホブ・ゴブリン

オーガ

半魔導鬼についてだが、どうやら中鬼から大鬼になるって一般的なルートではなくて、メイジ系のモンスターが低確率だが魔術行使に特化したルートに進むと成れる種族だそうな。

魔術を得意とするホブ星さんらしいと言えればいいと言えるだろう。自分の長所を生かす種族になるのは良い事だしな。

ただ特化型であるが故に身体能力は他の鬼人系ロードよりも大幅に低いそうだが、そもそも魔術は遠距離から一方的に敵を蹴る技法である。ほとんど肉弾戦を行わない魔術行使に特化した種族になったのだから、別に問題ないそうな。

ハイフ・スベルロード

半魔導鬼の見た目は額に二本の小さな角を生やした人間そのままだった。ホブ星さんだけしか見た事が無いので個体差があるのかもしれないが、半魔導鬼ハイフ・スベルロードになったホブ星さんは、容姿からパツと見て推察できる年齢は二十代前半から後半の間程度で、可愛い、と言うよりも錬金術師さんのようにスーツが似合いそうな知的クール系の美人である。

生気の抜けた青白い肌、ややつり目な知性を帯びた緑色の瞳、額の中心部には双角に挟まれた状態で直径三センチほどの丸い蒼玉サファイヤのような珠が埋まっついていて、灰色の腰まで伸びた長髪と、両腕の前腕部に刻まれている俺と同じような紋様だが微妙に違う黒い刺青が特徴的だ。身長は目測で百八十センチほど。

本人が言うには腕の刺青は本来無いはずのモノらしいが、何故あるのか分からないそうさ。ただ、そこから力が漲る感覚がして、悪い気分では無いそうさ。

ゴブ吉くんのように何かしらの【亜神の加護】持ちなのかどうか聞いてみたが、それは否定された。そんなモノは持っていないらしい。

ふむ、謎である。まあ、これも追々判明する事に期待して。

そしてゴブ爺が補足として、“半”ハイフと種族名の前につく場合は本来の種族スベルロード 今回は魔導鬼だ よりも全体的なスペックが劣って

いるのだ、と教えてくれた。

まあ、ハーフだからそうだろうとは以前から思っていたけどな。
ハーフがどういったモノかいまいち分からない人は、大鬼オウガと中鬼ホブ・ゴブリンのようなモノだと思っておけばいいだろう。それに成る一步前という意味だ。

今度ランクアップすれば正式に魔導鬼になるそうだしな。
スベルロード

その後、ハーフ・スベルロード半魔導鬼になってどの程度能力が向上したのか確認を、
てな流れで外で魔術を実演してもらったら、うん、凄かった。いや、
凄まじかった。

ホブ星さんが扱える魔術の中に、“シャル・ダイ・デイロウ炎禍の嵐群”と呼ばれる炎熱系魔術第二階梯に分類される魔術がある。

唐突に第二階梯とか言われてもチンプンカンプンで意味不明だと思うので、補足を一つ。

発動難易度やその破壊力、あと呪文解放レベル制限などによって魔術は一般的に、最低ランクである第一階梯から最高ランクの第十階梯までと、十のランクで>神<が全て定めている、らしい。

アビリティでもちよくちよく【なんたらの亜神】などとあったように、この世界には俺達の一つ上の領域に立つ存在が実在する。

実際に神と会える場所 “聖域” も世界には幾つか点在するそう
だ。

まあ神様うんぬんは一旦置いて、話を戻そう。

十の中で下から二番目の魔術、と聞くと簡単に弱そうなモノに思えるかもしれないが、それは誤りだ。最低ランクである第一階梯の魔術を扱えるだけでも、人を数人纏めて殺傷するのは容易い。

炎熱系統魔術の第一階梯魔術“シャル・ロウ炎禍”が放つ一発の炎球でさえ、
ヒト数人分を容易く焼死させられる。

ちなみに以前俺の顔に直撃した雷光系統魔術は第三階梯の魔術だ。

本当ならオーガクラスのモンスターでも一発で肉体全てを消し吹き飛ばせる程の破壊力を秘めていた。

俺の場合はアビリティでその威力を激減させていたのでそう言った事にはならなかったが、それでもアレは痛かったなあ……。

それと、第五階梯の魔術が扱えるのなら街一つを単騎で燃やす事もできるらしい。

そこまで行くとまさに“一騎当千”の化物で、赤髪ショートもそれと同じかそれ以上の事ができる人物を話ただけだが何人かは知っているそうだ。

……喰えばどんなアビリティを獲得できるのだろうか？

以前殺して喰った高位魔術師は最高で第三階梯までしか行使できなかったようなので、想像するだけで楽しみだ。

そんな機会があるかどうか分からんが、想像するだけなのだからいいだろう。

シャル・ダイ・テイロウ

話を“炎禍の嵐群”について戻すが、かつてホブ星さんが駆使し

シャル・ダイ・テイロウ

た“炎禍の嵐群”は直径十センチ、総数五発の火炎弾を連続射出する広域破壊系の魔術だった。

ただホブ星さんでは発動するにはかなりの集中と長い詠唱時間が必要とし、しかも一度使用すれば数日間は無手く魔術が行使できないようになる、等の反動があった。

だがそのリスクと引き換えにするだけの破壊力がある、奥の手の一つ。

ランクアップした現在は、そんな昔とは比べ物にならない魔術に変化していた。

シャル・ダイ・テイロウ

“炎禍の嵐群”を発動させるのに要する時間 呪文詠唱時間が

以前の五分の一度にまで短縮されていたばかりか、打ち出される一個の火炎弾は直径三十五センチ、総数二十発と強化されていた。

その上発動させても大した疲労感はないようだし、体内魔力量的にもまだまだ余裕があるそうで、あと二十回は連続使用したとしても以前のように強い反動はないらしい。

それにそれよりも強力な魔術を扱えるようになったそうだし。流石魔術特化な種族だと言うよりないだろう。

ちなみに、全て空に向かって撃ち上げられてます。地面に撃つと後処理が大変だからなー。

それにしても、これでもまだ半端者だと言うのだから、魔導鬼が扱う魔術はどれほど凄いのだろうか。

どうもこの世界の情報が少な過ぎて、上限が不明なのは怖い所だ。

【存在進化】^{ランクアップ} したお祝いとして、四ゴブにはこれまで通りにそれぞれ二つのマジックアイテムを。

ホブ星さんにはベルベットの遺産の一つの、【体内魔力増幅】^{オド・アンブリライケーション}や

【物理・魔法攻撃耐性】など幾つか優れた特殊効果を発揮する白銀と金系と赤い聖骸布で製造されたらしい【神迷遺産】^{アイティファクト}のローブを。

それに以前ベルベットのダンジョンで殺した【職業・高位魔術師】^{ハイ・ウイザード} 持ちの冒険者な青年が所持していた、古代樹の杖に魔法石なる赤い宝石が嵌めこまれた魔杖>アランノートの杖くをプレゼント。

それと普段は邪魔になる魔杖や小道具等を収納する能力を持つ腕輪タイプのマジックアイテムも、ゴブ吉くんと同じく渡しておく。

今回の武器更新によって今までホブ星さんが使っていた装備

魔杖と灰色のローブだ は、嘗ては俺の部下兼奴隷であったが、今ではホブ星さんの部隊に所属している弟子なメイジニゴブに贈られました。

さて、今回は最近分かってきた事でも呟こうかと。

うん、どうやら俺と同年代だったゴブリン達は成長率　もしくはは経験値吸収能力　が普通では考えられない程に高いようだ。それはホブ・ゴブリンが森の外に出る前に量産している事で証明されている。

ゴブ爺にも以前言われた事だが、普通、ゴブリンがホブ・ゴブリンになるのには年単位の月日が必要だからだ。

こうなった原因は、俺であるのは間違いない。

それでちょっと考えてみたのだが、恐らくゴブリンは生後一ヶ月かそこの生活環境によって今後の成長率が変化するのではないだろうか。

ほら、ゴブリンは種族的に身体の成長が早いから、能力の成長期も他より早くにくる、そんな仮説だ。伸び盛りに伸ばす、と言えばいいのか？

産まれてから一ヶ月以内に自分と同等かそれ以上の生物を多数殺して喰う、過酷な訓練を産まれてから繰り返す、など普通のゴブリンではできないような特異的行動をする事によって、成長率は大きく変化する、とか。

普通の一般的なゴブリンの成長率を1とすると、俺達のように殺して喰って腹一杯で厳しい訓練を続けているゴブリンは成長率が10である、のような感じで。

確かな確証は全くないが、しかしその可能性は非常に高いと思われる。

そうでなくては納得できる理由が無いのだし。

あと、俺の【群友統括】もそれを補助アシストしている可能性が高い。

このアビリティ、配下の能力を底上げする効果があるのは以前にも言ったが、効果発動の条件を満たす為にそれぞれの部隊のコンセ

プトに合わせ、個々の性格や能力的な事などを考えてそこが最も適正だと判断した個体を選抜し、配属させている。

その為【群友統括】の効果が常時発動している筈なので、普通よりもさらに強くなり易くなっているのではないかと試してみたり。まあ、そんなこんなで強い仲間が増えるのは歓迎するべき事だし、まだハッキリと解明できていないのでこの話はココまでとしよう。ただ、ランクアップしてオーガとかに成った場合どうなるのか、そこら辺は今後どうなるのか要調査だな。寿命とかも調べにやならん。

オーガがゴ布林よりも短命とかだったら流石にやるせない。

そうそう、十七名のエルフだが、十人居た男の内三名と七人居た女の内一名は肉欲に屈服しました。

俺は既にゴブ美ちゃん達が居たが、エルフの生態がどうなっているのか気になったので、彼女の最初の相手は俺が担当した。

とりあえず、できるだけ相手が痛くない様には気を使ったつもりである、とは言っておく。しかし失神させ過ぎた感が否めない。

いや、うん、凄かったんだ。何がとは言わないけど。美人が積極的だったからとか言うつつもりも無い。

その後は他のゴ布林達 主に同年代のゴ布林が多い。いや、強い順にしたらそうだったんだ。年上ゴ布林は主に男の方を……アー、的な の相手をしてもらってます。

ただ多対一ではさせていない。一対一だ。

プライドの高いエルフなのだから嫌々していると思うかもしれないが、薬の昂りを我慢した反動か、大変嬉しそうに日々喘いでいます。幸せそうだからいいんじゃない？ と思ってみたり。まあ、仕方が無かったんだと諦めてもらおう。

彼・彼女達は大切に扱う様に言い含めているので、と言うか普段は下位のゴ布林達以上に快適な生活環境にあるので決して悪いモ

ノでは無く、以前のようにボロボロになって死んでしまう事は無い、
筈だ。

そこら辺は前科のあるゴブ爺に特に言い聞かせているので、率先
して行動に移しているから大丈夫だろう。

最後になつたが、起きたら得ていた【 の眷属】の話をちよ
つとしよう。

うん、これ全く使い方が分からんだ。と言うかどんな効果があ
るのかさえ現状では不明である。最初の文字が見えないので、推測
する事すら不可能です。誰か教えてくれと言ってみたり。

眷属つてんだから、何かしらが俺に干渉しているのだとは思つ
たが……。

自分でラーニングしたアビリティならその使い方は概ね理解でき
ているのだが、このアビリティは多分この世界の法則に則つて得た
モノなので、うん、分かりません。

解析する事は今の所諦めている。

“五十二日目”

夕方、徐々にゴブ吉くとバディーを組んで未踏破区画にてハン
ティングを行っていると、武装した十二名の人間を発見した。

周囲を警戒しつつ、それなりの速度 俺達からすれば遅すぎる
のだが、比較するのは可哀そうだ でエルフの集落があるらしい
区画に進んでいる事から、人間軍の偵察部隊か何かだろうと予測。
好奇心に突き動かされて追跡する事に。

二メートル五十センチ以上の巨体であるオーガが二体というのは
目立ち過ぎると思う 事実、普通は目立って目立って仕方がない
筈だ かもしれないが、問題は特にない。

生後四日目から始まりを告げた、自分達の糧を得るためのハンテ
ィング。あの日から今日までの間、基本的には俺の方針により、獲

物を発見すると真正面から突っ込んでいくなどと言う事をせずに、隠れながら獲物の呼吸を読み取り、そして死角からの強襲という暗殺者紛いの事を繰り返していたので、それ等の結果として俺とゴブ吉くんなどに備わっている隠れ身技能ハイディングスキルは通常と比べるまでも無く磨かれている。

オーガの巨体を周囲に溶け込ませ、標的に悟られなくするには十分過ぎる程の技量だ。

それに加えて俺には【ハイディング隠れ身】をアビリティとしても所持しているので本来以上の事ができるし、ゴブ吉くんのサポートも軽くこなせるので問題などある筈も無く。

そして追跡する事しばし。どうやら目的のポイントに到着したらしく、そこで人間達は“U”の字に似た陣形を組み始めた。

陣形を構築する為の移動が終わると、一人につき二つ所持していたクロスボウの内の一つを手に取り、人間達は気配を消してその身を潜めた。

あれなら前もって知っておかないと、相当近くであつても発見するのは困難だ。非常に高度な隠れ身技能ハイディングスキルである。まあ、野生で生きる俺達には劣るレベルではあるが。

ココまで体勢が整うと、クロスボウによる奇襲　クロスボウは二つあるので、立て続けに射てから接近戦に持ち込むのだろう。俺ならそうする　で、誰とも知れない標的は沈黙させられる可能性が高い。

そこん所どうなんだろうか、という事で、例え注視したとしても殆ど見えない様な極細の糸を密かに伸ばし、小声で僅かに交わされる会話を盗聴してみる。

それによると、エルフの“円卓会議”議長の愛娘　エルフは幾つかの氏族の代表が集まって意思決定をする制度を採っているのかもしれない　を攫う任務で此処にいるそうだ。

当然愛娘についている護衛は皆殺しにするのだらう、準備と会話からして。

あとこの会話から、どうもエルフ内に裏切り者が存在する事が判明。裏切った個人までは特定できる筈もないが、この情報は非常に重要であるのは間違いない。

まあ、誰だつて滅びたくはないし、仲間を裏切っても自分だけはくって奴が居る事は珍しい事じゃない。利権とか関わるともうボロボロ出てくる事など多々あるし、そもそも俺には関係ないのでどうでもいい。

精々機会があれば、俺が稼がせてもらうつてだけの話^{ネク}なのだ。

この後どうなるのか成り行きを見守る事にして、大体二時間後くらい 待ち疲れたゴブ吉くんは少々離れた場所でハンティングさせ、事態に変化があったら糸で知らせるようにしている だろうか、武装した美男美女ばかりなエルフの一団がやってきたのは。

攫う娘さんとやらは、エルフ数名に担がれた神輿^{みこし}のようなモノの上に座すエルフで間違いないだらう。見た目的には十代後半から二十代前半と若く、ハッキリ言つて今までそうは見た事の無い程の美人であった。

それはもう、絶世の美女と言つてもいい程に。

少々見惚れてボンヤリと眺めていたら、隠れている人間達にごく僅かな変化が見受けられた。

これは事がもう直ぐ起こるなと思ひ糸でゴブ吉くんを呼び寄せる。その間に一斉に動いた人間達十二名は予め持っていたクロスボウで一度に十二人のエルフを正確に撃ち殺した。

それだけでは終わらず、矢を撃つたクロスボウは捨てて足下に置いていたもう一つのクロスボウに持ち替えて、再び射撃。放たれた矢は、更に十二人のエルフを撃ち殺した。

突然の奇襲に慌てながらも弓を手に取り反撃しようとした残り八名のエルフは、今度はクロスボウを放置して素早く駆け寄った人間達の刃で沈黙する。

この間僅か十秒程度だ。疾風迅雷、なかなかのお手並みと言うよりない。

その後、ただ一人生き残ったエルフの娘さんに近寄った男がその口元に抵抗されつつも布を押し当てると、しばらくしてエルフの娘さんの身体から力が抜け、意識を失ったのが傍目から見ても窺えた。グツタリと力の抜けた娘さんを担ぎ、無傷で任務を遂行した人間達はもと来た道を疾走する。迷いの無い撤退行動だ。

ちなみに、そのもと来た道つてのには俺が待ち受けていたりする。後ろから追跡していたので当然だが。

彼我の距離が十分近づき、頃合いだろう、てな事で地面から起きあがり様に指先から糸を射出。

保険として【地形操作能力^{アースコントロール}】を発動、十二人の人間達の逃げ場を完全に塞ぐように正面以外の三方に土壁を噴出させた。

突然の事態に、慌てふためく人間達の表情が可笑しくて。

結果、一網打尽です。

コガネグモから得たアビリティ【黄金糸生成】によって糸は柔軟性などをそのままに、黄金なので見た目以上にある重量で体力を消耗させ、今まで使用していた糸の弱点として存在した炎に対する脆弱性も、ある程度の耐性を持つようになっていたので早々断てるモノでは無い。

成す術無く糞虫^{ミラムシ}のようにのたうつ様は滑稽だ。

ただこのままでは定番としてあるだろう奥歯に仕込んだ毒などを飲まれたり、何も自白しないように舌を噛み切るかもしれない。そうなったとしても俺が治すので誰も今死ぬ事はないが、治療するの

が面倒なので糸で猿轡さるへしちわを。

それと一応拘束が解けない様に腕の関節を外し、親指と手首同士を嚴重に括りつけたりとしていたら、ようやくゴブ吉くんがやってきた。

遅れてやってきたゴブ吉くんは、仕事として人間十二名全員を担がせる。結構な重量になるはずだが、ゴブ吉くんが持つと非常に軽そうに見えた。……装備も合わせると、間違いなく一トン以上あるんだけどなあ？ と小首を傾げるが、全然余裕そうなので何も言いません。

まだ眠っているエルフの娘さんは俺が抱いて、住处である洞窟に帰還する。

娘さんの護衛でつい先ほど殉職なされた クロスボウの頭部を決る一撃を受けたか、頸部を切り離されている死体ばかりだ。見事なお手並み、俺は蘇生できないので急所を正確に壊されればどうしようもない エルフさん達だが、身に着けていた装備品全てと心臓を俺が貰って、死体がモンスターによって無残に喰い散らかされないようにしっかりと埋葬しました。

【能力名】アビリティ【幸運】ラックのラーニング完了】

【能力名】アビリティ【不運】ドゥームのラーニング完了】

良いアビリティと悪いアビリティの両方がラーニングできてしまった。

取りあえず幸運ラックは発動させるとして、不運ドゥームはうっかり発動させないように気をつけねば。

そして最後に合掌、南無。

彼等の冥福を祈る。

……ん？ 生け捕った人間達をどうするかだって？

そりゃ、尋問した後で皆の経験値稼ぎに貢献してもらおうのさ。あと、拷問のやり方のレクチャーとかに使わせてもらいます。男ばかりだし、エルフみたいに容姿は良くないし。

うん、今夜は大変そうだ。

と想像していたら、その前にイベントが発生した。帰り道に、ゴ布林と遭遇したのだ。

知らない顔ではない。年上ゴ布林組でも、嘗ては上位のメンバーだった六ゴブである。ただし現在では赤髪ショート達を担いでいた下っ端ゴ布林達にさえ実力が追い抜かれた、訓練についてこれずに落ちこぼれとなっている奴らだ。

同年代ゴ布林の方が年上ゴ布林よりも強いとは以前にも言ったが、それに加えて下っ端扱いされていたゴ布林達は比較的若かったようで、訓練によってそこそこ伸びる可能性を見せ、彼らを追い抜いたって裏話も。どうでもいいけどな、今は。

こんな所で何してんだ、と言おうとして、年上ゴ布林達が何か焦っていたのでジーンと無言で見つめながら観察していると、観念したのか、その中でも一番腕の立つゴ布林が言った。

曰く、俺にはついて行けないんだと。

女を無理やり抱けなくなっただけでも辛いのに、日々の過酷な訓練にはもう耐えきれない。それでも何か機会があるかと思って我慢していたが、エルフの女を捕虜とした事でどうしても我慢できなくなった。

エルフの女達を抱く事は自分達の立場では不可能で、手を出せたとしても男止まり。男でも美男子なので悪い気分ではないが、やはり女エルフの極上の身体には一生届かないだろう現状はどうしようもなく、歯痒い。

生殺しにも程がある。極上の料理が目の前にあるのに、自分達以外の奴らだけがそれを喰える環境など、どうしろというのだ。

だから、出ていく。

つまり、群れから離反するのだそうだ。

そこまで言つて、彼らは震えながら押し黙った。

殺される、そう思ったのかもしれない。

俺としては、ああついに出了か、と言う想定された話でしかなかった。

いや、現段階の彼等だと、従わないのにこのまま留めておく必要は特にないので、俺としても出ていくのなら、そうか、と言う感じだつたりする。

これがゴブ吉くんとかだったら引きとめただろうが、こいつ等だしなあー。って事だ。

俺はルールを厳守させるが、それが気に入らないので出て行きませ、てな奴は今の所どうにかしようとは思っていない。そこまで大きくはなっていないのだから、出て行きたいのなら行けばいい。

ただ何かしらの違反をして出ていこうとした奴等は別だけだ。

それに今は数を増やす事よりも個々の能力を高める事を目的としている。これは無駄に足手まといの数を増やすよりも、ある程度実力のある状態で子を増やした方が今後を考えれば良いのではないか、と思つたからだ。

だから、現段階で既に挫折してしまつた奴を置いておくつもりもない。才能が無くとも努力しようとする者には、手を差し伸べるもりではあるが。

とは言え、情報が漏洩しないように多少の細工は施さねばなるまい。別に、殺そうとは思っていないぞ。あくまでも現段階では、と

後ろに追加されるけどな。殺しはしない。

小刻みに振るえ、緊張した表情でコチラを見上げる年上ゴブリン達の武装は、俺が統一して配給したモノで、ランクで言えば最低から一段階上とされる【通常】^{イマル}級ばかりだ。

【通常】^{イマル}級の武具防具と、幾つかの【希少】^{レア}級の品が放り込まれている武器庫の品に手は出さず、配給された武装だけを手に黙って出て行こうとしたらしい。

手を出せば殺されると思ったからに違いない。

正しい判断だ。

話を戻すが、ゴブリンの武装としてはそこそ良い物ではあるのだが、最大の武器であった数が大幅に減り、実力が飛び抜けて高くない彼らが今後生きていくには、心もとない武装であるのは確かだ。

俺としても、まあ、餞別くらいは贈って見送るのが情けだろうと考える。と言う事で、アイテムボックスから六本のナイフを取り出した。

これは先ほど亡くなられた護衛エルフさん達の遺品の一つだ。刀身は青い銀 鑑定した結果、祝青銀^{ミスラル}と呼ばれる魔法金属製らしいで作られたそのナイフは、ただのゴブリンが所持するにはあまりにも破格なシロモノである。

ナイフは特別な能力こそ宿してはいないが、その切れ味は現在装備している鋼鉄製のショートソードとは比較にならない。ミスラルの刃は鋼鉄製のショートソードを刃毀れる事無く容易く切断できる、と言えば分り易いだろうか。

エルフだけが製造する技術を持つというミスラル製のナイフは、冒険者でも早々得られない希少^{レア}物だ。

ナイフの切れ味を見せる様に、俺は自分の指先を切って数滴ほど血を流してから、鞘に納めてゴブリン達に渡す。傷は【高速治癒】

で既に跡形も無くなっていた。

呆けた表情で立ち尽くす年上ゴブリン達。それに苦笑しつつ、俺とゴブ吉くんはその存在を二度と振り返る事無く、帰還するのであった。

彼らとは、縁があつたら出逢うかもしれないな。

まあ、その前に高確率でミスラルのナイフ目当てで冒険者達に殺されるかもしれないが。身の丈にあわない財宝は、破滅を呼び込むと相場が決まっている。

彼等の今後の頑張りを祈ろう。

最後に、今回の重要ポイントは血を流した所だ、とだけ言っておく。

“五十三日目”

捕まえた十二人の人間達から聞きだした情報によると、今から二十日以内に本格的な進撃があるっぽい。とは言え、ハインドベアーやトリプルホーンホースといった強力なモンスターが生息する森の中なので、特定のルートでしか多人数は動員できないようである。

無論、そのルートも聞きだし済みだ。

普通こんな重要な情報は彼らもプロなのだから洩らさないと思いかもしれないが、何、四肢を削いでは止血し、肉と骨を削いでは治し、腹を切り開いては治し、仲間を目の前で無残に喰ってー、などを繰り返してりや誰だつて聞く事全てを話してくれるモノである。

外道と言われるだろうが、間違いなく言われるだろうが、こんな事は歴史を紐解けば幾らでもあるので気にはならない。そもそも、俺が持っている手法は先人達が培ってきたモノが大半なので悪しからず。

あと、今の俺大鬼^{オーガ}だし。人間じゃないんだからこの程度問題無し。と言つ事で。

聞きたい事やその他を全て聞きだした後は、その肉を美味しく頂きました。あとマジックアイテムなどの武装と、それなりに多い経験値も頂きました。

- 【能力名】アビリティ【職業・秘密部隊】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・魔獣飼育】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・首狩り処刑人】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・隠者】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【状態看破】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【寄付】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【解錠】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【畏解除】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【畏感知】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【敵性感知】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【暗殺補正】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【暗器熟達】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【対人戦能力上昇】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【首狩り】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【気刃斬り】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【背撃】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【針通し】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【投擲】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【激痛耐性】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【魅了耐性】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【暗殺耐性】のラーニング完了

あとアビリティも。

うん、【三連突き】だけだった物理直接攻撃系アビリティも【首狩り】と【気刃斬り】などが加わった事で増えたのはありがたい。

あと【解錠】とか【畏解除】とか、有用そうなアビリティを多数

確保できたので満足です。

そして一日グッスリと薬で眠らされていたエルフの娘さんは、昼過ぎ辺りになってようやく目が覚めた。

ちょうど綺麗な寝顔を覗き込んでいた所だったので目が覚めた瞬間跳ねあがる程驚かれ、『私の護衛達は何処にやった！』『私をどうするつもりですかッ』『まさか、私の貞操を……ッ』とか色々騒がれたが、薬草などから作成したお茶モドキ 俺と錬金術師さんとの合作だ を飲ませ、一先ず落ちつかせた。

これ、素材に鎮静作用があるので効果覲面である。そうした後でようやく、淡々と成り行きを語って聞かせました。

護衛は全員死亡って事も、装備品と心臓は俺が駄賃として貰う代わりに丁重に埋葬してやったって事も、俺 ゴブ吉くんはあの時居なかったので除外した は敵が待ち構える準備段階からその様子を見ていたって事も、襲った人間は全てを殺してココで喰ったって事も、全部である。

一切の隠し事はしませんでした。

あ、ちなみに捕虜なエルフ達については言っていない。だって今は全然関係ない事だしな。今回の事と関係があったら言っていたかもしれないが、無いのだから言う必要性はない。

さて、娘さんの反応であるが、当然と言えば当然だが、激怒された。

なかなか様になったパンチが俺の胸筋を幾度となく叩く、が正直大した事はない。子供に小突かれているような感じである。ポカポカパンチ、とでも言うのか？ イメージとしてはアレに近いだろう。娘さんがそんな行動を採るのは、相応な立場ってヤツがあるのだからどうかとも思うのだが、感情的には理解できない事も無いのでしばらくは自由に叩かせ、その後コチラはデコピン 俺が殴った

ら洒落にならん。デコピンでも手加減して威力を抑えた　を一発返す。

大きく頭部が後退する程度だったので娘さんは死にはしなかったが、額が非常に痛いらしく、両手で押さえて涙目で恨めしそうに睨んでくるが、それは知らん。

お前達エルフと人間が始めた争いは俺たちに関係ないのに助けてやったんだから文句言うなあーなどとテキトーな事を言い放つ。後ついでに内通者いるっばいぞと言ってみる。

そしたら黙ってくれました。しばらくして色々な想いが噴き出したのか本気で泣きだしたので、一応慰めたりしましたが。いや、美人の本気な涙とか反則です。

その後、娘さんをエルフの里に送り届けるってな流れになったのだが、会話が予想以上に続いてしまい、時間も時間だったのでこの日も娘さんは泊る事に。まあ、一泊は意識無かったけどな。今夜も俺の糸製ハンモックでお休みです。さて、明日はエルフの里である。一体どうなることやら。

あと、ゴブ爺よ。娘さんを捕まえんのか？　と期待した瞳で見てるんじゃない、煩わしい。

別に敵じゃないんだから、俺としては偽善を働かす存在なのであって二時間ほど話を……。

あ、捕まえたエルフはさらに男二名に女二名が自分から求めるようになりました。ただ、今回はその気はなかったが、最初はトップが手を出してからってな暗黙のルールができていたようなので、流れに身を任せました。

ゴブリン達が列を成すシュールな光景が見られるのは、そう遠くないだろう。

一応、俺が決めたルールは守っているので何も言うつもりはない

けどなー。

“五十四日目”

普段通り目を覚まそうとして、吐息がかかる程傍で俺を見下ろす気配を感じた。誰なのかを見極めるため、しばらく狸寝入りを決め込む。

【気配察知】で調べたところによると、どうやら娘さんである模様。とりあえず、何をしているんだと言いたい。

あとな、ゴブ美ちゃんに赤髪ショートに鍛冶師さんに姉妹さんに錬金術師さん達が遠巻きにコツチを窺っているのも、どういう事だろうか。

流石に何時までも狸寝入りはできないので、と言うかゴブ美ちゃん達の視線にある種の感情が混じってネットリと粘つき、背筋が寒くなってきたのでバツと瞬間的に瞼を押し広げる。

そしたら娘さんはかなり慌てました。その動きが中々に滑稽で、思わず笑った。娘さんに殴られた。

何故だ。

その後朝食を終え、ゴブ吉くんと共に 俺が訓練に混じらなくなったのと同じ理由で、オーガなゴブ吉くんはホブ・ゴブリンでも容易く殺せるので訓練にあまり参加しなくなった。現在の訓練は、部隊次席のホブ・ゴブリンが担当している 娘さんをエルフの里に送り届けるべく、洞窟を出立した。

その後はコガネグモなどを適当に狩りつつ、約三時間程歩き、ようやく到着。

そしていきなり囲まれました。視界に見える数はざっと二十五以上。【気配察知】によると、正確には四十八名だ。

全員どうもミスラル製の鏃を持つ弓矢で俺とゴブ吉くんの急所を狙っているようではあるが、まあ、大した問題では無い。

アビリティの重複使用で十分殺し尽くせる程度であるし、そもそも俺とゴブ吉くんの肉体と装備はミスラルの鏃を持つ矢を近距離で受けてもある程度までなら耐えられる。オーガの生命力を舐めないでもらいたい。

剥き出しの頭部に直撃を受けるのは多少危ないが、至近距離で放たれても避ける自信がある。

しかしこんな所で争いをするのは面倒事ではないし、今回は娘さんが居るのだ。

反射的に周囲のエルフを斬殺しかけたゴブ吉くん　斧と盾などは腕輪型のマジックアイテムに収納しているので、持ち運ばなくても即座に引き出せるのだ。ちなみに十二種類を最大二十個まで収納可と優れモノ　を手だけで諫めるのと、娘さんが周囲のエルフを諫めるのはほぼ同時だった。

その後護衛と言う名の監視役達によって周囲を囲まれながら、エルフの里の中を俺達は進んでいった。

エルフの里は、なんていうか、巨大な樹と共に生活しているのだなあ。と分かる構造をしている。

近場では早々見掛けない巨大な一本の樹の周囲に、階段などの足場や居住区となる場所を造り、さらには吊り橋をかける事で他の樹にも行き来を可能としているのである。

生活空間が基本的に地面では無く、樹の上なのだ。

一応、地面には馬小屋らしき場所などもあるので全てが全て、樹の上で暮らしているのではないらしい。

物珍しそうというか見下した感があるというか、あまり居心地のよくない視線に晒されつつも階段を上ったり橋の上を歩く事しばし、ようやく目的地に到着した。

そこは周囲とは大きさからして違う豪邸だった。どうも娘さんの

家がココらしい。

促されるままに豪邸に入り、そして娘さんの父親と対面。

口ひげがご立派な、引き締まった肉体を持つダンディーなおじ様エルフとでも言えばいいのだろうか。同じ男として嫉妬してしまいたいそう。

勧められるままに席に座ろうとしたが嫌な音で軋んだので慎んで辞退し、俺達は床に胡坐だ。出されたお茶はお代わりを繰り返すほど飲み、そして商談に移る。

内容を分かり易く纏めれば、娘さんを助けたんだから相応の報酬をくれ、と言う事だ。

コチラとしても助けたのは慈善事業じゃないのだが、何分こんな事は初めてなので娘さんの正確な価値が良く分からない。なので、そちらが娘さんの命の金額を決めてその額だけの報酬をくれ、と言いました。別にはした金でもいいんだよ？それがアンタが決めたアンタの娘さんの金額なんだから。と言外に言ってみる。

嫌われるかもしれないが、これくらいで父親エルフが冷静な判断が下せるのかどうか、どういった性格なのかどうか、等を見極めるのならばまだ安いモノだ。

そんな軽い気持ちだったのは間違いなく。

結果を言うと、予想外の事だが、【遺物】^{エンシエント}級の【神迷遺産】^{アイティファクト}が一つ手に入った。

弓の形状をしたマジックアイテムで、鑑定した所によると【必中^{フェ}の名弓】と名称が記載されていた。弓矢を必要とはせず、弦を引き絞ると不思議パワーで矢が半物質化するので矢は尽きる事が無いそう。

それに放たれる矢は名称の通りに【必中】 盾などで防がれな

い限りは狙ったポイントに“必ず当たる”らしい。他にも能力はあるが、面倒なので説明は置いといて。

この弓、娘さんの反応からしてどうもココの家宝の一つであるらしいのだが、愛娘とは引き替えにはできないそうだ。親馬鹿である。おいおい、と思ったが何も言わない。

コチラとしては嬉しいので、生温かい視線を向けたただけだ。

でも流石に家宝を貰ってしまったのでハイさよなら、ってのはちよつと気が引けるので、俺が持っている情報を提示した。

父親エルフが個人的には嫌いでない性格だったって事もある。

あーそついや人間達はどこそこのルートでうんぬん、あと何日以内であれやこれや。そついやこんなトラップの組み合わせは効果的で、こんな戦略もあるんじゃない？ 的な事を少しだけ漏らしてみたら、報酬を出すから先を続けてくれと言われた。

提示された報酬はミスラル製のチェインシャツ三十着、ミスラル製のショートソードが三十本、ミスラルの鑄塊キャストが二十と、生活に便利なマジックアイテム数点だ。

いやいや、情報の重要性を知っている人物で助かった。

俺が知っている内容やトラップ諸々の情報を父親エルフが紙に書き写すのをボンヤリと見ながら、アイテムボックスの中に入れていた水霊石と土精石と風精石から鍛冶師さんが製造したナイフを各十本、取り出して机の上に置く。

あと、精霊の扱いに長けたエルフに適した能力を持つ【固有コニーク】級のスコップ型のマジックアイテムをついでに三つ程。

多少は恩も売っておこうかな、てな思惑が無い訳ではないが、例の精鋭エルフ達が抜けた穴を多少は埋め合わせようかなと思っただ。

商談は無事成立し、父親エルフと友好的な笑みを交わしながらガツチリと握手した。

ただ、件の精鋭部隊の行方を知らないか？ と聞かれた時だけは、笑いながら知らんと言っしか無かったけどな。

そんな帰り道、父親エルフから『コレはエルフが造った秘薬と名酒です。良かったら、どうぞ』とか、お土産まで貰いました。ちなみに酒は樽三つ分だ。

うん、これも幸運ラックの御蔭かね？

酒は大変楽しみです。

父親エルフに、アンタなら格安で助太刀する、とだけ言ってから帰還する。

夜。折角の酒なので、全員で飲む事に。

エルフの酒ウマーーーーー！！と思わず叫んだ。

うん、また奢ってもらおう。

“五十五日目”

昨日離反したゴブリン達の事を皆に告げ、他にも出ていきたい奴等が居たら何時でも出て行ってもいいから報告するように、その時には餞別をやるから、あと俺の方針は〳〳等を含めて色々教えておいたが、結局誰も居なかった。

まあ、それならそれでいいか、って事で今日は抜けたゴブリン達によって変化した順列の微調整を手早く終わらせ、ハンティングに出かける。

それから帰ってくると以前から考えていたとある品の製作作業に費やした。

“五十六日目”

朝、昨日からブツ続けて製作していた通信機（自作）がようやく完成した。

何の事か分からないと思うので、簡単に製作作業を纏めると以下のようになる。

父親エルフから情報の報酬として貰ったミスラルのインゴットを銀腕の能力の一つである【自己進化】セルフエボリューションを使って取り込む。

取り込んだ質量分を指先から絞り出してカフス作成
指先から血を数滴流す。

それを宝石に見立てて装飾とし、青銀のカフスに嵌めこむ。

通信機完成。

要するに、【自己分体生成】の思考共有を活用した通信手段である。

赤髪ショート達から聞いた所によると、この世界にはまだ通信機が一般的に普及していないようなので、迅速な情報共有ができるこの手法は驚くべき効果を発揮してくれるに違いないと期待している。しかしそれにしても、エンチャントするのにも思ったよりも手間取ってしまった。

素材が素材だけに壊れる事こそなかったが、流石に三つの属性を付加しようとした時の成功確率の低さが面倒だった。

色々と苦労しながら完成させたカフスを、全員に支給する。

カフスは肉と融合してしまうように細工したので一度装着すると俺でなくては肉を切らない限り取り外せない、でも着けてる間は【リジエネ持続再生】と【レッサ・ストレングス下級筋力増大】と【レッサ・テクスタリテイ下級俊敏力増大】などが発動するようになってるから気にするな、と説明しつつ。

個々の着け心地を聞きながら微調整を施し、終わった時には疲れたので寝た。

夕方になって目を覚まし、適当に狩りをして再び寝所に。

寝れずにいたら、ゴブ美ちゃん達がきたのでそのまま熱い夜を。

“五十七日目”

ペットが欲しい。折角【職業・魔獣飼モンスターテイマーい】があるのだから活用すべきだ。

そう思ったので、久しぶりに四ゴブで捕獲に出向く。

まず狙うのはブラックウルフの群れだ。狼なのだから、飼いならせば犬と同じように良きパートナーになってくれるだろう、多分。

それにブラックウルフはモンスターであるが故に見かけによらずパワーがあるので、上手く調教すれば騎獣とし、長距離の移動手段として活用できるだろうってのもある。

しかし現実はその簡単にはいかなかった。見つからないのだ、ブラックウルフが。

今日はトリプルホーンホース五頭にハインドベアー三頭を捕獲したので問題はないのだが。

しかしゴブ美ちゃんはともかくとして、ゴブ江ちゃんの活躍にはビックリだ。

俺とゴブ吉くんでは加減を間違えると殺してしまうので主に二ゴブが頑張ってくれたのだが、【必中フェイェルショットの名弓】をプレゼントしたゴブ美ちゃんの射撃が鱗と鱗の隙間を射抜くのはまだいい。

マジックアイテムの能力なのだから。まあ、その怒涛の速射には感服させられるがな。

しかしゴブ江ちゃんが愛用のピッケル　ベルベットの遺産であるマジックアイテムの一つで、ただ単純に【破壊困難】の能力があるだけの【希少レア】級の品　を一本片手に、トリプルホーンホースを一人であそこまで圧倒するとは思わなかった。

うん、きつと趣味で培われた採掘技術がココで発揮されたのだろう。上段からの一振りの速度と威力が尋常じゃなかったし。頭部に

直撃を受けたトリプルホーンホースの巨体が、その角を根元から押し折られ、頭部を起点に半回転して背中から地面に落ちるとは、流石に想像できなかった。

ゴブ吉くんやゴブ美ちゃんなどの影に隠れてはいるが、ゴブ江ちゃんは同年代ゴブリンの四席なのだなあ、と実感させられる。

この世界ではレベルなども重要だがただ一振りに凝縮される、足や腰など全身を使った技術の大切さが非常に良く理解できる一戦だったと言える。

ゴブ江ちゃんにボロクソにされたトリプルホーンホースは俺が【モンスターテイマー職業・魔獣飼】によって 使い魔 と呼ばれる存在に どうも脳の一部を書き換えるらしい。飼い主は最大で二名まで設定でき、主人とは念話で会話可能なようだ。なにこれ便利過ぎる すると、俺の次にゴブ江ちゃんに懐いたのでゴブ江ちゃん専用になった。

まだホブ・ゴブリンなゴブ美ちゃんとホ布里さんはゴブ江ちゃんと同じくトリプルホーンホースを、俺とゴブ吉くん、あとホブ星さんはハインドベアーをそれぞれ 使い魔 とした。

残り一頭のトリプルホーンホースは、ホブ・ゴブリンの中でも特に適正があったゴブ吉くんの部隊の副隊長に任せる事に。

ハインドベアーには偵察部隊の十二名が所持していたマジックアイテムな手綱と鞍が使えなかったが、トリプルホーンホースには使えたので支給しておく。

そして夕方、エルフは男が三名に女が二名、新たに陥落しました。そして以前と同じ行為を繰り返す。

うん、中々有意義な一日だった。

“五十八日目”

二日連続でブラックウルフを探しに行った。ただし今日は俺一人だ。

ゴブ吉くん達は昨日できたばかりの 使い魔 を乗りこなす訓練の最中なのだ。俺は前世で色々と経験していた事と、アビリテイ【騎乗】があるので大した時間もかけずに乗れるようになった。

意思疎通ができたのも大きい。

一応ハインドベアーに乗り易い様にと、手綱と鞍は糸と革で作っておいたのでゴブ吉くん達も乗り心地に慣れれば問題は解消されるだろう。

しかしそれにしても、灰色熊ハインドベアーに跨る武装した大鬼オーガつてのは、色んな意味で凄いい構成だな。これでハインドベアーにまで武装させたらどうなる事やら。

今日は【気配察知】の索敵範囲にブラックウルフの気配が引つ掛かり、結果、八頭のブラックウルフと一頭のブラックウルフリーダーの捕獲に成功した。

ブラックウルフの走る速度や踏破力や体力などは非常に優れているが、ハインドベアー程ではなかったのだ。まさかこの巨体で木々の間をすり抜けるように疾走できるとは、流石の俺も思っていなかった。

逃げられないと判断したのか逃げるのを止め、犬歯を剥き出しにと最初は反抗的なブラックウルフ達だったが、アビリテイを発動した状態で睨んでやると、まるで人懐っこい犬のように尻尾を振るようになったのには少々癒された。

その後、以前と同じようにブラックウルフ達の脳を弄って 使い魔 とし、ネグラに帰還する。

今回はホブ里さん率いる軽武装部隊 レッドシャルジュ に所属するゴ布林達に八頭のブラックウルフを与えてみる。

乗りこなすのはゴブ吉くん達と同様に苦戦していたが、今後の事を考えると頑張ってもらうよりあるまい。

俺は俺でハインドベアーのクマ次郎との仲を深めるべく色々。
ちなみにブラックウルフリーダーのクロ三郎は、俺の愛狼になっ
ていたりする。

二匹とも可愛いので癒された。

赤髪シヨートや錬金術師さん達に撫でられ気持ち良さそうにする
様子からは、以前の迫力は全く見受けられなかった。

そうだな、今後は鍛冶師さん達のボディーパーター役として 使い
魔を増やすのもいいだろう。

そして残るエルフの男二名に女二名が屈しました。最後まで抗っ
たのは例の護衛な二名だった。

今まで通り優しくやったとだけ。いや、ちょっと激しかったかも
しれぬ。

“五十九日目”

クマ次郎の上に赤髪シヨートと共に乗り、その横を歩くクロ三郎
という奇妙なパーティーで森の未踏破区画を散策中。

最近では戦闘技術も上達してきた赤髪シヨートだが、いかんせん
生物を殺していないので経験値が入っていない。つまりはレベルが
変化していないのだ。筋力などは日々の訓練で上がってはいるよう
だが、レベル上昇時に比べれば本当に些細なモノでしか無い。

ちなみに赤髪シヨートの今のレベルは“18”。ハインドベアー
狩りの時に“10”もレベルを上げたはいいモノの、ハッキリ言っ
て雑魚過ぎる。

このレベルの強化具合では普通のゴブリンの肉体能力にすら劣る
のだ。

そんな訳で、世界の不思議パワーによってハンティングに出かけ
ては日々レベルを上げてステータスを向上させていく周囲のゴブリ

ン達相手に、赤髪シヨートは技術の小細工云々ではどうしても勝てなくなってきた。

それを改善すべく、今回のハンティングが行われるのである。

赤髪シヨートの装備だが、大したモノは持たせていない。未熟な内に性能のよい武装を渡しても自分の実力を勘違いする可能性が大きいので、マジックアイテムの類は一切持たせていないのだ。

主武装は鋼鉄製のククリ刀ケルカナイフが一本、副武装として円形柄短剣を三本サイフエボン。そして身を守る為の甲殻補強したラウンドシールド、とゴブリン一般兵クラスに支給されている【通常ノーマル】級の武器。

防具は姉妹さん達がハインドベアーの毛皮と俺の糸で製作してくれた普段着の上に、胸当てフレストフレットと灰色のクロークを装着。前腕には鋼鉄ガントレットの籠手、脚部には鋼鉄の大腿甲キユイス、鋼鉄の膝当てホレイン、鋼鉄の脛当てクリープ、鋼鉄の鉄靴サボトンと見た目的には重量感タップリだが、俺がそれぞれ軽量化のエンチャントを施しているので、実際の重量的には大したことは無い。

それ故に赤髪シヨートの動きは軽快だ。

赤髪シヨートの最初の獲物はヨロイタヌキだった。

背面の甲殻の守りには少々手古摺っていたが、【職業・戦士】による戦闘補正か、もしくは訓練の成果か、またはその両方なのかはともかくとして、赤髪シヨートはヨロイタヌキを解体する事に成功。その肉はクロ三郎に喰わせました。

次の獲物はナイトバイパーが三匹だった。その眼光にやや怯みつつも、冷静に動きを見極めてラウンドシールドで攻撃を防ぎ、その首を刎ねる事に成功。

その肉はクマ次郎に喰わせました。

その次はコボルドが三体だった。俺が手早く二体を糸で捕獲し、

一対一で戦える状況を造り出す。残された一体は逃げ場無しと判断したのか、赤髪シヨートに狙いを定め、真正面から戦いを挑んだ。身体能力的にはモンスターであるコボルドの方が優勢だったが、日々ゴブリン達と訓練をして培った戦闘技術が身体能力の差を埋めた。

コボルドの斬撃を潜り抜け、時に防ぎと、赤髪シヨートは大した怪我を負う事も無く、最後には頸を切り落としてみせた。

しばらくの休憩の後、体力がある程度回復したのを確認してから捉えていた内の一体を解放。逃がすのではなく、赤髪シヨートと戦わせる為に。

今度は若干怪我しながらだったが、今度も赤髪シヨートはコボルドの身体を切り裂いた。

残る最後のコボルドだが、戦わせる前にコボルド族の集落の場所を聞きだしてみる。

結果、教えてくれました。

機会があれば行ってみるかと思いつつ、体力が多少は自然回復した赤髪シヨートが『次お願い』と言ってきたので解放する。

そして最後のコボルドは前の二匹よりも善戦したが、最後は赤髪シヨートの今日一番鋭く迸った一閃によって頸を斬られて死に絶える事に。

赤髪シヨートの怪我や疲労を全快させた後、クマ次郎とクロ三郎にコボルドの肉を一体分まるまる喰わせてやる。

残る最後に戦った一体のコボルド肉は俺がポリポリと喰おうとしたその時、赤髪シヨートもコボルドの肉を食べてみたいと言ってきたので、焼肉にして一緒に食べました。

しかしそれにしても、赤髪シヨートの適合力が半端じゃないなと再認識。モンスターの肉を喰う事に躊躇なくなってくるのかな。

まあ、“喰う”という行為で俺が言える事じゃないけど。金属だろつと生だろつと大抵は何でもいけるし。

うん。赤髪シヨートくらい胆力があるほうが、今後とも俺につ

いてくるのならあつた方が良いのでこれは良い事だ。

【能力名^{アビリティ}】【山岳踏破】のラーニング完了】

さて次の獲物は……と思っていると、赤髪ショートが俺の裾を引っ張った。

どした？　と思つて見下ろすと、蒼玉^{サファイヤ}のようだった双眸、それが今は鈍い赤色に変色していたのである。しかも円形ではなく四角く黒い瞳孔は、まるでモンスターのそれに似ていた。

しかしモンスターのそれとは別モノのようにも思えた。禍々しい、と言うよりは、何か奇妙な寒気を感じる瞳なのだ。

どうも、新しい【職業】を獲得したらしい。ゴボルドを喰つたからか、もしくはゴブリン達と訓練していたからか。

まあ、それは置いといて。話を聞いてみる。

赤髪ショートが得た【職業】は、【職業・魔喰^{ノワールソルダ}の戦士】と言うそうだ。

【職業・戦士】持ちがモンスターとの親和性を大きく高めた後、自分で殺したモンスターの肉を喰うという条件をクリアすると、一定の確率で得られる結構【希少^{レア}】な【職業】なのだとか。

これも例の如く俺が主な原因だろうな。後悔とか全くないので何とも思わないが。

新しい【職業】を得た赤髪ショートだが、その戦闘能力は飛躍的に高まる事となる。

【職業・魔喰^{ノワールソルダ}の戦士】は定期的にモンスターの肉や血液などと、とりあえずモンスターの一部を一定間隔で摂取しなければ身体が急速に衰えてやがては死んでしまうというトンでも制約^{リスク}があるそうなのだ、その戦闘能力向上率は目を見張るモノがあつた。

どう見ても普通のホブ・ゴブリンと同等かそれ以上の身体能力がある。以前とは比べ物にならない程、全体のステータスが上昇していたのだ。

今までの身体能力が普通のゴブリンと同等かそれ以下だった事を考えれば、飛躍的な進歩だろう。

凄く凄く言いながらアカシカの双角の攻撃を受け流し、横つ腹を蹴り上げて身体を浮かせ、筋肉に覆われて分厚い頸をククリ刀でズパンと斬り飛ばす赤髪シヨートは、どこか可愛かった。

角は回収し、肉は仲良く分け合って喰いました。

【能力名】アビリティ【双角乱舞】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【紅水晶の調】のラーニング完了】

その後も色々と狩りを行い。

夕暮れ時、赤髪シヨートとちょっと寄り道してから帰りました。

赤髪シヨートの新職業【職業・魔喰ノワールソルダの戦士】は、俺の一部を取り込んだ時が最も大きく能力が上昇する事が確認された。

この事から、より強いモンスターを取り込む程強くなりやすいのだろう。恐らく、とはつくが。

ちなみに何を取り込んだとかは内緒の方向で。

今日のハンティングで赤髪シヨートの現在のレベルは“34”と、飛躍的上昇を見せたのであった。

“六十日目”

【気配察知】に感あり。今は夜の二時だというのに、元氣過ぎるだろと言いたくなった。

最近ではかなり広域まで察知できる様になってきていたので、以

前のように常時発動させていると、今回のように寝ている時でも叩き起こされてしまうので、非常に煩わしい事になる。

そんな訳で【敵性感知】センス・エネミーに引つかかった奴だけを拾うようにしていたのだが、今回察知できた相手の数がやたらと多かった。夜だと言うにも関わらずだ。

一瞬人間が攻めてきたのか？とも思ったが、それはあり得ないと結論付ける。闇夜の森はモンスターの領域だ。人間達が攻めてくるには、あまりにも不利な環境だ。

ならば何か。それは即座に判明した。

脳内地図と気配察知の両アビリティによって構築される位置情報に表示された種族名が、コボルドだったからだ。あれ、ついに復讐しにきたのか？とも思ったが、それも違うかもしれない。

五十三の赤点で脳内地図に表示されているコボルド達、それを追走するように在る三十八の青点。そして最も遠い場所に周囲よりも若干大きな灰色の点の一つあるのだが、同一の種族は同じ色合いで表示されるので、つまりは三つの種族が居るといふ事になる。

青点と灰色の点は何なのかは今の所不明だが、確実に言える事は青点に接触した赤点　コボルド達の数がどんどん減っていくという事だ。

どうも、コボルド達は何かに襲われているらしい。

この程度ならよくあることだと無視できる。

しかし問題なのは、コボルド達は数を減らしながらも真っ直ぐこの洞窟に向かっていると言ふ事だ。

厄介事が飛び込んでくるとか勘弁してもらいたいのだが、全く止まる気配が無いので全員を叩き起こし、迎撃態勢を整えて敵を待ち受ける事に。

コボルドは何時でも殺せるので、現状の敵は青点と灰色の点で表示された存在だと認定。

しばらくして、ここに来るまでに数が三十六と大幅に減ってしまったコボルド達が必死の形相で飛び込んできた。コボルドは今まで喰ってきたオスだけでなく、メスや子供、老人まで居るようだ。

武装したオスのコボルド達は最後尾で青点 スケルトン 剣と盾と鎧で武装した白骨、と表現するのが適正なモンスター “スケルトン 骸骨兵士” 達の攻撃を必死に喰い止めていた。

……。

しばらくの間、言葉を失った。

あれは、リターナが居たからダンジョン内では一体も見かけず、実物見たのはこれが初めてなんだけど、どう見たって骸骨兵士スケルトンなこいつ等はベルベットのダンジョンを守護する魔法生物ではなかったのか？

それが何故こんな所にあるのか。……あ、コボルドが一体斬られた。どうやら考える時間はあまりにも少ないらしい。

と言う事で命令をカフス型通信機を介して下し、クロスボウの矢が先制攻撃としてスケルトン集団に撃ち込まれる。多少の足止めにはなったが、大したダメージは与える事はできなかった。

余分なモノが無いスケルトンはただでさえ当て難いというものもあるが、例え当たったとしてもその骨を砕く事ができなかったのだ。クロスボウの矢が直撃しても弾かれるとは、やけに頑丈である。

恐らく、何らかのアビリティが働いているのだろう。

クロスボウでは効果が少ないと判断し、遠距離攻撃部隊 ティラール の攻撃を止めさせて後方支援部隊 パトリ と共に逃げてきたコボルドの牢屋までの誘導を任せ、ゴブ治くんを中心にコボルド

達の簡単な治療を施させる。

ココに居られたら邪魔だからだ。あとは見張りつてな意味もある。遠距離攻撃では非効率だと分かったので、今度は待機させていた重武装部隊 ラーヴェロジオン と軽武装部隊 レッドシャルジユを突っ込ませる。ブラックウルフ達も追加だ。

しかし剣では骨を断ち難く、最初の方は苦戦した。

しかしホブ里さんが機転を利かせて鞘で骨を砕いた事によって全ては変化した。スケルトンは斬撃系の攻撃には耐性があるが、殴打系の攻撃には脆い事が判明したのは大きい。

即座にそれを伝達させる。するとこれまでの苦戦が嘘のように、スケルトンを倒すまでの間隔が短くなった。

最も、弱点が分からなくても問題はなかったが。

巨大戦斧とタワーシールドを持って突っ込むゴブ吉くんの姿はまるで移動城壁の如く。ズガガガと轟音を響かせ、その巨軀でもってスケルトンを挽き潰しながら一掃する様は、ある意味で清々しい光景だ。

相変わらずピッケル装備なゴブ江ちゃんだが、最早必殺と言っても過言ではないだろう上段からの振り下ろしはただ一撃で頭蓋骨を粉碎し、その勢いを止めることなく仙骨まで砕いてみせる。凄まじい一撃だ。スケルトン達はただ掘削されるのみ。

ゴブ美ちゃんの頭蓋骨に【必中】する矢はやはり効果が今一つのようにではあるが、それは当たる矢の数と連射性を上げ、さらに矢の大きさを変化させたりなどで威力を高めた事で解消された。怒涛の連射、防ぐ術はスケルトンには無かった。

ホブ星さんが駆使する魔術はスケルトンを轟々と燃え散らかす。流石に味方がいるので広域破壊系の魔術は扱えないが、ランクアップした事により魔術の効果が底上げされた状態なのでそんなハンデなどどうという事は無い。

俺は言わずもがなだ。

俺達にはコボルドと違って、対抗手段は幾らでもあるのだ。この程度のスケルトン相手に、負けるはずなど無い。

あと 使い魔 なハインドベアーやトリプルホーンホースの突進などもあるので、戦力としてはあり過ぎて困るくらいだ。

これは、俺の出番はないかもしれんな。と思ったのだが、そうはいかないようである。

スケルトンの数が減った気がしないのだ。

洞窟内に居るスケルトンはガラガラとその形を崩され、ただの骨の残骸となって白い山を形成するのだが、出入り口から後から後から湧いてくるので尽きる事が無い。

その原因を考え、俺はリターナに教えてもらった事を思い出した。

スケルトン 骸骨兵士の上位版として製造された^{グレイター}スケルトンには、^{スケルトン}骸骨兵士を生み出す能力があるのだと。

それも間に沈殿する^{マナ}自然魔力を吸収する事で、ほぼ無限に近い^{ヘルベット}数を生み出せるらしい。普通はそんな事できないらしいが、流石は主様だ、と自慢げに言っていたっけか。

ああだからか、と納得しつつ、早速潰しに行こうかとも思いはした。

しかし、^{スケルトン}骸骨兵士を倒すと経験値が入る事が判明したのでそれは寸での所で思いとどまった。

これは、レベル上げに丁度いいのではないかと。

そんな訳で、深夜に唐突ながら開催された経験値稼ぎ祭は始まりを告げたのだった。

骸骨兵士スケルトンを生み出している上級骸骨兵士グレートスケルトンだろう灰色の点は今も外で動いていないので、不安要素は今の所少ない。
誰かスケルトンに殺されたりしないだろうか？ と最初は思っていたが、しばらくすると皆もその動きに慣れてきたようなので怪我を負う事は殆ど無くなった。

ただ疲れが溜まってしまつてもしもの事が起こりうるので、それぞれ交代しながら排除に当たらせる。

遠距離攻撃部隊や後方支援部隊も鈍器で殴れば比較的簡単に壊せるので、バディーを組ませて一体を確実に屠らせていく事に。

俺はそれを観戦しながら山積みな白骨をボリボリと。途中から戦つて休憩しにきた赤髪ショートもボリボリと。

騒動で起きてきた鍛冶師さんや姉妹さんや錬金術師さん達には、白骨コレが何かの材料にならないかな？ と相談してみたり。

材料になる、というかココまで高品質なモノは結構なレアモノだそうで、一定量は別の場所に移させて保管した。売る所で売れば、結構な金になるそうだ。これは今後の資金源になってくれるかと期待している。

流石【職業・行人ペドラー】持ち。商売については頼りになるな。

- 【能力名アビリティ】【斬撃耐性】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【刺突耐性】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【陽光脆弱】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【殴打脆弱】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【クリティカルヒット無効】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【不眠不休】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【骨結合】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【魔力接合】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【装具具現化】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【魔瘴の生命】のラーニング完了】
- 【能力名アビリティ】【魔力吸収】のラーニング完了】

【能力名】状態異常無効化【のラーニング完了】
【能力名】冷気攻撃無効化【のラーニング完了】
【能力名】雷電攻撃無効化【のラーニング完了】
【能力名】酸攻撃耐性【のラーニング完了】
【能力名】光ダメージ脆弱【のラーニング完了】
【能力名】神聖ダメージ脆弱【のラーニング完了】
【能力名】炎ダメージ脆弱【のラーニング完了】
【能力名】酸素不要【のラーニング完了】

流石に数が数だけに、多くのアビリティを確保できた。 unnecessary なモノも多々あるが、発動しなければどうという事は無いので問題無し。

そして経験値稼ぎが始まって大体四時間ほどだろうか。そろそろ夜が明ける時間が近づいてきたし、皆結構な量の経験値を得た事で大幅にレベルアップしたので、この祭りもそろそろお開きにするべきだろう。

と言うか、寝たい。

そんな訳で俺はこの祭りを終わらせるべく、単騎で出入り口から終わりなく侵入してくる骸骨兵士達を銀腕や朱槍で薙ぎ払い、洞窟の外に出た。

それと同時に脳天に向けて振り下ろされた漆黒の大剣。予め予知していた俺は朱槍でその一撃を横に流し、槍のように指を伸ばした銀腕を眼前に突き出す。

漆黒の大剣の主たる、骸骨兵士を二周りほど大きくしてその武装を数段豪奢にしたような骸骨兵士 上級骸骨兵士の胸部を銀腕が貫いた事で、この祭りは終わりを迎えたのだった。

カタカタと恨めしげに微動する頭蓋を拾い、ガリツと喰って耳障りな音を黙らせる。その後はもちろん全身の骨も喰らいます。

流石上位種。壊して得られた経験値や、喰った時の美味さが骸骨^{スケ}兵士の比では無かった。

あと、骨がココまで美味しく感じるとは、流石に思っても居なかった。

何これ、高級骨？ 歯応えもいいな、これ。うん、美味しい。

【能力名^{アビリティ}】【下位アンデット生成】のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】【上位装具具現化】のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】【死者の波動^{ネガティブエナジー}】のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】【下位ダメージ軽減】のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】【下位魔法ダメージ軽減】のラーニング完了】

いやはや、最初はよくも厄介事を持つてきてくれたな、と思つていたコボルド達だが、今の俺にとっては幸運を運んでくる犬のように見えた。

とりあえず、牢屋に赴いて一人だけクレリックなゴブ治くんが必死に重傷のコボルドを治す様子を見ながら、その他のコボルド達全員の治療を俺がパパッと終わらせて、その後睡眠性の毒で全員を眠らせる。

寝ている隙に暴れられても困るしなー。

俺達は俺達で、祭りで疲れたのでグッスリと寝ました。

そして夕方。

毒で眠らしていたコボルド達を叩き起こし、その集団のリーダーだという短槍を装備した“足軽コボルド”とその側近数名に事情を聞いてみる。

その結果、こうなった流れとしては以下の通りだと判明。

彼等は俺たちと同じく洞窟（ただしほぼ天然のヤツ。拡張とかはしていなかった）で暮らしていたコボルド氏族の一つである。

そんな彼等は森と山での狩猟によつて暮らしていた訳だが、オークを殺し、鉄のピッケルを得た事から全ては変化した。

最近では食料を得るための狩猟にオスコボルド連中が出ている間、メスコボルド達が住処の拡張作業で穴を掘る事に。

それにより洞窟の快適化に成功。これ幸いと、さらに広げる。

するとベルベットのダンジョンに繋がるといふハプニング発生。当初はその空間が何なのか分からず、明日の朝にでもオスコボルド達が調査する事が決定されて一応簡単な埋め立て作業を行っていたのだが、夜、そこからスケルトンの大軍が！！

取る物も取らずに急いで逃走。

疲労とは無縁なスケルトンにコボルド達はやがて追いつかれ、しかも能力的に劣るので抵抗むなしく仲間が何体も殺される。女子供老人戦士関係なしに。

何処に逃げれば？ そうだ最近有名なオーガが居るあの洞窟に行けば何とかなるんじゃないか！？

でも殺されるんじゃない。

このままじゃどうせ死ぬ。なら賭けるしかないだろうとリーダーが叫ぶ。

そして現在に至る。

……なんぞこれ。

いや、うん。良いんだ、結果さえよければな。

話を聞き終わり、考えを纏めながら角を擦ったり摘んだりしていると、足軽コボルドやその他のスケルトンと戦っていた戦士階級のコボルド一同が整列し、土下座してきた。

どうも、コボルドの【存在進化^{ランクアップ}】した先が“足軽”とあったように、コボルドの性格は基本的に武士とか侍系であるらしい。今まで何頭も殺して喰ってきたが、初めて知った。

一応、俺達は同族を何体も喰ったんだぞと言って見たが、ござる口調で弱い者が強い者に喰われるのは必然、そして我らが“殿”に

ならば同族も殺され、喰われたのは本望だろう、などなど色々言われた。

そう、“殿”だ。

俺の事を、足軽コボルドを筆頭としてコボルド達は“殿”と呼ぶ。

命を助けられた これはもう命で返すしか道は無し、という思考回路であるらしい。

単純明快、しかしそれ故に一度主君と見定めた相手に裏切る事などありはしない、命令されれば喜んで自刃する、らしい。

これ等は自己申告だ。

まあ、そのまま全てを信じるのは流石にありえないが、あの真剣な瞳を見れば全てを否定する事もどうかと思う。あそこまで真剣な瞳は、そうそう見れるものではない。

と言う事で、保険を用意する事にした。

アイテムボックスからとあるマジックアイテムを取り出し、俺は喰った。全部で十個あったそれを、一欠片も残す事無く全て嚙下する。

【能力名【^{アビリティ}隷属化】のラーニング完了】

喰ったマジックアイテムは、ベルベットのダンジョンで殺した冒険者達が所持していた“隷属の首輪”だ。

効果は説明するまでも無いだろう。文字通りで、定番の品と言えるモノだから。

非常に便利なアビリティを得られるのが分かっていたのに何故今まで喰っていなかったのか。その理由は単純明快、以前一つ試しに喰ってみたんだが、酷く不味かったからだ。

舌触りからして気持ちが悪い。表面は何処かネバネバしているし中身はやけに硬く、噛めば噛むほど吐き気を催す。

しかも味は苦くて酸っぱくて辛い、という三重苦が何とも言えない絶妙な味わいを醸し出す、と言えはいいのだろうか。

ココまで不味いと思ったのは本当に久しぶりで、それ以後あれば便利だなとは思いつつも喰わずにいて、現在に至ったのだ。

流石に、必要に駆られれば我慢して喰うしかなかった。

そんな訳で得た【隷属化】。反逆防止となるこのアビリティだが、これを持っているだけでは効果を発揮しないので、それを解決する為に追加のカフス型通信機の製造に取り掛かる。

ん？ それでコボルド達をどうするかだっけ？ 取りあえず明日になったら待遇を決めるから、今は牢屋で寝てると押し込んでます。コボルド達は本当に従順に従ってくれたので、あまり無碍にはしたくないと思ってしまう。

しかし、うーむ、殺して喰うべきか、戦力として保持しておくのか、それが問題にて候。

六十一日目〜七十日目

“六十一日目”

今日は非常に色々な事が起こったので全てを語るのは面倒だ。なので無駄はできるだけ省き、順を追って語ろうと思う。

まず、ホブ・ゴブリンが八ゴブ増えた。しかもその内メイジ適正を持つのが二ゴブに、クレリックになったのは一ゴブもいた。

クレリックになったのは既にクレリックと成っていたゴブ治くんと親しかった個体で、恐らくはそれに引っ張られたのだろう。思惑通りクレリックが増えてニヤリと黒く微笑んでみる。

次はゴブ美ちゃんについて。

ゴブ美ちゃんは今日目が覚めると【タムヒール半吸血鬼・バリアント亜種】と呼ばれる種族になっていた。

その姿の変わりようは、ゴブリンからホブ・ゴブリンになった時の比では無い。というか、比べるまでもない。

百九十センチ以上はあるだろう身長、丁度掌からやや零れる大きさの胸に括れた腰と凹凸のハッキリとした魅力的な体型、エルフよりも儂く作り物めいたまるで月のような美貌、白銀に煌めく腰まで伸びた髪にきめ細かい肌、赤い瞳に黄金の瞳孔などが特徴的な姿だ。

しかも本人によると【氷原の神の加護】を獲得したらしく、何も無い場所から大したリスクも無く大量の氷を発生・操作できるようになっていた。【亜神】よりも一つ上の存在である【神】の加護は、ゴブ吉くんのように【亜神】二柱の加護持ちよりさらに珍しく強力だ、とは普段通りゴブ爺談。

それにその華奢な見た目からは想像し難い程ある膂力や俊敏性といった肉体系のステータスも、全て以前とは段違いだ。恐らく、素の状態では俺以上になったゴブ吉くんとい勝負だろう。

あと昼間でも【神の加護】持ちな【バリアント亜種】であるが故に、日光に

弱いという【吸血鬼】^{ヴァンパイア}系種族を含んだアンデッド族の特性は打ち消されているので弱点ではない。

これまで通り、昼間でも何の制約も無しに外に出る事ができた。

つまり無駄な情報を省いて要約するとだ、ゴブ美ちゃんはすっごい美人になりました。

それだけ理解できれば問題無しだろう。

ただ個人的に気になるのがその容姿で、俺は以前何処かで見たような、いやよく知っている人物を数歳ほど大人にしたような顔のようない感じがするのだが……。

それが誰だったのかは記憶に霧のようなモノがかかって思い浮かばないので一先ずこの話は置いとくとして、今日一日で変化した事柄をどんどん述べていこう。

今日は本当に多くの事があり過ぎて大変だ。

今度はゴブ江ちゃんについて。

ゴブ江ちゃんが成った種族は【半地雷鬼】^{ハーフ・アースロード}と呼ばれる【鬼人】^{ロイド}系種族の一つだ。ちなみに亜種では無く、ノーマルだ。

二百四十センチ以上と俺に迫る長身で、筋肉質で骨太なガツチリとした体躯、やや尖った黄色い短髪、側頭部から生えて斜め上に向かって湾曲しながら伸びる二十センチほどの双角、^{ガネット}石榴石のような双眸、やや黒みがある土色の頑丈そうだが女性特有の柔らかさのある肌、^{スイカ}西瓜のような大きさだが形の良い胸部、筋肉の形が見て分かる腹部、そして両肘に埋め込まれている直径五センチほどはある二つの黄色い宝珠　ホブ星さんの額にもあったのと同じようなモノで、【鬼人】^{ロイド}系種には必ず身体の何処かに埋まっている“鬼珠”^{オーブ}と呼ばれるモノだそう。鬼人系種の本当の能力はこの“鬼珠”によって発揮される、らしい　が特徴的な姿になっている。

種族の能力は主に地形操作関係のモノで固まっているのだが、そ

の中でも特に採掘に関する能力　岩盤の脆いポイントを見抜く【地質看破】などだけでなく、ザクザクと岩盤を掘削して多くの鉱石を採掘するためにだろう、肉体面を強化するモノも多くある　に特化しているようだ。

試しに壁を掘ってもらったが、素手だったと言っのにまるでドリルのように掘り進んだのには流石にちよつと引いた。ピッケル装備な時よりもサクサク掘るとか、流石にどうかと思う。

とは言え、ザクザクと精霊石やその他の鉱石をこれまでにないほどに採掘できたので文句などあるはずもない。

あと若干だが雷光系魔術も操れるそう、採掘時には鉱石探知などに活用しているのだから。多様な金属を確保できたのもコレがあったからこそなのだろう。

採掘技能を伸ばしていたゴブ江ちゃんらしいというか、何と云うか。一度嵌った事に向かつて突き進むとやがては色々と凄い事が起きるモノなのだ、としておこう。

それに戦闘能力は馬鹿にできないとだけは言っておく。素手で岩を容易く碎けるゴブ江ちゃんの一撃を、柔い生物がもらえばどうなるかなど想像するのは容易い。

岩盤よりも柔い肉の身体など、ミートペーストのようになるに決まってる。

怖いもんだ。

次はホ布里さんについて。

ホ布里さんは以前からソード系武器の扱いが上手かったからか、【鬼人】ロード系種族の一つである【半血剣鬼】ハイフ・ブラッド・レイロードになった。こちらもゴブ江ちゃんと同じく亜種では無くノーマルだ。

二メートル程度の身長、筋肉の形がハッキリと分かるが細く女性特有の柔らかさを残した体、少々慎ましい胸、額の中心から伸びる十五センチ程のルビーのような一本角、カーネリアン紅玉髓のような瞳、やや赤みを帯びた肌、血の色のような赤いロングヘアは紐で縛られてポ

二メートルになっており、両手の甲にそれぞれ一つ埋まっている直径五センチ程度の紅色の“鬼珠”^{オーブ}が特徴的な姿になっている。

新しく加わった能力に魔術は含まれていないそうだが、以前と比べると肉体面が、つまりは直接戦闘能力が飛躍的に上昇していた。

どうも【血剣鬼】^{ブラッディロード}系種は接近戦に秀でた種族のようだ。

それに“血剣”と種族名にあるように、自他の血液を条件はあるが操れる異能を持っているそうなので、魔術が使えなくても相当強い。

直接戦闘能力だけで言えば俺とゴブ吉くんに次いで三番目か四番目、確実に言えば五番目以内には入るだろう。

身体面では種族的にゴブ吉くんやゴブ美ちゃんにやや負けてはいるようだが、接近戦では役に立つ【見切り】やら【先読み】やら【直感】やらがあるのでいい勝負になると予測している。

それにしても不思議な事なのだが、全員ホブ星さんと同じように、身体の一部に必ず俺と同じようだが微妙に違う黒い刺青が刻まれていた。

ゴブ美ちゃんは背中に、ゴブ江ちゃんとホブ里さんは腕に、ホブ・ゴ布林達は首だったり腕だったり足だったりと。

まあ、そこから何だか力が沸く感じがするそうなので問題はないそう。

コレについての説明は今後に期待という事で。

ランクアップしたお祝いとして、ホブ・ゴ布林にはそれぞれ二つのマジックアイテムを渡す。

ゴブ美ちゃんには蒼と白の魔鋼系に黒い魔骸布などで造られたドレストタイプのマジックアイテムと、種族的特徴として獲得した【魅了の魔眼】をむやみやたらに使用しない為に“魔眼封じの眼鏡”を渡し、最後に氷結晶で造られた刀身を持つ芸術品のようなクレイモア型の魔剣【月光の雫】をプレゼント。

ゴブ江ちゃんにはその大きな体躯に適した大きさと種族的能力に見合った能力を有する【大地母神の戦鎚ウオーベック】に、巨大な【大地母神の円匙シヨベル】をセットで渡し。大きさのあった服が無くなったそうなので灰色のツナギ型マジックアイテムを着替え分も含めて三つと、本人が汗を吹く何かが欲しいと言ったので、俺の糸を編んで更にエンチャントを施したタオルモドキを贈った。

ホブ里さんには対物理・対魔力を有する赤鉄製のフルプレートアーマーと赤いマント型のマジックアイテムをセットで渡し、それに加えて、鬼珠オーブを解放すれば実剣はあまり必要ないそうだが一応保険として事で吸血能力を持つ深紅のロングソード型の魔剣【鮮血皇女】をプレゼントした。

ちなみにホブ・ゴブリン以上の種族になった三名にはゴブ吉くとホブ星さんにも渡している腕輪型の収納能力があるマジックアイテムをデフォで支給しています。

しかし、うむ。

どこぞの貴族令嬢のようになったゴブ美ちゃんに、ツナギの前側のチャックを閉じることなく解放して、一応胸には灰色の胸帯サラシのようなモノだ　を巻いて隠しているが臍とか鎖骨とか剥き出しな状態で俺製のタオルを首に巻いているという現場の親方的な格好になっているゴブ江ちゃんに、全身赤に染まった鋼鉄の騎士なホブ里さんという構図は、色々と凄いな。

それにしても。

ココまでランクアップしてもまだゴブ朗とかゴブ吉くんとか、以前のままの名前を使い続けるのも違和感を感じてきた。

だってゴブリンじゃ既に無いし。

そんな訳でゴブ爺に相談してみたら、こうなった。

俺ことゴブ朗　オガ朗

ゴブ吉くん オガ吉くん
ゴブ美ちゃん ダム美ちゃん
ゴブ江ちゃん アス江ちゃん
ホブ星さん スペ星さん
ホブ里さん ブラ里さん
ゴブ治くん ホブ治くん
ゴブ浮ちゃん ホブ浮ちゃん
e t c .

ランクアップした個体はそれぞれ新しい名を授かりました。
うん、センス云々についてはゴブ爺に期待してなかったが、コレは酷い。

まあ、個人が分かればいいんだし、そもそも名前なんて奴は本人が決める事でもないんで諦めた。

あと、聞かれるだろうから先にここで言うておく。

簡単にだが身内の種族を例として、その種族の平均的な強さで順列を造ると、こうなる。

ダムビール ハイフ・スベルロード ハイフ・アイスロード ハイフ・ブラッディロー ギガ
半吸血鬼 半魔導鬼 ホブ・ゴ布林 半地雷鬼 ゴ布林 半血剣鬼 大鬼 エルフ > 足軽
コボルド > コボルド ホブ・ゴ布林 中鬼 ゴ布林 人間 > 小鬼。

これはあくまでも種族の平均から割り出したモノで、武装や技量を含んだものではない。

オーガは肉体面では半鬼人達よりも基本的に勝っているのだが、如何せん知能が普通は低いので戦法が単純になり、そのためやや劣るのだ。

個人別はまたの機会にという事で。

さて、今度は犬達コボルドやエルフ達について。

昨日配下に加わったコボルド達だが、喰わない事に決定した。

いや、今喰つてもアビリティ的にも肉体強化的にも全然美味しくないし、それに忠誠心も裏が無く本物の様だ。あとコボルド種がどんな風にランクアップするのか気になる、等々色々理由はあるが、自分の意思で自由に動かせる手駒が増えるのは今後を考えればプラスになるだろうってのが一番大きい。

エルフと人間の戦争には、恐らく、というはほぼ間違いなく父親エルフから依頼があるだろう。今はまだないが、そろそろ使者がくるに違いない。

そしてお願いをされると、俺はその依頼を承諾するつもりだ。

大規模な戦乱はそれだけで新しいアビリティの確保と自己強化に繋がるし、この世界の戦力や戦術や戦闘方法などについても多少は知る事ができる。

それに父親エルフとの繋がりを太くすると、あのエルフ酒が手に入りやすくなるってのは大きい。

あの酒は、本当に美味かったなあ。
ってなわけで、戦争に参加すると人間を嵌めるトラップやら陣地構築やら奇襲やらで使える手駒の数が多い方が戦略の幅を広げれる訳で。

そういった理由から殺さずに配下に加えた訳だが、繰り返すが言う事全てをそのまま信じる訳ではない。俺が全幅の信頼を寄せるのは群れの中でも少ないのだ、なのにはっと出のコボルドを信頼できるわけが無い。

だから保険として、以前配給したカフス型通信機と同じ三つの能力をエンチャントし、それに【隷属化】の能力を新しく付加させた改良版カフスをコボルド達全員に配給、着用させる。

これで、コボルド達は俺に逆らえなくなったので当面の問題は解

消された。例えその忠誠心が途切れたとしても、なんら問題なくコボルド達を使役できるようになった。

そして今回のついでとして、現在の性処理兼繁殖要員であるエルフ達にもカフスを配給していく事に。ただしコツチは更に【隠蔽】を付加した優れモノだ。

【隷属】で身も心も俺の配下に下ってもらい、【隠蔽】で他のエルフとの無用な衝突を避ける事が目的である。

しかしどうもエルフ達は耳に装飾を着けたり穴を開けたりするのは重大な禁忌^{タブー}。そんな事をする、氏族からその名を永遠に除名・領内退去等の重い罰を科せられるそう。その為この世界に出回るエルフ種の奴隷はその特徴的な長い耳を半分程で切られるそう。だという文化というか風習があるらしく、耳と一体化するカフスを装着するのは最後の抵抗とばかりに拒否する者が殆どだった。

そんなの関係なしに装着させてもよかったのだが、それでは『無理やりだったんだ、仕方なかったんだ』とか本心を隠して言い訳しそだったので、最後に残ったプライドはベリツと剥ぎ取る事に。

そんな訳で。

男はアス江ちゃんとの関係について以前から密かに相談してきていたオガ吉くん、本番前の練習がてらやってみーって事で担当壊れない様に手加減する様には流石に言い含めている。させた、地位が低過ぎて殆ど機会が無かったゴブリン達に褒美として任せる。男とは言え、エルフは美男子だからな。十分いける。何がとは言わないが。

女エルフは上位のホブ・ゴブリン達が担当して肉体に時間をかけて聞いてみると、最後には自分からお願ひしてきました。

生物は素直に生きるのが良いと思うんだ。

その後、今までは逃亡するのを防ぐためにそこそこ大きな牢に入っていたエルフ達全員を外　とは言い洞窟内なのは変わりないが　に出してやり、コボルド達と一緒に俺が担当として執り行う訓練に参加させた。

折角の精鋭エルフなのだ、ただ性処理兼繁殖要員としてだけ費やすのは非常に勿体ないと言えるだろう。それにエルフは種族的に孕み難いようなので、優秀な個体は産めても人間の女を相手にした時より数が少ないと思われる。

そんな訳で、カフスによって反乱される心配はなくなったのだから、今後は性処理兼繁殖要員としてよりも戦闘面で働いてもらった方が効率が良い。人間の女は敵を捕獲すればいいだろうし。

久しぶりに牢から出られたエルフ達は、解放感に満ちた表情を見せている者が多かった。目的の一つでもあった気分転換は、どうやら成功したようだ。

今回の訓練だが、素早く隊列を組ませたり一定時間ずっと走らせたりと、今までにもオガ吉くん達にやらせていた基本的なモノである。コボルド達は兎も角、エルフ達は精鋭が揃っているので基礎をすっ飛ばしてもよかったのだが、最初だったので基礎を行った。

知っているのと知らないのでは、当然知っておいた方が問題が少ないしな。

訓練は疲労で立てなくなるまで続けられました。

そして休憩の後、性格的にも身体的にもあまり戦闘に関して適正がないと判断したコボルド達を選び、後方支援部隊の仕事を覚えさせるために監督役なゴブリンを付けて散らばらせる。

残った戦闘要員なコボルド　子供コボルド含む　達とエルフ

達には実戦形式の組み手をやらせた。

ただし、相手は俺でもオガ吉くんでも無い。もちろん他のホブ・ゴブリンでもゴブリンでもないし、コボルドやエルフ同士でもない。この訓練は、とある実験も兼ねていたからだ。

エルフとコボルド達を相手取るのは、【下位アンデッド生成】によって生み出されたスケルトン達である。

スケルトンは俺がほぼ無制限に生成できるのでリスクは無いし、倒せば経験値稼ぎにもなる。その上使う度に俺は経験を積んでアビリティレベルを上げられるし、倒した後に残る骨は錬金術や鍛冶など色々な材料に転用できるってな具合に、一石三鳥だからだ。

昼間だが洞窟なのでやや薄暗い大広間にてアビリティを発動させ、一体のアンデッド種を生み出す。ズブズブと地面から出現するのは黒い影。

俺はそこから白骨体が出てくる様を幻視した。

しかし、この時に予想外な事が起きた。

俺としては普通に骸骨兵士スケルトンが生まれるとばかり思っていたのだが、しかし生成できたのは半曲刀タイプのサーベルと紅蓮に輝く逆三カイトシー刃フルプレートアーマーを携え、やや刺々しいデザインをした漆黒の全身鎧とマントを装備した二メートル程の背丈がある黒い骸骨だったのだ。

白骨ではなく、黒い骨だ。黒い骨の騎士ナイト様。

どう見たって、昨日のスケルトン達よりも上位種だ。グレータースケルトンと同程度かそれ以上の能力はあるだろう。

スケルトン系は個体の能力によって身に纏う“魂魄具” 【上位装具具現化】や【装具具現化】といったアビリティによって発現する武器の事で、装着者を倒したり武具を奪った瞬間には霧のように消失してしまうので本人以外には扱えない。の質が変化する。それも身体を包む範囲が増えれば増えるほど魂魄具の質が上がっ

ていくので、ほぼ全身を包んだ黒いスケルトンは、今まで見たスケルトン系で一番強いはずだ。

しばしの調査。

それによると、どうも【下位アンデッド生成】は自分よりも下のアンデッドなら生み出せるアビリティのようだ。アビリティの扱いは喰った時に大体分かるが、今回のように自分で思っていたのと微妙に違う時があるので、やはり実際に使うのが一番だと再確認。

そんな訳で、黒いスケルトンは“ブラックスケルトン・ナイト”と率直に命名。

予定通りにミスラル製のショートソードとラウンドシールド装備なエルフ達と戦わせてみたが、結果はブラックスケルトン・ナイトの勝利で終わった。

戦わせて初めて分かったのだがブラックスケルトン・ナイトは熟練の騎士程度の技量を持ち、サーベルが繰り出す怒涛の斬撃とカイトシールドの堅牢な防御は中々に手堅く、見事な動きだったという他ない。

それに疲労や斬撃などに対しての耐性アビリティを持つブラックスケルトン・ナイトは持久戦に適しているので、技量的にはそこまですごい差が無かったエルフでも、最終的には体力の差で負けてしまったのである。

うん、こいつは使えるな。

ただ、ブラックスケルトン・ナイトでは数がこなせなくて大した経験値 手加減させて倒させてみたが、それだと取得経験値が普通に倒した時よりも大幅に減っていた。何故だか分からないが、そうになっていたのだからそうなのだろう が入らないのをどうにかしなければ。

この日は夜になっても【下位アンデッド生成】についての実験を繰り返した。

“六十二日目”

【下位アンデッド生成】を用い、昨日は再び全体のレベル上げに勤しんでいた。

それで判明したのだが、生成できるモンスターは俺の意思で変える事は可能だという事だ。ブラックスケルトン・ナイトの派生であるアックスやらランサーやらアーチャーやらメイジやらを生成できたし、手を抜けば普通の白いスケルトン種も生成できた。

それに動く腐乱死体である“ゾンビ”や、弱々しい靈魂の塊である“ゴースト”など他のアンデッド種も生成可能である。

ゴーストを喰ってみようとも思ったのだが、非実体系モンスターだったので流石の俺でも喰えなかった。この世界では特定の条件を満たすとゴーストを喰えるようになるらしいので、持っている奴がいたらぜひその肉を喰わせてもらおうと心に決めて。

話を戻すが、経験値稼ぎには主にゾンビと普通のスケルトン達を生成し、それを倒させる事で済ませた。

他よりも強いブラックスケルトン系な個体はオガ吉くんやダム美ちゃん達の相手役を務めさせたり、それぞれコボルドやエルフ達の訓練の指導役として使ってみた。

カタカタと音をたてるだけで会話はできなかったが、身振り手振りで大体の意思疎通は可能だったからだ。

実力強化は、怖い位に順調である。

ただ、アンデッドの事で問題が全く無かった訳ではない。

アンデッド種に備わっている【陽光脆弱】などが面倒な枷になっているという事が判明したのだ。アンデッド種の一つであるダムピールなダム美ちゃんは【神の加護】持ちの【亜種】だったからこそ問題ないのであって、他はそうはいかなかった。

ブラックスケルトン・ナイトクラスのアンデッドだったら十分程

は陽光の下でも全身から煙を上げながらも何とか耐えられたのだが、その総合的な強さは本来のモノと比べるまでもなく激減していた。

コボルド達ですら何とか倒せるほどまで弱体化していたと言えるば想像し易いだろうか。

ブラックスケルトン・ナイトクラスのスケルトン種でもそうなのだから、ゾンビやゴーストなどより低位なアンデッド達では数十秒と持たずに浄化されてしまう。

ゾンビだと陽光で浄化されても腐乱死体だけがそこに残るので敵地で疫病を流行らせたり、穴を物量で埋めて足場にしたり、腐肉好きなホブ浮ちゃんの為にリサイクルできるのだが、何も残す事の無いゴーストとかだと太陽のある時には全く使えない。

他にも聖水やら聖光など特定の方法で比較的簡単に浄化されてしまふのはとても痛い。

昼間でも戦える戦力として考えていたので、やや計算が狂ってしまった。

どうすればそれを克服できるのか、と悩みつつ一旦その考えは放置して。今日もエルフとコボルド達の訓練をミツチリと。

エルフは元々精鋭揃いだったのでブラックスケルトン・ナイトやアックス達と一対一で戦わせていけば自然と技術が磨かれて強くなるので指導は楽だった。

そんな訳で、主にコボルド達の指導に熱が入る。

コボルド達は種族的にホブ・ゴブリン達と同等かそれ以上の身体能力があるが、なにぶん現在の構成は

鬼人種：メス3

オーガ：オス2

ダムピール：メス1

ホブ・ゴブリン：オス6、メス4

ホブ・ゴブリンメイジ：オス3、メス2

ホブ・ゴブリンクレリック：オス1、メス1

ゴブリン：オス14、メス16
年寄りゴブリン：オス4、メス4

エルフ：男：10、女：7

人間：女5

足軽コボルド：オス1

コボルド：オス18、メス10、子供4、老人3

総数119体

これにペットを含めて考えると

トリプルホーンホース：5

ハインドベアー：3

ブラックウルフリーダー：1

ブラックウルフ：8

なので総数136体、という大所帯になっている。

住処はこの多さでも元々巨大な採掘場だった事に加えて拡張工事が進んでいるので問題ないが、このままの強さでは食糧や武装面などで大きな差がある。

弱いままだと部隊内の立場も弱いままなのでパシリにされる事が殆どで、食事 食料は皆が狩った獲物を持ちかえらせたモノが主に使用される。果物や山菜なども大量にあるので、姉妹さんや料理担当のゴブリン達を作る料理は美味しく、栄養バランスも悪くない

の量が他よりも少なくなる。

いや、最低限は喰えるのだ。

だが、激しい運動の後は腹一杯食いたくなるのが生物な訳で、地位が低いままだと腹半分ほどで喰う事ができなくなる。コレが地味にキツイのだ。

それに一番大きいのは武装面だ。

弱肉強食な自然界にて、強力な武器を持つ事は生き残る可能性を上げる重要な要素だ。別に牙や爪でもいいのかもしれないが、やはり長さや硬度、切れ味等の問題で亜人種リーチ　つまりは人間型怪物はヒューマノイドモンスター武器を持った方が何かと楽になる。

しかし弱いままだと、他よりも粗悪な武器しか配給されない。そうなる可他よりも倒し易いと思われて狙われ易くなる可能性が高くなる。ただでさえ弱いというのだ。

このルールを変えればいいのではないか？　と思うかもしれないが、弱いまま優れた武具を渡しても宝の持ち腐れでしかないし、何より不相应の品を持つと破滅を呼びこむ事になる。

自分の実力は把握しておく。

その能力を養うために、今後もこのルールが変更される事はない。だから血反吐を吐くまで訓練して、死ぬ気で地力を上げるしかないのだ。

まあ、コボルドの中にはそろそろレベルが一〇〇になるモノもいるのでランクアップできさえすれば順列でそこそこの立場に食い込むだろう。

それに若くて成長期な子供達には何気に期待している。

種族的に素早さに秀でているので、それを伸ばす方針で訓練を課していく。

“六十三日目”

今日はクマ次郎に跨り、同じくそれぞれの 使い魔 に乗ったダム美ちゃんと赤髪シヨートとアス江ちゃん、そして後ろから歩いてついてくる足軽コボルドを含む戦闘要員なコボルド十七頭で、コボルド達が暮らしていたという洞窟にやってきている。

目的は洞窟の奥にあるらしいベルベッドのダンジョンに繋がった穴を塞ぐ事と、コボルド達の僅かだがある荷物や蓄え等を取りにだ。コボルドの洞窟は、四十分程歩いた所にあつた。

パパッと荷物を運び出した後、地形の扱いに関しては一番長けているアス江ちゃんに洞窟を完全に崩してもらつた。

これで今日の目的の一つは終わった。

その後、コボルド達に狩りをさせる。

ヨロイタヌキ等を殺して今後の食糧として持ち帰るつてもあるが、今回の狩りの標的の本命は、ブラックウルフである。

使い魔 の数を増やしたいつてもあるが、群れを成すブラックウルフ達に対してコチラも一つの集団として衝突する事で連係の経験を積みたい、つてのが大きい。

訓練も重要だが、やはり命を賭けた実戦を積んだ方が色々早い。一応基礎の基礎はこの二日間で教えているので、それを多少なりとも生かせるかどうかが重要だ。まあ、無茶ぶりだとは自覚しているが、カフスの補助もあるし、やらなきゃ何も始まらない。死なない程度に頑張ってもらおうか。

そう思って期待はあまりしていなかったのだが、コボルド達は頑張った。

俺が言うとおりに動き、十二頭のブラックウルフの群れを罾を敷いた区画に追い込んだのだ。

ブラックウルフを殺してはならないという条件を課したので皆無茶をして大なり小なりの怪我をしていたが、カフスに付加された持続再生ジエネがその程度の傷は容易く治癒するので大した問題では無い。

今回の事で思ったが、案外良い拾い物かもしれんな、コボルド達は。

捕まえたブラックウルフは脳を弄って速攻 使い魔 にした。

その後、再び発見した新しいブラックウルフの群れを同じように追い込む事に成功し、今日 使い魔 にできたのはブラックウルフ二十頭だ。ただ今回捕獲した二つの群れのトップがどちらも“リーダー”と呼べる程の能力を有してない、他と同じ程度の個体だったのは残念である。

とは言え十分な数が確保できたのだから、一先ずは良しとしておこう。

今日の功績に意気揚々と帰っていると、その帰り道にアイロンのような形をした巨大な岩鼻が特徴的な“スタンプポア（仮称）”を見つけた。

力試しに丁度いいッ！ とやる気を漲らせながらアス江ちゃんがトリプルボーンホース愛馬から降りて真正面から突撃。真正面からその巨大な岩鼻で敵対対象を押し潰して喰らうという習性を持つスタンプゴアも、当然逃げることなく突き進む。

そして右から左に振り抜かれた【大地母神の戦鎚^{ウオーベック}】はスタンプポアに触れると同時にその身を粉碎した。

岩と同じぐらい頑丈なスタンプポアの肉体は、アス江ちゃんの一撃に耐えきれずに前半分が吹き飛んでしまったのだ。

これでも加減したつもりだったそうだが、まあ、そうなるだろうな 岩と同じぐらい頑丈だという事は、岩を素手で碎けるアス江ちゃんにとっては非常に殺し易い相手だという訳で とは思っていたので、特に何も言わず返り血がこびり付いた顔を水球で洗ってあげる。

死体は貴重な食料になるのでアイテムボックスに収納し、洞窟に戻って鍋にして喰いました。

夜、自分の工房で色々と作業していたら鍛冶師さんが近づいてきて、鍛冶場に来てほしいとの事。

なんだなんだと思いついて行ってみると、そこにあつたのは真新しくなつたハルバードの姿が。

以前レッドベアとの死闘の際に用いたハルバードは酷使してしまつた結果使い物にならなくなつてしまつたのだが、それを鍛冶師さんに直す様に頼んだのを覚えているだろうか。

つまりは、修理が完了した訳である。

しかも所々に鍛冶師さんが手を加えているらしく、鍛冶師さんが自慢げに語ってくれた。

まずハルバードの特徴とも言える斧頭だが、水精石と錬鉄とミスラルを混ぜ合わせて造られた合金製になっている。水精石を混ぜているので、精霊石ナイフを振つた時と同じように振ると水が噴出される。

ただ振つただけでは大袈裟な水芸でしかないが、一定以上の速度で振ると水が水刃になるのは既に判明している事実だ。それを利用して、ただでさえ三メートルもあるハルバードの攻撃範囲を拡張できるとは素晴らしい。

切れ味もほぼ鈍器と言つてよかつたナイフの時より改善されているので、例え水が出なくても普通の刃物として扱えるようだ。

ついで穂先だが、穂先も斧頭と同じように精霊石と錬鉄とミスラルの合金製になっている。配合された精霊石は雷を放つ雷精石。高速で突きを放てば穂先から雷の槍が迸り、遠く離れた敵に雷速の攻撃を叩きこむ事ができるそうだ。

もしかしてと思ひながら【三連突き】を発動させると、不可視の穂先からも雷撃が放たれ、一度で三つの雷槍が的を消し飛ばし

た。

何と便利な事か。

斧頭の反対側にあるピックも同じく合金製になっていて、配合されたのは火精石だ。試しにピックをアイテムボックスから取り出した丸太に突き刺してみたが、突き刺した箇所から轟々と炎が噴き出すという素敵仕様である。

刃と逆の先端部分である石突きには三角錐状に鋭く研磨された土精石そのモノが嵌めこまれていて、それで敵を突く事も、俺が持つ地形操作系アビリティの補助具としても使いやすい様になっている。それになにより、配合されている精霊石が発揮する効果が普通よりも強力だった。以前俺がエンチャントしたナイフと同等かそれ以上はありそうで、何故だろうかと思っていると鍛冶師さんが教えてくれた。

なんと、新しい職業を得ていたそうだ。驚かそうと、ハルバードが完成するまで誰にも話さず秘密にしていたらしい。

これを知っているのは今の所俺だけらしく、ちょっと嬉しかった。職業名は【精霊鍛冶師】というもので、多様な精霊石を一定期間扱う、その扱いに長ける、など幾つか面倒な条件をクリアすると得られるレアジョブの一つだそう。

これがハルバードに使われた精霊石の能力上昇の要因らしい。

嬉しかったのでハグしました。最近では色々あって力加減も無意識の内にできるようになっている。

腕の中の鍛冶師さんが向けてくる笑顔はとても可愛かったです。

色々と燃えた。

“六十四日目”

今日もホブ・ゴブリンが三ゴブ増えた。今回はメイジやクレリック

クはいなかったのは少々残念ではある。

まあ、普通メイジは一つの群れに一ゴブか二ゴブ程度らしいので、現状が異常なのだが。

それぞれに何時も通り祝いの品を贈る。

今日は訓練の後、バディーを組ませてコボルド達を実戦兼食料調達に行かせた。スケルトンと戦うばかりでは経験値取得効率がいいとは言えマンネリ化するし、多種多様な種族と闘った方が応用力が養えるからだ。

俺はいつかはこの森を出て行くつもりなので、今後の事を見据えるのならば、やはり今の内に色々なモンスターと対峙して経験を積んだ方が死に難くなる。

という事で今日の俺は暇ができ、一人でハンティングに出かける為の準備をした。

この前喰ったスタンプボアの肉の美味さが忘れられないっていうのもあるが、新しいアビリティを得られそうな雰囲気があったし、そろそろ行っていない区画に生息するモンスターを喰いたくなってきたからだ。

スタンプボアは既に生息区域の調べはできているし、気配はこの前知ったので直ぐに見つけられるだろう。

さて出発……しようとして、オガ吉くんに止められた。

人気のない所で話したい、という事で洞窟の外に出てしばらく歩き、周囲に誰も居ないのを確認してから相談された。

それによるとどうも、ようやく、またはやっと、アス江ちゃんに告白する決心がついたそうだ。ランクアップして更に想いが強くなって、もうイクしかないと思ったそうだ。

しかし何と云えばいいのか分からない。だから、教えて欲しいと言われました。

そんなのはお安い御用、とは言わないまでも、既にオガ吉くんは俺の心友である。

俺の事のように相談に乗るのは、まあ、当然だろう。

今日はスタンプボア狩りして再び猪鍋にしようと思っていたのを断念し、昼から夕方になるまで作戦会議に費やしたのであった。

そしてオガ吉くんの告白作戦は、この夜決行される事に決定。
その結果は、明日になれば分かるだろう。

“六十五日目”

成功した。何が？ 当然オガ吉くんの告白が、である。

今日起きて訓練前の日課になっているオガ吉くんとのお組み手をする前に、やや赤面しながら報告してくれたのだ。

まあ、成功するとは思っていたので驚きはない。オガ吉くんは気が付いていなかったかもしれないが、アス江ちゃんは前々からオガ吉くんの事が好きだったからだ。

アス江ちゃんはダム美ちゃんに相談していて、その情報が俺に流れて来ていたのでこの情報に間違いはない。

だから振られるとかの心配はあまりしていなかった。昨日の作戦会議も、裏話をぶちまけてしまえばカフス型通信機を密かに使ったダム美ちゃんと密談し、二人の仲をおぜん立てするための時間稼ぎをする為でもあったからだ。

だから、この結果は当然と言えば当然だ。

ただ気になるのは、昨日の夜さっそく盛り上がり過ぎてアス江ちゃんが壊れなかったかどうか。

いや、以前オガ吉くんに事前練習でエルフ男を担当させてみたっ
てのは既に語ったが、オガ吉くんが初体験だった事と一メートル近い
体格の差もあって色々壊してしまっただけ前例 身長は二メートル

ル程とエルフ内で一番デカイ奴をあてがったのだが、今は練習がてらホブ治くんに治療させて寝かせている。があるので、心配なのだ。

アス江ちゃんは今現在、ベルベットのダンジョンの影響でココ等一帯に群生している精霊石と希少金属の採掘関連のトップなので、動けなかったりしたら作業効率が段違いなのだ。

ほら、今のアス江ちゃんって掘削機みたいな存在だし。

返答によつては色々と予定を調節しなければならぬか。

と思つていたが、報告を聞く限り大丈夫なようだ。

オガ吉くんが初めてでは無かつた事と、アス江ちゃんがタフだった事、それと昨日の作戦会議で教え込んでいた約束を守つて、どうにか加減できたのが要因だろう。

微笑ましい事である。

それにしても、今日の組み手はオガ吉くんの元気が良過ぎて良いのを何発か喰らつてしまった。

ガクガクと膝が笑っている。

元氣過ぎて鬱陶しいので、ブラックスケルトン系を幾体か宛がつて気分の高ぶりを発散させた方がいいかもしれん。

即実行に移した。

昼になって訓練が終わり、オガ吉くんと共にハインドベアーでも捕獲しに行こうとして、ダム美ちゃんとアス江ちゃんがついて行きたいと言つてきた。

アス江ちゃんに採掘作業は予定通りに進んでいるのか聞いたら、午前中に頑張つてノルマはクリアしているそうなので、久々に四人でハンティングに行った。

残念ながら目的のハインドベアーは見かけなかったが、スタンブ
ボアを五頭、一メートル大と巨大な体躯と毒々しい紫色の液体が滴
る鎌が特徴的な“ポイズンマンティス（仮称）”を六体、一メー
トルはあるだろう巨大な角と黒光りする鉄のような外骨格が特徴的な
“兜虫（仮称）”を四体、コガネグモを五体、オニグモを四体、灰
色の甲殻が特徴的な六十センチ大のバツタ“飛脚飛蝗”を三体、黄
色い体毛と異様に発達した尻尾が特徴的な“イエローモンキー（仮
称）”を十一体狩る事に成功した。

いや、流石に俺自身はまだきた事の無かったエリアなだけあって、
喰った事のないモンスターが多い。ただ残念ながらポイズンマンテ
イスや兜虫など甲殻虫系は俺以外が喰うには毒が心配なので、土産
としてはイマイチだ。

残念なことに。そう、残念な事に。

という訳でそれぞれの使えそうな部位は剥ぎ取ってアイテムボツ
クスに収納し、残りはポリポリと喰いました。俺だけ喰うのも気が
引けるので、他の三人はイエローモンキーを二体ずつ喰ってもらっ

- 【能力名【脱皮】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【鞘翅生成】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【致死の毒刃】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【無音暗殺】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【正面突破】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【不協和音】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【寄生】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【跳躍力強化】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【強靱なる生命】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【外骨格着装】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【錬鉄の外殻鎧】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【湧き上がる戦闘本能】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【寒冷脆弱】のラーニング完了】
アビリティ

俺は変身ヒーローになった。

いや、兜虫を喰って得た【外骨格着装】を早速発動させると俺が今着ているレッドベアーから造った防具は一瞬で取り込まれ、それを元にしたのか、赤く独特の光沢を持つ甲殻を持った二メートル五十センチ以上のヒト型クワガタ、のような全身鎧を装着した状態になったのだ。

何故兜虫を喰ってクワガタに、と一瞬疑問に思ったが、きっと俺の双角が原因だろう。

やや湾曲しながら伸びる刀剣のような双角に意識を向けると、ガチンガチンと動かす事ができた。試しに木を挟んでみると、ジヨギン、と切断できてしまった。しかもさしたる抵抗も感じ無かった、凄まじい切れ味である。

面白いな、コレ。

しばらく外骨格について調査をする。

それで分かったのだがこの外骨格、凄く動きやすいくせに非常に頑丈なようだ。試しにオガ吉くんに殴ってもらったのだが、殴られた部分が多少凹みはしたが俺に殆ど痛みは無かった。どうも衝撃を全身に分散してダメージを軽減する機構が外骨格に組み込まれているらしい。

それに転生前の職場で配備されていた生体金属製のパワードスーツを着ているように、鎧を着ている気が全くしないこの一体感。動きをほんの少しも阻害される感覚が無く、身体によく馴染む。

それにどうも外骨格はパワーアシストまでしてくれるようで、デメリットが見当たらない。いや、目立ち過ぎるってのはデメリットか。

うん、まあ、これは非常にいいアビリティだ。

ただ、一通り調査してから【外骨格着装】を解除すると素っ裸に

なったのは勘弁してもらいたい。以前造ったズボンがあったからまだ良かったモノの、俺にストリップ趣味はないのだ。

それにレッドベアーとの戦いの思いでが詰まった防具が無くなったのも痛い。

まあ、意識すると脳内に

【アビリティ】【外骨格着装】

登録“1”「赤熊獣王の威光」の登録完了

登録“2”「」空き

登録“3”「」空き

登録“4”「」空き

登録“5”「」空き

残り“4”までフォームの登録が可能です。

何番を装着しますか？】

と表示されるので、完全に無くなった訳ではないのはありがたい
と言えはありがたい。

それとフォームは戦況に応じて選ぶ事ができるようだ。結構応用力がありそうで、便利なアビリティである。

あと空を飛ぶ為の器官である鞘翅が造れるようになったのは良いが、空を飛ぶのは思ったよりコントロールが難しかった。

帰ったら練習する事にしよう。

非常に満足いく結果だったので、お土産を引っ提げて帰って喰いました。

スタンプボアの肉はウマかとです。

アビリティ
【能力名】猪突猛進【のラーニング完了】

アビリティ

テールアタック

【能力名】尻尾強撃【のラーニング完了】

その後帰って飛行の練習をし、作業場で色々と作品を造ったりして夜になるとぐっすりと眠った。
うむ、有意義な一日だった。

“ 六十六日目 ”

久しぶりの雨だったので、今日は赤髪ショートや鍛冶師さん、姉さんに錬金術師さん達と戯れる事に決めた。

夜は皆で一緒に寝ているのだが、朝や昼は色々と用事があるので構っていなかったからだ。

【ノールソルダ魔喰の戦士】を獲得してからというモノ、赤髪ショートの快進撃は凄まじいモノがある。今までは技量が同等程度でも肉体面で負けていたのを巻き返した結果だ、と言えばそこまでだが、着実にその力を伸ばしているのは事実だ。

最近特に『訓練してよ、私とちょっと組み手してよ』と迫ってくるので、とても可愛いです。その分加減が難しいが。

なんだろう。可愛らしい顔と相まって、子犬がじゃれてくる感じだろうか？ それもミニチュアダックスとかの小さい犬が、尻尾をブンブン振っている感じで。

他から見たら赤髪ショートはドールベルマンのような存在になってきているのかもしれないが、俺からすると赤髪ショートは子犬のように可愛らしくて、グツとくる。

朝の時間は赤髪ショートと戯れました。

次は鍛冶師さんの所に行く。

最近ではエルフのキルエとアルエ 以前馬鹿を護衛していた女性エルフ二名の事だ。今後は面倒なので護衛エルフさんと纏めて扱おう が造れるミスラルを用いた合金を造る事に熱中しているらし

く、その試験品だろうナイフやショートソードが工房ではアチコチに転がっている。

ミスラルは捉えたエルフの中では護衛エルフさん達しか作る技術を持っていなかったため、二人はアッチ方面の仕事は他よりも少なくなっている。貴重な技術持ちは、適材適所で活用するべきだ。

どうもこの二人、結構血統の良い家の娘なようだ。

ミスラルの製造法はエルフ全員が知っている事ではなく、鍛冶を担う限定された家系に伝わるモノで、一般のエルフでは製法を知らないで作れない。この二人は精鋭として訓練を受ける傍ら、生家がミスラルの製造法を継承する家系だったので教え込まれていたが故に造れるのだ。

まあ、二人では量が作れないのが難点ではあるが、それは仕方ない。造れるだけで上等だ。

鍛冶師さんと護衛エルフさん達が新しい作品についての意見を出し合っている所に加わり、以前お願いして作ってもらっていた連射式クロスボウ　つまり連弩　の開発は成功したか、と聞いてみる。

連弩は従来のよりも威力と飛距離が劣るのだが、手数を増やしたくて作ってもらっているので関係無し。

そして鍛冶師さんによると、無事成功したらしい。試作品が完成したので、訓練しているゴブリン達の所まで持って行き、早速練習させる。

結果、成果は上々だ。十分使えるモノにできあがっている。

連弩の量産をお願いし、ついでに護衛エルフさん達が作っていたミスラルを取り込み、銀腕からインゴットとして抽出。銀腕の成分を取り込んでミスラルとは似て非なる金属となったそれを渡し、これでまた俺専用の作品を造って、と頼んでおく。

分かった、まっかせなさい、と胸をはる鍛冶師さんは可愛らしかったです。思わず唇を塞いだとしても仕方あるまい。

その後色々意見交換した。

夕方になって姉妹さん達の所に行く。

最近姉妹さん達も新しい職業【料理長】コック・チーフを獲得したらしく、せつせと調理に勤しむゴブリン達の指揮を担当していた。

飯を喰う数が数だけに、早めに調理を開始しなければ間に合わない。幸い調理用具は略奪品や鍛冶師さん作があるので足りているので回せているが、それでも調理場は戦場と化していた。

それに俺も加わり、食材を刻んでいく。こう見えても俺、料理はそこそこできるのだ。

料理ができるようになった切っ掛けが、勉強や運動はできなくせに料理だけはド下手なアオイの料理を喰いたく無いって情けない事情があるんだが。

アオイのヤツ、俺刺した後どうなってんだらうなあ。

なんて黄昏ながらも俺は仕事をこなし、飯の仕度が終わった後、二人と共に料理の研究を開始した。

目標は転生前の料理の再現だ。今の所ポテトチップスとかは似た様なモノができている。食材が転生前と全然違うので非常に難航しているが、料理人な二人に相談すれば比較的早く完成しそうなので心配はしていない。

食の探求は面白いです。

飯の後、錬金術師さんの所に向かった。

錬金術師さんは最近スケルトンの骨を使ってオリジナルのマジックアイテムの製作に専念しているのだが、その結果はまだ教えてもらえていなかった。

なので今回はそれを聞きだそうと思っていた。のだが、様子を見に行つて会話しながら問いかけてみると、サラッと包み隠さずに教えてくれたのは拍子抜けだった。

が、サプライズはその後だ。

差し出されたのはブラックスケルトンの骨を削って造ったのだから無骨で黒い杭。数は十本で、その能力は“突き刺した者を一定時間その場から動けなくする”と言うモノだ。

へー凄いじゃん、と感心していると、アイテムクリエイター【魔道具製作師】を得て初めて造った思い出の品だから私だと思って大事にしてね、と言われました。

どうやら錬金術師さんも新しい【職業】を獲得したけど黙っていたらしい。

それにしても可愛らしい言い方と笑顔付きは反則だと思う。普段クールな彼女が見せる茶目っ気とか、ギャップでやられました。

隠れてイチャイチャしてたら以前のように乱入者が。

その後はあえて言うまい。

“六十七日目”

昼をやや過ぎたころ、父親エルフから使者　六名のエルフが来た。アポ無し訪問だったが、高圧的な言動ではなく礼儀を弁えていたので話を聞く為に中に通す。

その時は入ってすぐに広がる大広間で精鋭エルフ達も訓練に参加していたのだが、使者エルフ達はその事について何も言わなかった。

ただ、侮蔑の視線を一瞬向けただけだ。

今の精鋭エルフ達はカフスに付加した【隠蔽】によって浅黒い肌を持つエルフ　所謂ダークエルフと呼ばれる種族に見えているはずなので、使者エルフのようにチラッと見ただけでは同郷のエルフだと気付けなかっただろう。

使者エルフが侮蔑の視線を向けたのは、ファンタジーによくある

話でエルフとダークエルフは仲が悪い、とかそんな所に違いない。好都合な事だ。

精鋭エルフが訓練しながら数名ほど何か言いたげに使者エルフを見ていたが、結局何も言う事はなかった。今更戻れないしな。

その後、使者エルフ達は俺の作業場兼私室である一画に通し、以前父親エルフから貰った茶を出す。生憎ソファなんてモノはないが、俺の系製のイスはあるのでそれに座らせた。

六名の内イスに座ったのは一名だけだったが、どうもその一名が交渉役で、他は護衛なようだ。

そして話を切り出したのはアッチ側だった。

最初から分かっていた事だが、ついに人間軍が来たようだ。それも俺が以前教えたルートから、結構な規模の軍隊らしい。

人間軍と相手取るには現在のエルフ軍は俺が提供したマジックアイテムを含めても戦力に不安がある。現在は俺配下な精鋭エルフ達が抜けた穴が結構大きく、その為俺達の所に援助依頼にきたそうだ。素知らぬ顔で精鋭エルフ達はどうしたんだと聞いてみたら、馬鹿が目的も言わずに配下な精鋭エルフを動かして、その結果行方不明になったからだそうな。

消息は今もって不明。搜索を行おうにも状況が状況だし、時間も余裕も無いので死んだモノとして半ば諦めているそうだ。

どうせ父親エルフがそういう風に情報操作したんだろうが、素直にありがたい。

軽く情報交換した後、仕事についての話をした。

仕事は早い話が人間軍の撃退か、あるいは撃滅。できれば撃滅してもらえるとありがたいが、できる範囲で良いとの事。ただし戦略的撤退はありでも、敵前逃亡は許さないとの事。大して意味は変わ

らないと思うんだがな。

報酬はミスラル製のショートソードとラウンドシールドとチェインメイルが四十にインゴットが十、矢が三千本に光源を発生させる一般的なマジックアイテムなどエトセトラ。

功績によつては更に上乘せしてくれるそうだとか。あと略奪した品はそのまま納めてもいいそうだ。

受けるか否かを聞かれ、もちろん二つ返事で依頼を受けました。

ただ条件として俺達は自由に動かせてもらつてのは組み込ませる。俺は正面から戦つよりもゲリラ戦法の方が得意だからな。正面から戦うのは、最終手段です。

情報交換を円滑にするために通信機能だけを搭載した腕輪を使用者エルフに渡し、父親エルフに届けてもらう事に。

帰つていく使用者エルフを見送つた後、斥候として俺の分体を走らせる。戦況の確認と情報収集は大事だからな。

何はともあれ、傭兵団 パラスラム 戦に備えよ の初仕事だ。

“六十八日目”

午前三時。まだ闇に包まれた森の中を俺達は疾走していた。

機動力重視で選んだのでメンバーは少なく、クマ次郎に跨る俺を先頭に、使い魔に乗つた三十六名だけだ。他は洞窟にて待機中である。

今回こんな時間に移動しているその理由は簡単で、斥候に出した分体が発見した人間軍の駐留地点に奇襲を仕掛ける為である。

奇襲する部隊の規模は八百人程と俺達とは桁が違い過ぎる。コチラは 使い魔 を含めて七十三だ。普通に当たれば数の暴力で殺されるのがオチだ。

それに流石の俺も、数が多い上に一人一人の戦闘能力がハッキリと分かっていない敵を襲うのは早計だとは自覚している。

が、夜という状況が俺達に 特に俺に力を貸してくれる。ブラックスケルトンやゾンビを生成し続ければ物量で負けないだろうし、闇に沈殿する魔力を吸収する事で魔力切れは起きないので、魔力不足でアンデッドを生成できなくなる、なんて事態にもならない。

もしヤバかったら即逃げればいい。暗視を持たない人間が暗視を持つ俺達を追走する事は難しく、その為の機動力重視なのだから。

そんな訳で仕掛けた奇襲であるが、逃げるまでもなかった。一時間も経った頃には殲滅完了である。

流れとしては、

密かに近づく。

周囲に張られた半透明の結界とその内部を歩いている見張りを発見。

周囲を囲むように散らばらせる。

配置についたのを確認し、半透明の結界を俺が終焉系魔術の投げ槍で粉碎すると同時にアス江ちゃんが周囲を四メートル程の高さがある土壁で囲む。

それを合図にダム美ちゃんやスペ星さん等を筆頭としたメイジ部隊の魔術が敵陣中に炸裂、一瞬で数百名単位の人間を殺害する事に成功。

俺は俺で一秒で十体程のアンデッド生成しつつ、終焉系魔術の投げ槍を左腕を変化させて造った巨大弩^{バリスタ}で撃ちまくる。

たった十数秒ほどで雑兵を大雑把に削り殺した後、中心の方にあった一際大きなテントから登場した白銀の女騎士や白色の聖職者（男）や紅の女騎士に漆黒の魔術師（男）など精鋭だろう一部にゾンビや普通のスケルトンがやられる。

ブラックスケルトン種でその一団を集中的に攻撃させて足止めをする。

その間に周囲を殲滅、ただし女は殺さず捕虜に。でもあまりに醜悪だった場合はその限りではない。

最後に残った精鋭部隊にクマ次郎に跨りクロ三郎を従えるハルバード装備な俺、ハインドベアーを従える重武装なオガ吉くん、ハインドベアーの上で詠唱するスペ星さん、氷の刀身を持つクレイモア【月光の雫】を片手で軽々と扱い【魅了の魔眼】を振りまくダム美ちゃん、巨大なウォーピックを持って微笑むアス江ちゃん、紅の騎士と化して周囲に血の刃を三十程漂わせるブラ里さんが一斉に押し掛ける。

蹂躞無双。

戦闘終了。

改めて振り返っても、酷い戦いだった。いや、あれは一方的な凌辱だったかもしれない。

まあ、さて置き。

被害は全てアンデッドが肩代わりしてくれてコチラに死者は出ず、アチラは女と一部優秀そうな個体を除いて全滅させた。恐らく取りこぼしも殆どないだろうが、一応って事でブラックスケルトンを周囲に散らばらせる。

陽光で浄化されるまでがタイムリミットだが、消えたとしても一応の保険なので問題なし。

今回の奇襲の戦果は繁殖要員となる捕虜、その他多量の武装に兵糧だ。特に女とマジックアイテムの獲得は大きいと言える。

それに鮮度が落ちてはアビリティ確保の確率が下がるので、優秀な個体を選別してその場で喰いました。

アビリティ
フレイブハート
【能力名】【勇ましき心】のラーニング完了】

- 【能力名【足払い】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【軍勢統括】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・部隊長】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・重剣士】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・吟遊詩人】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【速読】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・軍師】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【鍛冶】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【回避率上昇】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【大回転斬り】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【十字斬り】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【硬気功】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【軽気功】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・槍士】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・奴隷】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・農夫】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・修道士】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【一方的な正義感】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【無垢なる信仰】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【愚かな妄信】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【繋がる魂魄】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・重戦士】のラーニング完了】
アビリティ
- 【能力名【職業・軽戦士】のラーニング完了】
アビリティ

ホクホクである。

大変満足いく結果である。

その後毒で眠らせた捕虜や戦利品を持ちかえり、以前のエルフのように薬を盛って牢屋に入れる。

ただ流石に男エルフのように容姿端麗ではない人間の男に薬は盛

らなかった。こいつ等は情報源兼奴隷として働いてもらう予定だ。
なので、女と違って男達には隷属の首輪を即座に嵌めた。

今回の情けも“殺さない事”である。“死ぬまで”働いてもらおうか。

さて、女は何日快楽に耐えられるかなと思いつつ、今回の戦果を父親エルフに報告。

昼前に報告した時は大層驚いていたが、それが事実だと調べがかったのか、午後三時くらいには護衛を引き連れてエルフ酒を樽五つも持参して直接コツチに来た。おいおい、来ていいのかよとも思ったが、俺達があの一軍を壊滅させた事が人間軍にも伝わったらしく、進撃は停滞しているそうだ。

なるほど、乾杯。

軽く酒会を開いた後で父親エルフは帰っていった。

さて、捕虜の様子はどうかねえ。と思っ行ってみると、既に堕ちてました。勇猛果敢に戦っていた女騎士さんの乱れっぷりが凄かったです。

え、大貴族の令嬢だって？　へー、あっそ。今の俺には大した事ではありません。

だって俺、人間じゃなくてオーガだし、今。

人間の事情なんて、モンスターにとっってはどうでもいい事である。としておこう。

あと、捕虜（男）達の反応は面白かったので、ゴブリンとコボルドのメスで自分で申請してきた奴には貸し出してやりました。

“六十九日目”

寝ていると胸に微かな痛みが走った。

起きあがってみると、どうやらナイフで心臓を刺されたらしい。犯人はまだカフスを付けていない、生まれたままの姿で所々を濡らした例の女騎士である。

昨日あれだけ乱れたというのに、正気に戻ってせめて俺だけでも思ったのだろうか。幸い近くに食材を刻んでいた錬鉄製のナイフ（鍛冶師さん作）が転がっていたしな。

なんて暢気に考えながら、胸に生えたナイフの柄を掴まんで引き抜く。オーガという種族の生命力を舐めては困る。アビリティを発動させるまでも無く、たかが錬鉄製のナイフで浅く心臓を刺された程度で死にはしない。ただ痛くて、治癒する間は動けなくなるだけだ。

でも痛いのは嫌なので【高速治癒】を発動。目に見える速さで傷口は塞がった。

さて、と顔を上げる。そこには全裸状態だが静かな怒りを宿したダム美ちゃん、に髪の毛を掴まれて組み伏せられている女騎士の姿が。人外の膂力に抗える筈も無く、女騎士は恨めしそうにコチラを見上げてくる。

ふむ、どうもまだ足りないらしい。なので直接俺の成分調節した薬を注入。ダム美ちゃんと一緒に責めました。

午後、そこにはカフスを自ら装着する女騎士の姿が！ と大袈裟に言いつつそれは置いといて。

奴隷（男）達を集めて知っている情報を全て吐き出させる。【隷属】の効果によって虚偽も隠蔽もされる事の無い情報を得、それを父親エルフに流してやる。

俺達が手柄を上げるばかりではエルフ達の士気に関わるので、エルフ酒を樽十個で情報の売買を昨日父親エルフから取り付けられたのだ。強かである。

あと、ホブ・ゴブリンが四体増えていた。今回はクレリックが一体混じりである。

普段通りに祝いの品を送る。

“七十日目”

今日は人間軍の侵攻ルート上にトラップを張り、待ち伏せである。どうやら人間軍は数の多さを良い事に、多方向からエルフ軍を攻撃する作戦らしいので、こうやって個別のルートで待ち伏せして各個撃破が望ましい。

現在待ち構えている場所も幾つかあるルートの一つで、ココを通るのは主力部隊の一つなのだそう。これは良い経験値稼ぎになりそうだと思いつつ、アス江ちゃんと共に狩り場の作成に勤しむ。

獣道のような道を周囲よりもやや低くし、先に進むにつれてやや坂になるように地形を弄る。

そして左右に生い茂る木々の根元には落とし穴を、ある程度離れた木々の根元には隠れる為の塹壕を掘る。塹壕近くの茂みにはパツと見では分からないようさり気無く木の板で造った盾を組み込むことでコチラの安全性を高め、鍛冶師さん達が頑張つて造った連弩を装備した遠距離攻撃部隊 ティラール を塹壕の中に配置。

保険として塹壕の中には軽武装部隊 レッドシャルジュ も入っている。落とし穴を飛び越え、矢の雨を掻い潜つて近づいたとしても時間を稼ぐ、あるいは殺す事は容易いだろう。

もっとも、その前にある落とし穴に潜むコボルド達で殺されるはずだが。

一通り準備が整い、しばらくすると斥候としていた俺の分体から敵についての情報が入ってきた。

敵の行進スピードだと凡そ三十分後には到着すると言う事で、皆息を潜めてその時を待つ。

そして、来た。

鈍鉄色の全身鎧を着て軍馬に跨り、周囲に注意を向けながら進む鈍鉄騎士に率いられ、隊列を乱す事無く歩み進める軍団が。確かに個々の戦闘能力は比較的高そうで、その数は七百前後。

その内魔法使い　魔術師を代表とする、魔力を用いて奇跡を成す【職業】持ちな存在の総称。【召喚術師^{サモナー}】や【秘術使い^{アーケイナ}】や【妖術士】などがある　の数は恐らく百名前後だろう。

魔術が齎す殲滅力を考えれば、数は七百とはいえ凄まじい戦力だ。ただしその分、俺にとっては美味しい敵に見える訳で。

カフスを介し、まずは敵の退路を断つべく木を切り倒す。けたたましいい音を響かせて倒れた巨木は一人たりとも圧殺する事はなかったが、敵の注意がそっちに逸れた隙に次の指令を飛ばす。

退路を断ち、最初の攻撃となるそれは、敵の進行上となる坂の上から丸く削った岩を複数転げ落とす事だった。左右よりも窪んでいく足場が災いして逃げ遅れたモノは引き潰され、もしくは必死で逃げようとする仲間に踏み殺された。

中には武器を手にし、あるいは魔術を行使して丸岩を砕こうとする者も居たが、生憎丸岩には俺がエンチャントを施しているので早々碎けるモノではないし、勢いと回転力がある。無駄な抵抗を試みた者から丸岩の餌食となった。

丸岩によって七百いた敵の内、二百から三百以上は圧死、あるいは戦闘不能となる。他にも余波で怪我をした者は多数で、即座に大勢を立て直すのは難しいだろう。

そして敵を休めるつもりが俺には毛頭なく、ココでようやく連弩の毒矢を敵に撃ち込ませる。

退路は防がれ、丸岩の奇襲で仲間が惨たらしく潰されて、そこに飛来する矢の雨の追撃。しかも連弩であるが故にその数は多く、威力もそこそこ高いと嫌らしい仕様だ。

しかも鏃には俺製の毒を塗っているので更に夕チが悪くしたそれ

は、敵の数を一気に減らしていく。

何人かは反撃しようとして塹壕に向けて駆けだしたが、巧妙に隠されている落とし穴に嵌り、そこに隠れていたコボルド達に袋叩きにされて死ぬという哀れな結果に。

しかし流石にこれだけで殲滅するまでには至らなかった。鈍鉄騎士の指揮力は中々侮れるものではなかったのだ。

生き残った少数を掻き集め、仲間の死体などを盾に毒矢を防ぐ陣形を組んでみせたのだ。丸岩を転がしてみたが、殻のような陣形の隙間から放たれる魔術の連射を受けて砕かれた。毒矢も死体などで造られた盾に阻まれ、数が減らせられなくなった。

しばしの膠着状態に突入。

残り百名足らずで良くやるよ、と思いつつ、鈍鉄騎士に興味があった。

手駒にしたいと思ったので魔術による殲滅は一先ず取り止め、オガ吉くん率いる重武装部隊 ラーヴェロジオン を坂の上から進撃させる。

誤射を防ぐために左右からの毒矢攻撃は止めさせ、タワーシールドを構えて先頭を進むオガ吉くん達の様子を見守る事に。

敵陣からオガ吉くんに向けて魔術が迸るが、全てはマジックアイテムであるタワーシールドに阻まれて虚しく散っていく。敵もその様子からオガ吉くんを狙うのは無駄と判断したのか他を狙いはしたが、その大半はオガ吉くんが防いでしまった。

守り硬過ぎるぞ、と言いたくなる光景だ。

その後両者の距離が無くなり、一か八かとはかりに囲いから飛び出す敵は、しかし部隊員の重装甲な守りを突破できず、逆に連携して攻めて行く部隊員に一人また一人とその数を減らしていく。

オガ吉くと闘っている鈍鉄騎士は奮闘しているが、ここ最近ブ

ラックスケルトン種との手合わせで更に技術が向上したオガ吉くんの敵ではなかった。奮闘できているのも、俺が捕える事を指示した為に遊んでいるからに他ならない。

そして三十分後、存分に戦いを堪能したオガ吉くんによって鈍鉄騎士は気絶させられ、捕獲、そして奴隷という流れに。

そして肉は選別してバリバリと。

- 【能力名】アビリティ【職業・妖術士】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・盾戦士】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・歩哨】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【盾打】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【戦技早熟】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【刀剣の心得】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【守り手の心得】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・射手】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・狩人】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・魔道具製作師】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【盾壁】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【道具上位鑑定】のラーニング完了

今回の戦果も上々と言えるだろう。

使えそうな武装は回収し、兵糧や捕獲した使えそうな人員を以前と同じように運んで行く。

捉えた女は薬を盛って牢屋に入れ、男は即座に奴隷の首輪を嵌めていく。

その後、父親エルフに今回の事を報告。

今回捕虜とした女達が我慢できずに求めてきたら、その時は活躍していた個体に褒美としてくれてやるう。

無理やりはしない、ってのはどうなったんだとか聞かれそうだが

ら言っておくが、薬を盛らずに無理やり犯さないのは何の関係ない人物だけですとっておく。

敵だったんだから薬盛るくらいは許容範囲内だろうよ。

さて、鈍鉄騎士とかに対して色々と尋問するか。と思っていたら、気恥ずかしそうに頬を染めたダム美ちゃんに裾を引っ張られた。

え？ 子供が欲しいな……だつて？

色々燃えた。

七十一日目〜八十日目

“七十一日目”

今日はホブ・ゴブリンが八ゴブ増えた。

メイジになったのが三ゴブに、クレリックになったのが一ゴブ、そして今回初めてホブ・ゴブリンシャーマンが一ゴブ生まれて、普通が三ゴブである。

先日の待ち伏せの際にも活躍を見せたメイジ系の個体が増えたのは素直に嬉しいし、アンデッド種を使役したり滅したり強化して昼間でも活動時間を延ばせるシャーマンが増えたのは、色々とできる幅が増えたので大変好都合だ。

今回はそれに加え、コボルドが三体程足軽コボルドにランクアップした。

コボルドはランクアップして足軽になると、“生体槍”と呼ばれる武器もセットで発生する仕組み　生体系武器の素材は本体の細胞だそうで、そのため本体が成長すればそれに伴って武器も成長するそうだし　なっているのです、足軽に成った個体は早朝の報告時に槍を携えた状態だった。

三体とも槍を持つのは生まれて初めてなはずだが、自分から生まれた生体槍は手足の延長といえるものなのでその槍さばきはなかなか様になっていた。しかしそれでも完璧、とはいかないので三体の足軽コボルド達には最初から足軽だったコボルドリーダーと同じく、槍の扱いを重点的に訓練する予定である。

それにしても、ここ最近の人間軍戦で経験値が順調に集まっているのでランクアップする個体が多く、また労働力となる奴隷が増えたりと戦力強化になって非常に助かる。

そろそろ最初の予定をクリアできそうだし、繁殖要員となる敵側の女も手に入ったので数を殖やしていくべきか。増やし過ぎると食糧事情とか面倒事が増えるので数は調整しなければならぬだろうが。

俺のようにホブ・ゴブリン以上に成った種族の子ができるまでの期間は流石のゴブ爺も知らなかったので判明していないのだが、ゴブリンの子は人間の女が妊娠すると約二十日、ゴブリンの雌が妊娠すると約二十五日で、ホブ・ゴブリンの子は人間の女が妊娠して約四十日、ホブ・ゴブリンの雌が妊娠すると約五十日だそう。

生まれるまでの期間にはばらつきがあるものの、この早さには流石に驚きを禁じえない。

人間が定期的にゴブリン狩りをする理由が良く分かった。

などと細かい事は置いとくとして、普段通りそれぞれに祝い品を贈る。

一応オガ吉くんのように持つマジックアイテムの属性を偏らせて亜種に成るかどうかを見ているのだが、俺とオガ吉くんとダム美ちゃん以外に亜種と成った個体がないので、やはり他の条件を満たさないと【加護】は獲得できないようだ。

これは今後の課題として一旦置いとくとして。

今日は午前訓練の後、【隷属】の首輪を装着して牢屋に入れていた鈍鉄騎士を筆頭に、その他の指揮官職っぽい奴等に対し、先に捕えていた女騎士達から聞きだしていた今回の戦争の人間軍の目的について、多角的な面の情報による補完を試みた。

その結果、今回の戦争について裏も表も大体の事が理解できた。

今回の戦争の切っ掛けとなったのは“シュテルンベルト王国”

他の国はまだ出ていないので、出てくるまでは王国とするの
姫が非常に厄介な病を発症した事から始まりを告げる。

姫の病は人間だけが発症する“クリシンド病”と呼ばれるまだ治
療法が発見されていない病で、発症すれば命は無い“死病”の一つ
だそうだ。

代表的な症状は、発症してから月日が経過するにつれて臓器が生
きたままゆっくり腐っていくこと。発症してから一年以内の死亡率
は九十九パーセント以上、最大で発症してから二年ほど生き残った
例もあるが、それも治る事無く死んでいるので、今の所発症して治
った者は一人も居ないそうだ。

幸い空気・飛沫感染ではなく、症例自体が少ない事が唯一の救い
といった死病だそうな。

症例が少な過ぎて治療法を研究する機会が少ないのは弊害かもし
れないが。

そして当然、王国は姫の“クリシンド病”を何とか治そうと試み
た。

発症したのが“賢姫”として名高く、また同盟国に嫁ぐ 政略
結婚ではあるが、本人同士好きあっているので恋愛結婚でもあるら
しい 事が決まっていた姫様だったから、尚更だそうだ。

王命により、王国中の医師や薬師などが忙しなく動きまわる事と
なり。

しかし結果は芳しくなかった。病気の進行をやや遅くする事はで
きたものの、姫の臓器は既に半分近くが腐っているそうだ。現在は
魔法で強制的に眠らせる事で四六時中続く気が狂いそうな苦痛から
解放し、魔法で腐っていく臓器を再生する事で延命されている。し
かし腐る力の方が強いので元に戻す事は敵わず、治す事はできてい
ない。

最近までは治療法が見つからないまま死ぬのを待つしかないのか、と思われた。

しかし毎日祈りを捧げていた【職業・聖女】を持つとある女性の下に、かつての王国国民だった【癒しの亜神】からの【天啓】があった。

“クリシンド病”を治すのには、【深緑の亜神】の庇護下にあるエルフの秘薬が必要である、と。

その【天啓】に従い、条件に適合した俺達が生まれた森、“クーデルン大森林”に住むエルフの秘薬を譲り受けるべく、姫様の婚約者であった“キーリカ帝国” 王国と同じ理由で、帝国と呼ぶ事にする の若き次期皇帝（現在24歳）がエルフと交渉した。

しかしエルフは秘薬が少量しか無く、昔からある掟 基本的にエルフは面倒で厄介な掟が多いそうだ で、その秘薬を“人間”に渡す事はできないと拒否。

再三にわたる交渉も、全て不発に終わったそうだ。

種族的に元々のプライドが高く、人間を見下しているエルフなら掟が無くても渡さなかったのではないか、とは個人的に思うのだが、とりあえず事実として、秘薬が帝国と王国に渡る事は無かった。

この交渉が失敗に終わった事が戦争の切っ掛けになったのは間違いない。

しかし話を聞いていくともっと人間らしい事情があった。

まあ、細かい話を長々と語っても面倒なだけなんでズパっと言うと、こうなる。

『人間は欲深い』

この一言でもう十分だと思う。

思うが、大雑把な理由を簡単に四つだけ述べるところなる。

一つ目、エルフはその殆どが美形である。性奴隷に最適。

二つ目、エルフは種族的に人間よりも優れている。護衛とか戦力として優秀。

三つ目、ミスラルや溜め込んだマジックアイテムや森から採れる素材など、経済的観点からして非常に美味しい。

四つ目、エルフが住んでいる場所が、他国との戦争時に色々都好都合である。中継ポイントとして優秀。

話を聞いて、酷く現実的な理由だと思ったモノだ。

切っ掛けは確かに姫様の病を治す秘薬の売買を拒否されたからであるが、そこに大勢の人間の欲や思惑が混ざり、本来の趣旨が色々と湾曲した末に、今回の戦争になったようである。

異世界でも人間という種族は厄介なんだな、と思わざるを得ない。

今回はいざとなれば隠れたり逃げればいい立場なので、あまり気にはならないんだがな。

その他にも色々と聞きだしていく。特に今回の人間軍の構成については念入りにだ。

現在の俺では勝てない相手がいるかもしれないからな。

鈍鉄騎士達は帝国に所属していたので、王国軍側の話　人間軍は王国と帝国の連合軍だそうだが、非常に少なかったが、それは王国軍に所属していた女騎士の方から聞いていたので問題はない。

戦力はやはり巨大な帝国の方が兵の数も質も良いらしく、今回来ている軍隊の中ではオーガや鬼人ロドや竜人ドラゴナイト、それに幾多のモンスターを掛け合わせて造られた“合成魔獣”キメラなどが所属する魔物部隊が非常に強力だそうだ。

部隊構成員の殆どが奴隷であるらしく、主の命によっては強制的に命を賭して襲ってくる部隊になるそうだ。面倒で、厄介な話である。

しかし厄介である分、上手い事やれば簡単に転がりそうな話でもあるだろう。

とりあえず、奴隷に命令権のある人物はピックアップした。

情報を聞きだした後、俺以外の指揮能力向上の為にゴブリン達の中に男の捕虜達を加え、ゲームをする事に。

プレイヤーは隊長格の役職についた個体で、それぞれの戦力がだいたい均等になるよう振り分けた手駒を駆使し、プレイヤーが手駒に指示を出して相手側の手駒を潰す、という実戦形式のゲームである。

手駒の武装は木刀に盾、もしくは槍か斧か弓か盾のみと差異を設けたので、手駒の武装に適した指示を出せるかが重要なポイントだ。

俺は審判役なので今回のゲームには参加しなかったが、ダム美ちやんとスペ星さんの指揮能力は高かったので勝ち星が多く、逆に自分が先頭に立って戦線を切り開く事の方が得意なオガ吉くとブラ里さんは弱かった。アス江ちゃんは丁度中間くらいだ。

これは脳筋とそれ等の差、という事だろう。分かり易い事である。

今日は人間軍から奪った食糧が大量にあるので全員狩りには行かず、洞窟の中で戦闘訓練ばかりしていた。いや、訓練というよりは皆ゲーム感覚だった。

最近では訓練を通してゴブリンとコボルドとエルフには少なから

ず仲間意識が生まれだしたので、今後はそれを強めていきたいものだ。

奴隷となった人間達はそもそも俺達が訓練している事に最初は驚きを隠せていなかったのだが、その表情が時が経つにつれて段々と深刻な事になっていく事には笑った。

今日は人間軍側に動きが少なかったので訓練に集中できた。いい事である。

そして夜、人間の女性達は嬉しそうに嬌声を上げてました。エルフよりも欲が強い為か墮ちるのが早かっただけに、順応も早い様だ。ただ鍛冶師さん達が若干複雑そうな表情を見せていたが、ココに来たばかりと比べて色々と考え方に変化があるらしく、別に文句は無いそう。

というか、戦争なのだからこんな事も仕方ない。それに経緯はどうあれ無理やりやられて壊れていくのではなく、自分から好きで求めているのだから、まあ、ありじゃないかな、ヒトの幸せはそれぞれだし、とのこと。

理解力のある、良い女達である。
俺には勿体ないくらいだ。

あと、人間の女性達を羨ましそうに見ていたエルフ　性欲発散は現在人間の女性達が担当しているので、エルフ達は今は強制的には行っていない　の姿もチラホラ見えたので、足軽に成ったコボルド達とホブ・ゴブリン達に宛がってみた。

かなり嬉しそうでした。

一度プライドを折ると、エルフを従えるのは楽なようだ。まあ、

だからといって態々自分から襲うつもりはないんだけど。

今の状態で十分満足しているし。無駄に敵を造る必要はないさな。

“七十二日目”

普段通りオガ吉くんと午前訓練をしていると、ブラックスケルトンナイトと戦わせていた鈍鉄騎士。既に鈍鉄色の鎧は着ていないけど、が俺との手合わせを願ってきた。

他の人間のようにプライドが木っ端微塵になつて現実逃避。帝国の下級貴族で、ゴブリンやオーガは家畜と同列だと思つていたそうだ。それなのに家畜に奴隷扱いされちゃ、壊れるよな。したり、壁に頭を打ち付けて自殺しようとはせず、ただ黙々と俺が課す訓練を行い、奴隷になつても真つ直ぐ俺を見てくるその視線には好感が持ってたので、手合わせを承諾する事に。

そして、鈍鉄騎士はやはり強いんだなと実感した。

格闘技術だけで言えば俺が遙かに優位に立っていたが、それでも今まで出逢つた人間の中で一番の技巧を持ち、それに加えて素の肉体性能はどうやら鈍鉄騎士が勝っているようだ。

アビリティを使っていないとはいえ、オーガ【希少種】を凌駕する肉体性能とは、恐れ入る。

以前ベルベットの迷宮で殺した冒険者も、これくらいやってもらいたかつたものだ。

手合わせしながらその要因を聞いてみると、鈍鉄騎士はレベル“一〇〇”の【職業・戦士】、レベル“一〇〇”の【職業・騎士^{ナイト}】、レベル“62”の【職業・修道士^{モック}】、レベル“25”の【職業・聖^テ堂騎士^{ソウルナイト}】、と四つの戦闘職を保有しているそうで、それ等の補正と今までの訓練の賜物だそうだ。

鈍鉄騎士の拳は速くて重く、身体は柔軟でありながら硬く、無駄のない動きで俺の急所を正確に狙ってくる。

それに淡い光を伴って繰り出される様々な技　脆弱な人間しか使えない術技で、この世界では戦技アイツと呼ばれるそうだ　を駆使してくる、難敵であった。

しかし、野生を剥き出しに襲ってきたあのレッドベアー程ではなかった。

手合わせの結果だが、俺は勝った。

繰り出される様々な種類の戦技アイツも、言ってしまうえば攻撃に様々な効果を付与するアビリティのようなモノでしかないので、対応は比較的楽だったからだ。

しかしオガ吉くんの時のように結構ギリギリの勝利だったので、やり様によっては勝てる相手だと思われるのも癪だ。その為今度はアビリティを使用した状態で対峙する事に。

しかしその為には、準備が必要だった。

【職業・付加術師エンチャンター】を使って鈍鉄騎士が現在装着している麻製の半袖長ズボンに、肉体強化・回復力強化・防御力強化を付加してやる。

それに驚いた顔で鈍鉄騎士がコチラを見てくるが、俺も俺で【職業・守護騎士ガーディアン】と【山の主の堅牢な皮膚】で防御力を大幅に上昇させ、【職業・修道士モンク】と【山の主の強靭な筋肉】で肉弾戦時の攻撃力を上昇させたので問題は無い。

というかこのレベルのアビリティを使おうと思ったら、相手を死

なせないために最低アレくらいは付加しないと怖くて相手にできないのである。それに発動するアビリティ数もこれくらいで抑えないと、施した強化を貫通してしまうので調整も面倒だしな。

で、結果を述べる。鈍鉄騎士はボロボロな姿で床に転がっています。

いや、なかなか根性があったので、思わずやり過ぎてしまった。まあ、結構満足そうな面で気絶しているので大丈夫だとは思うけど。鈍鉄騎士を介抱していると、オガ吉くんがジッと俺を見てくるのに気がついた。その視線には、俺も戦いたい、という思いが込められている。なるほど、鈍鉄騎士と素手で戦いたいのかオガ吉くん。

確かにオガ吉くんと鈍鉄騎士だと、素手なら俺よりも拮抗した勝負になるだろう。

オガ吉くんが戦いの際、鈍鉄騎士を相手にあそこまで圧倒できたのも、実際の所は技量云々などよりもマジックアイテムの存在が大きかった。

【黒鬼の俎板^{まないた}】という名を持つタワーシールドの防御力は尋常ではないのだ。鈍鉄騎士が繰り出すアーツの悉くを、まるで子供の兎戯のように容易く跳ね返していたのがその証拠だ。

だから今度は素手で戦い、今度も勝ちたいのだろう。

道具の性能に頼らず、己の身体一つで勝ちたいのだろう。

でも、もうちょっと待ってな。といいながら時が経つのを待つ。

流石にこの状態では、ハンデがあり過ぎる。

そして覚醒した鈍鉄騎士を回復させた後、オガ吉くんと戦わせた。やはりいい勝負となったが、俺よりも素のスペックが上なオガ吉

くんだと鈍鉄騎士と丁度いい具合で、最終的には尽きる事の無い体力で何とか勝ちをもち取った。

かなりギリギリな戦いだったが、二人ともいい顔を見せているので問題は無いと思われる。

というか、鈍鉄騎士。なんの違和感も無く混ざってくるその適応力はなんなのだ？ と昼飯時、エルフ酒を交えながら聞いてみる。

それによると、どうやら鈍鉄騎士は帝国騎士を辞めて、俺達側に入りたいからだそう。

話を聞いて行くと、どうも鈍鉄騎士が生まれ育った場所は亜人種が多かった場所だったので他の王国国民帝国国民のように種族差別とかは無く、嫌悪感はない。

むしろ何故周囲の人間が亜人種を嫌悪するのかが分からないので、話に混ざれない事など多々ある。

それに育った所では殴り合いの喧嘩も日常茶飯事だった為か、鈍鉄騎士は基本的に自分よりも強い者に従順する、といった考え方をしていた。

帝国に仕えていたのは現在所属している騎士団の先代団長に負けたからであって、帝国に対する忠誠心は元々殆どない。

そして先代団長が戦場で死に、新しく団長になったのが名前も知らなかった貴族のボンボンだった。

それでも実力があれば納得できたのだが、ボンボンには鈍鉄騎士を打ち負かすだけの実力は全く無く、むしろ一般団員といい勝負ができればいい程度のレベルだった。

それでも指揮力があればまだ許容範囲内だったがそれも無く、完全にコネを使って団長に成った奴だそう。

その為、鈍鉄騎士が現団長に対する忠誠心など欠片も無い。むしろ嫌っている。

しかしそれだけならまだ良かった。まだ我慢できたそうだった。

だが先代団長が死に、鈍鉄騎士が留まる理由になっていた同じ釜の飯を喰った仲間である他の騎士達を、貴族な現団長が自分と関わりの深い同じ貴族連中を団員として入れる為に所属を変えた。

結果として新しく入ってくる奴等との入れ替えの為、仲間だった騎士達は他の騎士団に行ってしまう。

副団長となっていた鈍鉄騎士は最後まで残され、今ではたった一人になってしまったのである。残されたのは、隊員の育成のためだったそうだった。

教官という立場になったので手を抜く事無く訓練をし、結果あの屈強な部隊ができたそうだった。ちなみに現団長は普通に岩に潰されて死んでいる。そう言えば、無駄に豪華な鎧を着た一般兵のような奴が居たような気がするが、あれがそうなのかな。

閑話休題。

鈍鉄騎士は新しく入ってきた隊員を鍛えた。が、やはり平民からの成り上がりである鈍鉄騎士では貴族として育った他の団員とは最後まで波長や考え方が適合せず、最近では実力がついてきたので隊員との言い争いも増えてきた。

鈍鉄騎士としては既に居座る理由が見いだせず、全てが面倒になってきたのでそろそろ騎士を辞めるか、と思っていた時に俺達と出会った。

コレは運命だ、と思いき即行動。

これが今までの行動の理由だそうなの。

なるほど、単純明快である。

一応嘘を言わせない様に【命令】して吐かせた情報なので、事実で間違いない。

俺としても鈍鉄騎士は有用そうなので文句は無く、受け入れる事にした。使える者は、エルフのように使った方がいい。

鈍鉄騎士を首輪から解放し、自分の意思で耳にカフスを装着させる。カフスを付けた後に武具一式は返してやり、見た目も鈍鉄騎士に戻った。

これで鈍鉄騎士は、奴隷ではなく仲間になった事になる。まだ俺以外は認めていないので、それは今後鈍鉄騎士の活躍に期待をしておこう。

所属はとりあえず、今は俺の直属の部下とするか。

午後、俺は外にハンティング兼今後の待ち伏せに使う場所のセッティングをしに出かける事に。

その間、鈍鉄騎士には赤髪ショートに戦技アーツを教えてもらう事にした。

現在赤髪ショートが扱える戦技アーツは全部で六つだけだ。

斬撃の威力を一振りだけ上昇させる【斬撃】スラッシュ

盾で敵を殴り一定確率で動きを阻害する【盾打】シールドバッシュ

勢いを乗せて一点突破力を上げた突きを繰り出す【刺突】スタブラッシュ

威力を上げた斬撃の連続攻撃を行うが隙の大きい【連斬】

一時的に体内魔力を増幅させる事で全身を強化し、モンスターの如き能力を発揮する【魔法】フォーカル

モンスターの血肉を喰らう事で一定時間喰ったモンスターの能力を自在に使用できる【可変】ヴァリアブル

前記の四つのアーツは【職業・戦士】を持つ者なら簡単に使えるようになる基礎的なモノで、後記の二つは【職業・魔喰ノワール・ソルダの戦士】など特定の【職業】を持つ者でなければ使用できないアーツだそうだ。

アーツが六つというのは駆け出し冒険者にしてはやや多いそうだが、しかし鈍鉄騎士が扱えるアーツの数は優に七十を越える。アーツは【職業】と練習しだいで扱えるようになるそうなので、俺も前提条件となる【職業】をアビリティとして得た時には教えてもらうつもりである。

人間にしか使えないアーツを自在に扱うモンスター。
うむ、アーツを使う時には目撃者を極力造らないように配慮すべきだろうな。

“七十三日目”

アス江ちゃんが温泉を掘り当てた。

今までは身体を洗うには川に泳ぎに行ったり、水精石を使って瓶に溜めた水に浸したタオルで身体を擦るなどしかしていなかったのだが、これでゆったり湯船に浸かってリラククスできると思うと、地形とか地質とか細々とした謎がどうでもよく感じるから不思議である。

まあ、ファンタジーだし。こんな事もあるんだろう、きっと。

そんな訳で、アス江ちゃん達と協力して今日は温泉に関する作業に心血を注いだ。

幸いスケルトンなどという休み不要の労働力が在る。普通では考えられない作業効率を叩き出した。

アビリティと色々な力技で夜になる前には全ての作業が終了し、男用女用混浴と区分けした大勢で入れる大浴場、そして俺やオガ吉くんなど幹部だけが使える特別な浴場が三つ、とかなり大きなモノになった。

一部は山肌を貫通させて露天風呂になっているが、岩陰なので外からは発見し難く、そもそも切断崖絶壁になっているので空を飛べない限りはココから敵が入ってくるのは難しいだろう。

でも一応、って事でトラップは山盛りだ。

晩飯が終わり、完成した温泉に一番最初に入るのは当然俺達だ。生まれて初めて入る事になった温泉に、他の皆はかなり癒されていた。

一応湯を掘り当てた時に飲んで無害である事を確認しているので、誰かが毒で死んだなどの問題は無い。

むしろ湯には治癒力向上などファンタジーとしか言えない効能があるので、今後とも愛用させてもらう予定である。

いやいや、良い掘り出しもんだった。

“七十四日目”

俺達とエルフ軍の罠のせいで人間軍はそれなりの数を失い、進行速度が遅くなっているようだ。

父親エルフには二重三重四重に続くえげつない組み合わせのトラップを教えていたので、それを有効に活用しているようである。

進行予定のルートがトラップの森と化した事で内部情報が漏れていると判明し、その対策の為に人間軍は作戦を練り直しているらしく戦線が一時的に後退した。

分体を潜入させて詳細な情報を収集しつつ、今日俺達は森の人間軍陣地に物資を運んでくる予定になっている補給部隊に奇襲を仕掛

ける為に動いていた。

遠征時の補給物資はそれこそ死活問題になる。森なので食糧や水は砂漠などと比べれば獲得し易いが、敵は数が多いので食糧はそれなりの量が必要になるし、何より士気を挫くのに役に立つ。それに武器は摩耗するモノだ。

特に矢などの消耗品を削るのは、今後を見据えればやっておいた方がいい。コッチの武器にも流用できるので、一石二鳥だ。

平原の向こうから補給部隊はやってくる。

平原で襲わないのは、当然、コチラは数が少ないからだ。数が男女合わせて四十七名にもなる捕虜を加えてやっと二百を超える程度でしかなく、その中で戦える数はもつと少ない。

それに引き換え、補給部隊の数は六百以上だ。コチラの三倍以上である。

この数の差で、見渡しの良い平原で攻勢を仕掛けられるはずがない。

そりゃ、上手く立ちまわれば相手にできない事もないだろうが、コチラの被害を考えれば止めておいた方が賢明だろう。

そんな訳で、ある程度補給部隊が森の奥に来るまで待つ事しばし。女騎士と鈍鉄騎士から得た情報通り、補給部隊がキルポイントに到着した。

後方に潜む奴隷たちを見る。

奴隷の中には顔を真っ青にしながらも、俺が分体を直接体内に【寄生】させる事で支配力を高めているので自分の意志では指一本動

かせない状態のモノが多い。

正直無理やりやらせるよりかは鈍鉄騎士のように自主的に働いてもらった方が色々と助かるのだが、これは仕方ないと諦めている。俺にとっては、彼等は所詮使い捨ての手駒でしかない。

コレ以上暗い顔をされていて鬱陶しくて仕方ないので、今回の作戦で華々しく活躍してもらおう予定である。

今回の作戦はあまり大した事は無い。

まず鈍鉄騎士が抜けた事で十八名から十七名になった男の奴隷の内、【魔術師】や【付加術師】^{エンチャンター}など色々と思える【職業】を持たないただの貴族騎士十名を補給部隊に向けて先行させる。

その後を俺達が追撃する演技を行う。

騎士の格好をして逃げてくる人間と、武器を携え雄叫びを上げながら殺意を漲らせて走ってくるオーガやゴブリンにコボルド達。

これくらい見て分かる敵と味方がハッキリとした状態なら、大抵の場合、味方に見える方はさして疑問にも思われる事も無く、攻撃をされる事も無く保護される。

何故なら意識が敵に向いているからだ。

少なからず助けられない可能性が無くは無かったが、今回は普通に成功した。

そして無事潜入したのを確認した後、俺達は奴隷に当たらないように気を付けながらある程度離れた場所に造っていた塹壕に身を隠しつつ、鍛冶師さん達が頑張つて量産した連弩で痺れ毒を塗った矢を撃ち、魔術が扱える奴は威力を抑えた魔術を放ち、ホブ・ゴブリンシャーマンは支配した六体のゴーストを利用して敵に【陰鬱】など精神的な状態異常を付加していく。

木や茂みが邪魔をして矢や魔術の命中率が良いとはとても言えるモノではないが、それは向こうも同じだし、コレはある程度敵の数を減らしつつ足止めをするのと、敵を一ヶ所に固まらせる事が目的なので、ただ俺達は本命の準備が終わるのを待てばいい。

そしてある程時間が過ぎ、中に紛れた貴族騎士十名が一斉に行動を開始。

隠し持たせた、俺と錬金術師さんが造ったオリジナルのマジックアイテム【炸裂の火実】バーストシードが周囲にばら撒かれる。

バーストシードは森で採れる【油草】ユサや【弾けの実】などを素材として使用したマジックアイテムだ。

簡単に造れるのに威力が高いという仕様なので、密集している場所に撒けば重軽傷者と死者を合わせて被害者は五十名近くにはなる。安く簡単に大量生産できる、大変素晴らしい兵器だ。マジックアイテム

そんな利点と引き換えに、爆発させる距離が近過ぎると巻き込まれて自滅する可能性があるのだが、それは捨て駒としか考えていない奴隷にさせているので別に問題なし。

どんどん弾けさせると命令を下す。死んだら骨は拾ってやるぞと。

総数三百発のバーストシードが弾ける爆音が、しばらくの間森に轟いた。

爆撃と爆音が終わったにも関わらず、未だ混乱中な敵に対し、俺は追撃として地下からアス江ちゃんの率いる部隊に補給部隊の足下を陥没させるよう指示。ココは以前からこんな事もあるつかと工事を行っていたので、容易く崩す事ができた。

陥没した高さは二メートルほどだったが、それだけあれば十分過ぎる。

急激に変動する足場のせいで崩れた体勢は即座に逃げる事を阻害し。相変わらず離れた場所から俺達が降り注がす連弩の毒矢の雨に、魔術の雨。

そして瓶一杯に入れた俺製の毒液を、予め敵上となる木の上に登らせ待機させていたエルフ達がブチ撒いた。

毒液は即効性の痺れ薬で、毒液を浴びた兵士はバタバタと地面に倒れ伏す。まだ死んではないが、今回の戦闘に復帰する事は不可能だ。

俺は俺で、指示を出しながら【職業・吟遊詩人】モンスターと【紅水晶の調】を発動させ、歌声とギターのような弦楽器から紡がれる音で味方の強化・敵の脆弱化を行う。

補給部隊で強い敵兵は居ないのだからここまでしなくてもいいのだが、念には念を入れて置いた方がいいだろうし、何よりバーストシードの爆音に引かれて敵の増援がやってくるかもしれない。

そんな訳で最後まで手を抜く事は無く、今回の作戦は滞りなく終了した。

バーストシードをばら撒かせた十人中、三名が爆発に巻き込まれて死亡、五名が破片などによって重軽傷、残り二名は無傷で帰還した。今回の被害はこれだけだった。

死んだ三名にはお疲れ様と言いながら、その死体は爆発に巻き込まれてバラバラな状態なので、捕虜や食糧などを回収する間、皆で摘まむ事になった。

ちなみに赤髪ショートは連れてきていない。モンスターを喰うのに抵抗は無くなっていたが、流石に人間を目の前で喰うのは控えるべきだろう。

補給部隊の隊員で重症なのは治療が面倒なので苦痛を長く感じないようその場で殺してやる。殺した全員の心臓や身体の一部は喰い、

己の血肉に変えた。

殺した相手はできるだけ喰う。そして死ぬまで喰ったモノの分だけ生きる。

これは俺の信条の一つである。

他のゴブリン達にも殺した責任として肉の一部を喰わせる事に。治すのが簡単な軽傷者は殺さずに捕虜としたが、捕虜の数は百名ピッタリで、全員男だ。女性は少数だけ居たそうだが、攻撃によって既に死んだそうだ。

まあ、仕方ない。

十分数はそろっているし、今は無理に捉える必要性も薄い。

カフスや首輪は数が足りないので、血を流して分体を生み出し、体内に【寄生】させる事で問題を解決した。

幸い、そこ等に血の原料となるモノは大量にあった。

- 【能力名】アビリティ【連続突き】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【兜割り】のラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【刺突】スタフのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【忍び足】スニーキングのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【鎧通し】アーモリアースのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【剣嵐の舞】アタックフォースのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【軍事行軍】レンジャーのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・野伏】レンジャーのラーニング完了
- 【能力名】アビリティ【職業・補給兵】のラーニング完了

鈍鉄騎士に聞いていた戦技アーツが幾つか手に入った。

【連続突き】から【剣嵐の舞】までが全て戦技アーツである。

俺の場合アビリティと並行して戦技を発動させると単発時よりも威力が増加するのが実験で判明しているので、意外と嬉しい。

捕虜と戦利品を持ちかえる。

帰りながら、暗い顔をする新しい捕虜の姿を見てみると、ふと思いついた。

洞窟のスペースにはまだまだ余裕があるのだが、補給兵はそこまで強くなかったので手駒としては正直微妙だ。

そんな訳で、半分くらいはエルフ軍に流す事に決定した。売れる恩は売っておこうという事だ。

予定を変更してエルフの里まで歩き、父親エルフに買ってもらった。

命令通りに動かせる人間が居ると戦術の幅も広がるので即決だ。代金として、生活に便利なマジックアイテムなどと交換する事に。

ついでに新しく知った情報を交換しながら、秘薬の話も聞いてみる。

それによると秘薬は強力なのに副作用が無い薬で色々と応用性が高く、【深緑の亜神】の力も微妙に混じっているので非常に希少で万能薬に近い効果を発揮……これ、喰ったら、アビリティ獲得できるんじゃない？

本来の考えから若干逸脱し、ふとそんな事を思った俺は、そう言えば既にエルフの秘薬を貰っていた事を今更ながら思いだした。

ほら、五十四日目の初めて父親エルフに出逢った日である。お土産として酒と一緒に貰っていたのだが、エルフ酒の印象が強過ぎて、今までアイテムボックスに肥やしになっていたのだ。

思いだしたついでになんで貴重な秘薬を俺にくれた？ と聞いてみると“人間”には掟で渡せないが、娘を助けてくれた“オーガ”に渡すのなら、別に掟には違反していないとの事。

なんだそれ。なら帝国が人間以外でお願いしたら秘薬をやったのかよ。とは思うがそれは置いといて。

帰り道に秘薬を飲んでみる。

アビリティ【能力名】高速再生【のラーニング完了】

アビリティ【能力名】秘薬の血潮【のラーニング完了】

俺の血潮は秘薬になった。

試しにまだ怪我を治していない奴隷に血を一滴飲ましてみたらあら不思議。怪我が瞬く間に治癒したとさ。

何これ怖い。

こんな事を知られたら金のなるオーガとして人間に狙われそうで、凄く怖いな。

一応自分の治癒能力などが大幅に上昇しているのだが、リスクとの引き換えとしては正直ビミョーに釣り合っていない様な気がする。

人間は欲深で、傲慢で、脆弱で、執拗で、数だけはやたらと多いから、バレ無い様にしなくては。

いや、例えバレテもそいつを殺せばいいのか。

なんて思いながら帰るのだった。

“七十五日目”

今日は洞窟内で訓練せず、そろそろと皆で川に行った。

いや、オーガなども入れるようになって事で浴槽は結構深めに設定

されていたのだが、そこで溺れてしまう奴がしばしば居たのだ。泳いだ事が無い奴が多いのは事実なので、仕方が無いのかもれない。だから今後泳げなかったから死んだ、なんて事があっても困る。その為今日は泳ぎの練習をした。

折角の機会だったので、以前グリーンリザードに襲われた滝のいる川に、普段は住処に籠ってあまり外に出ない鍛冶師さん達を気分転換も兼ねて連れていく事に。

分体で森を調査させた結果、滝の上をしばらく進んだ所にグリーンリザードの住処があるので俺達を襲ってこないかなー、と僅かに期待していたが、結局最後まで来る事は無かった。

少々残念だが、鍛冶師さん達が楽しそうに泳いでいたのでよしとしておこう。

“七十六日目”

どうやら新しいホブ・ゴブリンは新しい子供ができるまで打ち止めなようだ。

現在のゴブリンの数は十五ゴブ。それらのレベルが全て一〇〇で止まってしまったのである。

つまりこの十五ゴブにはランクアップするだけの才能が無かったという訳だ。残念である。

が、嘆く必要はない。ランクアップという手っ取り早く強くなる手段が使えないのなら、地道に訓練して強くなればいい。

訓練は己を裏切らない。例えばゴブリンでも、ゴブリンエリートになればいいじゃないか。

落ち込みかけるゴブリン達に、そう言って励ました。

そしてコボルド達だが、コチラはまだ伸び白がある。

今日目が覚めると足軽コボルドが二体に、下忍コボルドと呼ばれ

るコボルドが一体増えていたのだ。

足軽は予定通りの育成コースに入れるとして、注目するのは下忍コボルドだ。

下忍コボルドは小太刀型の“生体剣” 生体槍の刀剣バージョン を一本持った、普通のコボルドよりもかなり細い肉体をしたコボルドだった。

未だ犬顔だが、その目には知性の輝きがあり、身体の造りが人間に近づいていた。それに“下忍”とあるように、忍法 というか魔法の一種である妖術が扱えるようになったようだ。

忍びなのだから諜報活動にて活躍してくれそうなので、今日から常に気配を消しておく様に指示。

そうすると気配は希薄になり、種族的に隠密に長けている事がよく分かる。実にナチュラルな隠れ身^{ハイディング}だった。

まだ人間軍は大きな動きを見せていないので、今日も川に行つて泳ぎの訓練をする事に。

“七十七日目”

今日は訓練を無くし、休日とした。

勉強するのも、女を抱くのも、訓練するのも、ハンティングに出かけるのも、全てはそれぞれの意思によって動く。

俺は朝、オガ吉くんと鈍鉄騎士と赤髪ショートと女騎士を相手に一対四の格闘技戦を行つて汗を流し。ペット達と戯れて。

その後姉妹さん達が昼食として作ったメルザックと呼ばれるサンドウィッチに似たこの世界のパン料理を摘まみつつ、相変わらず研究に没頭している鍛冶師さんの所に赴いて、護衛エルフさん達も交えて新しい武器の構想を提案し合い。

バーストシードの量産の為に錬金術師さんの所に赴いて製作に勤しむ。

夜になるとダム美ちゃんと二人で空の旅を楽しんだ。夜風は少々寒いが問題は無く。

冷えた身体は温泉に浸かって芯まで温めて。

寝る時は最近加わった女騎士も含めて皆で寝た。汗が流れたが、明日の朝温泉に入って流せばいいので問題無し。

実に良い休日だった。

“七十八日目”

ハインドベアーなクマ次郎と、ブラックウルフリーダーなクロ三郎がランクアップした。

クマ次郎はレッドベアーよりも大きくなり、灰色だった体毛はより黒みを増し、額から五十センチほどの長さを持つ黒曜石のような鋭い一角が生えたので種族はハインドベアーではなく、“鬼熊^{オニグマ}”と呼ぶ事になり。

クロ三郎は大きさが軍馬と同じぐらいになったので、俺を乗せる事ができるようになった。口からバチバチと雷を帯びた炎の吐息が漏れ、それぞれ思考する二つの狼頭を持ったので種族はブラックウルフではなく、“双頭狼^{オルトロス}”と呼ぶ事にした。

ランクアップした二頭の上昇したスペックがどんなものかを知る為に、俺やオガ吉くんなどオーガラス　つまり二回ランクアップ経験組み　の六名とその　使い魔　の計十三体だけで、人間軍の部隊を強襲することにした。

少数精鋭で行くのは、俺達のレベルを上げる為である。

最近は全体のレベル上げが主な目的だったからな。レベルが上がらなければならない必要経験値が他よりも多い俺達からすれば、仲間の数が多ければ多いだけ入ってくる経験値が少なくなるのでレベルが上がり難い。

全体の強さの底上げをするのは問題ないのだが、最終的に頼りになるのはやっぱり自分自身しかない。弱いままでは大切なモノを守れない事もある。

ここらでガツンとレベルを上げておきたかったのだ。

留守はそろそろランクアップしそうなかつて奴隷だった例の五ゴブや、最近メキメキとクレリックとしての実力を伸ばしているホブ治くん。それに赤髪シヨートの教官役にした鈍鉄騎士や、王国ではなく俺に対して忠誠の剣を捧げて貴方のモノになりたいと言ってきた女騎士などに任せる事にした。

保険としてある程度成長した分体も三体程置いているので心配無用だ。

まあ、人間軍の目的はあくまでもエルフである。わざわざ離れた場所にある他種族の住処を襲おうとは思わないだろう。

午前十一時頃、俺はクマ次郎に跨り、他の皆はそれぞれの使い魔に乗って森の中を駆けていた。

向かう先は【魔法使い】の比率が少ないが、【重戦士】や【騎士^{ナイト}】など近接戦時に力を発揮する職業持ちが多く集まった部隊が駐屯している場所である。

隊員は六百名弱。亜人種は一人もおらず、全て人間で、全員が武勲で成りあがった兵士ばかりだそうだ。近くには他の部隊が居るの

で、短時間で削れるだけ削ったら遁走する予定である。

駐屯地には、一時間ほど走ると到着した。

昼間なのでアンデッド族による戦力増員はできないのは痛いのが、敵軍全体が見渡せる丘の上から観察した限り、特に注意しなければならぬ相手は赤黒い刀身に小さな棘が無数に生えた黒鉄の短槍を携え、神々しく淡い白色の光を宿した鱗鎧スケイルメイルを装備する、白く立派な髭を生やした老齢の騎士だけだった。

この特徴的な武具を装備した老齢の騎士だが、鈍鉄騎士と女騎士達から聞いて製作した“王国帝国強敵情報一覧表”の中に、該当する人物が一人いた。

帝国に所属し、若い頃は冒険者として名を馳せたアイゼン・リッターという名の男である。

黒鉄の短槍は帝国内の【神代ダンジョン】にアイゼン自身が潜って獲得した【遺物】エンシェント級のマジックアイテムで、銘は確か【呪刻の逆棘】。刀身が掠るだけで対象に強力な“呪い”を傷つけた回数だけ付加するという能力を持つ槍だそうだ。

装備している白いスケイルメイルは【呪刻の逆棘】を守っていた白竜を殺し、その素材から造ったマジックアイテムらしい。

是非とも槍と鎧、それに本人も含めて喰いたいとモノである。

最初に殺す相手は、厄介なアイゼンに決定した。敵の最大戦力には不意打ちをして真つ先に消した方がコチラの勝率は高くなるし、安全だ。

今まで大軍戦で使っていなかった朱槍をアイテムボックスから取り出し、バリスタ状に変形させた銀腕に装填。

暗殺成功率を上げる【職業・暗殺者】アサシン、バリスタで攻撃するので

効果を發揮してくれる【職業・射手】と【職業・狩人】、それに遠距離攻撃時の命中率と威力を上昇させる【投擲】と【針通し】ニードルショットを重複発動させた上で、アイゼンの胴体を狙って朱槍を射出。

俺達と敵陣中心部近くに居たアイゼンは目測で二百メートルは離れていたが、弾丸、というよりは赤い彗星のように飛来した朱槍は、狙い変わらずアイゼンの白竜の鱗製のスケイルメイルに守られた胴体を呆気なく貫いた。

可能な限り気配を消し、知覚できない距離と速度で飛来した強力な一撃は流石のアイゼンも防げなかったようだ。

何が起きたのか理解できない、と言っている様な最後の表情は印象的だった。

これぞ不意打ち最強伝説の始まりだ。

正々堂々などは豚にでも喰わせておけ。

所詮弱肉強食な自然界は生き残った方が正義なんだし。

などと、思考が脇道に逸れる。

気を取り直して、敵の様子を観察していく。

アイゼンを貫いた朱槍は勢いが衰えなかったので地面に深々と突き刺さってしまったのだろう、軌道上にある地面には穴が開いている。胸部が消失したアイゼンの死体の周囲には、何が起こったのかまだ把握できていない敵兵の姿があった。

アイゼンが死んだ事は認識しているようだが、その死の予兆が無さ過ぎて、幻覚のように感じているのかもしれない。

俺はそれを気にすることなく、ある程度ヒトが集まったのを見計らって、朱槍の能力を使った。

使った瞬間、何の予兆も無く、地面から朱槍が生えた。

突如足下という死角から発生した数え切れない程の朱槍に身を貫

かれて、一瞬で百名以上の兵士が死に、能力範囲である百メートル圏内に居たほぼ全ての敵が死にはしないまでも手傷を負う事になった。

圏内に居る敵兵全てを殺しても良かったのだが、それでは皆の取得経験値が少なくなるので自重した。

突然の攻撃に騒然とする様を嘲笑いながら、俺達は突撃していく。鬼熊にオルトロス、ハンドベアーにトリプルホンホースの走る速度は人間が乗る軍馬などの比ではない。瞬きの間に敵との距離を踏破した俺達は散開し、近くでまだ混乱している敵兵に対し、それぞれ手に持つ得物を振った。

オガ吉くんの 使い魔 であるハンドベアーの突進で敵はまるで人形のように弾き飛ばされ、周囲に炎禍を撒き散らす戦斧が【重戦士】の集団に向けて振られる。

混乱していながらも身体に染みついているのか、攻撃に反応して咄嗟に構えられた重層盾が戦斧の斬撃を防ぎ。しかし追撃として発生した炎禍までは防げずに全身を高熱で焙られるし、重撃に耐えられなかったのだらう、重層盾はくの子に折れ曲がってしまう。

ようするに、【重戦士】達は斬撃を防ぎはしたものの燃やされ、鉄を強引に捻じ曲げるような、交通事故にでもあったかのような鈍い音を立てながら後方に弾き飛ばされた。

守りなど、その圧倒的パワーの前には効果が無い様だ。相変わらず、凄い殲滅力だ。オガ吉くんが持つ【加護】の能力も上乘せする事により熱量などが上昇し、周囲に逆巻く炎は被害範囲を広げ、黒焦げの死体を量産していく。

周囲に炎禍を撒き散らし、重層盾を折り曲がらせて持ち手を吹き飛ばすだけのパワーがあり、突破困難なタワーシールドを所持したオガ。

間違いない、敵からすれば恐怖の的である。

その傍らでダム美ちゃんは【魅了の魔眼】を使い、抵抗レジストできなかつた敵を操って同士討ちをさせていた。

自分の手はあまり汚さず、被害を増やしていくつもりらしい。

ただ全てを洗脳できた訳ではない。アーツか、もしくはマジックアイテムか何かを使って【魅了の魔眼】をレジストして斬りかかってきた数少ない相手には、洗脳した敵ではなく、自分自身の手で処断するようだ。

【加護】によって扱えるようになった氷の能力で対象を串刺し、あるいは俺がプレゼントしたクレイモアでその身を刻んでいく。

殺した敵の血をシャワーのように気持ち良さそうに浴びるその様子は、美貌と合わさって妖艶で神秘的で、それでいて恐ろしいモノだと感じた。

爆音を響かせながら、アス江ちゃんのウォーピックが大地を砕いた。

ひび割れた大地が、逃げ遅れた敵を次々と飲み込んでいく。隆起した土壁が敵の逃げ場を奪っていく。

繰り出す攻撃の大半が大振りで隙が多い為、タイミングを合わせ敵が攻撃を仕掛けるが、地中でも活動する為防御力が異常に高いハイ・アースロード半地雷鬼なアス江ちゃんの防御力は鋼の剣程度では薄皮一枚も断つ事はできなかつた。

通常攻撃ではあまり意味が無い。

それを見てアーツをしようとした敵も居たが、アーツを発動する意識の僅かな隙を逆に狙われ、今まで繰り出していた大技ではなく、攻撃の出が早い岩を砕く拳や蹴りや体当たりなどによって、その肉を弾けさせて絶命していく。

アス江ちゃんの陽気で豪快な笑い声が響く。

スぺ星さんが魔術で生み出した濁流が、やや離れた場所に居る敵

兵を押し流す。

それは剣や槍や金属鎧などを入れた洗濯機に人間を放り込んだような攻撃だったので、巻き込まれた兵士の末路は悲惨なモノだった。死体が死体を量産していく様は、最早苦笑しか出なかった。

ブラ里さんが造った三十本近くある血剣が、敵をすれ違いざまに刻み、その血を吸って更に大きさを増していく。

高速で周囲を回転する血剣の範囲に入った敵が細切れになり、全身を血で濡らしてただでさえ赤いその身を更に赤くしていくブラ里さんは死神のようにも見えるだろう。

元々人間よりもスペックが上なモンスターが日々激しい訓練を続けた結果が、この一方的な大虐殺なのだろう。

などと思いつながら、俺は鍛冶師さん作の精霊石強化ハルバードを薙ぎ、敵の数を減らしていくのだった。

攻撃を開始して、二十分くらいか。戦闘は終了した。

最初の一撃で周囲を朱槍で取り囲んだので取りこぼしは無いし、一応全員に【隠蔽】を施していたので生き残りが居ても本当の姿は見られていない。今回の目的は十分達成できたので、まあ、こんなモノだろう。

使えそうな物資を掻き集め、朱槍を地中から引き抜き、殺した相手の血肉を喰っていく事に。

数が多いので糸を使って掻き集め、【消化吸収強化】と【吸血搾取】と【形態変化】^{イリア}を使用する事で効率良く取り込んでいく。^{ヴァンパイアラ}

【能力名】断風【のラーニング完了】^{アビリティ}

【能力名】嵐風【のラーニング完了】^{アビリティ}

【能力名】再生阻害【のラーニング完了】^{アビリティ}

- 【能力名】アビリティ【認識妨害】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【切り上げ】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【重斬撃】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【戦士の血統】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【騎士の血統】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【職業・双剣士】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【職業・斧術師】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【職業・槍術師】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【生存本能】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【同族殺し】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【腕力強化】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【鷹の目】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【職業・狂戦士】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【小心者の精神】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【職業・格闘士】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【武芸百般の心得】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【飛翔斬】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【弧月閃】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【千槍百華】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【連斬】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【重斧撃】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【畏生成】のラーニング完了】

そして今日のメインディッシュであるアイゼンを喰う事に。

鎧と短槍は喰わずにそのまま所持していても良いのかもしれない

が、今回は喰う事にした。

- 【能力名】アビリティ【聖十字斬り】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【職業・剣聖】のラーニング完了】
- 【能力名】アビリティ【職業・竜殺し】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【竜鱗精製】のラーニング完了
【能力名】アビリティ【呪刻の傷】のラーニング完了

満足行くハンティングに、ホクホク顔で俺達は帰るのだった。

“七十九日目”

通信機から連絡が入り、父親エルフに呼ばれた。

丁度赤髪シヨートと女騎士を相手に訓練していた所なので、その二人を護衛として連れていく事に。他は訓練か、あるいはハンティングが勉強かに振り分けた。

俺と赤髪シヨートはクマ次郎に、女騎士はクロ三郎に跨ってエルフの里へ。

事前に俺が行くと連絡していた事と、俺が人間を引き入れている事は既に知られていたのだろう、特に問題は起こらなかった。

まるで家畜を見る様な不躰な視線を向けてきたエルフには、【威圧する眼光】などで立場の違いを教えると共に強制的に視線を背けさせた。

父親エルフの屋敷に到着し、以前通された部屋に向かう。父親エルフが来るまで出されたお茶を飲んでいたのだが、ココには初めてくる赤髪シヨートと女騎士は相変わらず物珍しそうに周囲を見回していた。

それを咎める事はせず、俺は俺で遠く離れた分体が次々と収集してくる情報を纏めていた。

五分ほどだろうか。エルフ酒とコップを手に父親エルフがやってきたのは。

父親エルフの背後には俺が助けた娘エルフさんが居り、手には酒のツマミらしきモノが。

遅れて申し訳ないと謝罪され、まずは一杯と勧められる。

酒は娘エルフが注いでくれた。

当然飲んだ。摘まみも喰った。凄く美味かった。

上機嫌になった。

しばらくいい気持になって雑談して情報を交換した後、本題に入る。

話は依頼主である父親エルフから次の仕事の説明だった。

俺達とエルフの精鋭部隊で敵の主力部隊を強襲したい、という話である。里の周囲を包囲される前に、敵のトップを退けたいのだからだ。

まあ、長期戦は敵さんとしてもエルフ側としても望む所ではないのだろう。

敵さんはそもそも他の国との緊張状態が高まっているので、エルフとの戦争を切っ掛けにこれ幸いと他国が攻め込んできたとしても可笑しくない状況らしいし。

人間よりも優秀だがその分圧倒的に数が少ないエルフには既に結構な数の死者が出ている。負傷者には安全な場所で養生して欲しい、という思いはあるに違いないし。そもそも、エルフ側からすると今回の戦で得られるモノはあまりに少ないのだから、さっさと終わらせたいのだろう。

まあ、俺達は所詮傭兵である。雇い主の意向を無視する訳にはいかない。

それに今回の仕事は自由にやらしてもらえたいし、その分だけ報酬も貰っている。十分利益を得ているのだから、まあ、ココ等が潮時か。

欲張り過ぎても身を滅ぼすだけだしな。

大体の相談が終わり、帰還する事に。
その途中、女騎士からお願いされた。姫様の病を治す薬を送って
はくれないだろうか、と。

私の忠誠は貴方に捧げたが、貴族としての最後の奉公として、薬
だけは届けたい、と。

ふむ、と考える。

恩を売り、国のトップとの繋がりを持つ事は良いかもしれん。
何かあった時に国のバックアップが在るのと無いのではやはり違
ってくる。それに得られる情報などにも違いが出てくるし、普通で
はできない事が可能にもなるだろう。

しかし姫の病を治す薬を持って交渉しに行くのは、
終焉と根源
を司る大神の加護を持った黒オーガである俺。

パツと考えただけで色々と面倒事が発生しそうだ。王国帝国国民
の奴隷を所持しているって事もあるが、主に宗教とか宗教とか宗教
とか。

現在王国の王妃様はこの世界最大宗教である 五大神教 の信者
だそうだし、トラブルの香りしか漂ってこないぞ。

正直面倒な話ではある。だから俺が薬を持って行くという案は却
下だ。が、とある案が俺の中で完成した。

その案を色々と検証し、リスクとメリットを考え、メリットの方
が多そうだったのでその案を実行する事に決めた。

さて、明日の決戦に向けて準備をしなくては。

“ 八十日目 ”

午前四時。俺達は森の中を走り、人間軍の総大将として自ら戦場にやってきている次期皇帝（現在24歳）などの主戦力が居る駐屯地にやってきていた。

敵さんの数は約二千名。精鋭揃いで、例の奴隷部隊も含まれる。流石に本陣だけあって、周囲には歩哨の姿が数多く見受けられた。警戒が強い。

コチラの戦力は父親エルフが出してくれた五百のエルフを含めて約六百五十しかない。今回は人間を連れてこなかった。乱戦になつたら殺す可能性もあつた。ので、普通なら戦うという選択肢を避けるべきだ。

しかしだからこそ、俺達はこの時間帯に仕掛けるのである。

この時間帯ならブラックスケルトンを生成して数の差を覆せるし、俺は周囲の闇から消費される魔力を補充できるので消耗は無く、現在の光源は焚き火などしか無いのでそれを消せば闇が訪れるなど、暗視を持つ俺達にとって日中よりも有利な条件が整っているからだ。

だから闇雲に突っ込めばいい、という訳でもない。

アチラ側には種族的に俺達と同じかそれ以上の能力を発揮する魔物の奴隷部隊があるからだ。それをどうにかしないと、非常に厄介な事になる。

だから俺はブラックスケルトン・アサシンと分体、それと下忍コボルドを送り込む事にした。

鈍鉄騎士から聞きだした、奴隷部隊を使役する人物を狙うのである。奴隷部隊は首輪があるから従うのであって、それが無くなれば、それぞれ自由に動く事ができる。

なら、分体を奴隷の使役者に【寄生】させて首輪を外させればいい。幸いそいつは合成魔獣キメラも使役する魔術師らしいので、用が済んだ後殺せばキメラも動かせまい。

そしてその魔術師を殺して喰えば、俺がキメラを操れるようになるかもしれない。

などと、そんな事を考えてました。

いや、まさか奴隷部隊の首輪を全部外させた後に予定通り使役者を殺したら、キメラが使役者の死亡を感知して一時的に周囲の敵を自動的に襲う様になるとは思わなかった。

しかも高さが六メートルはある像と虎と蛇と蟹を掛け合わせたようなキメラが真っ先に狙ったのが近くに居て今まさに逃げようとしていた元奴隷部隊員だったのにも困った。即座に反応できなかった奴等が殺され、臨時戦力として考えていた奴等の数が大幅に減ってしまったのである。

それに加えてその騒ぎによって俺達の存在がバレてしまい、もっと静かに動いて徐々に数を減らしていくといった作戦が狂ってしまった。

しかしそれも仕方なしと諦め、俺達は攻撃を開始した。戦場では臨機応変でなくては死ぬだけだからな。

やがて太陽が昇った。

ブラックスケルトン達アンデッド族の動きが一気に悪くなり、壊される個体も増えてきた。

それに人間軍は雄叫びを上げて士気を向上させるが、陽光対策は既に確立されている。士気を上げて落とす為には、あえて一度何の對抗もせずに日の下にブラックスケルトン達をさらけ出していたに過ぎない。

その事を敵軍は知る筈も無く。俺は静かに嘲笑を浮かべた。

陽光対策は至極簡単な話で、ブラックスケルトンの全身を俺の分体がコーティングして日光を遮ってやればよかったのである。幸い

そこらに血の原料となるものが転がっていたので、大量の分体を生成する事は容易かった。

本来の動きを取り戻したブラックスケルトン達が、斬りかかってきた敵を逆に切り伏せていく。

分体も触手を伸ばして攻撃できるので、攻撃回数や攻撃力が無駄に上昇したブラックスケルトン軍の完成だ。弱体化から一気に強化された結果、敵の士気が落ちるのが手に取るように分かった。

想像してもらいたい。ただでさえ手古摺る敵軍が、強酸性の触手を何本も生やし、奇妙に統制のとれた動きで一心不乱に襲ってくるその様を。

士気が下がるのは仕方が無い事だった。

そんな光景を尻目に、俺は単身敵本陣近くに潜っていた。

【職業・妖術士^{ソーサラー}】の得意な状態異常攻撃で周囲の敵の認識力そのモノを低下させ、【職業・暗殺者^{アサシン}】や【認識阻害^{ハイディング}】、【隠れ身^{ハイディング}】などの隠密系アビリティを発動し、さらに保険としてマジックアイテム【隠者の衣】も装備しているからこそできる荒技である。

俺がこのような事をしているのは、一際立派な鎧を着た次期皇帝に接近する為だ。

しかし接近しても殺すつもりは無い。殺せば、流石に帝国も威厳とかの為にエルフを根絶やしにするまで諦めないだろう。被害がどれ程出ようとも、殺し尽くしにくるだろう。

それは避けなければならぬ。流石に帝国に本気でこられたら、数の差で容易く押し潰される。

父親エルフとはこれからも良き仲でありたいのだ。殺させる訳にはいかん。

などと考えていると、次期皇帝の背後をとる事に成功。

周囲にはヒトが居るが、誰も俺には気付いていない。ただし話しかけた次期皇帝だけは別である。

その耳元で俺は撤退するよう告げ、小瓶に入った病を治す為の紅い薬をポケットに滑り込ませつつその使用方法を教える。他にも色々ごによごによと囁き。

分かったかと聞くと、静かに頷いたのでその場から離れた。

これで用は済んだので、アス江ちゃんにお願いして両軍を遮る土壁を出現させてもらう。敵は半分近く削ったのだ、これで十分だろう。

アチラが土壁を壊す前に、負傷者と元奴隷部隊員の生存者と死体それにキメラの死体などをできる限り回収し、急いで撤退する。本当なら優秀そうな人間の肉も持ち帰って喰いたかったのだが、流石に時間が足りない。

戦闘中に色々つまみ食いしていたので今回は諦めるとしよう。キメラなどの戦利品もあったのだ。

我慢だ、我慢。

洞窟まで撤退し、負傷者の治療を行う。

重傷者を重点的に治療していると、撤退中に連絡して要請したエルフ軍の医療部隊も到着したので治療速度が上がり、手当が遅れて死ぬ者はいなかった。

その後エルフ達はカフス装着組を除いて皆帰還したが、一緒に連れ帰った約百名ほどの元奴隷部隊の面々はポツンと残される事に。

俺としても戦略の一環として助けたので、殺すつもりは当然なく、それぞれの意思を尊重するからどうかに行くならご自由に、とだけ

言った。

とりあえず一泊だけならさせてやるから、ココのルールは誰かに聞いてくれ、とだけ言って、外に出る。

今回の戦争で、初めて死者が出た。

死んだのはホブ・ゴブリンが三、ホブ・ゴブリンメイジが二、ゴブリンが五、コボルドが六、男エルフが四の計二十名である。

乱戦だったし、敵も強かった。この程度の被害ですんだのだから、僥倖だったとも言えるだろう。

幸い死体は回収できている。死体の心臓を喰らい、その死体はいつかの女性達のように燃やしてやる。

周囲には他の奴等の姿が在り、祈りを捧げたり、涙を流している者が多かった。

俺は別に悲しいとは思わなかった。涙も出る事は無い。

ただ、喰ったアイツ等の分まで意地汚く生きよう。

普段通り、そう思ったただけである。

死体が燃え尽きるのを最後まで見続けた後、戦闘で摩耗した武器の点検をしつつ、キメラの肉を喰う事に。制限時間内に喰わないと、折角持ち帰ったのに勿体ないからな。

【能力名【^{アビリティ}合成】のラーニング完了】

キメラを喰うと、面白いアビリティを獲得した。

どうもコレを使えば既に取得しているアビリティ同士を掛け合わせ、新しいモノにする事ができるそうだ。

が、流石に今日は疲れたので、元奴隷組の寝所を適当に用意した後、ゆっくりと温泉に浸かって寝室の俺製ベッドに寝ころぶ。

今回の物事が上手く転がって戦争が終われば、父親エルフとの契約は終わる。

その時は準備して外に行こうと心に決め、深い眠りに落ちるのだった。

八十一日目〜九十日目

“ 八十一日目 ”

昨日の戦いから得た経験値は量と質が良かったからか、大量にランクアップ者が現れた。

ホブ・ゴ布林クレリックだったホブ治くんは【半聖光鬼】^{ハイフ・セイントロード}と呼ばれる種族になった。

身長は百七十センチほどと小さく、手足も引き締まっているというよりは純粹に筋肉が少なくて細い。もやしっ子だ。そしてやけに白い肌と両手の甲に刻まれた例の黒い刺青は目立ち、肩まで適度に伸びた髪はやや銀色で、瞳の色は金色だった。スぺ星さんのように額の中心には白い“鬼珠”^{オーブ}が埋まっっていて、その隣に生えた五センチほどの小さな二本角が特徴的である。

肉体面のスペックはスぺ星さんのように他の鬼人種^{ロード}よりも低いそうだが、その分守りと治癒に秀でた種族だそうだ。

試しに奴隷に怪我をさせて治させてみたが、その治療速度は以前の比では無かった。

今度は固有能力の一つである聖力場^{フィールド} 薄い光の膜を想像してもらいたい を展開させてそれを俺が殴ってみたら、アビリティの無い状態では二十撃も耐えられてしまった。

相当頑丈な守りである。ちよつと悔しかった。

名前はホブ治くんからセイ治くんに改名する事になった。

ホブ・ゴ布林メイジで腐肉好きだったホブ浮ちゃんは、【死食鬼】^{グレイ}になってしまった。

最近では俺が生成したゾンビの腐肉を美味しそうに喰っていたかな、やっぱり成るだろうとは思っていたので驚きは少なかった。

グールは身体の一部が腐っているなどという事は無く、黒髪に生

気の抜けた青白い肌にはやはり黒い刺青があり、パツと見では平凡な人間の女性に見える。が、やはり腐肉を喰らい靈魂を喰えるようになった為か、何処か、ある意味で非常に危険な雰囲気纏っていた。

とくに最近では俺とオガ吉くん、あるいは俺とセイ治くんを交互に見ては恍惚とした表情を見せ、時には涎を零すのはどういう事だろうか。その度に寒気が走るのでもうにかしてもらいたいのだが、言ってもあまり意味が無い様だ。

名前はホブ芽ちゃんからグル腐ちゃんに改名する事になった。ちなみに浮が腐になっているのは誤字にあらず。

ホブ・ゴブリンの一人であるホブ芽ちゃんは全身各所に無数の目を持つ【百々目鬼】になった。

黒い長髪に百六十センチほどの女性体で、正直全身にある目のせいで美人かどうかは見る人によって変化するだろう。そして、最初から白い着物風の衣服を纏っていたので新しい衣服は必要ないらしい。

ちなみに着ていた白い着物風の衣服は“生体剣”の防具版 “生体防具”の一種だそうだ。

種族的に妖術を扱えるようになったが肉体能力がかなり低いので総合的な戦闘能力は低く、しかしその分情報収集能力が高い種族なんだそう。

なるほどなるほど。情報戦などで非常に活躍してくれそうなので期待しておこう。

名前はホブ芽ちゃんからドド芽ちゃんに改名する事になった。

それとかつて奴隷だった例の五ゴブを含む七体のホブ・ゴブリンは順当にオーガになっている。

七体のうち二体はメスオーガのだが、その姿は何と言うか、色々と凄い。何だろう、妙に迫力があるのだ。俺と同じくらいの大

さで、茶色い肌に刻まれた黒い刺青に筋肉隆々の身体。ワハハハと男勝りに豪快な笑いをするその様は、どこその戦場の姐さんという雰囲気撒き散らしていた。

一目見れば迷彩服を着て大型銃器を掲げ、戦場を駆け巡っては屍を量産していくその様を簡単に想像できるに違いない。

それぞれ改名する事になった。

ついでコボルド達だが、足軽が新しく六体増え、最初から足軽だったリーダーは【武士コボルド】になった。

その見かけだが、黒を基調とした着物と朱色の手甲具足を装備し、腰に黒鞘の太刀を佩いた東洋系の顔立ちの三十代後半男性に犬耳と尻尾を取り付けた様な姿である。

足軽時よりも顔や肉体などが明らかに人間よりになっていたが、三十代後半のむさ苦しいおっさんに犬耳尻尾とは、コレは酷い。

俺の感覚からするとどう見てもコスプレのようにしか映らないその姿には、思わず顔を背けても仕方が無いと思うのだ。

それに足軽だった時の犬頭時に『殿、殿』と甲斐甲斐しく色々としてくれていた時はちよつと可愛らしい部分もあったのだが、コスプレ武士の様になってゴツくなったその姿でやられると、色々と唸らされる。

まあ、外見は置いといて。

名前は足軽リーダーと呼んでいたので今後は武士リーダーと呼ぼうと思っていたのだが、どうもこの世界にはある程度以上の存在になると【真名】というモノを世界から授かるらしい。

それによると武士リーダーの【真名】は【秋風之辻】^{アキカゼノツジ}、と言うそうだ。

ちなみに、本来なら他人に【真名】を語るのは馬鹿がする事だ。理由として、真名を知られるか知られないかにより、呪いの効力や威力やら、色んな術技の強制力が上下するからである。

それを明かしたのは、生涯をかけて仕える為の簡単な儀式だった

からだそうな。なるほど、と頷き。普段使う名前を俺が考える事になった。ほら、普段【真名】は使えないだろって事だ。

そして悩んだ結果、秋風之辻改め【秋田犬】と呼ぶ事になった。いや、以前の顔つきが似ていたので、無意識にそう選択してしまったのかも知れない。

まあ、本人が納得してるんだから問題ないだろう。

それぞれに祝い品を贈った。

さて、今度は元奴隷部隊員についてである。

半数以上はそれぞれの故郷などに帰ると決めたのだが、旅費など先立つ物が何も無い状態である。

その為、洞窟の整地や外部演習場製作などに使う木の伐採などのバイトをしてもらい、働きに見合った分だけ人間軍から略奪した食糧や調理道具、金などを渡す事にした。ちなみに脱走兵であるが故に武器はあるので給料には含まれていない。

皆非力な人間ではないので五、六日もすればある程度旅費は貯まると思われる。コチラとしてもさっさと出て行ってもらいたいと言う思いがあるので、時給は非常に高いのだ。

そんな訳で、帰郷選択組について語る事はあまり多くない。

多いのは、残る事を決めた、つまりは傭兵団 パラベラム 戦に備えよ に入

団する事にした五十名についてである。入団理由としては既に帰る場所が無い、自由になったが生まれてずっと奴隷だったのでどうやって生きていけばいいかわからない、これからも血沸き肉踊る戦場で生きたい、恩を返さねば納得がいかん、などなど、様々である。

大まかな種族の分類と数は、

ロード 鬼人：3体。

ハーフ・ロード

半鬼人：5体。

ドラゴニユート
竜人：4体。
ハイフ・ドラゴニユート
半竜人：6体。
オオガ
大鬼：10体。
トロル
巨鬼：1体。
リザードマン
蜥蜴人：5体。
ドワーフ：5体。
デユラハン
首なし騎士：1体。
オロリン
猿人：3体。
ダムピール
半吸血鬼：1体。
レッドキャップ
赤帽子：3体。
ワータイガー
虎人：2体。
ケンタウロス：1体。

となつている。

正直、現在の構成員の大部分であるホブ・ゴブリンよりも強い種族ばかりだ。まだ俺達には居ない鬼人^{ゴート}や、それと同程度の能力を有する竜人^{ドラゴニユート}などは特に強力である。

俺個人としては別に入団させるのは問題ないのだが、流石に一度にこれだけの数を入れるには弊害が多い。俺は兎も角、他のは流石に納得しないだろう。

俺達は基本的に強い者こそ正義である。

それ故強い奴には従うし、そういう風になるよう俺が仕向けた。

が、やはり同族だった俺が頂点に成り上がったなどの事例は兎も角、いきなり知りもしない奴等が大量にやってきて、今までの地位を奪われて上に立たれたら、どうしたって不満が溜まる。

俺だつたら我慢ならん。

レッドキャップやリザードマン、ケンタウロスやドワーフ辺りはホブ・ゴブリンなら大半のヤツが勝てるだろうが、他のは一部を除

いたほぼ全員が勝てない。だから、何も考えずに入れてしまえば現在の上位層が著しく変わってしまい。

最悪内部分裂する可能性は、非常に高いと思われる。というか、ほぼ確実だろう。

ココまで鍛えたのだ、それは些か勿体ない。いや、むしろ将来性を期待するならホブ・ゴブリン達の確保の方こそが必須事項か。

一応強制的に離反させない術は多々あるが、前にも言ったように自主的に動いてくれた方が色々楽なのだ。

なので、とりあえず、優先順位が低い五十名は体験入団扱いとして、信頼を得るまでの一定の期間は一番下の雑用として扱う事にした。最低位であるゴブリンよりも低い地位、訓練兵のような扱いである。

そうすると、今度は元奴隷部隊員から不満が出た。

当然と言えば当然だが、『ごちゃごちゃと語るのは面倒なので工程を省略し結論を出すと、『我等が率いてやる』的な事を言う様になったのである。

そう喚いているのは鬼人ロドの直接戦闘系二名と、半ハーフを含む竜人十名そしてゴリラのように毛深くて筋骨隆々な肉体をした見るからにボス系の猿人オロリン一名に、半吸血鬼タムヒール一名の、総数十四名だ。

虎頭を持つ虎人ワータイガーや、首を小脇に抱えた首なし騎士デユラハン辺りも言うて来るかと思っただが、『受けた恩を仇で返すわけにはいかん』そうです。武人氣質な性格の様だ。

対応が楽なので、ちよつとだけ優遇しようと思う。訓練兵から二等兵になっただぐらいの扱いだけだな。

さて、『我等が率いてやる』的な妄言を吐き出した十四名についてだが、取りあえず立場というモノを教える事にした。

まず、鬼人ロード二名は同時に相手取った。

素のスペックが俺を遥かに超えた二名なので出し惜しみはしない。そして今回は鈍鉄騎士のように、エンチャントを施すなどは一切しなかった。

理由としては、【疾風鬼】ゲイルロードと【灼熱鬼】フレイムロードである二名の能力の相性が良いから、というのは実はどうでもいい事で、十四名の中で一番調子に乗っていたからである。

同じ【鬼】系統で俺が二名よりも下の種族だからと言って、一番楽しそうに喚いていたので、ちょっとプライドとか色々なモノを潰しておこうかと。

後で聞いた話だが、俺は不気味に嗤っていたそうだ。

そして結果だが、二名はギリギリ生きている、といったラインで転がっている。

時間としては大体五分くらいだろうか。二分が経過した辺りから鬼珠オープの力を解放し、疾風鬼ゲイルロードはエメラルド色の装甲を持つ風を纏ったロングブーツを、灼熱鬼フレイムロードはルビー色の炎が噴き出すフランベルジュをそれぞれ装備した。

だが、俺もそれに合わせて使っていないかった糸や毒などを使用する事で動きを封じ、最終的には銀腕の能力の一つである【武装殺し】アームブラストでそれぞれの武装を砕いてやったので、碌なダメージも受ける事なく終了した。

それと今回の事で判明したのが、鬼珠オープの力を解放して出現させた武装を壊すと、本体である鬼珠オープに亀裂が入ってしばらくの間能力を使用できなくなる。あと、その反動でしばらくの間は動けなくなる事も判明。時間が経過すればどちらも自然と治るそうなので心配はしていない。

とりあえず早速仕事ができたセイ治くんに治療させる事にした。

ついで、竜人ドラゴニオンの四名である。

半は自分よりも実力が上な鬼人ロード二名がボロクソになった様を見て、心変わりしてくれたのだ。楽な事である。ちなみに竜人ドラムニョーカサードマンと蜥蜴人の簡単な見分け方は、外見が人間よりか爬虫類よりかどうかである。なんて事は置いといて。

四名とも正確な種族分類では【雷竜人】サンダードラムニョーターだそうだ。

雷を纏い雷速で動ける、訳ではないが雷を発生させられるし、竜人特有の高い身体能力に加え、竜種が扱う【息吹き】ブレスの一種である【雷の息吹き】ライトニングブレスを使えたりと、十分強力な種族であるのには変わりない。

が、全く問題ないので四名同時に相手した。

こちらは鬼人ロード二名よりも容易かった。

理由として、既に【雷電攻撃無効化】を得ていたが故に、攻撃の一切を俺が受け付けなかったからだ。雷ライトニングブレスの息吹きを撃ち込まれようが、雷槍を撃ち込まれようが、俺はその全てを無効化した。雷は俺の体表に触れるか触れないかの内に、消滅してしまったのである。

【雷】という最大の能力は無効化した。したが、優れた肉体能力が無くなった訳ではない。マトモな戦闘技能があれば俺を殺す可能性はあつただろうが、今までは持って生まれた力を考えもせず振ってきただけなのだろう。

四名の技術は総じて拙く、数多のアビリティで強化し、竜人の肉体能力そのモノを凌駕した俺の敵ではなかった。

鬼人ロードの“鬼珠”オーブのように、竜人ドラムニョーターには“竜玉”スファイアと呼ばれるモノがあり、同じような能力を有していたが、脆弱すぎて、あまり意味は無かったと追記しておく。

コチラもセイ治くんにも思ったが、他の医療部隊員に実戦経験を積ませる為に其方に振った。

さて、今度はボス猿についてだが、コチラは竜人戦ドラムニョーターが終わり、セイ治くん達に指示し終えたその瞬間を見計らって、普通は死角であ

る背後から奇襲を仕掛けてきた。

それは【直感】などで悟っていたので避けても良かったのだが、奇襲、という事ではこの攻撃はほぼ完璧だったので俺はあえてそれを受ける事にした。気配の殺し方、機の見切り、足さばき、殴る際に用いた身体の効率的な運用法など、それ等の総合的な行為だけでボス猿の実力のほどが窺える。

種族的能力では鬼人^{ロード}などよりも劣るのだろうが、劣っているが故に培われたのだろう戦闘技術により、ボス猿はこの入団希望者五十名の中でかなり高い水準を誇っていると思われる。

岩さえ砕くだろう一撃が俺の脇腹に入り、俺の身体は岩壁に向かって飛んで、めり込んだ。

それを見てドラミングをし始めたボス猿。周囲にはその音だけがしばらくの間響いた。何事も無く復活してもいいのだが、奇襲されたので、コチラも奇襲してやろうと悪戯心を発揮し、しばらく様子を見る事にした。

そしてボス猿が『俺が今日からココのボスだ』と言い始めたくらいで、事も無げに岩壁から抜け出し。そのままボス猿の背後から全く同じ奇襲を返す。

それを察知できなかったのだろう、無防備だった脇腹に拳がめり込み、骨が砕ける音を響かせながらボス猿は吹っ飛び、俺と同じく岩にめり込んだ。生きているか確認して見ると、ギリギリ生きていた。ふむ、案外頑丈である。

ボス猿の治療は流石に時間が限られていたので、セイ治くんに任せた。

残る半吸血鬼^{ダムヒール}だが、コイツは待ち時間の間ダム美ちゃんを口説こうとしていたので手加減はしなかった。吸血鬼系^{ヴァンパイア}は総じて生命力が高いからな。よほどの事をしなければ大丈夫だろうし。という事だ。開始早々【魅了の魔眼】を仕掛けてきたが、同性である事で威力が半減、それにそもそもコイツレベルの魅了では俺に効果は無かつ

た。

【装具具現化】で造ったナイフで四肢を縫い付け、内臓を幾つか破裂する寸前まで殴る程度で終わらせました。

血を飲めば大抵の怪我は治るそうなので、俺の血を飲ましてやる。俺個人としては分体を体内に入れる、その程度の考えだったのだが、どうやら俺の血は相当美味しいらしい。血を一滴飲んだ瞬間から恍惚とした表情を見せ、赤い瞳が爛々と輝く。

恐らく【秘薬の血潮】とかが関係しているのだろう。

飲んだ血の量はちょ一杯分程度だったのだが、飲み終えた瞬間『おお、我が愛しの君よ』とか言い出して手の甲にキスしようとしたのには、本気で引いた。反射的に殴り飛ばしたとしても正常な反応だと思う。殴られて喜んでいいる風に見えたのは、きっと気のせいだと思っておこう。

気持ちが悪いだけなので、深く関わらない様にしようと今決めた。

そんな訳で、下っ端として働く事になった新入り全員に作り置きしていたカフスを装着させ、恒例の訓練を行う事にした。

皆それなりのレベルはあるので、今までにない位にハードなものにしてみました。

そして午後、ドワーフ五名は鍛冶師さん達の所で働かせる事にした。

ドワーフは鍛冶の腕に置いて一、二を争う種族だそうだ。腕力があるので兵士として前線でも十分使えるが、俺としてはやはり鍛冶に集中してもらった方が都合がいい。

鍛冶師さん達の方が鍛冶の腕が低いのでドワーフ達に教わるように指示し、最も腕の良いドワーフを鍛冶長に任命する。鍛冶師さん達は職人氣質の頑固親父のようなドワーフ達がちょっと苦手そうだったが、それは時間が解決してくれるだろう。

ドワーフがミスラルでどんな作品を造ってくれるのか、今から楽

しみである。

午後の訓練だが、まだ文句を垂れる新入りにオガ吉くんが毎日行っている訓練をさせてみる事にした。

バトルジャンキー
戦闘中毒であるオガ吉くんの訓練は、ブラックスケルトン十体を一度に相手取る事から始まる。それをクリアできるまで休憩は一切無く、そしてクリアできたとしても今度は数が十体ずつ増えていく仕様なので、相当厳しいだろう。

とりあえず死なない様に、かつ足腰が立たなくなるまでやるように言っておく。

そしてできた時間を使い、俺は【合成】を使ってみる事にした。

最初からアビリティ同士を合成するのは怖かったので、先日の決戦時に死んだ鬼人と竜人達から分体を使って回収していたオーブとスフィアを、俺の身体と【合成】させてみる事にした。

俺は死体から全てのオーブとスフィアを回収しようと思えばできたが、回収したのは十個だけである。

その理由として、人間軍が被った損害を少しでも軽減する為だ。流石に損害ばかり多くては、引くに引けない状態になる恐れがあった。

オーブとスフィアは非常に高額で取引されるし、強力なマジックアイテムになる。アレだけあれば、被害は多少軽減できるに違いない。今までも死んだら回収されていたそうなので、今更な話しかもしれないが、無いよりある方がいいに決まっている。

まあ、取りあえず俺はエメラルドのような二個のオーブを、自身の両膝と合成した。

結果、成功した。

疾風鬼のオーブであるその能力を解放すると、先ほど見たロン
グブーツの豪華版、のようなモノが発現した。肉体との合成に、大
きな問題はなかった。能力も問題なく使用できる。

これ幸いとして、俺は色々な【合成】に勤しんだ。

“ 八十二日目 ”

昨日の合成をして判明した事などを述べる。

合成は非常に疲れると言う事だ。体力的にはなく、精神的に。
十個あるオーブとスフィアを全て肉体と合成させた後、無くなっ
ても問題の無いアビリティである【陽光脆弱】と【光ダメージ脆弱】
を合成させた後、精神的な疲れのせいでこれ以上合成しようという
気持ちが湧かなかった。

やろうと思えばできない事もなかったが、集中力を欠いた状態で
コレ以上やると何か取り返しのつかない失敗をしそうだったので、
できるギリギリのラインで止めた。その為限界突破した後には合成す
るとどうなるかは不明なままだ。が、これは知らないでいた方がい
いと思うので知ろうとは思わない。

ちなみに合成させた結果できたアビリティは、【陽光ダメージ激
弱】である。試しに発動させた状態で指先を外の光に晒してみたが、
まさか燃えるとは思わなかった。

うん、人体発火は洒落にならん。封印決定だ。

そして合成させた二つのアビリティであるが、消えずに残っては
いる。が、能力を発動させようとしても効果を発揮しなかった。コ
レで合成に使用したアビリティを再び獲得できない、という事の確
認が取れた。

これからは慎重に合成していく必要性がありそうだ。

今日も新入りの訓練をオガ吉くんに任せる事にして。
俺はアス江ちゃん達と共に温泉や訓練所など、住処の更なる快適化に努力する事にした。

幸い休み不要のスケルトン達に加えて六十二名の男の奴隷にバイト達が居るので、一度に幾つもの作業を並行で終わらせる事ができた。

今回の作業で居住区の充実化、簡易ベッドなどの生成、衣服の充実、外部訓練所の整地、住処周囲に外敵の侵入を阻む木製の壁の製作、エルフ達から金を巻き上げる為の温泉施設の充実などである。

エルフ達も以前の俺達同様、水浴びなどしか経験した事が無いそうだし、エルフ達の反応を見る限り、温泉は結構イケると思っている。

今度父親エルフでも呼んで、噂を広めようか、と宣伝について考えていたりする。

本日の合成結果。

【竜鱗精製】 + 【鎧鱗精製】 = 【竜鎧鱗精製】
【見切り】 + 【視野拡張】 = 【刹那の瞳】
【血流操作】 + 【山の主の強靱な筋肉】 + 【腕力強化】 + 【脚力強化】 + 【跳躍力強化】 = 【黒鬼の強靱なる肉体】
【威嚇咆哮】 + 【鱗馬の嘶き】 = 【黒鬼の咆哮】
【蛇の魔眼】 + 【威圧する眼光】 = 【黒鬼の魔眼】
【下位ダメージ軽減】 + 【下位魔法ダメージ軽減】 = 【下位物魔ダメージ軽減】
【再生阻害】 + 【呪刻の傷】 = 【治癒せぬ呪刻の傷】

合成は疲れるので、今日はここまでだ。

“ 八十三日目 ”

午前訓練時、早速合成アビリティを使用してみる事にした。

手っ取り早く効果を確認する為、俺一人对新入り二十三名で組み手を行う事に。ちなみにこのメンバーを選んだのは、事故があったとしても代えが効く為である。

新入り達の種族と人数は、

ロイド
鬼人：2体。

ハイフ・ロイド

半鬼人：5体。

ドラムユニット

竜人：4体。

ハイフ・ドラムユニット

半竜人：6体。

トロル

巨鬼：1体。

デュラハン

首なし騎士：1体。

オロリン

猿人：1体。

ダムビル

半吸血鬼：1体。

ワイタイガー

虎人：2体。

である。

同じ戦場にいた為か、新入り達の連携はそこそこ良かった。とは言え、やはり技術の拙さが目立つ。動きに速さはあるが、単調で無駄が多過ぎるし、何より全体の流れが読み易かった。それでもノーダメージとはいかなかったが、回復系アビリティの使用で即座に回復できる程度のモノだった。

昼飯まで、休むことなく組み手をしました。かなり良い訓練になった。

ただ、五つのアビリティを掛け合わせてできた【黒鬼の強靭なる肉体】は取り扱いが面倒だと言う事が判明した。単純に強過ぎるた

のだ。訓練に使うには、余りにも危険過ぎたのである。
まさか、最もタフで防御力の高かった巨鬼トルが一撃で沈むとは思って
もいなかった。

そして午後、今日も住処の改善作業を行った。

温泉の準備も着々と進んでいる。エルフと人間の戦争も徐々に終
結に向かっていているそうなので、終わったら今度は人間の奴隷達を使
った作戦に移行する予定である。

“八十四日目”

朝、俺は俺を呼ぶ声に反応して起きた。

生まれたままの姿でベッドから起き上がり、皆が眠る部屋の外に
出ると、そこにはミスラルと精霊石と鋼鉄などを混ぜ合わせて精製
された、精巧な細工を施されているながら十分実戦で使えるだろう一
本のウォーハンマーを掲げた、ドワーフ達が居た。

そして、ドワーフ長からウォーハンマーを渡される。

え、何これ。と小首を傾げながら聞いてみると、ドワーフは感謝
や友好の印として、自作のウォーハンマーを贈る風習があるそうだ。
そして贈るウォーハンマーの質が良ければ良いほど、より良い思い
が込められているとの事。

なるほどと頷き、俺が扱うのは基本的に長物なのだがと思いつつ、
結構な業物っぽいので有り難く貰っておく事にした。

それにしても、会話はできるがドワーフなど言語系アビリティの
無い種族相手だと、理解できない方言が所々あってちょっと面倒だ。

本日は午前訓練の後、単身で森の中を放浪中。

既に敵となる存在が居ない森は、何故か俺の心に寂しさを感じさ
せた。

生まれた頃は常に周囲に気を配らなくてはならなかったのに、現

在では気配を隠さなければ俺の周囲からは生物が逃げてしまうようになった。そんなに月日が経過した訳でもないのに、あの危険に満ちていた日々が懐かしく、俺は黄昏る。

そして歩く事数十分。以前出逢ったドライアドさんの所に到着した。分体を使って以前から会話をしていたのだが、今日は用事があったので、直接来たのである。

相変わらずドライアドさんは美人だった。早速魅力全開で誘われたが、一先ず用事を済ませ、その後は二人だけの時間を過ごした。

その後、ドライアドさんから色々教えてもらった素材を回収しながら住処に戻り、夜は夜で色々燃えた。

人間の中にはお腹が膨れはじめた者もいるので、さて、誰の子が一番最初に生まれるのだろうか。

楽しみである。

“ 八十五日目 ”

食糧自給率を上げるため、畑を造る事にした。

種はドライアドさんが魔法で作ってくれたモノや、森から回収したモノを使用する。ドライアドさんの種は自然物よりも色々高性能らしいのだが、それに加えて俺は精霊石などを用いて成長力とか、効能とか、美味さとかのさらなる向上を図ってみる事にした。

という訳で、今日の訓練は簡単な基礎だけとし、皆で住処の整地やらの為に動きました。

畑関係は赤髪ショートや元補給部隊員の一部に農業関係の【職業】持ちが居たので、その指示にしたがって動くようにした。

今日は良い汗を流した。
健全な労働も、悪くは無い。

本日の合成結果。

【鱗鎧駆動】 + 【竜鎧鱗精製】 = 【堅牢なる竜鱗鎧】
【斬撃力強化】 + 【貫通力強化】 = 【斬貫強化】
【高速思考】 + 【並列思考】 = 【並速思考】

“ 八十六日目 ”

朝、目的地がココからあまり遠くない為、十分な旅費が貯まった
帰郷組の一部が旅立った。

既に情報の漏洩を防ぐための対策はしているし、一応口止めして
いるから、彼・彼女らが無事に暮らせるかどうかは、個人の誠意の
問題だ。

そしてそれを見送った後、男の奴隷の中から貴族である三十六名
を選出し、それぞれの家に帰す事にした。別に良心とかで帰してや
る訳ではない。平原まで引き返していた人間軍が本格的に撤収する
らしく、この機会に乗り、分体とダム美ちゃんの【魅了の魔眼】で
洗脳済みである彼等を帰す事により、帝国と王国内部の情報を収集
する為の“草”、つまり潜入^{スパイ}人工員として運用する為である。

俺は別に両国と敵対したい訳ではないが、何せ俺はこの世界につ
いての知識が乏しく、他者との繋がりも限定的だ。既に進行してい
る本命が失敗した時の為にも、使える手段はできる限りやっておく
ほうが、無難だろう。

朝のそんなイベントを終え、普段通り午前訓練を行い。

昼になって人間軍が完全に撤退し、草が無事合流できたのを確認
した後、父親エルフと通信機で連絡を取り合う。

契約の終了や報酬などについて最終的な確認をし終え、雑談をした後、今夜エルフの里で開かれるという【想魂の宴】に参加する事になった。

【想魂の宴】はエルフ族が行う、死者が家族や友、恋人などの事が心残りとなって現世に留まりゴーストなどのアンデッドにならないよう、皆で送り出す為の、ある種の儀式である。

そして夕方、新入り達と分体に留守を任せ、俺達は差し入れ品を持ってエルフの里に向かった。

今回、十三名に減ったエルフ達を連れて来ている。知り合いの追悼に参加させてやらない程、酷くは無いつもりだ。外見は【隠蔽】を使って変化させているので、正体を看破させる心配が少ないからでもあるが。

エルフの里に到着すると、宴は既に始まっていた。

会場に入る前から注がれていた様々な感情が混合した視線を無視し、出迎えてくれた父親エルフに狩ってきたバイコーン数頭分の肉を渡す。

そのついでに、俺の傍らに居て興味深そうに周囲を見回していた赤髪ショート達の安全を保証してもらった。人間を連れてくるのはどうだろ、とは思っていたが、本人たちの強い希望により、連れてきたのである。

流石に鈍鉄騎士と女騎士は置いてきたがな。

挨拶を済ませると、皆に交流でもして来いと言って解散させた。とは言え、本当にエルフ達と会話しようとしたのは極一部で、一ヶ所に集まって料理を摘まむ程度だった。

俺は俺で、娘エルフさんがエルフ酒を注いでくれたので、気分が良かったです。

そして宴の最後には、会場の中心に設置された巨大なかがり火の

周囲を白い球のようなモノが無数に飛び交い、天に昇っていくという光景が発生した。

父親エルフによると、これで現世に留まっていた死者の魂が天に還ったのだという。ホブ・ゴブリンシャーマンも、霊が居なくなっただと言っているのが本当なのだろう。

俺はしばらくの間、再び黙禱を捧げるのであった。

“ 八十七日目 ”

アス江ちゃんを中心となっていた採掘作業だが、二つの巨大な精霊石の採掘と共に、終了を迎えた。

精霊石が枯渇してしまっただのである。元々、ここでこんなにも様々な種類の精霊石を大量に採れたのは、精霊に好かれていた（らしい）ベルベツドのダンジョンがあったからこそだ。そしてベルベツト亡き後はダンジョンの管理者であるリターナが生存していたので精霊達も集まって、その余波として様々な種類の精霊石が発生していた。

が、リターナは既に逝ってしまっている。

その為、精霊がダンジョンに立ち寄る理由が消失し、既にある精霊石を採りつくしてしまえばもう精霊石は精製されないのだから、当然そこで終わりである。

ただ、俺達は既に十分過ぎる程の量を確保しているので、あまり欲を出し過ぎるのは止めておこう。

俺達がベルベツドの恩恵によって得た利益は凄まじいモノであり、感謝の念と共に、二つの巨大な精霊石に祈りを捧げた。

その後、もちろん精霊石を喰った。今まで喰った事の無かった精霊石だったからだ。

アビリティ

フォトンラー

【能力名】【光子操作能力】のラーニング完了】

アビリティ

トランス・フォトン

【能力名】【極光耐性】のラーニング完了】

アビリティ
グラビティロウ
【能力名】【重力操作能力】のラーニング完了】
アビリティ
トランス・ダイクネス
【能力名】【暗黒耐性】のラーニング完了】

喰った二つの精霊石　光精石と闇精石は、純度と大きさと美しさ、あらゆる点に置いて今まで採掘して得た精霊石を凌ぐ、最高品質のモノだった。闇精石を喰って重力操作とは些か首を傾げるが、ブラックホールなどを思えば、あながち間違いでもないだろう。それに【闇】という漠然としたモノより、【重力】と言われた方が扱いやすいので文句は無い。応用も効くしな。

午前訓練の後、住処の改築の進行具合の視察を行う。

その後俺は外に出る準備を進める事にした。赤髪ショート達とは街に連れていくと約束していたので、俺の所に残るかどうかはさて置き、馬車などの乗り物の確保は必須である。

別にペットを使ってもいいのだろうが、折角休み無用の手駒があるのだ。それを使う。

まず、【下位アンデット生成】でブラックスケルトンを量産。

その骨を掻き集め、その骨と【骨結合】を使って乗り物の製作開始。

完成したそのの外見だが、背中に荷台のようなモノを乗せた骨のムカデである。

そして大量に生まれている分体を使って全体をコーティングしていく。

完成だ。

完成した時には、既に夜になっていた。

晩飯を喰った後、赤髪ショートと鍛冶師さんと姉妹さんと錬金術師さんと呼んで三日後にココを出発する事に対しての打ち合わせをする事に。

追い出すの？ と聞かれたが、外に出るのは最初の約束を守る為であり、また仕事の宣伝とかの為であると説明。俺についてくるかどうかは、またその時に決めればいいと伝える。
今日は夜遅くまで話し合いである。

“ 八十八日目 ”

客人用の温泉が完成した。洞窟の内装が一段落した。
そして帰郷組は今日全員出立した。

一気に数が減ったが、元に戻ったと思えば大した問題ではない。
外に行く為に自前の保存食を造るとか、訓練とか、様々な雑務をこなす。

うむ、今日はイベントはあまりない平和な一日だった。

“ 八十九日目 ”

明日、俺達は五つのグループを造って外に出る事になっている。
理由としては経験を積むとか、情報の収集などが多々ある。しかし最大の理由として、この森では経験値取得効率が悪くなったからだ。

無論居残り組は居るので、住処が他種族に乗っ取られるなどの心配をする必要性は無い。

グループはどれも十人ピタリで、ペットは含まれていないのでペット持ちの数によっては数が微妙に違うとは言っておく。

そしてそれぞれのメンバーは以下の通りだ。

第一グループは、俺、ダム美ちゃん、赤髪ショート達五名、鬼人^{ロード}三名。

第二グループは、オガ吉くん、アス江ちゃん、ホブ・ゴブリック
レリック一名、人間三名、足軽コボルド四名。

第三グループは、ブラ里さん、スペ星さん、エルフ三名、人間一名、ホブ・ゴ布林三名、ホブ・ゴ布林クレリック一名。

第四グループは、オーガが二名、ホブ・ゴ布林メイジが1名に、^{ワタヤガ}虎人が二名、竜人が二名、人間三名。

第五グループは、ドド芽ちゃん、オーガ五名、人間二名、下忍コボルド一名、ケンタウロス一名。

人間がどのグループにも入っているのは、無駄な衝突の回避要員としてや雑用の為である。あと、新入りを何名か入れているのは、大した理由は無い。しいて言うのなら、気分だ。

しかし指名した本人たちは正式な入団試験である、などと勝手に勘違いしているようだが、真面目に取り組みそうなので敢えて訂正はしなかった。

セイ治くんやグル腐ちゃん、鈍鉄騎士や女騎士などは居残り組なので、手早く仕事を取り付けて外に連れ出そうかと思っている。

まあ、その前に新しい世代が生まれるかもしれないが。

さて、それは置いて。出立前日である今日、俺は父親エルフ一行を温泉に招待した。

客人用の温泉は洞窟内部にはなく、少々離れた場所にある。防衛の観点に加え、外からも入り易くする為だ。

父親エルフ達の反応だが、上々だった。気持ち良さそうにしていたので、宣伝を頼んでおく。

無論ルールとか、料金制であるとかの説明も添え、軽く料理を振舞ってみる。姉妹さん達のお陰で、ゴ布林コックとも言えるゴ布林が居るので、結構美味しい、と思う一品だ。

一行は満足げに笑っていたし、エルフ酒を樽でもってきてくれたので、そのまま宴会となった。幸い外部演習場があるので、キャンプファイヤーを囲んで好き勝手に踊ったり　音楽は無論俺が担当

した　と、盛り上がりを見せた。

新入り達も日が経つにつれて少しずつではあるが、馴染んできて
いるようで、メンバーに混じって一緒に踊っている姿も見受けられ
る。良い傾向だ。

俺はその光景を見ながら、父親エルフと杯を交える。

いや、飲み友っていいよな。

“ 九十日目 ”

遂に出立の日である。

加工済みのブラックスケルトン達はストックも含めて多数いるの
で防衛面の問題はなし、俺が不在の間にも色々と改築作業は進め
ていく予定だ。

エルフ達からは温泉などで親睦を深めると同時に利益を得る予定
である。まあ、温泉運営は退屈しのぎというか趣味の部分は多いの
だが、十分だろう。

住処の細かい事は置いとくとして。既に準備は万全である。

俺達は今日初めて、森の外に本格的に進出する。

森を抜けた先にある風吹く草原が、俺達を迎えた。

未知なる外界に思いを馳せて。

目指すは、取りあえず防衛都市　トリエント　なり。

第一章 生誕の森 黒き獣編 終了。

閑話の後、

第二章 傾国の宴 腹黒王女編 に続く。

閑話 見解の相違とは自覚し難いモノである

【赤髪ショート視点】

「時間軸：二十七日とそれより数日前の話」

簡単な、ありふれた依頼クエストの一つになるはずだった。

しかし、そうじゃなかった。実際には滞りなく終わる事は無く、この依頼クエストは失敗してしまったのである。

私達ではどうする事もできない障害が、待っていたが故に。

今回のクエストの内容は 星神亭 という中小規模の行商人ペトラーの団を、防衛都市 トリエント まで盗賊やモンスターから守りながら送り届けるという、冒険者の定番なクエストと言ってもいいものだった。

本来は私のような駆け出し冒険者では信頼や力量不足から受注できないランクのクエストだけど、今回は、冒険者組合クラン 弱者の剣に所属していたので同行する事ができた。

何事も経験だ、とクランマスターが取り計らってくれたのだ。

その為本来なら十名かそれ以下の人数で行われるはずのコレに、私のように駆け出し冒険者が十八名、引率役として中堅冒険者である先輩方が六名の、計二十四名が参加する事になった。

人数が人数なので収入は弧雀スハロクの涙ほどしかないけど、経験を積むためだと思えば我慢できる。

最初は良かった。

今回進む街道は国から総合統括機関ギルドに定期的なモンスター討伐依

頼が出されている区画であり、最近モンスターが掃討されたばかりで、他と比べれば遙かに安全になっていたからだ。

それでも完全に危険が無い訳ではなかったが、モンスターと遭遇したのは駆け出し冒険者達が経験値稼ぎとして狩る、“ミステッド”と呼ばれる七十センチほどの大きなニワトリに似たモンスターの小さな群れが二、三回出てくるだけで、危険と呼べるものではなかった。

その他に道中では大した危険も無かったので、私と同じく初めての護衛クエストを行っていた仲間を含め、皆そこまで緊張する事はなかった。暇な時間も多かったので必然的に話が弾み、女の冒険者は今回私だけだったけど、皆気さくなヒトばかりで気楽だったし、先輩達の話は今後の為になる情報に溢れていた。

それに護衛対象である 星神亭 に四人の女性が居た事も大きい。【鍛冶師】であるエメリーからは試作品だと言う指輪やネックレスを格安で売ってもらえたし、【料理人】であり姉妹であるフェリシアとアルマからはお菓子を分けてもらえた。【錬金術師】であり年上で寡黙だったスピネルさんは話してみると優しく、自作なので市販されるモノよりも少々効果は落ちるらしい体力回復薬を一本だけ譲ってもらえた。

市販されているモノよりも劣るとは言え、ライフポーション体力回復薬を譲ってもらえたのは、今の私にとっては非常に大きな意味を持つ。

コレ一つで私の命が一度は救われる、ライフポーションかもしれないのだ。冒険者に必要なアイテムの一つである体力回復薬は、効果に比例して高額で、駆け出しである私程度では手が届かなかったから、持っていなかった。

だから、何よりありがたかった。

思いがけない収入があったりしたので、この時の私は油断していたのは間違いない。

今回も滞りなくクエストは終わって、皆で酒場で飲もう。といった話になるはずだと、この時の私は本気で思っていたのだ。

しかし、そうはならなかった。

始まりは、林の中から唐突に飛来した矢が先輩方の身体に突き刺さった瞬間からだった。

どうやら矢には即効性の毒が塗られていたらしく、慌てて治療を試みたモノの、先輩達は泡を吹きながら死んでしまった。初めてヒトが死ぬ所を見た訳ではないけれど、それでも慣れている、とまではいかなない私は先輩達の死体に思わず自分を重ねてしまい、そのせいで思考が停止しかけた。

しかし忘我している暇が、私達には無かった。

何故なら、奇声と共に近くの林の茂みから飛び出した大量のモンスターが居たからだ。

「　　ツアアアアア！」

気合いの咆哮を上げながら、高名で現役の冒険者である伯父から饑別として貰った唯一の品　鋼鉄製の愛剣ショートソードを横一閃。
それとともに、

【ルベリア・ウォールラインは戦技アーツ【斬撃スラッシュ】を繰り出した】

伯父から教え込まれて体得した、【職業・戦士アーツ】ならば誰でも扱える基礎とも言える戦技を上乗せする。

愛剣の刀身に赤く淡い光が灯り、必殺の意思が刃に籠る。

目の前の敵　緑色の肌に尖った耳と醜悪な面が特徴的なモンスター。通称>山賊^{バンディット}ゴブリン<と呼ばれるゴブリン族の一種　の頸部を切り断たんと放ったその一閃は、しかし、私の一撃を受け流す様に斜めに傾けられたショートソードで軌道を変えられた。

鉄と鉄が衝突した際に起こる耳障りで甲高い音が響き、散らばる火花。敵の刃毀れの目立つショートソードの表面を私の愛剣が削っていくその衝撃に私の手がビリビリと痺れ、舌打ちが漏れる。

手が痺れて愛剣を握る力が少しだけ弱まるが、大丈夫、問題は無い。まだ戦える。

だが、どうやら目の前のバンディットゴブリンはそうでないらしい。先ほどの一撃の衝撃で発生した痺れのせいだろうか、その手からはショートソードが無くなっている。

少々離れた場所に、飛んでいってしまったのだ。

恐らくこれは、戦闘職に関して“10”と低レベルな【職業・戦士】しか持っていない私だけど、冒険者になる一ヶ月前まで家族と行っていた日々の農作業により鍛えられた職業レベル“48”の【^{ファーマー}職業・農婦】がもたらしてくれる筋力・耐久補正による差に違い。

日々の農作業によって私の腕は逞しく、手の皮は硬く頑丈で、だから私は愛剣を落とすことはなく、反撃に移せたのだろう。一瞬だけあの日々を思い返し。

だけど、今は過去を振り返っている時ではない。手首を返し、今度は袈裟懸けに愛剣を振り下ろす。今度こそ斬る伏せると思いながら。

しかし今回もギリギリの所でバンディットゴブリンが掲げたラウンドシールドに阻まれてしまった。ラウンドシールドを小破する事はできたが、致命傷を負わず事はできなかった。

敵も必死だ。

だが、それでもバンディットゴブリンの体勢を崩す事には成功した。

ヨタヨタとバンディットゴブリンが後退する。

その隙を逃がす事無く、獣の皮で造ったのだらうハイドアーマーに覆われていない剥き出しの大腿部、そこを狙って、再び斬撃スラッシュを繰り出した。

「ッシ！」

【ルベリア・ウォールラインは戦技アーツ【斬撃スラッシュ】を繰り出した】

アーツにより切れ味が上昇した刃は肉を切り裂き、硬い骨に勢いがやや殺されはしたが足を斬り飛ばす事に成功した。

片足を失い、その傷口から噴き出す鮮血が周囲を濡らす。斬られた足を必死で押さえながら激痛で呻くバンディットゴブリンに止めを刺すべくショートソードを上段に掲げ、重心の移動や全身のバネなどを使って繰り出した渾身の一撃を脳天に叩き込む。

今度は防がれる事も無く、ザグシャ、と肉が切れて骨が潰れる感触が全身を駆け抜ける。頭蓋を叩き潰した結果飛び散る脳漿と鮮血が私の革鎧レザーアーマーの一部を汚した。

洗濯しなければと意識の片隅で思った瞬間、

「ルベリアアツ！！ 後ろを殴れッ」

最近仲が良くなってきた同年代の男性　チャールズに声を掛けられて、考える間も無く背後に振り返る。同時に、左手に装備したラウンドシールドを前方に突き出した。

【ルベリア・ウォールラインは戦技アーツ【盾打シールドバッシュ】を繰り出した】

背後に回って不意打ちをしてこようとしたバンディットゴブリンの顔面に、青く淡い光に包まれたラウンドシールドが衝突した。

声に反応して咄嗟に出した攻撃だったので、それが決まった事に私は驚きつつ。

アーツによって本来以上の硬度を獲得したラウンドシールド越しに、グシャリと鼻が折れて顔が潰れる生々しい感触が全身に伝わる。鼻血を吹きだしながら、バンディットゴブリンの身体が大きく仰け反った。

【盾打】^{シールドバッシュ}の効果の一つ、【仰け反り】^{ノックバック}だ。

できたその隙を逃さず、ショートソードで首を切り落としにいく。アーツは体力と精神力を消費する為、今回は使用しなかった。ココでアーツを使っても過剰殺害^{オーバーキル}になるだけで、隙が生まれるからだ。そして私の斬撃は事前に体勢を崩していた為、防がれる事無くバンディットゴブリンの首を切り裂いた。

動脈が切れて勢いよく鮮血が噴出する。肉を斬る手応えと、骨を断つ時にやや刃が欠ける感触が手に残る。

また研ぎに出さないと、などと思いの片隅で考えていると、視界の隅で私を狙う敵の姿が映る。敵は棘付きの棍棒を振りかぶった状態で、体勢的にラウンドシールドの防御も、ショートソードで防ぐ事もできそうにない。

守りが間に合わない。そう判断した私は咄嗟にバックステップを刻んだ。

「ク　ッ！」

ブウン、と風切り音を響かせながら振り抜かれた棍棒が私の前髪を揺らしたが、それだけだ。ダメージはなく、私は距離をとる事に

成功した。

しかし、それこそが敵の狙いだったらしい。

「グギャキャキャキャ」

「な、バンディットホブゴブリンが何でココに　　ツツー！」

背後の死角に息を潜めていた強敵　　バンディットホブゴブリンが奇声を上げながら襲ってきたのだ。

ゴブリンの上位種であるホブゴブリンは、人間の一般男性の平均値をやや越えた身体能力を持つ、駆けだし冒険者が一度は越えなければならぬモンスターとして有名だ。

私は以前伯父が捕まえてきたホブゴブリンと闘った事があるのだが、一対一だと殺すのにてこずった厄介な相手である。ゴブリンのように闇雲に突っ込んでくるのなら対処は簡単だが、ホブゴブリンはゴブリンよりも知恵が回る分強いのだ。

そして今回は状況も相手も悪い。

普通のゴブリンよりも知能がやや高くて厄介なバンディットゴブリンを従える事から、この敵はランクアップしてバンディットホブゴブリンに成った個体に違いない。そしてランクアップを経験している個体は伯父によると、最初からホブゴブリンだったモノより優れた身体能力と技能を有している事が殆どらしい。

その理由にも納得できる。

生物を多く殺し、レベルを上げて下から成りあがったモノが、最初から持って生まれた者と同種になった時に劣る筈がないからだ。努力は、人間もモンスターも等しく強くするのである。

間違いなく強敵であるバンディットホブゴブリンの拳が私を殴らんと繰り返され、それは咄嗟に構えたラウンドシールドで防御する

事に成功。

しかしアーツを使う余地が無かったせいか、ラウンドシールドは嫌な音を響かせて小破し、巨大な何かが衝突してきたような感覚がした直後、私の身体は後方に飛んでいた。

一瞬何が起きたのか理解できず、しかし重力に引かれて地面を勢い良く転がった時には理解できた。

簡単な話だ。先ほどの攻撃の威力は、私程度の力では耐える事ができない程強力なモノだったと言う事だ。

攻撃を受け止めたラウンドシールドは殴られた部分がやや壊れてしまったし、左腕の骨は折れてはいないだろうけどしばらくの間は満足に動かせそうにない。それに転がった時に頭部を石か何かで強かに打ちつけたのだらう、痛みと流血で、意識が朦朧としてくる。

派手に溢れた血が、目に入って視界を赤く染めた。

このまま倒れて休みたいと言う思いが湧き上がるが、しかしそうすればどうなるか、知っているだけにその選択肢はあり得ない。

血が出るほど歯に力を込めて、痛みでギシギシと軋む身体に鞭を打ち、剣尖を地面に突き刺した愛剣を支えに何とか起きあがる。足はガクガクと小刻みに振え、片側が赤く染まった視界が揺れるが、それでも立つ。

目の前のバンディットホブゴブリンはそんな私に即座に攻撃を仕掛けはせず、人間と似た顔立ち　ただし不細工だ。今までみたホブゴブリンの中で最も醜悪だ　に、人間と変わらない知性を帯びた瞳で私を見据え、下卑た笑みを浮かべていた。

その様は外見や体色などを引けば、下賤な人間の男と変わらない。盛り上がる股間がそれを如実に表している。

精神的なモノと、腹部から湧きあがる吐き気を抑え、周囲に助けを求めて視線を走らせる。

確かにバンディットホブゴブリンは強い。強いが、例え駆け出し冒険者だろとも数の利で押し潰せない程の相手ではない。三人も

居れば、比較的簡単に殺す事ができる。三人と言わずとも、二人居れば何とか倒せるに違いない。

誰か、誰か。血で視界が滲む左目を擦りながら、必死で周囲の様子を見渡した。

しかし、皆それどころではないらしい。

今回の要にして司令塔だった先輩方が一番最初に殺された事で、皆の意思がバラバラだったからだ。駆け出しであるが故に危機的状況下でどうすればいいのか分からなかったのだらう。

残された戦力は私を含めた駆け出し冒険者が十八名だけなのだから、こんな時こそ一致団結しなければならぬと言うのに、集まって反撃しようとしているのもいれば、逃げようとして後ろから斬られているのもいるし、飛来した火の玉で燃やされ　って、メイジも居るのかッ！！

バンディットホブゴブリンに加え、魔術という強力な術を行使してくるメイジが居る事に、私は視界が暗くなる様な錯覚に襲われた。メイジ相手では、駆け出し冒険者などただの虐殺対象に過ぎない。そりゃ、弓などの遠距離攻撃法を持つ場合は、工夫すれば何とか戦える。時には殺せる事もあるだらう。しかし私のように遠距離攻撃法を持たない戦士では、剣が届く間合いに入る前に魔術で殺される事が殆どだ。

力量に差があれば殺すのは容易い、と伯父は言っていたモノの、今の私では無理な話しである。

私は冒険者である伯父の手解きがあったからこそ今のように戦えはしたが、それでも戦況を覆す事ができる力量はない。まったく無い。

先ほど声をかけてくれた、私よりも力量がやや上なチャールズも、目の前のバンディットゴブリン二匹を同時に相手取っているので、私を助ける余裕はないだらう。むしろ、助けに入るべき状況である。

戦況は最悪だ。

でも、諦めたくない。諦めれば、その後どうなるかは冒険者なら知っている。

捕縛され、連れ去られ、無理やり犯され、望まぬ子を孕まされ、そして死ぬまでの間ゴブリンの子を生み出すだけの存在にされる。家畜のような、存在にされる。

それは、嫌だ。絶対に嫌だ。

殺されるのならばまだいい。しばらく前に親は逝ってしまったし、恋人も居ない。私に生きる術を叩きこんでくれた伯父には悪いけど、現在の私は死ぬ事にあまり忌避感はなかった。

だから、殺されるのならいい。まだ、受け入れられる。

だけど、犯されて家畜のように死んでいくのだけはお断りだ。

「……めて、や……」

フィールドバック

腰の雑囊から、スピネルさんから貰ったライフポーション回復薬を取り出す。

運がいい事に割れていなかったそれを、一気に嚥下する。

口内に広がる、仄かな甘さ。それと同時に身体の節々の痛みが引いた。左腕も問題なく動かせる。それに疲労感も無くなっていた。

凄い効果だと思った。市販の品よりも劣ると言う話だったけど、今の私にとっては十分過ぎるほどの回復量であるらしい。

これで、まだ戦える。

「諦めて、やるもんかッ!!」

咆えて、駆ける。

敵を殺す為に。

ダメだった。

あの後、なんとか数体を斬り伏せたけど、チャールズ達を殺して集まってきたバンディットゴブリン達に取り囲まれ、最終的には気絶させられて捉えられてしまった。今は四肢を縄で拘束され、騒がない様に猿ぐつわを噛まされて住処に運ばれている最中だ。

ゴブリン族の言語は聞きとり難いが、会話から断片的にはあるがもうすぐ住処に到着すると言う事は分かった。

正直、最悪だと思った。

私を倒したバンディットホブゴブリンの膨らんだ股間が脳裏を過る。下卑た笑みを見せるその顔、下品な笑い声を上げるその口が近づいてくる幻影を見る。

嫌だ、あんなので、あんなのに犯されたくない。嫌だ、嫌だ、嫌だッ、嫌だッ、嫌だッッッ！！

そう思えど、しかしそれは最早逃れ得ぬ未来だった。

猿ぐつわによって舌を噛み切る事もできず、四肢も縛られて動かせないので逃げれない。隙を見て壁に頭を打ち付けて死のうにも、それが許されるとは到底思われないし、できたとしても全てが終わった後だろう。

汚された、後だろう。

運ばれている最中、何度も【運命の神】である シックザール様に祈りを捧げた。

この世に神は確かに実在する。可能性は低いけど、それでも祈りを捧げる事で神々が応えてくれる事も、無くはない。

私はまだ一度も応えてもらった事はないけれど、それでも、僅かな希望に賭ける程、追い詰められていたのだ。

しかし変わる事の無い現状に私は祈るのを止めると、顔を上げた。そこで、守れなかった、守る事ができなかった、現在の私と同じ境遇下にある人達 エメリーに、フェリシア、アルマ、スピネルさん達と目があつた。

そのどれもが、私を責めてはいなかった。それが余計に、私の胸を引き締める。

胸が痛む。涙が出る。弱い自分に吐き気がした。戦う術を持たない皆は私を気遣ってくれたのに、戦う術を持っていた私は自分の事ばかりに気を取られている事に、どうしようもなく恥ずかしくなる。恥じて恥じて恥じて、皆に目で謝った。心から、謝罪した。弱くてごめんなさい、と。

その後で、死んだ父母の顔が浮かんだ。それに、伯父の顔も。

涙が止まることなく流れ出る。父母には私ももう少しでそっちに行くから、伯父にはただごめんなさい、と思う。涙は、止まる事が無い。

そして、やや離れた場所に洞窟が見えた。

ああ、終わった。という思いが胸の中を駆け巡り。

しかしまだ私の運は尽きていなかったようだ。

涙で滲む視界の中に、何かをしていた 思い返してみれば、戦っていたのかもしれない ゴブリン達と、一人だけ体色が黒いホブゴブリンが現れた。

それを見て、私は目を疑った。それは自分の状況に考えを巡らせる事が一時中断されるほどの、驚愕だった。

黒いホブゴブリンなど、噂にも聞いた事が無かったからだ。

確かに、鉾山などの洞窟に住む褐色の肌を持つマインゴブリンなどは存在する。存在するが、ココはマインゴブリンではなく緑色の肌をしたバンディットゴブリン達の住処であり、何よりマインゴブリンの肌はあくまでも褐色である。

あのような、闇のように全てを塗り潰すような濃い黒色ではない。

だからあの黒いホブゴブリンは、数多く存在する神々のどれか一柱から加護を受けて【亜種】に【存在進化】ランクアップした個体なのだろうと思いを。

そこまで考えた所で、近づいてきていたその黒いホブゴブリンは口を開いた。

「ソノ女性タチハ、俺ガ預カラセテモラエナイカナ？」

表面は優しげで、しかし圧倒的強者の威圧を伴った声音が響いた。彼は　そう、彼は、表現し難き魅力カリスマをその身に宿していたのである。私の運命は彼と出逢う様に、既に決まっていたのかもしれない。

私は、私が持っていない“力”を持つ彼に、ただただ惹きつけられるばかりで。

ココから、私の激動の運命が始まりを告げた。

【赤髪ショート視点・終了】

【女騎士視点】「時間軸：六十八日目」

太陽が沈み、月光で照らされた森は人外の世界となる。

夜の森を歩くのは、如何に大軍だと言えども自殺行為だ。過去、夜の森を進軍したとある国の軍が全滅した事例も、幾つか実在する。それ等は全て、闇の中を自在に動くモンスター達に襲われたからだ。

その為、私たちは森の中でやや開けた場所にテントを張り、焚き火をするなどして野営地を設置し、休息をとっている。勿論警戒を怠ってはいない。交代制で見回らせているし、それに加えて周囲には使用者よりも低位のモンスターを退かせる効果を持った魔術の結界が張られている。

結界を張った魔術師は我が家と親交のある冒険者であり、その実力は折り紙つきだ。エルフの軍か、この森最強のモンスターであるハインドベアーが複数同時に現れるか、あるいは【山の主】と呼ばれる赤いハインドベアーが近づかない限りは、この結界は破られる事は無い。

その安心から今の私は鎧を脱ぎ、エストック型の魔剣 リュヌ・ヴァン 月の風

を置いて楽な格好になっていた。太ももと肩が露出したデザインのもの、以前男の従者には上から何か羽織って欲しいと言われた服だが、折角動きやすい格好なのだし、面倒なのでそのままにしている。

それにしても、なぜそんな事を言うのだろうか？ とやり取りを思い出して小首を傾げていると、私が居るテントの中に結界を張った魔術師 ワイスリィ 殿が入ってきた。

「お疲れ様です、テレーゼ殿。今日は見事な指揮でございました」

「うむ。ありがとう、ワイスリイ殿」

「しかし、些か気が早まっているようなご様子。あまり力を張られていては、本番で仕損じる事になりますぞ？」

「そうかもしれぬ。が、姫の病を治すには、早くこの戦を終わらせねばなりません。それに私はできる限り、エルフと我等連合軍双方の被害を出したくは無いです。」

私は、できる限り流す血を流したくはない。血を流せば流すほど、恨みや怒りは大きくなるばかりですから」

彫が深く、精悍な顔立ちをしたワイスリイ殿の瞳を正面から見据えながら、私はそう言った。

私の瞳を真っ直ぐ見つめ返しつつ、ワイスリイ殿は微笑みを浮かべる。

「優しいですな、テレーゼ殿は」

「命を奪っている時点で、優しくはないとは思いますが……。褒め言葉として、受け取りましょう」

私は微笑みを浮かべる。

そしてグルル、と不意に私のお腹が鳴った。何が起きたのか、一瞬分からなかった。

「……………」

「……………」

しばしワイスリイ殿と見つめ合い、先ほどの痴態のせいで顔が徐々に赤く染まっていくのを自覚する。

顔が火照り、汗が出てくる。私は慌てて誤魔化す様に話題を切り出した。

「そ、そう言えば夜食がまだでした。ワ、ワイスリイ殿も夜食がまだなら、い、一緒に食べませんか？」

「くくく。……ええ、ありがたく、頂きましょう」

小さく笑うワイスリイ殿が頷くのを確認し、私は恥ずかしさを我慢しつつ部下に指示を出して食事をテント内に運ばせる。

私はこの部隊の指揮官だが、一応ココは既に戦場である。運ばれてくるのは普段のように香辛料を使った豪勢な食事ではなく、造るのが簡単な野菜たっぷりのスープと硬パンに、ジャーロウ牛のハムそして独特の酸味がクセになるラングドの実といった、質素なモノだ。

簡易テーブルの上に運ばれてきた料理の前に紅茶で唇を湿らせ、喉を潤し、その後で夜食のパンをスープに浸して頬張った。

疲れている為、質素ながらも普段食べているモノよりも身体に染み込んでくるそれを意識して噛み、その味を堪能する。うん、美味しい。

食欲に突き動かされるままに食べていく私の手の中から一つ目のパンは直ぐに無くなり、二つ目のパンに手を伸ばす。

その様子を可笑しそうに見てくるワイスリイ殿の視線に気づき、疑問を投げかけた。

「ワイスリイ殿、何がそんなに可笑的なのか？」

「いや、いや。普段は気丈なテレーゼ殿が、あまりにも可愛らしく食事するので、ついつい見惚れていただけですよ」

「ヒトの食事を見て見惚れるとは、ワイスリイ殿は些が変わった趣味でもあるのですか？ それは気が付きませんでした」

「いや、決してそんな訳では無いのだがね……」

「ならば、どういう事か？」

「うーむ。どう言えばいいのだろうね。私の立場的に直接的な事を言うのは流石に不味いし……しかし遠回しに言っただとしても伝わるかどうか……。ふむ、どう言えばいいのだろうなあ。これは、難題だ」

苦笑し、本気で悩みだしたワイスリイ殿の顔を見ながら、私は二つ目のパンを食べ終わる。あとパンを八つほど食べるつもりだが、流石にまだ一つも手をつけていないワイスリイ殿を放置して食べ続ける訳にもいくまい。誘ったのは私の方なのだから。

考えるのを止めさせるべく声をかけようとした、その瞬間。パリン、と何かが碎ける乾いた音が周囲に響いた。

その音は、鏡がガラスが碎けた音に似ていただろうか。

「ん？ なんだこの音」

「馬鹿なッ！」

音が何なのか疑問の声を上げる前に、ワイスリイ殿が立ち上がって言葉が途切れる。

ワイスリイ殿の顔には、明らかに驚愕の感情が浮き上がっていた。

「ど、どうなされたワイスリイ殿？」

「私の結界が、破られたのですッ。何が来るかは分かりませんが、敵がきたのは確実。早く装備を着けて下さい」

ワイスリイ殿がそう言い終わるかどうかのタイミングで、今度は敵の攻撃だろっ轟音が轟いた。

その衝撃で地面とテントが激しく揺れる。バタバタバタバタ、とテントに何かが衝突する音が鳴る。幸い軍用のテントだった為に布は丈夫で破ける事は無かったが、俄かにテントの外が騒がしくなりだした。

情報収集の為、耳を澄ませる。

『敵襲————！！ 敵襲————！！』

『総員戦闘準備ッ！ 死にたくない奴はさっさと動け————！！』

『痛て————！ 痛て————よお——！！』

『腕が、俺の腕があああああッ』

『魔術の砲撃を確認ッ。敵にはメイジがいるぞッ。魔法使いは何でもいから早く魔術を防げッ』

『衛生兵、衛生兵——！！』

『敵を確認ッ。敵はアンデッド族！ 繰り返す、敵はアンデッド族の大軍だッ——！！』

『死ぬな、死ぬんじゃねー！！』

『寒い……寒いよ、ママン』

『密集し過ぎるなッ。魔術で狙われるぞッ——！！』

テントの外から聞こえてくる声を聞き、私は急いで鎧を装着し、
魔剣 リュス・ヴァン 月の風 を手に取った。そして最後に、専属の鍛冶師に鍛え

させたエンチャント済みマントを羽織る。私は盾を持たないので、このマントが盾の代わりをするのだ。

私の仕度が済んだのと同時に、背後に位置するテントの出入り口から人が飛び込んできた。

足音から人数は二人で、この気配はよく知る人物である。

「失礼します隊長ッ」

「敵は黒いスケルトンの大軍です！ その他にもホブゴブリンメイズが何体か確認されていますッ」

報告を聞きながら静かに振り返り、私はただ命令を下す。

二人の副官　二十二歳にして【司祭】^{ピシヨップ}となつたベーンと、紅の甲冑を着た同性の剣士であるレビィアスに向けて。

「敵は殲滅します。ついてきなさい。ワイスリィ殿も、我等と一緒に」

「勿論です。勝ちましょう」

「ええ、当然です」

血はできるだけ流したくは無い。あの言葉に偽りは無い。

しかし、ココで私が率先しなければ部下が死ぬ。ならば、私は情けを殺す、敵を殺す為に。部下の命を救う為に、私は敵の命を奪う。その覚悟を今一度抱く。

そして私達は戦場に赴く。ただ勝つと心に決めて。

この時のテレゼの瞳には戦いの決意が宿っていた。その姿は美しく、高貴で、人を率いるのに十分過ぎるほどの魅力を発していた。しかしこの時のテレゼは知らなかった。テントの外には今まで屠ってきた敵とは違い、武人からすればただ絶望を感じさせるだけの“武”を積み重ねてきた大鬼が居ると言う事に。

月夜に輝く月の光とテントを燃やす紅蓮の炎によって、視界は万全とは言えないまでも見えない事は無い。戦うには、十分な光量である。

しかし敵の体色が黒、というのはいささか厄介だ。光の届かぬ森の闇に伏兵が居るかもしれない、その為敵の正確な数が把握しきれない。今戦っているのがほんの一部かもしれないと思うと、戦意が萎えそうになるが、それは気合いで跳ねのける。

それに加え、黒いスケルトン一体一体の強さが普通ではない。技量が高く、タフで、そう簡単には殺せないのだ。

スケルトン種はその身を包む“魂魄具”によっておおよそのレベルが推察できるが、ほぼ全身を覆う武具からみて、かなりの高レベルモンスターであるのは間違いない。何故こんな所にこのレベルがこんな数も、と思わずには居られない相手であった。

だが、私はそれでも進む。進まねばならない。

私の立場が戦場で立ち止まる事を決して許さないのだから。

幸い、今宵は月が出ている。月夜は魔剣 リュクス・ヴァン 月の風 の最大の能力が発揮できる日だった。

正面から、一体のスケルトンが駆けてくる。

その手には黒鉄で造られ、黄金で彩られた両手斧。強力な一撃を

放てる代わりに相応の重量のあるそれが、モンスターの膂力によって高速で迫る。肉の無いスケルトンはしかし、魔力で動いている為に見かけ以上の膂力があるので厄介だ。

だけど幸い、常識はずれな程とは言えなかった。あの程度の速度なら、対処は容易い。

より速く、より鋭く、より無駄のない軌道で突きを入れる事だけを考えて、私は歩を進める。私の殺意が刃に宿った。

【テレーゼ・E・エッセルマンは戦技【アーツ聖域の薔薇】を繰り出した】

【リユヌ・ヴァン魔剣 月の風 ユニークスキルの固有能力【リユヌ・ヴァン月の風】が発動しました】

リユヌ・ヴァン魔剣 月の風 の刀身がアーツによって赤く淡い光を宿し、更に月から降り注ぐ魔力を吸収して発生させた螺旋風を纏う。

「 シッ! 」

黒いスケルトンの両手斧は リユヌ・ヴァン月の風 が纏った螺旋風によって強制的に軌道が逸れ、私の側面を通り過ぎ、地面に斬痕を刻んだ。

それに引き換え、私の攻撃は剣尖がスケルトンの頭蓋骨に軽く突き刺さっただけだ。貫通させるつもりだったのだが、やはりスケルトン種に刺突攻撃は効果あまりないらしい。とは言え、既にこのスケルトンは終わっていた。

刀身に宿っていた赤い光がスケルトンの中に侵入し、次の瞬間にはスケルトンの全身に赤い薔薇の紋様が広がった。

【テンブルナイト聖堂騎士】持ちだけが扱える戦技【アーツ聖域の薔薇】によって発生した赤い薔薇の紋様には、大半のアンデッド種にとって致命的である【神聖神聖】属性がある。

全身に赤い薔薇の紋様が浮かび、【神聖神聖】属性によって存在する力を失った黒いスケルトンの身体から煙が立ち上り、骨が結合力を

失って周囲に散らばった。

その残骸を踏みつけ、蹴飛ばし、攻撃を仕掛けてくる新たなスケルトンを相手取りつつ、私は大声を出した。

「ベーンツ。広域浄化神術はまだですかッ？」

「後少しだけお待ち下さい、隊長」

「隊長、後ろが隙だらけですよ」

「ッ。感謝します、レヴィアス」

「そう言う貴方も、後ろがから空きです」

「うわッ、熱ッ！！ ちょっと近いですよ、ワイスリイさん！」

「わはは。戦場で油断する方が悪いのです、よ」

ワイスリイ殿の手から炎の塊が射出され、三体のスケルトンを一度に燃やす。しかしそれでも動きを止めないそれ等を、レヴィアスが刃で粉碎する。一度燃やされ、脆くなっていたのだろう。

私達はお互いに助け合う事で戦えている。しかし、全体的な戦況はコチラが押されていた。

周囲の兵士を掻き集めてそれぞれに指示する事で何とか対抗しているが、やはり、敵が多過ぎる上に一体一体が強いからだ。

だが、高レベルの聖職者であるベーンの広域浄化神術が成功すれば、半径五十メートル内のスケルトンを浄化、あるいは弱体化できる。コレが決まれば、戦況は覆せる。

そう思った。しかし、現実はそのなにごくなく、残酷なようだ。

「 ツー！！ 」

「 ツ 」

「 な、 」

「 うお 」

「 きゃー！ 」

敵味方入り乱れた戦場に、咆哮が轟いた。いや、コレを咆哮と呼んでいいのだろうか。

地面が振え、身体の底から揺さぶられるようなコレは、立派な攻撃法だと言えるだろう。竜や巨人など一部のモンスターが使う様なハウリング砲撃に近い。

反射的に耳を押さえながら、咆哮が聞こえた方向を見る。

そしてそこに、居た。

赤い刺青を全身に刻み、この森で最も強いモンスターであるはずのハインドベアーに跨った、銀色の左腕を持つ黒い鬼が、周囲の黒いスケルトンの主が如く雰囲気醸し出してコチラを見つめていた。鬼の種族は大鬼オーガ。優れた身体能力で知られるオーガは本来棍棒など扱いが単純なモノを愛用する筈だが、しかしあのオーガの手にはその巨軀に見合った巨大なハルバードの姿が在った。

革のズボンを着いて上半身が剥き出しの状態は普段見掛けるモノだが、しかし、ハルバードの構え方からして素人ではないと分かる。その姿から、普通種ではなく亜種であると確信した。褐色の肌を持つマインオーガではなく、本当に黒い肌をあのオーガは持っている。

黒と言う事は、終焉と根源の大神の属神のどれか一柱から【加護】を与えられているに違いない。それも、あの色の濃さから相応な上位神だろう。恐らく【死海の神】か、【冥府の神】辺りの【加護】持ちに違いない。

非常に厄介な相手と判断せざるをえない。しかし厄介な分、黒いスケルトンの軍団についてはこれで納得できた。

スケルトン達は、恐らくあのオーガが生み出している。情報が少な過ぎて判断するには些か早計かもしれないが、【直感】もあのオーガが原因だと言っている。

ならば、狙うは黒きオーガただ一体。製作者を殺せば、スケルトン達は自壊する。

「あの黒いオーガを殺します。ベーンは広域浄化神術の発動の後、全員に支援魔法バウを施しなさい」

「了解です、隊長」

「ワイスリイ殿は魔術で、レヴィアスは私と共に前線にて足止めを。他の者も続きなさい。あれは、一気に攻め殺さねばならない相手です！」

「了解ッ」「」

部下を引き連れ、私は先頭を走る。

黒オーガに到達するまでに立ちふさがってきたスケルトン達は、走りだした直後にベーンが発動させた広域浄化神術によって消滅するか、あるいは動きが鈍くなった。

弱ったスケルトン達を砕き、あるいは突き飛ばしながら私達は黒オーガを攻撃可能範囲にまで接近した。

そして、同時にあり得ない声を聞いた。

「状況判断能力はまあまあ、か。纏う魔力も上質、と」

黒オーガが、流暢な人間の言葉を喋ったのだ。普通、オーガは知能が高いメイジでも片言で喋る程度だと言う話なのに、黒オーガはまるで人間のように喋ってみせた。

それに心底驚愕しつつも、今更止まれるはずもなく。いや、止まるつもりはなく。私達は突撃した。丁度その時背後からベーンの支援魔法が私たちに付与され、疾走速度が飛躍的に上昇した。

身体がまるで羽毛のように軽くなったのだ。

突然速くなった私達を見て驚いた表情を見せるオーガを観察しつつ、好機、と感じる。

ハインドベアーに跨った分の高さがある黒オーガの心臓と高さを合わす為、私は地面を蹴り碎きながら跳躍した。地面を砕く程の力の跳躍だ、ただの跳躍ではない。

まるで矢が射出された様な速度で、私の身体は跳んでいた。

敵との高さが等しくなり、心臓を狙える位置と速度を得た。先ほど屠ったスケルトンの時と同じように、刀身に殺意が込められ、赤い光が宿った。

【テレゼ・E・エツケルマンは戦技アーツ【聖域の祭壇】を繰り出した】
ハイリヒトゥーム・アルタール

私が繰り出せるアーツの中で、最強の一撃だ。

オーガなので【神聖】属性ダメージ量はアンデッド程極端に多くはない。だから私が選んだ戦技アーツは、直接魂魄にダメージを与える【霊光】属性が付与された【聖域の祭壇】ハイリヒトゥーム・アルタールだった。

これで心臓を貫ければ、幾ら強靭な生命力を持つオーガとも言えど致命傷を負う。これは幾体もオーガを屠ってきた事から知っている。例えば亜種と言えど、そこまで大きくは変わらないはずだ。

致死の一閃が宙を疾走する。

敵は私の動きに反応できていない。例え反応できたとしても、敵の攻撃を逸らす能力がある螺旋風で私が致命傷を負う事は無い。故に、この一撃は黒オーガの心臓を貫ける。

そう思っていた。確信していた。

しかし結果として攻撃は届かず、私の身体は気が付けば空に向かって舞い上がっていた。

どうしてそうなったのか、意識が現実を追いつかず、

「隊長ッ」

しかし落下点に居た部下に身体を受け止められた時の衝撃で現実に引き戻された。

どうしてこうなったのか振り返り、黒オーガの姿勢を見て、そこで何となくだったのが理解する。私は掬い上げられたのだ。ハルバードの斧頭とは逆に在る石突きの方を使って、私が気が付けない程の速度で、しかし痛みを感じない様にそっと添えられて、下から空に打ち上げられたのだ。

それを理解した瞬間、ブワツ、と嫌な汗が噴き出した。

何時、ハルバードを動かしたのかさえ見えなかった。黒オーガが本気だったら、私は先ほどの一撃で斬られ、殺されていたに違い無い。なのになぜ、私は生かされたのか。

その理由は、すぐに出た。

「よし、貴女は生かして捕えよう。色々と有用そうだ」

黒オーガが私を値踏みしていたのだ。生かす価値も無い様な存在

なのか、殺すには惜しい存在なのかどうか。それを見極める前に私が攻撃をしたから、見極める為に殺さなかったのだらう。

その考えに至り、怒りが湧きあがる。私はとある貴族の娘として生まれ、育ってきたが、しかしその前に一人の騎士として、武人としての自負がある。誇りがある。

どうとでもなる相手と見下されたままでは、収まりがつかない。

我慢ならない。私は怒っていた。

「ほざくな、オーガの分際で。貴様は私が、断つ」

「ふむ。その気概やよし。貴女は思っていた以上に、良い女なようだ」

「我が名はテレーゼ・E・エツケルマン。シュテルンベルト王国王女に仕えし騎士なり。我が欲しくば、その力を示すが良い。我を倒せたなら、その後は好きにしる」

「俺の名は、オガ朗。一応、傭兵団団長をやっている。俺からも一言だけ言わせてもらうが、全力で来い」

「当然だ。コレ以上の言葉は不要、後は刃を交えるのみぞ」

「ああ、そうしよう」

互いに名乗り合い。

そして、稲妻のような速度でハルバードが私の頭上へ振り下ろされた。

速い。ただ単純に、その一撃は速かった。黒いスケルトンの斧とは比べ物にならない程の速度だ。それに刃から薄らと水の飛沫が跳んでいるのが見えた。斧頭に、何かしらの細工があるのかもしれな

い。
それでも慌てることなく私はハルバードの一撃を螺旋風で逸らそうとし、しかしその時初めて気が付いた。螺旋風が、何時の間にか消えていたのだ。

原因を考える前に、私は反射的に横に跳ぶ。螺旋風が無ければ、この一撃は到底防げるモノではない。受け身を考える暇さえなかったのだ、私は無様に地を転がった。土で鎧が汚れる。

しかし汚れた程度、どうと言う事は無い。地を砕いた一撃を避ける代価としてなら、安いモノだ。

「良い反応だ。ますます、欲しくなった」

「貴様、奇妙な力を持っているな」

「何故、そう思う?」

「貴様が、普通ではないからだ」

黒オーガの目が見据える。その隙に、背後から迫っていたレビィアスのシミター型魔剣 トランブ 斬り裂く焔 が黒オーガの脇腹を斬り裂く軌道で振われた。奇襲のタイミングも完璧で、アーツが付与された一撃は黒オーガの肉を斬る、かに思えた。

しかし斬れなかった。レビィアスの方を見る素振りさえ見せずに動かされたハルバードの柄で防がれたのだ。

慌てて距離を取ろうとするレビィアスは、しかし腹部を石突きによって強かに突かれた。幸い胴鎧を着ていた為ダメージは軽減されているようだが、小さな穴が穿たれ、血が流れ出ている。どうやらあのハルバードの石突きは尖っているらしい。

痛みでレビィアスの動きが鈍る。そこに伸びる銀腕。

このままでは捕まってしまう。そう感じた私は自然と動いていた。

月の魔力を改めて吸収させ、螺旋風を再展開。コチラを向いているハインドベアーの頭部を狙う。足場が崩れれば、多少なりとも隙ができるはずだ。

そう思っていた私の予想は、再び裏切られる。

「甘い」

突き出した剣尖の軌道上に、突如水球が発生した。

中空で渦を巻くそれを私は突いてしまい、そして、刀身を包む螺旋風は逆向きに回る水球の渦によって相殺され、螺旋風が解けた。

「なッ」

これは魔術ではない。魔術独特の魔力の波は感じない。ならばこの水球は何なのか。その答えが出る前に、黒オーガが動いた。

「狙いはよかつたんだが、な」

レヴィアスの胴体を銀腕で掴んだ黒オーガは、私を見る。

その瞬間、私の心を恐怖が蝕んだ。身体が竦んで、身動きが取れない。私を見抜くその瞳から、眼を逸らす事ができない。

殺されると、そう思った。あれは、餌を見る捕食者の眼だ。

「ルイド・ファラ・ラクス
“蒼炎の槍衾” ツ！！」

動けない私の横を高速で通り過ぎる、蒼く燃える炎の槍が三十本。その全てが私を見据える黒オーガに向かった。

ルイド・ファラ・ラクス
第三階梯魔術“蒼炎の槍衾”。使用者は、ハイ・ウイザード【高位魔術師】である
ワイスリー殿で間違いなかった。

蒼炎槍はオーガ程度を殺すのには余りある威力を秘めている。通

常よりも強い黒いスケルトンでも直撃すれば即座に燃え、炭化する程の熱量がある。近くにいるだけで熱波が全身を舐めまわし、身体が熱くなる。

例えオーガ亜種だろうとも容易く殺し尽くせる、そんな魔術は。

しかし呆気なく碎かれた。

「遅いな」

近くにいたため黒オーガが小さく呟いたその声を私は聞き。

それと同時に、黒オーガに迫る“蒼炎の槍衾”ルイド・フアラ・ラクスは先頭から順に、激しく瞬き、蒼い残り火を残して形を成さなくなった。

三十本の蒼炎槍は全て、たった三秒ほどで何も燃やす事無く消えた。その後に残るのは、無傷のハインドベアーと黒オーガ。

その姿と、先ほどの言葉で黒オーガが全て叩き潰したのが何となくだが理解できた。

しかしどうやって？ 当然の疑問が私の脳裏を過る。

「テレゼ殿ツ。早く後退されよ！」

後方からワイスリイ殿の怒声が飛んできた。その言葉にハッと我に帰る。

蒼炎槍を防ぐために両腕を使ったのか、銀腕に捕えられていたレピアスも既に下がって治療を受けていた。今最も黒オーガに近いのは、私だった。

慌ててバックステップで距離をとる。

追撃に備えるが、しかし黒オーガは何処か虚空を見つめて何かを言った。

「ふむ、あの魔術師も有用そうだ。

オガ吉くん達、あの一団は

基本的に捕獲する方向で」

「貴様、何を独り言を」

「ん？ ああ、ちょっと標的の確認をしていたただけだ」

「何の」

私の声は、しかし黒オーガを包囲するために右側に移動させていた兵士数名が胴体を切り離された事で途切れた。夥しい量の鮮血が切断部から噴出し、臓腑が飛び出し、切り離された上半身が激しく回転しながら地面に転がる。

そして、死体は激しく燃え上がった。

何が起きた、と反射的にそちらを見れば、そこには二体目のオーガがいた。その皮膚は黒ではなく、赤銅色で、黒オーガよりもさらに大きい肉体をしていた。手には体格に見合った巨大な両刃の戦斧と、巨躯の四分の三ほどを隠す黒く巨大でかつ強固なタワーシールドがある。

一目見て、まるで城壁のようだという感想を抱く。

それに傍にハインドベアーを従えたその姿は、黒オーガ程ではないにしろ危機感を感じさせた。

「オガ朗、適当二殺しテ喰ってモイいか？」

「まあ、程ほどにならな。いいぞ」

「分かつた。手強そうナノハ、捕まえる。他は、喰うかヲナ」

「ああ、それでいいから、さっさと行け」

オウ、と答え、赤銅オーガはハインドベアーと共に、私達とは離れた場所で戦っていた兵士達の所に駆けた。

速い。三十メートル程の距離は即座に踏破され、戦斧が水平に振られた。するとまるで雑草を刈るように、近くにいた兵士数名の胴体が切断される。二つに斬り分けられた死体が、先ほどと同じように燃え上がる。

間違いない、あの戦斧はマジックアイテムだ。それもかなり高ランクのシロモノに違いない。何故あんなモノを、と思う中、私は黒オーガに視線を戻した。

赤銅オーガも目を離していい存在ではないが、黒オーガは更に危険だからだ。

ギリギリと間合いを計っていると、耳元で声がした。独特の響きから、魔術で届けられた声だと判断する。

『テレゼ殿、少々時間を稼いで下さい。私の奥の手で、黒いオーガを殺します』

「了承した。どれ程の時間を稼げば？」

『無茶を承知で、二分ほどお願いしたい。それと、できればあの銀腕を封じて欲しい。可能なら、斬り落としてもらいたい』

「厳しいですが、やってみます」

『お願いします』

ワイスリイ殿の声が消え、後方から詠唱が聞こえた。

それと同時に立ち上る魔力を感じた。途轍もない速度で練り上げられ、どんどんと膨れ上がるそれに、全ての過程が終了して生み出される“結果／魔術”の規模が脳裏に過る。

これは恐らく、先ほどのよりも一つ上 第四階梯級の魔術に違いない。城壁を粉碎するレベルの破壊を齎す魔術だ。

それに反応したのか、黒オーガがハインドベアーから降りた。そして、コチラに歩いてくる。

その瞳はワイスリイ殿が居る方向を向いていた。詠唱を中断させるつもりなのだろう。

その前に、私は立ち足はだかる。そうせねばならない。

「これより私たちはワイスリイ殿を全力で守ります。レビィアス達は左から、貴方達は右から、貴方達は後方から、そして私は正面から、黒オーガを切り崩します。ベーン達は絶えず私たちに支援魔法を、黒オーガには阻害魔法を」

「了解、体内魔力が尽きるまで頑張ります」

「あのクソ野郎。絶対、斬ってやる」

「その意気、です！」

タイミングを合わせ、攻撃を仕掛ける。

全ては黒オーガを殺す可能性を秘めた、ワイスリイ殿を守り、時間稼ぐ為に。

約束の二分の内、一分が過ぎた。しかしその為に払った代償は、決して安くは無かった。

ハルバードの斧頭から発生した水刃で縦に両断され、臓腑を撒き散らした者。銀腕で胴を貫かれ、頭部を喰われた者。額の角で串刺しにされ、仲間と共に押し潰れた者。突如発生した焰に包まれ、炭となって崩れた者。ハルバードの穂先から迸った雷槍に貫かれ、内臓を焼かれた者。

ただ黒オーガを留める為だけで生み出された死屍累々。

それに重軽症者も入れれば、黒オーガによつて齎された被害は甚大だった。

今黒オーガの前に立っているのは、私だけである。

シミターを砕かれたレビィアスは地に倒れ、体内魔力を使い過ぎたベーンは“魔力欠乏症”によつて気を失っている。他の兵士も、地に倒れてうめき声を上げていた。

だと言つのに、黒オーガは無傷でそこに立っている。掠り傷一つない状態だ。私達の攻撃は全て、見た事も無い動きや技法によつて叩き落とされたからだ。

「貴女の指揮は適切だった。前後左右から、攻撃部位を散ばせた一斉攻撃は、流石に捌くのが難しい。だから、これほど時間が必要だった。けど、これでお終いだ」

黒オーガは言う、事実を、淡々と私に向けて。

その声音には嘲笑などの色は無く、不可思議な事に、称賛の色があつた。

「貴様は、何故、そんなにも強い」

レビィアス達同様、私も無傷ではない。全身各所に細かい切り傷は数え切れないほどあるし、利き腕である右腕には少々深い裂傷があり、大腿部には小さなナイフが刺さっていた。ナイフは、黒オーガが何処からともなく取り出して投げてきたものだ。

そんな事は予想していなかった故に、防ぐ事ができなかった。

既にベーン達神官団が倒れた後だったので、回復も見込めない。余力があればナイフを抜いて自分で治すのだが、その余裕は無いと考えるべきだ。治療行為を行えば、即座に黒オーガが攻めてくるだろう。

私が率いる部隊は、既に崩壊したと言っても過言では無い。今や、周囲では掃討戦が繰り広げられている。いや、“狂宴／饗宴”と言った方が良いかもしれない。

今の私達の野営地は、悲鳴と雄叫びと剣戟の音と血の香りで充満しているのだから。

黒と赤銅のオーガ達が現れて、戦況が一変してしまった。たった一分ほどで、こうなった。

圧倒的過ぎる。

「なぜ、そんなにもお前は強い？」

私は無意識の中で嗤いながら、黒オーガに質問を投げかけていた。嗤っていたのは、そうするしか精神を保てなかったから、かもしれない。

「そう感じるのは、お前達が弱いからだ。日々の鍛錬が足りず、ただレベルによる肉体強化や戦技テクニックなどの派手な技に頼る戦い方がそうさせた」

「私達の鍛えが、足りない？ 日々汗を流し、土や血に塗れたあの日々が、無駄だと言うのかッ！！」

「ああ、無駄だ。無駄だった。お前達は、無為な時を過ごしていたに過ぎない。そもそも、根本的な所で他者に頼っているお前達が強いモノか。他人に頼る戦い方をする奴が、強いモノか」

黒オーガのその言葉に、私から嗤いは消え、怒りが溢れる。

ココで怒らねば、ココで動かねば、私が強くなる為に過ごしてきた日々は否定され、強くなる為に教えを乞うた人達の全てが否定され、我々が積み重ねてきた思いが否定されると思ったからだ。

私だけならばともかく、尊敬する人達まで否定されるのは、我慢ならない。

無くなりかけていた力が、気力が、怒りによって充填される。

「それ以上、何も言うなアアアアアアアッ！！」

大腿部のナイフを引き抜く。激痛が走る。

血が飛び出る。激痛が走る。

私は走る。激痛が走る。

大腿部の切れかけていた筋肉がブチブチと千切れる。激痛が走る。無理をしたせいで大腿部の骨にあった亀裂が更に大きくなる。激痛が走る。

激痛を無視して、走る。例えば足が壊れようとも、走らねばならない。

手にした魔剣 リュヌ・ヴァン の銀鉄の刀身に、激痛で軋む身体に、殺意に燃える意思が籠る。

刀身には赤い光が、身体には白い光が灯った。

【テレーゼ・E・エツケルマンは戦技【ハイリヒトウーム・アルター聖域の祭壇】を繰り出した】

【テレーゼ・E・エツケルマンは戦技【アーツ風の奇襲】を繰り出した】
【魔剣 リュヌ・ヴァン の固有能力【ユニークスキル月の風】が発動しました】

最強の一撃に、疾走速度を飛躍的に上昇させる、身体能力強化戦技【ヴァイント・ユーバーファル風の奇襲】を上乗せする。

大腿部の負傷のせいで最速よりも遙かに遅いが、しかし風のような速度をアーツは私に与えた。

通常ではありえない高速移動の為、後方に飛んでいくような視界のなか、その中心にはハルバードを構えた黒オーガの姿がある。その双眸を再度見、更に燃え上がる憎悪の炎。

殺す、という単純な思いではなく、殺さねばならない、という脅迫に近い思いに急かされながら、私は駆ける。十メートルはあった距離を踏破するのに、一秒も必要としなかった。

魔剣 リュヌ・ヴァン 月の風 を突き出す。

それを、黒オーガは事も無げにハルバードを放り捨てた銀腕で掴み取った。

その事実には、私の中から何かが急激に抜けていくような感覚がして。

しかし勢いが完全に止まる事は無く、剣尖が、胸部に僅かだったが刺さる。

血が、流れた。私達と同じ赤い血が。それは、それは、それは。

私の攻撃は、最速の一撃は、確かに届いたという証拠だ。その事に、安堵した自分がいる。

【霊光】の光りは黒オーガを殺すには至らなかったようだが、それでも。

「これは、無駄と言ったのは、撤回しないといけないだろうな。少なくとも、貴女の積み重ねたモノは俺に届いたんだから」

気力と体力を消耗し過ぎて重だるい身体に鞭を打ち、黒オーガの顔を見上げると、そこには微笑があった。

黒オーガの顔は怖い。人を喰う、凶暴な面をしている。しかしその微笑は、何処か優しかった。

「テレーゼ殿、伏せて下さいッ」

私と黒オーガだけだった空間に、ワイスリイ殿の音が響いた。約束の二分が過ぎたようだ。途中から、その事を忘れていた。

後方から、途轍もない破壊を秘めた魔術が飛んできているのが、何となく分かった。

ワイスリイ殿は伏せろと言う。だから伏せれば私が被る被害は最低限に収まるように調整が成されているのだろう。普通ならできない事だが、【ハイ・ウイザート高位魔術師】であるワイスリイ殿なら可能だろう。

だが、私はもう素早く動くだけの体力も気力も無かった。だから、巻き込まれて死んでしまいかもしれない。いや、十中八九死んでしまっただろう。

しかしそれでもいいと思ってしまうのは、なぜだろうか。

自分でも分からない。分からないけど、胸にあるのは後悔でも懺悔でも無く、ただの満足感だった。

可笑しい話だ。部下を殺され、自分も殺されそうになっているのに、満足感だけが胸にある。

私は見る。銀腕で魔剣 リュヌ・ヴァン 月の風 を掴んだままの、黒オーガを。自然と、言葉が出た。

「どうだ、見たか、化物。傷は私からの贈り物だ」

「ああ、見た。そして、受け取った。だから、とても魅力的な貴女を死なせるつもりは、俺には無い」

疑問が浮かぶ前に、私の腰に腕を回される。

突然の行動に何が起きたのか理解できなかったが、この動きには覚えがあった。そう、ダンスのような、動きだった。サイズが違い過ぎると言うのに、その動きは、とても様になっていた。

私の背後から迫る魔術は、クルリと私ごと回った黒オーガの背後から迫る事となり。

そこでようやく、私はワイスリイ殿が生み出した魔術を、黒オーガの体格にほぼ全体が隠されながらも見た。

それは、白い炎で造られた蛇のように細長い胴をした竜だった。

私が予想していた第四階梯よりもさらに上、第五階梯魔術“ヴァイス・フ
ランメ・ドラッヘン白き炎の竜”である。確かに、奥の手と言える魔術だと、私は納得した。

第五階梯魔術“ヴァイス・フランメ・ドラッヘン白き炎の竜”は、【炎熱】と【風塵】系統魔術を掛け合わせた合成魔術の一つであり、確か、一定時間内ならば発動者の意思によつて自由自在に動かせるといった特性を持つモノだ。

以前父に連れられて行った戦場で一度見た事があつたが、千の敵兵を数秒で薙ぎ払つた光景を私は忘れないだろう。

それが、私に向かつて来ている。

最後の光景がこれほど壮観ならば、悪くないとも思った。死ぬには、光栄に思うほどの魔術である。

「何を諦めた表情をしている。自分が死ぬとでも思っているのか？」

「え？」

「言つただろう。貴女を死なせるつもりが俺にはないと。悪いが、俺が勝負に勝つたんだ。貴女の生殺与奪は、俺にある」

そう言つて、黒オーガは首を動かして背後を見る。

その腕の中にいる私は、抵抗する事もできず、ただ成り行きに身を任せるばかり。

白炎の竜は止まりはしない。ワイスリイ殿も、最早私を助けるのは無理と判断したのだろう。躊躇いが無くなり、最高速度で竜がコチラに突っ込んでくる。正しい判断だと私も思う。むしろココで躊

踏ったりすれば、私はワイスリイ殿を侮辱せずには居られなかっただろう。

黒オーガとて無事では済まないだろう熱量を秘めた白炎の竜の顎が開かれ、白炎の牙が突きたてられる。黒オーガの血肉は一瞬で蒸発し、骨も残さずにこの世から消え去る。

そうなれば当然私もこの世から消える。普通なら、それで終わるだ。

亜種とは言え、オーガ程度、どうする事もできないはずの破壊がそこにある。

しかし、だけど、やはりと言うか、この黒オーガは私の想像を遙かに超えていた。

この時何をどうしたのかは私では理解する事ができなかった。

だが事実として、黒オーガの背面から迫ってきていた白炎の竜は、黒オーガの攻撃によって消滅してしまったのである。その光景は言葉として表現するには私には到底不可能だ。

ただ、黒オーガが背中を向けたままで何かをし、その結果として白炎の竜の身体が爆ぜた事は間違いなく。

その光景を見た人間は、私と“魔力欠乏症”によってよろめくワイスリイ殿と、顔を上げていたレヴィアスの三人だけである。

ただ、私はそこで気を失ってしまったので、その後はよく覚えていない。

確実に言える事は、私と黒オーガの戦は、黒オーガの勝利で終わった、と言う事だ。

後に直接本人から聞いた話だが、白炎の竜を屠ったのは“貼山靠てんざんこう”
別名“鉄山靠てつざんこう”という技に、【終焉】系統魔術と、【背撃】バックアタック
など幾つものアビリティを上乗せした攻撃を繰り返したからだそう
だ。

詳細を説明すると、まず【水流操作能力】ハイドロハンドで水の膜を体表に張り
巡らし、水の膜からちよつと離れた場所に【大気操作能力】エアロマスターを使っ
て風を操作して、真空の膜を用意する。

そしてその二重の防御膜の上から銀腕の能力の一つである【属性
反響】リトエコーを用いて強化発動した【終焉】系統第三階梯魔術“我が闇は
全を滅す”タ・メイデ、と呼ばれる三角錐状の盾を被せる。

これら三つは、盾であると同時に予だった、そうだ。
そしてオガ朗はその三つの盾を、【背撃】バックアタックなどで強化した“貼山
靠”こうを使って高速で押し出し、白炎の竜を真正面から粉碎した、ら
しい。

つくづく、化物だと思う。いや、化物としか言えないだろう。常
識が全く当てはまらないのだから。

とは言え、私は負けた。ならばこの身は、約束通りオガ朗のモノ
である。騎士は約束を破らない。少なくとも、私の騎士道はそうな
っている。

故に、私はこの命が消えるまでオガ朗に尽くす。

ま、まあ、最初はあんなに激しくされるとは思っていなかったの
で動揺し、心臓をナイフで刺してしまっただがその程度の攻撃は問題
にされなかったし、今ではオガ朗と共にいるのは悪くない。

オガ朗は、触れていると、言葉を交わすと、案外良い奴だと理解

できたから。

【女騎士視点・終了】

閑話 見解の相違とは自覚し難いモノである（後書き）

赤髪シヨートは最初自分が持つていない力に憧れて、次第に恋心を。

女騎士は勝負に負けて、忠誠、次第に惹かれていく。

そして二人を思っていた二人の男は、一人は殴り殺され、一人は思い人を目の前で奪われた事に加えてコボルドやホブ・ゴブリンに犯されると言う悲惨な結果に……。

というのは、蛇足。

と言った感じのお話でした。

騎士なのに負けたからと言って相手に忠誠を誓うのか？ といった疑問はあると思いますが、中世ヨーロッパでは自分にふさわしい君主を選ぶ権利があったそうなので、それを採用した結果です。

本当は鈍鉄騎士の話も入れるつもりでしたが、長くなったので一旦ココまで。

ちよっと冗長過ぎたかな？ とは思いますが。

九十一日目〜百日目（前書き）

第二章 傾国の宴 腹黒王女編 開幕。

九十一日目〜百日目

“九十一日目”

俺達は昨日の昼に森を出発した。

休む事無く動く事が可能な骸骨百足　そのままだと流石に目立ち過ぎる為、かなり変わった自走する帆馬車風になっている。これでも目立つが、骸骨百足そのままよりはマシ、か？　を本気で走らせていけば、森を抜けた先にある広大な草原を踏破し、丘陵地帯を越え、山道を抜け、目的地である防衛都市　トリエント　に続く街道に到着していても良い程の時間はあった。

が、俺達は草原にある村で一夜を過ごしたので、今だ草原に居る。

泊まった村は“クルート”と呼ばれ、人口は約三百人ほど。一応農業もしているがそれは最低限度のモノで、基本的には俺達が生まれ育った森、人間達からは“クーデルン大森林”と呼ばれている場所で採れる良質な木材　ココでもベルベットのダンジョンに集まっていた精霊が作用してか、精霊の力の名残りがあある古木があるのだそうだ　を使って普通とは一風変わった椅子や楽器などを製造し、それを街で売って収入としているのだそうだ。

製品を見せてもらったが、見事なモノだった。僅かにだが精霊の力が宿っていたので、金持ちなら一種のステータスとして購入しているのも頷ける。【吟遊詩人】など楽器を使う職業持ちなら、普通よりも性能のよいコレを買い求めるモノもいるだろう。

本来ココは周囲の草原のように何も無かった場所だったらしいが、森から採れる良質な材木を求めて腕に自信のある職人が集まって集落ができ、そしてその職人に弟子入りする人間が増えた結果造られた、所謂職人の村、と言った所である。あと数年もすれば規模はも

っと大きくなるだろう。

職人の中には貴族専門の商売をしている名人が何人も居るので、顧客の貴族の取り計らいで村の警護を担当する人造魔法生物【守人】早い話が、鉄で製造されたゴーレムである。実力はオーガ未満ホブ・ゴブリン以上とそこまで強くは無いが、鉄製なので耐久値が非常に高い。が五体ほど居る。それに加えて外からの脅威に対する備えとして、物見やぐらに掘りや木壁なども設置されていた。

赤髪シヨート達が言うには、この世界では安全度と言う意味でかなり恵まれた環境にある村の一つだそうだ。

しかしこれだけの村ならふらっと立ち寄って 俺がオーガであるが故に一悶着あつたがそれは省略する。それと、目立つ黒い体表はベルベットの遺産の一つである【変身の腕輪】シェイプシフト・リングで普通のオーガと一緒に茶色に変えた。後でリングを喰おうと思う。ご近所の挨拶をし、分体を埋め込んで通信機能を持たせた名刺ならぬ名鉄を渡し、そのまま都市に向かって出立していただろう。

そうしなかつたのは、この村に最近一つの問題が発生し、村人たちが困っていたからだ。

問題と言うのは、以下の通りとなる。

この村は村ができた十年ほど前から半年に一度女の奴隷を数人かあるいは食料や武器などを一定量森に住むオークの氏族に献上する事で森の中から安全に良質の木材を得ていた。森のモンスター達から、オークが守ってくれていたからだそうだ。

村ができた当時はそうする事が一番都合がよかつたらしく、それが現在まで続いていた訳である。

しかしながら最近オーク達が契約を守らず、それどころか伐採中に襲ってくるようになり、そのせいで三人ほど弟子入りしていた若い娘が攫われてしまった。そればかりか、最近では村にも何度か襲

撃があつた。

オークは【守人】なら十分殺せる程度のモンスターではあるが、如何せん数が多かったそう。【守人】が壊される事こそないが、五体だけの【守人】だけでは村全体をカバーできず。村を守る為に村人達は困惑しながらも武器を持って戦い、その結果としてまだ死者こそ出ていないが怪我人は続出するし、畑は荒らされ、材料となる良質な木材を安全に得られなくなった。

この十年間ずっと友好的だったオークが何故このような蛮行を、と村人は戸惑い、やはりオークはモンスターでしかないのか、という思いを抱いたそう。

まだ木材には余裕があるが、それもこの状況が続くのなら納品期間などに差し支えが出てくるだろうし、最悪顧客が遠のいて、村が寂れてしまうと。そうなれば廃村である。

歴史が浅く、殆どの村人が生まれ育った村ではないが、それでも暮らせば愛着が湧く。開拓当初から十年も暮らしていた古参の職人達ならば尚更だ。廃村とするには悔しく、職が無くなるのを避けたいのは人間として当然の考えだろう。

そしてそうなるくらいなら、と近々オークの討伐依頼を総合統括ギル機関に出そう、といった所まで話が進んでいたそう。

つまりだ、うん、この村の危機的状況の根本的な原因は俺達にあると言っただ。

現在の俺達の本拠地は、かつてオーク達のモノだった。それを俺達はオークを殺す事で奪った。その時にオークの主力、というかりーダーやメイジなど群れの頭脳を残らず殺し、喰らっている。

そうした結果残ったのはあの時採掘場に居なかった、つまりオークの集落にいたオーク達であり、分体で調べた結果、あまり知恵の無いオークだけが残ったらしい。クルート村を襲撃した際、【守人】や村人などによって何体か殺されて数が減りはしたが、まだ三十体程生存しているのも確認した。

もう少し知恵の回る個体が居れば結果は違ったのかもしれないが、事実として、今までリーダーやメイジが決めていた役割や食料配分はそれ等が死んだ事で崩壊し、本能のままに動き、無計画な暴食により食料が無くなり、食糧不足で困るようになった、と言うのは妥当な流れだろう。

オークは力は強いが気配を消すなどの技能は拙いので、気配に敏感な森の動物やモンスターを集落にいるオーク全てが飢えないだけ確保するのは困難を極めたらろうというのは、想像にし難い事ではない。

最近のオーク達は痩せてきていた。碌なモノを喰えていないのだらう、とはその姿でも判断できた。

そんな感じで切羽詰まった残りのオークは、とにかく生きる為に人間から略奪行為をするようになった。森の獣よりも、人間を狩る方が遥かに楽だからだ。

畑の作物も手に入るので、尚更だっただらう。

オークは村を襲った。

とまあ、そんな感じで、原因は俺達に、特に俺にある。

俺も、流石に見ず知らずの村人を巻き込んだまま問題を放置するのは忍びない。原因が俺にあるのだから尚更だ。それに、と言うかコッチが本音なのだが、恐らく依頼が出されれば拠点の現状が外に漏れるだらう。オークの採掘場から発掘された精霊石は、偶にこの村に卸されていた事から確実に洞窟は探され、調べられるだらう。

精霊石は貴重だ。売る所に売れば、莫大な金になる。上質なマジックアイテムの素材としても需要がある。そんな金の成る木を、人間が見逃すとは到底思えない。今まではオークとの契約によって調べずに情報を秘匿していたそうだが、それも今は過去の話だ。

俺としても、探られるのだけは避けたい。拠点はまだまだ要塞化計画の途中なのだ。情報は可能な限り洩らしたくない。拠点は秘密であるにこした事は無いのだ。

と言う訳で、昨日俺はこの村の村長と話し合いをし、木々の伐採の際の護衛に関する契約の取り決めなどを決めたりして時間が無くなり、一泊した訳である。

オークの時のように裏切られるのではないか、とも思われはしたが、そこは赤髪ショート達が説得してくれた。やはりこう言った時に同族の言葉は参考になるのかもしれない。無料で怪我人の治療をした事も要因の一つではあるだろう。

とにかく、クルート村との契約は成された。幾つかの約束事と、一応今は短期契約とし、様子を見て正式な長期契約を結ぶ、と言う話で片が付いた。精霊石の探索はしてはならないと決めたので、とりあえずが大丈夫だろう。約束を破れば村はどうなるか保証できない、と村長には脅しを入れておいた。

報酬などでは大分譲歩しているので、これくらいは良いだろうさ。問題が解決したので、朝食を貰い、俺達は村を出立した。

契約が成された時点　つまり昨日の夕方くらいだ　で待機組に指令を飛ばし、数時間後には生存していたオーク達は全て焼き豚となつているので、オークについての問題は解決している。

奴隷にせずに殺したのはオーク程度の奴隷は今はいらないからだし、オークは喰うと結構美味しいので、拠点防衛の為に精力を養う為に喰わせたわけだ。

そして攫われたという三名の女性　【性欲豚^{オーク}】と俺が以前言ったように、あとあのアビリティを得たようにアッチ方面はまさに底なしで、結構汚されていたが、まあ、それは村人がどうにかするだろう　を保護したので、今日の昼ごろにホブ・ゴブリンメイジに率いられたゴブリン十ゴブの総数十一ゴブが村に挨拶する時に連れて来させる予定である。

信頼は、コレから勝ち取っていけばいい。

あと、オークに献上されて生き残っていた女奴隷数名はコチラで引き取る事にした。

以前よりも生活環境はいいと思う。

幸先は、まあまあ良い、と言えるだろう。

そして骸骨馬車に揺られながら腕輪は喰いました。

アビリティ 【能力名】シェイプソフト 【変身】のラーニング完了】

取りあえず、体色だけ変化させておこう。赤い刺青はそのままだが。

“九十二日目”

さつさと都市に行く事は止めた。じっくり周囲の地形を調べたり、モンスターを喰ったりする事に力を注ごうと思ったからだ。

現在地は草原を抜けた先にある丘陵地であり、ココでは草原で何体か殺して喰ったバイコーンに加え、サイとバッファローとイノシシを混ぜ合わせた四メートル程の大きさがある“ボルフォル（仮称）”に、二メートル程の蛇の胴体の中心部に三十センチ程の赤い亀の甲羅を付けた様な“タートルスネーク（仮称）”、額から二十センチほどの鋭い刃を生やしたホーンラビットの上位種だろう“ブレードラビット（仮称）”、人間の腕と足を鳥に変えた様な“ハーピー（仮称）”など、今まで遭遇した事の無い種族が多く居る。

喰えばまだ得た事の無いアビリティを得られるだろう。楽しみである。

ただ、森のように隠れる事ができる場所は多くない。ココで死角から隠れて近づいて奇襲するのは、俺やダム美ちゃんも兎も角、赤髪ショートには難しいだろう。

そう判断したのでオルトロスとなったクロ三郎に先制攻撃を仕掛けさせ、その後から鬼熊になったクマ次郎に赤髪ショートと共に跨って接近する事にした。ダム美ちゃんは自分の 使い魔 であるトリプルホーンホースに騎乗してである。

全て俺一人で終わらせても良いのだが、そうするとダム美ちゃんや赤髪ショートやクマ次郎達に経験値が入らないから、コレが一番良かった。

ただ、ダム美ちゃんが赤髪ショートを羨ましそうに見ていたのは何故だろうか。

最初の得物はボルフォルの群れだった。数は十頭。一頭くらいは使い魔 にして骸骨百足を牽引するカモフラージュとして使おうと決めた。

いや、村に立ち寄った時に骸骨馬車はやはり驚かれたので、少しはマトモに見えるようにしようかとおもったのだ。別に荷台で寝転がっていたクマ次郎でもよかったのだが、有事の際には騎獣として使うので、止めておいた。クロ三郎は遊撃手として有能なので、そこらは乗るよりも自由に殺させた方が効率がいいのだ。

話を戻すが、ボルフォルを狩る事に成功した。

赤髪ショート達に聞いた所、ボルフォルの角は薬の素材として高額で売れるらしいので剥ぎ取った。

肉も売れるそうだが、取りあえず朝飯として五頭ほど喰いました。

アビリティ
【能力名】粉骨犀身【のラーニング完了】

アビリティ
【能力名】知覚鈍麻【のラーニング完了】

喰った数と量はそこそこあったが、俺よりも弱かったので得られたアビリティは二つだった。まあ、こんなモノだろう、と思う。二つとも有用そうなので、特に気にはならないし不満も無い。

と言うか、肉が極上過ぎて不満などある筈がない。焼き肉にしたのだが、口に入れた瞬間溶けるようなあの食感、広がる肉の旨味、堪らん。見た目に反してこの美味さ、詐欺だろう、と言っても仕方がないと思うのだ。

むしるボルフォル肉マジウマー、と吼えて当然だと思うね。

食事中に血で造った分体を走らせ、脳内地図を埋めていく事も欠かさない。食後は 使い魔 にしたボルフォルが骸骨百足を牽引できるように形を変えたりした後、丘陵地を進んでいく。

しばらくすると、ブレードラビットを見つけた。ホーンラビットよりも大きく、鋭い武器を持ったブレードラビットはしかし、俺やダム美ちゃんからすると軽く踏み潰せる雑魚も良い所なので、赤髪ショートに狩らせる事にした。

俺はその様子を鍛冶師さん達と一緒に、父親エルフから貰った紅茶を飲みながら見守る事に。

ブレードラビットは案外素早いようだ。短距離ならば赤髪ショートが惨殺していたアカシカなどよりも速く動いている。その速度と奇妙な軌道を描く動きに翻弄されて、赤髪ショートの身体にはすれ違いざまに四肢に小さい傷が増え、血が流れている。

その度に姉妹さん達から小さな悲鳴が上がるが、赤髪ショートは焦る事無くブレードラビットを観察していた。確かに速度には苦戦しているが、どれも掠り傷でしかないし、一度も致命傷を受けていない。日々の訓練の成果の表れだろう。

一分程でブレードラビットのスピードに慣れた赤髪ショートのグールカナイフが振り下ろされ、それはブレードラビットの頸部を正確に捉え、肉も頸椎も纏めて切り裂いた。

ゴロリと転がった頭部と胴体を拾い、赤髪ショートがコチラを振り返る。俺は頷いた。それを見て、死体を赤髪ショートは喰いだした。生で、である。額のブレードは、煎餅せんぺいのように喰われていた。

血抜きもしていないのでポタポタと溢れる鮮血が赤髪シヨートの口や革鎧を赤く染めていく。

結構スプラッタな光景に、流石にクールな錬金術師さんも息を飲んだのが分かった。

それを見て、俺は『アレは赤髪シヨートの【魔喰の戦士】ノワール・シルダによる副作用を抑制する為にも必要な行為の一つで、病気になる事は無いから大丈夫だ』と鍛冶師さん達に言ったのだが、『いや、そうじゃなくて……』と呆れられた。

そしてクスクスと笑われてしまった。

何故だ。

まあ、良い。ブレードラビットを喰った事で能力値が上がった、と喜んでいる口周りを赤く染めた赤髪シヨートの頭を撫でて癒されたので、気にしないでおこう。ちなみに革鎧に付着していた大量の血は【水流操作能力】ハイドロハンドを使って綺麗に吸い取ったので跡形も無い。

昼になって、タートルスネークの住処を発見した。どうやらタートルスネークは蟻などのように地面を掘って巣穴を造るらしい。奇怪な習性だが、【反響定位】エコーロケーションで調べた結果結構な数が中で眠っていたので、一網打尽とする事にした。

【地形操作能力】アースコントロールを使い、眠っているタートルスネーク達を一匹残らず外に押し出す。勢いが強過ぎて天高く飛び上がったそれ等の首を、俺とダム美ちゃんと赤髪シヨート、それに一緒に連れてきていた鬼人三名の総数六名で手分けして切り落としていく。

鬼人の種族は【疾風鬼】ゲイルロードと【灼熱鬼】フレイムロード、そして最後の一人が【幻想鬼】イリュージョンロードだそうだ。

直接戦闘系ではない【幻想鬼】は首を刎ねるのにもたついていて、赤髪シヨートの方が多く狩れていたってのは、まさに蛇足である。

タートルスネークは甲羅が高額で売れるらしいので、甲羅に傷がつかない様に気をつけた。終わって数を数えた所、タートルスネークの数は八十八体だった。その中の三十八体は俺が殺していた。

赤髪シヨートには速すぎだと呆れられたが、鍛冶師さん達が凄かった、と興奮しながら称賛してくれたので気分が良い。

回収した甲羅をアイテムボックスに収納し、蛇肉はかば焼きにして喰う事に。

ナイトバイパーではできなかったかば焼きは、大層美味しかったです。エルフ酒との相性は抜群だった。また喰いたいね。というか、絶対に喰ってやると心に決めた。

アビリティ
【能力名【殻に籠る】のラーニング完了】

アビリティ
【能力名【休眠】のラーニング完了】

味は良かったが、得られたのは微妙なアビリティだった。甲羅は絶対に高額で売ってやる。

本当は空を舞っているハーピー達も喰いたいとは思ったが、ダム美ちゃんや赤髪シヨートは兎も角、鍛冶師さん達の精神衛生上良くないと思い、居ない時に喰う事にした。今は我慢の時である。

午後三時くらいになると、もういいか、と思ったので俺達は丘陵地を過ぎた先にある山道まで行く事となった。

既に丘陵地は分体を走らせてマップが完成しているので、特に心残りも無い。

さて、山道ではどんなモンスターがいるのやら。

“九十三日目”

山道には主に、最も短いが困難な崖沿いの道、危険度も距離も中間に位置する基本的に幅広い普通の山道、最も危険度が低いがその分長い川沿いの道、と言った三ルートがあるそうだ。

そして当然な事だがその中から俺が選んだのは最も短いが困難な崖沿いの道である。

困難、というのが道が他よりも険しいと言う事もあるが、何より、この崖にはハインドベアーのような周辺最強種が住みつき、さらにレッドベアーのようなボス級モンスターまで生息しているからだ。しかも崖に生息しているボスモンスターの強さはレッドベアーを越えているらしい。

崖に生息する周辺最強種は“ファレースエーグル四翼大鷲”と呼ばれる茶色い羽毛と四つの翼を持つ大型の鷲だ。平均的な身体のサイズは二メートル程で、身体の二倍以上はある四翼を広げて飛ぶ姿は見る者を圧倒するそう。しかも厄介な事にその巨軀に見合えない飛行速度と回旋性能を持ち、鉤爪からは得物をジワジワと弱らせる麻痺毒が分泌されているのだと言う。

個体数こそ少ないが、崖沿いの道を進んでいると必ず襲ってくる厄介なモンスターだと言う。

そしてそれを率いるボス ファレースエーグル翡翠色の羽毛を持つ【四翼大鷲・亜種】は際立って大きく、神々のどれか一柱から授けられた【加護】の能力によって口から小さな竜巻を発生させて標的を攻撃したり、羽ばたきで生まれる風が敵を切り刻む刃に変化したりする事に加え、配下を指揮するだけの知性もあるのだと言う。

コイツが住みついて以来、崖沿いの道を進むモノは殆どいないそう。

確かに厄介そうな話である。レッドベアーは強かったが、あくまでも単体として動いていた。しかし今回は群れと考えた方がいいのかもかもしれない。

崖沿いの道に入る前に鍛冶師さん達に散々そう説明されたが、俺は大丈夫と言って突き進み、特に困る事は無かった。

確かにファレースエーグル達の飛行速度は速かった。それに加え、死角の多い崖沿いの道から突然飛び出してくるのは対処が面倒だろう。しかし、【気配察知】を持つ俺からすれば死角から出てきた瞬間を狙って糸で捕獲する事は容易かった。

奇襲など、事前に分かっただけなら、それを狙い撃ちする事など容易いのだ。そんな訳で捕まえた総数十八頭のファレーズエーグル達の売れる素材は剥ぎ取り、残りをから揚げや焼き鳥などにして喰いまくった。

さっぱりとした肉の味はいは、なかなか美味かった。

【能力名】パニックボイス【混乱を呼ぶ鳴き声】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【羽生成】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【高速飛行の心得】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【風読み】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【麻痺爪】のラーニング完了】

【能力名】トランス・バラライクス【麻痺耐性】のラーニング完了】

そんな感じで危なげなく進んでいると、午後二時頃、俺達は崖沿いの道の中で最も広い場所に出た。そこには色んな動物の骨が散らばっていて、道、というよりは何かの巣の様だ。よく見て見れば、人間の骨や武具の残骸が幾つか発見できる。まるで、道に居座った猛獣を討伐しにきて返り討ちにあつた名残りのような。

などと思っていると、上空から羽音がバサリバサリと響き。そして吹き荒れる突風が肌を打つ。

【気配察知】で既に感知していたので驚く事は無く、俺は上空を見上げた。

そこにいたのは五体のファレーズエーグルに加え、翡翠色の羽毛をもつ【四翼大鷲・亜種】ファレーズエーグル “ジャッドエーグル（仮称）” だった。普通のファレーズエーグルの二倍以上はある体躯が力強く飛んでいる光景は、圧倒的存在感に満ち溢れていた。

レッドベアーよりも遙かに巨大で、発している威圧感が桁違いだ。目が合う。チリチリとうなじの辺りに違和感を覚える。アチラは、コチラを確実に殺しにきていた。

翡翠色の羽毛はまるで刃のように陽光を反射させて煌めき、金剛

石のような嘴くちばしや鉤爪は早く獲物の肉を斬りたいと疼くのか、しきりに動かされていた。爪と爪が擦れ、火花が散った。

俺を見下ろすその黄色い双眸からは知性を感じる。殺すのは、勿体ないと思うだけの気品がある。

しかし残念ながら、俺は初見の敵はできるだけ喰う様にしている。そしてジャッドイーグルは亜種だ。喰えばレッドベアーの時のように【加護】系のアビリティを得られるだろう。俺からすれば、喰うべき相手だった。

赤髪ショート達の守りをダム美ちゃんとロード三名に任せ、俺は【鞘翅生成】を使って背中うしろに虫のような翅を生やし、上空で俺を見下ろす敵に向かって飛翔した。

ハルバードを、その手に握りしめて。

一時間ほど経過しただろうか。

流星に空はジャッドイーグルの領域だった。

四つの翼を使って生み出されるその飛行速度と旋回能力はまさに風の様だった。先ほど得たばかりの【高速飛行の心得】があったので、余計にその凄さが理解できた。

風のように空を縦横無尽に駆け巡るジャッドイーグルに俺は翻弄され、四つ翼が生み出す乱気流に揉まれて飛行は困難を極め、口から吐き出された小さな竜巻の槍によって翅は何度も何度ももぎ取られ、巨大な麻痺爪が俺の全身各所の肉を抉った。

俺の全身は血に染まり、体液は失われていく。しかも翡翠の羽毛は硬く鋭く、掠っただけで斬られてしまうほどだった。厄介極りない。

それに攻撃を避けきれず、盾にした右腕は金剛の鉤爪によって切り落とされ、左足は金剛の嘴によって食い千切られてしまった。どうやら唾液には回復阻害の効果でもあったのか、食い千切られた左足からは血が止まる事無く流れ落ち、仕方なく筋肉を引き締め出て

血を無理やり抑えるしかなかった。

幸いな事に【激痛耐性】や【知覚鈍麻】があったのでココまでの深手を負っても痛みに思考を割かれる事は無く、しかし、ジリジリと俺は追い詰められていつていた。

俺が体得した武術の数々も、流石に空中でその能力を十全に発揮するのは困難を極めた。あくまでもアレは人間が生み出し、受け継いできたモノだからだ。空中でその効果を十全に発揮するのは難しい。

とは言え、それでもただやられていた訳ではない。

付き従っていた五体のファレーズエーグルは全て斬り殺した。

ジャッドエーグルの右足もハルバードで切り落とし、四つの翼には幾つか風穴を開け、胴体には深い刃傷がある。翡翠の体毛は、所々赤く染まっている。

決して個体の能力として負けている訳ではない。

だが戦場は俺の不慣れな空だ。敵の領域が俺の足枷になっていた。風が渦巻き荒れ狂う突風に晒されながらの不慣れな飛行を戦闘と同時に進む事で精神には僅かだが乱れが生じ、深いダメージによって最初と比べ飛行速度が明らかに衰えた俺は、ジャッドエーグルからすれば狙いやすい的だっただろう。

攻撃は激しさを増し、ついには俺の手からハルバードが崖沿いの道に落ちてしまった。運よくハルバードは骸骨百足の進行方向に落ちて刺さり、崖下に落下する事は無かった。とは言え、即座に拾える場所でも無い。

武器を失ったのを好機と見たのかジャッドエーグルは今までにないほど大きく距離をとり、その金剛石のような嘴くちばしで俺を貫くつもりなのだろう、真っ直ぐ俺に向かって突っ込んできた。

それに伴い、まるで嵐のように風が吹き荒れる。

【加護】で生み出したのだろう突風に乗ったジャッドエーグルは、

今までとは比べ物にならない程の速度を叩きだした。正真正銘の最高速度で突っ込んできているのだろう。

傷だらけの肉体でよくそこまで、と思うほどだ。

赤髪シヨート達から悲鳴が上がる。

嘴に貫かれ、俺は空で果てる。

ジャッドエーグルが自らの勝利を確信し、小さく嗤ったような気がした。

俺は、悔しそうに歯を食いしばる。

と言う演出を試してみた。

いや、正確に言えば、ただ単純に俺が使ったアビリティを限定していた結果がこうなっただけである。

流石に、敵の領域でアビリティ無しのまま勝てるほど優しい敵ではなかったようだ。種族的にオーガよりも遥かに強いことから、当然と言えば当然かもしれないが。

地力を上げる為の鍛錬だった今までの戦闘を止め、俺は本気で殺しに行く事にした。

ジャッドエーグルが突っ込んでくるタイミングを見計らい、先の戦闘では使っていなかったアビリティの数々を発動させていく。

切り落とされたが密かに回収していた血の滴る右腕を喰らって【補液復元】の発動条件を満たし、【高速再生】や【高速治癒】を重ねる事で全身の損傷を一瞬で治す。切り落とされていた右腕も、食い千切られた左足も、即座に新しいのが生えた。その分エネルギーを使って腹が空いたが、食料は目の前にあるので問題ない。

次いで【外骨格着装】を使って赤いクワガタのような姿に変身し

た。外骨格は防御面だけでなく俺の膂力を強化してくれる作用があるし、それに加えて【黒鬼の強靱なる肉体】や【堅牢なる竜鱗鎧】などを重複発動させ、竜鱗を持つクワガタのような姿に変化。

俺が一瞬ごとに変化する様を見ていたジャッドエーグルに指先から黄金糸を噴出してその全身をからめ捕り、ついで【重力操作能力】グラビティロウを使ってジャッドエーグルが進行方向とは逆方向に落ちる様に重力を操作し、強制的に失速させる。

身に纏う風の刃で黄金糸は幾らかは斬られてしまったがそれでも残っている黄金糸はあるし、無形である重力に抗える筈は無く、驚異的な速度は既に無い。

今更軌道変更ができなかった敵の頭部に、俺は両腕の拳を振り下ろした。

そこに技など無い。ただ単純に、力の限り両腕を振り下ろしただけである。しかし現在の強化された膂力でそんな事をすればどうなるか、結果は火を見るよりも明らかだった。

ジャッドエーグルは地面に向かって高速で叩きつけられた。落ちた地面には小規模なクレーターができるほどの衝撃だった。普通なら四肢が千切れ飛んで絶命しているようなレベルである。

しかしモンスター特有の強靱な生命力によつてか、ギリギリ生きていた。しかしまだ死んでいないレベルである。死んでいなかっただけで十分凄いと思うが。

俺は取りこぼしてしまつたハルバードを回収し、ジャッドエーグルの首を刎ねて戦闘に決着をつけた。

転がった頭部から宝石のような目玉を液体入りの小瓶に回収し、頭蓋骨と肉を喰らつた。美味い。まるでジャッドエーグルの生命力が俺に流れ込んでくるような感じがする。

堪能した後、刃のような翡翠の羽毛が抜けない様に気をつけながら皮を剥ぎ取つたり肉を捌いたり、普段通り解体していく。そして心臓の辺りを切っていると、解体用ナイフから硬い感触が伝わっ

てきた。感触から骨ではないと分かっていたので、不思議に思いながら探ってみると、そこから翡翠色をした十センチほどの丸石のよ
うなモノが得られた。

何だこれ？ と思い【ディテクト・アナライズ物品鑑定】を使ってみると、【四翼大鷲の
主の御霊石】というアイテムだそうだった。

鍛冶師さん達にコレ知ってる？ と聞きたくて振り返ると、そこ
には行商人クエスト四名がすぐ傍にいて、俺の手の中にある石を食い入るよ
うに見つめていた。

いつの間に近づいたんだ、と言う程の早業である。流石に驚いた。
気を取り直して、知っているようだったので説明してもらおうと、

【御霊石】系のアイテムは全て【レジェンダリー伝説】級だと言う。

【御霊石】はボス系モンスターの百体に一体の確率で得られるそ
うだ。それもボス系モンスターが強ければ強いほど手に入れられる
確率が高くなるとの事。

とはいえ、ボス系モンスターはそう簡単に狩れる存在では無い。

とある有名なボス系モンスターは【御霊石】を持っていると目さ
れ、とある国の軍隊が討伐に赴いたそうだが、呆気なく全滅させら
れたと言う話もあるそうだ。

【御霊石】は、狙って得られるようなアイテムではない。

その為【御霊石】系のアイテムはオークションに出すと小国が買
える程の金が動く、らしい。もつとも、大抵の場合は売りに出され
る事無く、強力無比なマジックアイテムなどの製作に使われるそう
だ。

へー、と思いながら喰うかどうか迷っていると、『まさかそれも
食べるつもり？ 食べるなら売りましょう』と言った感じに、四人
にジト目で見られたので一先ずはアイテムボックスに放り込む事に
した。

根っこの部分はやっぱり商人な四人に苦笑が漏れる。

これを得られたのは【幸運^{ラック}】と【黄金律】のお陰だろうから、一応感謝しておこう。

その後剥ぎ取った翡翠の羽毛付き皮を羽織り、【外骨格着装】を発動させた。

レッドベアー製の革鎧を取り込んで赤いクワガタのような外骨格を精製した時のように、ジャッドエーグルの翡翠の羽毛付き皮を取り込んで、二つ目となる新しい外骨格が精製・登録された。

全体的に翡翠と黒を基調とした独特の光沢がある外骨格で、背中には翡翠の四つ翼がある。所々にやや鋭い突起があり、四肢には金剛の鉤爪が取り付けられている。意思によって鉤爪は収納できるようなので便利そうだ。新しい外骨格は、全体的に鳥類を彷彿とさせるフォルムをしていた。

試しに飛んでみたが、翅よりも速く飛行する事が可能だった。翼を生み出す事に突風が自動的に発生して飛行速度を底上げしてくれているらしい。

出来心で翅も追加で生やしてみたら、更に高速で飛べたのは嬉しい誤算である。

空中戦時には大活躍してくれそうだと思いつつ、今度は肉を喰う事に。

感想、頭部を喰らった時にも思ったが、多分、今まで喰った中で一、二を争うほど美味かった。

思わず叫んでいた程である。

ウマい!!! と。

【能力名^{アビリティ}】【矢羽根】のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】【天空の捕食者】のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】【嵐の神の加護】のラーニング完了】

【能力名^{アビリティ}】【風塵完全耐性】のラーニング完了】

【能力名【金剛瞬爪】のラーニング完了】

満足いく結果だった。アビリティも良さそうなのが多く、得られたモノは非常に大きい。

ついでに死んだ冒険者たちの骸から何か得られないかなー、と思っていたら、まだ使える“収納のバックパック”が五つほどあった。中身を拝見させてもらうと結構な額の金と武具防具に薬品があったので、ありがたく頂く事に。他にもまだ使えそうなのは粗方回収した。

その代償として、骨だけになった骸の数々は埋葬する。骨を一ヶ所に集めて火葬した。

南無。

黙祷を捧げた後、俺達は歩みを進める事に。ただ、鬼人三名が酷く複雑な感情を込めた視線を向けてくるのが気になった。

化物を見るような、それと同時に憧れの人を見るような、そんな感じの視線である。

“九十四日目”

今日は豪雨だった。

幸い昨日の内に街道まで到着していたので、街道にある“休憩所”と呼ばれる一辺が三十メートル程もあるただ単純にデカイ平屋の中で雨風を凌いでいる。骸骨百足は馬車専用の建物の中だ。

俺達の前に入っていた行商人ペドラーの一団やら冒険者の集団やらが入ってきた俺を見た瞬間怯えたり殺気を出したりしたが、取りあえず人間軍からの略奪品の一つである酒樽を二つほど取り出して、そこに居た全員に振舞った。

冒険者はそれで釣れたが、釣れなかった行商人ペドラーにはこの前手に入れたタートルスネークの甲羅や、森で採れた素材や火葬した冒険者の所持品だったモノを売ったりして交流してみた。

最初は怖がりながらもだったが、鍛冶師さん達の存在もあって、次第に打ち解ける事ができた。

後から入ってきた人間や獣人も俺の存在に驚いていたが、周囲の雰囲気から危険は無いと判断したのか、注意を向けつつも襲ってくる事は無かった。襲ってきたら喰ってやろうと思っていたのだが、ちよつと残念だ。

昼ごろ、姉妹さんや他の【料理人】持ちの男女に混じって一緒に昼食を作り、それを喰い終わった後に始まった賭博に誘われて、参加してみる事にした。

カードを使ったブラックジャックに似たゲームで、簡単な説明をしてもらった後、昨日手に入れた金銭を賭けてやってみる。

結果、ボロ勝ちだった。

これもきつと【幸運^{ラック}】と【黄金律】のお陰だろう。他の参加者が素っ裸になるまで剥ぎ取ってしまった。中には商品まで俺に持っていかれたギャンブラーな商人もいた。

ワハハハと勝ち誇った後、衣服は返してやり、もぎ取った商品は欲しいモノだけを貰って返してやった。

金や物資を全て返してやるわけではないが、むさい男達の素っ裸を見ても嬉しくないし、多少イカサマのような事をしているという罪悪感があったからだ。それに商品を賭けたのはそこそこ大きな商会のメンバーらしかったので、貸しを作っておこうと思ったのである。

仲良くなった奴らには傭兵団の宣伝も兼ねて名鉄を配っているので、まあ、そこそこの成果ではないだろうか。

この日は雨が上がる事が無かったので、休憩所で一日過ごす事になった。

別に屋根を取り付けている骸骨百足で進めない事も無かったが、急ぐ旅でもないので雨が上がるまで待つ事にし、休憩所の一角にある訓練所にてダム美ちゃんと赤髪シヨート、それにロード三名と組み手などをして時間を潰す事にした。

ダム美ちゃんや赤髪シヨートは最近自分にあつた戦闘スタイルを見つけた様なのでそれを伸ばしていけばいいが、ロード三名は攻撃が単調で、生来持つて生まれた身体能力で無理やり押し切ろうとしている部分がある。

なので取りあえず足癖の悪い【疾風鬼】ゲイルロードな風鬼さんにはサバットなどを、肉弾戦を好む【灼熱鬼】フレイムロードな熱鬼くんにはムエタイなどを、直接戦うのが苦手な【幻想鬼】イルシェンロードな幻鬼くんには柔術などを教えてみる事に。

転生前の時代では特殊な装置を使い、脳に直接様々な武術の情報を刷り込める事ができたので術技は全て覚えていたし、実際に使っていた技も多くあるので、教えるのには苦労しなかった。

組み手をしばらくしていると、遠くの方で見学していた冒険者が数名混ざりたいと言ってきたので、軽く手合わせをする事になった。

【拳士】よりも【剣士】や【戦士】が多かったので、予め作っておいた木刀や木槍などを“収納のバックパック”から取り出すと見せかけてアイテムボックスから引き出して渡した。

そこそこ手加減してやってみたが、最近はずっと多対一でやっていたし、それほど強いモノも居らず、あまり手応えは無かった。

それでもいい運動になったし、かなり打ち解ける事ができたのでよしとしておこう。

それにしても、分体が数体何処かに行ってしまったのは何故だろうか？

さっぱりわからん。

“九十五日目”

昨日は一日中降り注いだ雨は上がり、現在はぬかるんだ街道を進行中。ただし、今まで居なかったメンバーが増えている。

休憩所で仲が良くなったファルメル商会の防衛都市 トリエント 支部副店長一行と、その護衛をしている冒険者の集団である。

副店長について分かり易く言うと小太りの禿頭な中年男性で、昨日の賭博で商品を俺に持って行かれた人だ。根っからのギャンブラーで、時たま商品を担保にしまっただろう。

そんなので副店長などが務まるのかと疑問に思ったが、ギャンブル狂いさえなければ文句なしの人材なのだと言う。実際、現店長よりも能力としては上なのだそう。

おいおい、と思ったが、まあ悪人ではないし関係ないのでどうでもいいのだが。

骸骨百足と違い、休憩を必要とする帆馬車がいるので今までよりも移動速度は遅くなったが、この世界の情勢を色々聞きだす事ができたので有益な時だった。

話の中で、例の王女様は次期皇帝が持ち帰った秘薬で無事治った、と言う話が出た。

“クリシンド病”が初めて治った事例であり、数滴残った秘薬は帝国と王国が分析している、という噂話もある。

実際には使われなかった秘薬は既に一滴残らず自然発火してしまっているのだが、それは黙っておく事にした。

それに再びエルフが襲われる事はないだろう、というのは分かった。国家間の情勢が不安定になってきて、近々戦があるのでないか、といった話が多くなってきているからだ。

エルフに手を出す余裕がないと言う事である。

今日は話以外、何事も無く日が暮れた。

“九十六日目”

昼ごろ、防衛都市 トリエント に到着した。街をグルリと囲んだ白壁は堅牢そうで、様々な機構が組み込まれている白壁を落とすのはかなり面倒そうだ。

などと言った事を考えていたら、俺がオーガだった事で門前にてかなりの騒ぎとなった。いや、鬼熊やオルトロスにボルフォルも要因の一つではあるか。

俺が街には入れないかもしれない、と言うほどに事態は面倒な方向に進み。

だが、そこは副店長が何とかしてくれた。この街ではファルメル商会の影響力はかなり強い様だ。

感謝である。ただそれと引き換えにタートルスネークの甲羅などを格安で売るように交渉されたけどな。

取りあえず、街内では全身をフード付きコートで身を隠す事にした。巨躯を隠せる訳ではないが、多少はマシ、だろうと思う事にする。

街の中は人間が多かったが、獣人や亜人種なども見受けられた。割合としては人間が六に人間以外が四と言った所だろうか。街には活気が満ち、メインストリートには商店が立ち並び、客引きの音が響いていた。

色々と暗部はあるだろうが、楽しめそうな街だった。

街に入った後は色々と買い物したり、宿を探したりと、なかなか忙しい一日だった。

赤髪ショート達には四、五日ほど滞在するから、それまでに俺と共に来るか、それともこの街に留まるか決めるように、と言っておく。俺としては放したくないが、やはり意思は尊重すべきだろう。

“九十七日目”

今日は赤髪シヨートに案内されて、ギルド総合統括機関 と呼ばれる施設に赴いた。

メンバーは俺とダム美ちゃんと赤髪シヨートで、ココには居ない鍛冶師さん達はロード三名をボディガードとして街を散策中だ。と言うか、造っていたナイフや魔法薬などを売って明日の買い物の為の資金源を得るのだと言う。流石行商人ペドラーと言うべきだろう。

ギルド総合統括機関 はかなり大きく、立派な施設だった。

外から見た限り三階までであるようで、俺達が踏み込んだ一階には酒場としても使われているようだ。何人か酒を飲んでいる姿が見受けられた。コートは着ていたが巨体を隠している訳でもないし、室内では邪魔になったのでフードを外して入ってきた俺に驚いて剣を抜いた者もいたが、それを無視しカウンターに向かう。

それを見て斬りかかってきた輩は正当防衛として鎮めていく。流石にココで殺しは不味いので、気絶するに留める。骨が折れた感触があつたが、不可抗力だ。

近づくごとに受付嬢は顔面蒼白になっていくが、とりあえず現在ある依頼クエストはどんなものか聞いてみる。近くの板に紙が何枚も貼られていたが、やはり説明してくれる人がいた方が分かり易いだろう。

しかし答えは返ってこなかった。どうやら椅子に座った状態で気絶してしまつたらしい。

仕方ないのでその隣に居た不思議な雰囲気をした老人に聞いてみると、カウンターにドサリと分厚い書物が出された。コレに書いているらしく、それを読んでいく。分からない部分は説明してもらった。

そしてその中から手持ちの品で納品条件がクリアされるモノ
ポルフォルの角の納品など を選び、冒険者として登録している

赤髪ショートに依頼を受けてもらって俺が品を出し、報奨金を貰っていく。ココに来たのは、情報収集と金が同時に手に入るからだ。

書物の中には赤髪ショートの冒険者としての階級的に受けられないモノもあったが、実際に品を取り出してみせれば特別に受けさせてもらった。話の分かる爺さんである。

その結果赤髪ショートの階級は一つ上昇してしまったが、現在の實力とは釣り合っているので問題はないだろう。

その後色々と老人に話を聞き、ギルドを後にする。

その後で知ったのだが、俺が話していた老人はどうもギルドの責任者 通称ギルド長だったようだ。

なんであんな所に居たのだろうか。不思議である。まあ、俺とは関係ない事だ。

その後錬金術師さん達と合流し、俺も買い物につきあった。つくづく思うが、何故女性の買物物はあんなにも長いのだろう。異世界でもこれは共通だったのだ。

かなり疲れた。

途中、俺を追跡している輩がいたので、路地裏に引き込んで撃退する事に。ナイフで反撃されたので、気絶させた後で身包みを剥いで素っ裸な状態にし、その辺に吊るしておく。

全く、都市に着て早々何だと言っつのだ。

宿に帰って軽く訓練をし、寝た。

“九十八日目”

早朝、宿の近くにある空き地にて軽く訓練をこなした後、今日は単独で街を放浪する事にした。

ダム美ちゃんは鍛冶師さん達と一緒に服を見に行くんだと言っていたので、熱鬼くんや幻鬼くんには荷物持ちという生贄となってもらうのだ。風鬼さんはロード唯一の女性体なので、ダム美ちゃん達と一緒に買い物を楽しむだろう。

尊き二人の犠牲に、敬礼。

一人放浪する事にした俺は、今回はフードを被ったオーガ体のま
まではなく、【変身】と【形態変化】を使い、イメージし易かった
前世の身体に似せた人間体となって行動する事にした。

やはり目立つ目立たないで言えば、コチラの方が目立たないから
だ。

ふらふらと放浪しつつ、街の情報を収集していく。やはりと言う
か当然と言うか、俺の噂は結構広がっていた。

基本的に大鬼は周囲の生物に害を成す【モンスター】として知ら
れている。オーガ・メイジなどの中には稀に人間に害を成さない個
体もいるので一概には言えないが、概ね危険な種族として認知され
ている。門の所での騒ぎもそれに起因した。

俺について良く分からない為に起こる反応は様々だ。ただ恐ろし
いとか、怖いとかと言った傾向が強い。まあ、そんなモノだろう。

三時間ほど表通りを歩いて、適当な店で昼食をとり、ある程度情
報を収集した後は裏道を歩く。

そこそこ身なりの良い装備にしているので、ゴロツキが釣れない
かなー、と思つての行動だ。

結果、釣れた。ナイフや鉈に似た刃物で武装したゴロツキが六名
ゲヘへとこれまた典型的な下種な笑いを見せながら、だ。

周囲に人気も無かったので、ゴロツキは問答無用で叩き伏せる。
ただ人間体となつているので身体が本来よりも小さい事を失念して
いた。距離感が狂つてしまい、それで生まれた隙を突かれて最後の
一人のナイフが心臓に刺さってしまった。

とは言え、人間体でも俺はオーガだ。痛みはあれど大した事は無かったのでナイフを引き抜くと、酷く驚かれた。まあ、いい。全員の首の骨を捻り砕き、路地裏で死体を喰う事にした。周囲には誰もいないと【気配察知】で分かっているが、誰が来てもいい様にさつさと喰った。

【能力名】アビリティ【職業・盗賊】シーフのラーニング完了】

【能力名】アビリティ【静寂の突き】のラーニング完了】

【能力名】アビリティ【逃煙玉】エスケープボムのラーニング完了】

この六名は盗賊だったようだ。共通の紋様が刻まれた指輪を嵌めていたので、同じ組織に所属していた可能性が高い。もしかしたら結構大きな組織の構成員だったのかもしれない。

まあ、そんなのは関係がない話だ。

誰かがこない間に価値のある所持品は回収し、価値の無い所持品を酸性に変化させた体液で溶かし、六名が死んだ痕跡を隠蔽した現場から立ち去る。

再びゴロツキが釣れるのを期待しながら裏路地を歩いていると、五人の男達と一人の少年が激しく言い争っている、という場面に出くわした。

五名の男達は強面で、懐に刃物を仕込んでいるのが鉄の臭いや草で分かる。顔に刃傷があるモノも多く、普通なら関わりたくない類の職業についていそつだ。平均的な年齢は二十代後半くらいだ。それと真正面から言い争っている少年は十三、十四歳くらいだろうか。薄暗い路地裏の僅かな光でも輝く金髪に端正な顔立ちは将来美男子になるだろう、と思うだけの輝きがある。白銀の軽甲冑を着け、赤いマントを羽織り、腰には剣があるので騎士見習いなのかもしれない。武装の品から、そこそこの名のある家の子ではないかと推察してみる。

隠れて話を聞いていると、どうやら誘拐がうんたらかたら、と言った話だった。

騎士の少年は今にも抜刀しそうな勢いで五人の男達から情報を聞き出そうと躍起になっているようだ。別に興味も無かったので帰ろうかとも思ったが、五人の男達の指に先ほど俺が喰った盗賊連中と同じモノが嵌められているのに気がついた。

取りあえず最後まで見てみるかと思っていると、案の定、乱闘が始まった。

人数は男達の方が多いが、少年の方が個人としては強かった。数の差に、容易く押し潰される事は無かった。だがやはり数の差は大きく、最終的に少年が物量に押されて取り押さえられてしまった。

馬乗りになった一人の男が握るナイフが取り押さえられた少年の胸を突き刺す為に振り下ろされ、俺はそこに割って入った。取りあえず五人の男達は気絶させて分体を寄生させ、男達のアジトの調査をする事にした。

ボロボロになった少年を担ぎ、この場を立ち去る。流石に気絶させた男達を放置せずに殺したり、捕まえたりされると面倒だからだ。離れた場所までできたところで、少年の怪我は有料で治してやった。何故あの男達を逃がした、と少年には怒鳴られたが、命の恩人になったその態度は、と鉄拳制裁した後で名鉄を渡し、しばしの時間が経った後にコレを誰にも悟られぬように使え、と言うと少年からお前は何者だ、と聞かれたので、ただの傭兵だ、と言って帰る事に。少年は美形だったが、男なのだからこんな扱いで十分だろう。

“ 九十九日目 ”

午前三時、まだ闇に包まれた街中を、俺は人間体ではなくオーガの姿で移動していた。その傍らにはダム美ちゃんや幻鬼くんに加え、昨日助けた騎士の少年の姿がある。

話は昨日に戻るが、俺が宿に帰ってしばらくして、少年に渡した名鉄から連絡があった。

まだ一時間も経っていないのだが、と思いつつ少年に俺達が宿泊している宿を教えると少年はやってきて、傭兵か、と聞かれたので傭兵だ、と答えた。そして依頼したいと言われた。

依頼内容は少年が仕えるべきお転婆姫の救出だそうだ。

なんでも、お忍びで トリエント まで来ていたのだがお転婆姫は従者である少年や護衛団の隙について宿を抜け、どこぞの貴族の令嬢と思われるヒト攫いの組織に拉致されたそうだ。

そして身代金の要求が送られてきて、少年は他の護衛団の代表として指定された場所に金を持っていったが、そこに居たのは六名の下っ端だった。昨日叩きのめした奴である。一人数が多いのは身代金をさつさと持ち帰った奴が最初は居たからだそうだ。

言い争っていたのは、約束と違い、金を更に請求されたからだそうだ。

なのにそれを叩きのめしては不味かったかもしれないが、始めたのは少年の方だったし、分体は寄生済みなので問題はない。滞りなく予定通りに、と言う風に話を進ませた。

そして現在、闇に紛れて組織のアジトとなっている住民の居なくなった元貴族の屋敷を四名で襲撃する為にやってきていた。分体で内部情報は筒抜けだ。

少年の他にも護衛団は居たが、足手まといは必要ないので何も知らせていない。少年は今回の雇い主で、ついて行きたいと言ったので仕方無くだ。

赤髪シヨート達は今も寝ているし、必要ないとは思いがボディールガードとして風鬼さんや熱鬼くんは置いてきた。少年を除いた三人でも十分事足りるので問題無し。

組織のアジトに到着し、少年に分からないように密かにブラック

スケルトン・アサシンを生成。敷地内に十体ほど放ち、俺達とは別行動で敵の数を減らせていく。

俺達は敵のアジトに侵入した。

結果だけを言うと、朝日が昇る前に組織は壊滅した。酒を飲んで寝ていた盗賊団のリーダーを暗殺し、その他多くを殺し尽くして決着がついた。見逃しは一切無し。そういう依頼でもあったからだ。

お転婆姫は無事救出する事ができた。予想に反して、線が細いというか、触れれば壊れそうなほど儂げな少女だった。歳は十〜十二前後と言った所だろうか。白金に輝く髪は美しく、将来は美人になるのだろうなと予想ができる顔立ちだった。

四肢は鉄の拘束具が嵌められ、口は声を出さない様に塞がれていたが幸い薬で眠らされていただけで、服の乱れも暴力の痕も無かったので大きな問題は無いだろう。これで少年を含む護衛団は一先ず首を刎ねられずにすんだ訳だ。

組織を潰したついでに溜め込んでいた財宝や、色々と王国の暗部に関わる書類を少年に隠れて回収しておく。また一つネタができたというか、書類を見る限り今回の誘拐は計画的なモノだったらしいが、これには関わるつもりはまだ無いので眼を瞑っておこう。

下手に触れば身体が燃やされかねない話である。

俺は、何も見ていない。

少年は、何も知らない。

誘拐など、そもそも初めから無かった。

コレでいこう。

少年にはこれら全ては王女様が計画した悪戯だった、そして少年は仕方なくそれに協力していた、と護衛団に報告しろ、と言っておく。

王女誘拐などと言った事実はもみ消した方が無難そうだ。守れなかった事に対する厳しい罰を与えられるより、お転婆姫の悪戯だった、という方がまだマシだろうよ。

少年が語った武勇伝から、これくらいしても信じられそうな事をお転婆姫がしていたので、今回も行けるのではないかと思うのだ。

これに少年は、国王には全て報告するべきである、と言って納得してくれなかったので、幻鬼くんの催眠術で無理やり納得させた。真っ直ぐ過ぎるのも考えモノだ。俺の迷惑となる事はして欲しくない。

ついでにお転婆姫にも口裏を合わせるように言っておけ、とも。

少年が催眠によって一時的に意識が混濁している間に組織の構成員を喰ってみた。

【能力名】スハイダー・ウエブ【足止める蜘蛛の糸】のラーニング完了】

【能力名】ボイスンボム【毒煙玉】のラーニング完了】

【能力名】アビリテイ【盗聴】のラーニング完了】

【能力名】アビリテイ【ヒト攫い】のラーニング完了】

まあまあ、な成果だ。日が昇る前に、俺達はアジトから撤退した。屋敷からは、轟々と炎が立ち上っている。証拠隠滅、真実は灰燼に帰したのだ。

その後は昼まで寝て、少年が内密に報酬を持ってきて、その後顔を出すと副店長と約束していたのでファルメル商会の支店に挨拶しに行ったりして時を過ごした。

明日、この街を出立する事になった。次代の子供たちが生まれたので、一時的に帰るのである。

鍛冶師さん達がどういった選択をするのか、若干不安だった。

“百日目”

鍛冶師さん達はこれまで通り俺についてきてくれるそうだと嬉しい事である。と言うか、今更だ、と言われた。

昼前、荷物を纏めて一旦本拠地に帰るべく街を出立。しようとして、邪魔が入った。

騎士の少年と、昨日は言葉を交わす事無く別れた小さなお転婆姫の二人によつてだ。宿を出た瞬間、待ち構えていたのである。

お転婆姫からは一応、助けてくれた事の感謝を告げられた。やけに年寄り臭い口調で外見からは想像し難いモノではあったが、そこまでは、まあいい。人の口調をとやかく言つつもりはない。

むしろオーガである俺に恐れなく言う様は、やはり王族の貴録があった。図太い、といつてもいいのかもしれない。

が、傍らに佇む少年が携えた大量の金の音ゴルドがする袋を見て面倒事の予感がした。

そしてお転婆姫は王が下民に命令するように、王都 オウスヴェル までの護衛を俺に依頼してきた。その言葉通りに従いたくなるような不可思議な魅力が声音には込められていて。

しかしそれに吞まれる事無く護衛団がいるだろう、と言ってみると、アヤツ等はつまらん、お主が居た方が面白そうだと、お転婆過ぎる。周囲の迷惑を考えると思わず言ってしまうほどだ。

しかしお転婆姫は、我にそのようなモノ言いはお主が初めてぞ、とか愉快そうに笑つて話を聞いていない。少年を見た。苦笑していた。

話が進まないので護衛に対する報酬を聞くと、金板一枚 つま
り百万ゴルドだそうだと。

赤髪シヨートによると、普通の行商人ペトラの護衛は、ギルドが仲介するので幾分か減るとはいえ、ココから王都まで行くなら銀板一枚つまり一万ゴルドの報酬が基本なのだという。

一ゴルドが十円と勝手に解釈しているので、普通は十万円、姫様は一千万といった感じか。食糧費とかで色々減るから予想金額そのままが手に入る訳ではないだろうが、取り合えずアホかと。血税を何だと思っているのだと言いたい気分である。無駄に使うんじゃないと。

とは言え、とは言えだ、王族と言う事を考慮に入れればリスクと報酬は釣り合っている気がしないでもないし、王都 オウスヴェルに行くのも悪い話ではない。

拠点には分体もいるので生まれた子らの教育にも問題はないだろう。とりあえずの目的は達成済みだから、一旦戻ろうか、と思った程度である。別に、絶対に戻らねばならないと言う話でも無い。

別にココで依頼を受けても問題はないのではないか？

そんな訳で軽い気持ちで依頼を受けた訳だが、待ち合わせ場所を門の外に指定された時に気がつくべきだった。

一時間後、約束通り門まで出向き、そこに居たのはお転婆姫と少年の二人だけである。少年は“収納のバックパック”とそれよりも多くの品を入れる事ができる高級品だろう旅行鞆 “収納のキャネーリケース”を抱えており、他には誰の姿も無かった。

影も形も見当たらない。護衛団は？ と聞くと、置いてきた、とお転婆姫は言う。

え、これ、誘拐とかって思われるんじゃない……。

都市に残してきた分体の情報網を駆使すると、お転婆姫が護衛団と思しき連中に探されている事が分かった。冷や汗が流れる。正直

この小さなお転婆姫に頭が痛い思いたが、既に契約は成されている。護衛団は置いていくのだ、と言う依頼主の意向は、守らねばなるまいよ。

絶対に許容できない内容でも無いのだし。

しょうがないので、さつさと王都 オウスヴェル に行く事にする。今後の軍資金の為だと思っ様にしよう。いや、【黄金律】と【^{ラック}幸運】は発動済みなので、コレはもしかしたら良い事が起こる前振りなのかもしれない、と考える事にした。

追手が追いついた時には、お転婆姫がどうにかしてくれる事を期待する。最悪、殺さねばならない事になるかもしれないがそれはお転婆姫の責任と言う事で。

さて、王都 オウスヴェル には何日程で到達するだろうか。

俺達は骸骨百足に揺られて、街道を進んでいく。それにしても、このお転婆姫はどうやら俺の肩が気に入ったようで、まるで椅子に腰かける様に、かなりの時間座っていたのであった。

この世界の歌を歌うほど上機嫌なのだが、一体何なのだろうか。分らん。分らんが、まあ、王都に着くまでの付き合いだろう。

ん？ 肩に乗る少女と見た目バーサーカーな俺？ はて、何処かで見たとような……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1782t/>

Re : Monster 刺殺から始まる怪物転生記

2011年9月27日00時03分発行